

茶畑の民俗



伊豆佐野・古宿山より茶畑方面をのぞむ

下の護岸が境川、左の森が柏木屋敷、右の集落が本茶・道上、中央の丘が道場山



国境の川・境川 左側が本茶(駿河国)、右側が伊豆佐野(伊豆国)、後ろは箱根山



柏木屋敷



住宅地の中の田植え 後ろは箱根山



お不動さんの念仏講



吉田さんの引き継ぎ式



吉田さんの祭礼

調査の概要・例言

一 調査の目的

裾野市史民俗編は平成七年度の刊行を予定しており、現在はこれをまとめるための基礎資料収集のため、市域各地での民俗調査を行っている。特に市域を旧村単位で五地区に分け、民俗編の執筆までの五年間に地域を限定した集中調査を実施することにした。五地区とは、旧小泉村、旧泉村、旧深良村、旧富岡村、旧須山村で、これらは明治の町村制で誕生した村々であるが、裾野市として合併後も西地区、東地区、深良地区、富岡地区、須山地区としてそれぞれに特色ある発展をしてきた。地区ごとに地理的環境や産業構造などが異なっていることから、裾野市域の全体像を知るための準備段階として、これら各地区のうち、伝統的なまとまりを持った地域を順次調査対象としてとりあげ、集中的に資料の収集にあたっている。

茶畑はその第三回の調査として選定したものである。茶畑を対象とするにあたっては、この地が近世を通じて一村として行政的なまとまりがあったこと、中世の土豪屋敷を彷彿とさせる柏木屋敷、柏木家文書が豊富に残されていることが大きな理由にあげられる。また、茶畑は箱根山の西麓に位置し、箱根山と深いかかわりをもちながら特徴ある生活を伝承してきた。同時に、近年では宅地化の波にあらわれ、裾野市域のなかでも生活の変貌の激しさをものがる土地である。この民俗調査は、以上のような点を考慮に入れつつ、集中的に行ったものである。

茶畑は内部が市ノ瀬・峰下・道上・本茶・滝頭・中丸の六つの集

落と、新興の鈴原団地、県営住宅などで構成される非常に広い地域であるため、この民俗調査は本茶、滝頭に重点を置き、他の集落については適宜調査に訪れた。調査が細部にまで行き届かなかった点もあるが、茶畑の民俗を総体としてえがくよう努めたつもりである。

二 調査期間

調査は平成三年九月一三日から一六日の四日間を第一次合同調査とし、平成四年二月八日から一一日の四日間を第二次合同調査とした。第一次合同調査では、調査拠点を本茶と滝頭の二地点とした。第二次合同調査では、拠点を市立東小学校内市史編さん室とし、第一次合同調査を補う形で、茶畑全域を対象とした。第一次、第二次とも合同調査で、第一次は八人（うち臨時調査員三人）、第二次は九人（うち臨時調査員二人）が参加した。なお、この二回にわたる合同調査以外にも、調査員は必要に応じて数日間の補充調査を実施している。

三 調査関係者

調査にあたったのは、市史編さん委員会民俗担当の福田アジオ専門委員をはじめ六人の調査委員と四人の臨時調査委員、それに市史編さん室職員である。調査委員は民俗担当のみではなく、近代担当など他担当からも参加した。調査者の氏名と執筆分担は次のとおりである。

役職	氏名	調査及び執筆分担 ()は調査時の所属
専門委員	福田アジオ	序章
調査委員	岩田 重則	第一章
	齋藤 弘美	第二章第二節～第六節
	杉村 齊	第三章第一節・第三節
	松田香代子	第三章第二節・第四節
	新谷 尚紀	第四章
	岩崎 信夫	
	宮村田鶴子	第二章第一節
	植松 良夫	(日本民俗学会会員) (早稲田大学卒業生)
	酒井 誠	(早稲田大学学生)
	塩原 誠志	(早稲田大学学生)

四 調査方法と調査経過

茶畑のなかでも、本茶、滝頭の区長さんにご尽力いただき、話者のリストアップをしていただくとともに、本茶、滝頭の公民館をお借りして、そこを拠点に話者を訪問し、個別面接調査をさせていただいた。また、滝頭では、区長さんのご尽力により、多くの人々に公民館までお越しいただき、集団で面接調査も行わせていただいた。

調査員は各々の調査分担テーマに基づき聞き取りを行ったので、話者の方々には何人もの調査員が入れ替わり訪れる場合もあるなど、ご迷惑をかけたことも少なからずあったであろう。また、念仏講、古田さん、氏神社祭りなどの特別の日程の民俗行事については、その都度担当者が茶畑を訪れ、観察・聞き取りによる調査を行った。なお、調査員が行くことのできない場合は、編さん室職員に行事、そのほかの写真撮影をお願いした。

調査期間中は裾野市内に合宿し、毎日二時間余りのミーティングをして、調査上の課題や問題点を出し合った。調査終了後は、各自の調査結果をカード化して提出し、共通の資料として分類し、関連事項を執筆者に分配した。以上の経過で、本書は作成されている。

五 編集上の留意点

編集は、福田アジオ専門委員の指導のもとに、第三集を担当した調査委員の岩田重則と市史編さん室の中村恒之・浜田明が行った。提出された原稿は編集段階で記述上の統一をはかり、民俗語彙と考えられるものはカタカナ表記としたが、一般に通用するものや漢字をあてたほうが理解しやすいものは例外とした。数字表記について

は、民俗語彙としての十五夜、二十三夜講などは十を入れ、一般には十を抜かした表記とした。図表は執筆担当者が原図を作成し、写真は調査員や編さん室で撮影したものを使用した。

六 調査協力者

調査に話者として協力してくださった方々、あるいは貴重な資料を提供して下さったり、お宅のなかを拝見させていただいたりとお忙しいところをさまざまな形でご協力いただいた皆様、および、校正をお手伝いいただいた清水四郎・高木利郎の両氏には心より感謝申し上げます。報告書の完成をもって、お礼の言葉にかえさせていただきます。

話者名簿(順不同・敬称略)

〈滝頭〉

清水なお(大正五年生)
 清水まつ(明治四〇年生)
 清水まさ(大正三年生)
 清水重雄(明治三四年生)
 清水綾子(大正六年生)
 山本その(大正八年生)
 山本藤夫(昭和元年生)
 高木利郎(大正一五年生)
 市川正枝(明治四三年生)
 清水あき(大正二年生)
 芹沢繁(大正四年生)
 勝又香(大正一三年生)
 清水武(昭和六年生)
 市川幸男(昭和三年生)
 山本一二(大正六年生)
 清水弘一(昭和六年生)
 勝又明男(大正一五年生)
 芹沢志げ(大正七年生)
 清水喜和枝(大正一一年生)
 清水しげ(大正一二年生)
 清水四郎(大正三年生)

山本光彦(昭和三年生)

山本研次(大正一一年生)

勝又喜代子(明治三五年生)

芹沢美春(大正一三年生)

勝又治男

橘正雄

清水信夫

清水良一郎

山本一

市川たつ子(大正五年生)

市川きん(大正八年生)

芹沢しづ(明治三九年生)

〈道上〉

清水一雄(大正一〇年生)

横山良作(大正一二年生)

芹沢鈴太郎(大正六年生)

芹沢ひで子(大正一一年生)

庄司唯一(大正八年生)

柏木ちゑ(明治三九年生)

中山のぶ(大正五年生)

萱間富夫(大正九年生)

萱間進(大正九年生)

清水やす多(大正一三年生)

中山キク(明治三四年生)

〈本茶〉

柏木れん(明治三五年生)

山本一(大正元年生)

小沢喜作(大正元年生)

庄司清一(明治三五年生)

庄司麻一(大正元年生)

橘武雄(大正六年生)

橘ひさ(大正一〇年生)

庄司好子(大正四年生)

柏木ふさ(明治三九年生)

庄司とめ(明治四一年生)

庄司良平

柏木ふさ(明治三五年生)

柏木輝雄(大正九年生)

柏木みえ(大正一三年生)

小沢理作(大正一四年生)

庄司好子

〈中丸〉

清水親憲(大正五年生)

長田みさお(明治四〇年生)

服部政市(明治三七年生)

〈峰下〉

杉山和作(大正二年生)

高田 伸枝 (明治四三年生)
杉山 清

〈市ノ瀬〉

杉山 政雄 (大正元年生)
杉山 実

〈平松〉

岸沢 千工 (明治三九年生)

〈佐野〉

杉山 幸江

〈三島市佐野〉

甲賀 絃之 (昭和一五年生)
(耕月寺)

目次

□ 絵 調査の概要・例言

序章 茶畑の歴史と民俗

第一節 民俗調査と市史編さん

市史のなかの民俗／地域差を知る／体験としての歴史

第二節 茶畑の集落と歴史

広い領域と多くの集落／茶畑村の伝統／茶畑の開発

第三節 民俗の特色

内容豊かな民俗／山と水／家の伝承／年齢集団の活躍／吉田信仰／残された問題

第一章 生活環境の民俗

第一節 開発と土地利用

(一) 茶畑の成立

国境のムラ／中世の佐野郷／茶畑と柏木家／モヨリ／市ノ瀬の開発伝承

(二) 土壌と立地

サトジとヤマジ／水田／畑／岩盤／モヨリの立地／宅地化の進展

第二節 水と生活

(一) 井戸・カワバタ・水車

滝頭／本茶／水車

(二) 関東大震災と水

震災による環境の変化

第三節 箱根山と生活

(一) 二一一名共有

茶畑山／二一一名共有とモヨリ／山の神／市ノ瀬の共有地／神社持ち／一軒前と新住民

(二) 箱根竹

「精根かぎりかせげた」／肥料

(三) 草刈り

草刈り場／ボンクサ／ワカイシユウ／堆肥／屋根替え

(四) 雑木林

落葉を掻く／薪／炭焼き／サキヤマ

(五) アラクオコシ

アラクオコシ／カイコン／猪／ハクビシン

第四節 四季の変化と動植物

(一) 風と気象

富士のカサグモ／ナライ／イナサ／西風／虹／月と天気

(二) 魚

ウグイ／蟹／ウナギ

第二章 社会と生活

第一節 家と屋敷

(一) 屋敷構えと付属屋

ヤシキの境界／オモテを囲む屋敷取り／付属屋いろ いろ／屋敷取りの例／屋敷墓	31
(二) 間取りと部屋の使用方	26
間取りと各部屋の名称／屋内神や仏壇の位置／本茶 S家の間取り／ニワの使用方／居住部分のハレと ケ／食事・だんらんの場合／接客の場合／就寝の場合／お 産の場／人寄せ・儀式の場	31
(三) 養蚕のときの家と付属屋の使用方	31
コノメとタナガイ／市ノ瀬S家の使い方／道上S家 の使い方／滝頭SA家の使い方／滝頭SS家の使い 方／蚕の保温／タバコのための付属屋の工夫	34
(四) 家の手入れと生活環境	34
屋根替え／カヤムジン(萱無尽)／滝頭Sさん(明治 三五年生)のカヤムジンの話／市ノ瀬Sさん(大正元 年生)のカヤムジンの話／道上Sさん(大正一三年 生)のカヤムジンの話／カヤムジンがなかったとい う話／葺き替えの準備／屋根の葺き替え／瓦屋根の 瓦の葺き替え／大そうじ／生活の水とその利用／マ キと炭	38
(五) 新築	38
シンゾウブシンとキャアコシ／新築の移り変わり／ 家を建てる手順／地鎮祭／ジツキ／タテマエの準 備／タテマエ／棟梁送り／ヤウツリとヤブマチ	41
第二節 家族と親族	41
子どもの仕事／嫁入りはエンツナギ／アシイレと嫁	41

の実家／ナコウド三年オヤ一生／相続と継承／オヤ ネンブツと位牌分け	44
第三節 村落の形と組織	44
(一) 村の範囲と地域区分	44
語り継がれた歴史／村内区分と行政区／クミとモヨリ	44
(二) ムラの構成員と運営	51
旧戸と新戸／地主と小作／ムラの役職／ムラの集会 所／ムラの寄合／ムライリ	51
第四節 共有と共同	54
(一) 茶畑山をめぐる共有と共同	54
(二) 社寺をめぐる共有と共同	55
第五節 ムラの集団構成	56
(一) 近隣集団とモヨリ	56
モヨリの神様／講とモヨリ／葬式組／結婚式	56
(二) 年齢集団	58
子どもの仲間／ワカイシユと青年／女衆の淡島講／ 年寄りとお念仏	58
第六節 世間との交流	60
(一) 買い物	60
(二) 神仏を介した人々の交流	61
第三章 時間と民俗	63
第一節 生活の時間・生産の時間	63
(一) 茶畑の生業	63
(二) 稲作の一年	63

茶畑の水田／種もみと苗代／田植え／田植えの日の
一日／ミズカケ(水かけ)／田の草とり／刈り入れ・
脱穀

(三) 稼ぎのタケキリ(竹切り) …………… 66

シノダケ／タケキリの時期／ウミダイラ／カセギ／
ラオ屋の暮らし／山行き／タケキリの道具と野良
着／ラオ作り／ラオ問屋／箱根竹が枯れたこと／柏
木さんのラオ屋のその後

第二節 一日の生活 …………… 70

(一) 仕事の日 …………… 70

草刈りの一日／ヒネンブツ

(二) 食事と生活 …………… 70

食事の回数／アサメシ／オヒル／ヨウジャ／バン
ゲ／弁当／モロコシ／サツマ／二番米／水の利用／
魚屋／川魚／お茶／醤油／味噌の作り方

第三節 一年の生活 …………… 73

(一) 年中行事 …………… 73

ススハライ／餅つきとお飾り／正月／初山／ゴカン
ニチ(正月五日)／七草粥／二番正月／二十日正月／
天神講／次郎朔日／初午／節分／大山講／不動講／
ヨシダサン(三月二八日、四月三日)／節句／節句／
田植えと休み／天王祭り／七夕／盆行事／合社祭／
彼岸／月見(十五夜、十三夜)／山の神講／浅間神社
例大祭／エビス講

第四節 一生の生活 …………… 81

(一) 産育 …………… 81

1 妊娠と出産前 …………… 81
妊娠／トリアゲバアサンからお産婆さんへ／ハラ
オビイワイ／安産祈願／デミマイ／出産の準備

2 出産 …………… 83

出産の場／ウフメシ／産湯と後産の始末／乳付
けと産婦の食事／産後と産の禁忌／お七夜と名
付け／ネネミマイ／ハシワタシ／ヒヤクヒトエ

3 成長過程 …………… 85

初節句／初誕生／初客／七五三／疱瘡神／子ど
もの行事／青年団

(二) 婚姻 …………… 88

1 縁談の成立 …………… 88
通婚圏／クチキキ／見合い／仲人／カネオヤ／
サケ／アシイレ／嫁入り道具

2 祝言 …………… 90

婿入り／嫁入り／サカズキゴト／お振る舞い／
カオミセ／オチツキノボタモチ／ミツメ

(三) 厄年と年祝い …………… 93

厄年／年祝い

(四) 葬送と墓 …………… 93

1 臨終から葬式準備まで …………… 93
死の予兆／マクラメシとマクラダング／シニミ
マイ／葬式組／死の通知／葬具の準備／アナホ
リ

2 トムライの儀礼 95

お通夜／湯灌／キチュウミマイ／出棺／野辺送り／ハマオリ／キチュウウ／子どものトムライ／火葬

3 供養と先祖祭祀 98

位牌分けとオヤネンブツ／七日ごとの念仏／四十九日までの禁忌／四十九日／ヒヤッカナンチ／ニイボン／一周忌／ネンカイ／五十年忌

4 墓制 102

墓と墓地／屋敷墓／屋敷墓と先祖／共同墓地

第四章

信仰

第一節

神社と小祠

(一) 茶畑全体でまつる神 105

浅間神社／吉田神社／山の神の神社

(二) 地区ごとにまつる神 107

金比羅神社／峰下の駒形神社／滝頭のサイの本
茶のサイの神／市ノ瀬のサイの神／道上のサイの神

第二節

寺院と堂

(一) 寺院 108

耕月寺／願生寺

(二) 堂 109

滝頭の不動

(三) 講 110

滝頭の講／本茶の講／道上の講／市ノ瀬の講

第四節

家ごとにまつる神仏 112

本茶の庄司清一氏の家の神仏／道上の清水一雄氏の家の神仏

付録一

茶畑・柏木家文書1 御厨下筋茶畑村 (延宝五年十一月) 114

付録二

茶畑・柏木家文書2 駿州駿河郡小泉庄茶畑村鏡之帳 (延寶八年正月) 121

付録三

茶畑・柏木家文書3 駿列駿東郡御厨小泉庄茶畑村 諸色書上帳 (延享二年五月) 127

付録四

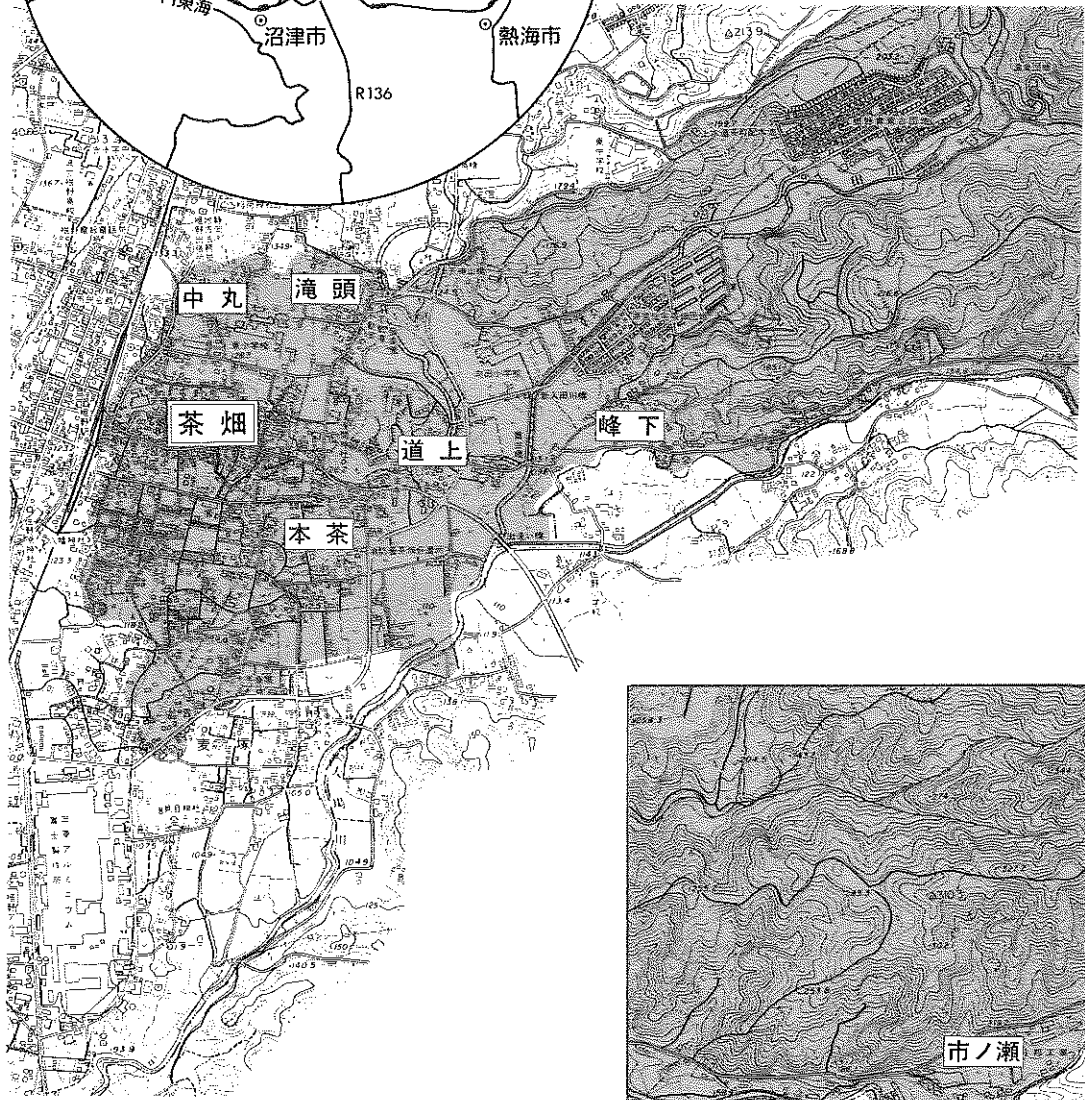
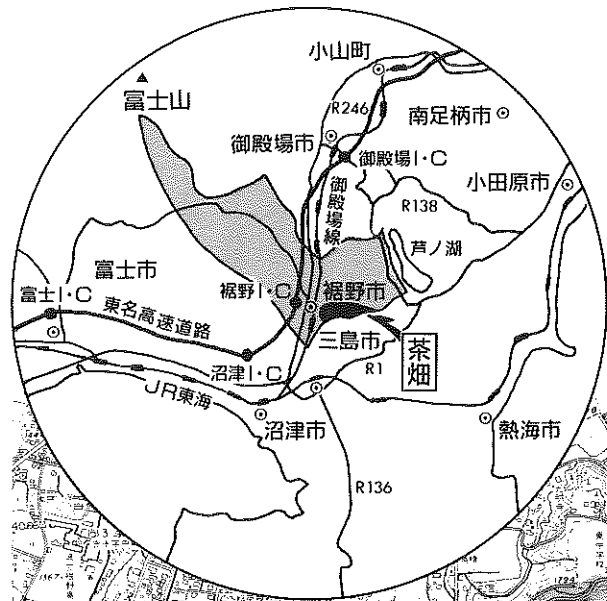
茶畑・柏木家文書4 相定申若者条目之事 139

付録五

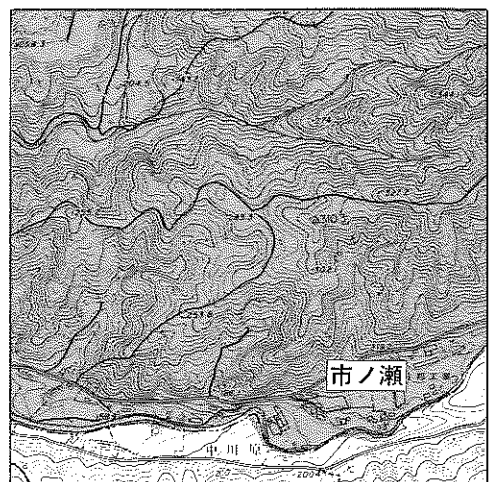
「駿河記」駿東郡茶畑村(桑原藤泰 文化三年完結) 140

編集後記

裾野市史編さん関係者索引



茶畑の位置



序章 茶畑の歴史と民俗

第一節 民俗調査と市史編さん

市史のなかの民俗 市史編さん事業も次第に進み、「深良用水」「考古資料」「近現代Ⅰ」の三冊をすでに刊行し、また近世の重要な日記を資料叢書二冊に収録し刊行した。民俗関係でも『葛山の民俗』『深良の民俗』を市史調査報告書として刊行してきた。したがって、裾野市史がどのような内容で構成され、どのような特色をもっているかは、おぼろげながら市民の方々にも理解していただけるようになってきている。市史のなかに民俗という表現の部門があることについても違和感は少なくなってきたのではなからうか。

今までに刊行してきた市史の刊行物の多くはくずし字で書かれた文書を読みやすく活字にして刊行したものであり、原文書に比較すれば大変親しみやすく、また読みやすいように思えるのであるが、実際には文字資料を読み進めることは大変困難な作業であり、その資料が表現している内容を理解することに困難を覚える人も少なくない。文字資料である文書・記録を活字にして刊行することは市史編さんの基礎作業であり、不可欠なものである。しかし、それはその次に予定されている通史編として歴史を記述する作業の前提となるものであると同時に、地域の先人たちが書き記し残してくれた貴重な遺産を明らかにして後世に残すためのものであり、直接多くの

市民の方を読者に想定したものではないことも事実である。民俗調査報告書ももちろん同様の目的をもってしているが、しかし随分異なった印象を多くの人は得ているのではないかと思われる。地域の各地で民俗調査報告書に非常に親しみを抱いて読んでくださっている方々がいるのである。

地域差を知る 民俗は現代に実際に人々によって行われたり、知識として保有されたりしている事柄である。民俗は父祖の代から受け継がれてきた人々の生活の内容である。したがって、地域の人々にとっては日常的に接し、また自分自身も行い、知っていることばかりである。当然のことながら親しみを感ずるわけである。多くの文字資料に示された歴史は現在と断絶して、現実の生活とは関係がないかのような印象を与える。それが故にまた人々の好奇心や探究心を呼び起こすのであるが、民俗は逆である。現実の生活そのものであり、当たり前の事柄である。したがって、それを日常的に興味をもったり、そこから歴史が明らかになると考える人はほとんどいない。

しかも、そのような当たり前の特に変わった事柄でもない生活事象は、自分の経験や知識を基準にして、どこでも同じようにやっているとか伝えているかと思いがちである。ところが「所かわれば品かわる」のたとえの通り、ごく近い所でも相違が多く見られることに民俗調査報告書を手にして知り、興味を持つということが多いのである。今までに刊行してきた葛山と深良の二冊の調査報告書を手にした人は、そのような目で内容を読み、驚いたり、逆に納得したりしてきたものと思われる。それほど広くない裾野市域であり、しかも報告書を刊行した葛山と深良はそのなかでもそれほど遠く離れて

いない。したがって、共通性も大きいのであるが、そのなかに相違が多々あることも発見するのである。この自他の比較は学問の始まりであり、研究の第一歩である。多くの読者は民俗調査報告書を手にすることで郷土の研究の入口に立つことになるはずである。

体験としての歴史 市史で刊行した民俗調査報告書を手にした人のもう一つの印象と興味は、記述のなかに自分の若いころや子供のころの思い出を発見する点にあるものと思われる。民俗調査は現在の人々の行為や知識を把握することを最大の課題にするが、同時にその現状にいたる変化の過程をできるだけ体験、見聞に基づいて把握する。それは民俗調査を基礎にした民俗学という学問が、民俗を資料として歴史的世界を認識し、再構成することに大きな目標を設定しているからである。それがまた民俗編として市史編さんの重要な一部門を構成している所以でもある。父祖の代から伝えられ、その結果として行われている事象を通してその世代を超えた長い時間の歴史を知ろうとする。その前提として今生きて暮らしている人々の体験としての変化を把握する。それが多くの人々の興味を呼び、懐かしさの感情とともに歴史への興味となる。身近な生活の歴史を自分の体験を基礎に考えることになる。

民俗調査報告書は以上の二つの点において市域の人々の興味関心を呼び起こす。歴史には関心もないとか、興味もないと言っている人々が民俗に接することで地域の生活の歴史を関心の対象とするようになるのである。『萬山の民俗』『深良の民俗』に続いて今回『茶畑の民俗』を刊行したことにより、市民の皆様の生活史研究はいよいよ具体化できるようになってきたと言えるよう。

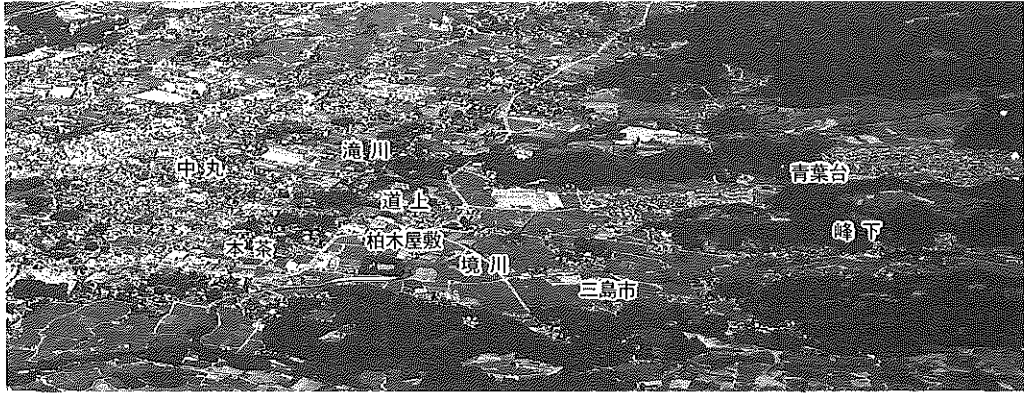
第二節 茶畑の集落と歴史

広い範域と多くの集落 茶畑は広大な地域である。御殿場線の裾野の駅の東側からはじまって箱根の山まですべてが茶畑である。そのなかの山林の部分は人間の住めない土地であるから除外しても、なお広大な地域が茶畑である。

人間の居住空間として形成されて来た茶畑は、御殿場線よりの東部の段丘緩傾斜地域と農免道路沿いの西部の低地に大きく分かれる。西部の段丘面は今では急激に住宅地化が進み、かつての農村的な景観は失われつつある。特に御殿場線裾野駅に近い所は住宅の密集した完全に市街地になっており、その間を縫うようにかつての用水路が激しい水音をたてて流れている。そして、ところどころに農家の屋敷が大きな構えでそれと分かる姿で交じっている。それに対して、西部は大場川と泉川が形成した河谷平野で、川の水を利用して開発された水田地帯である。現在なお水田が広がっており、またそのなかに農業集落もまとまった姿でたたずんでいて、農村としての景観も維持されている。

そして、その北部のかつての山の一部分は開発されて、巨大な住宅団地となり、遠望すると別世界の大きな町を形成しているように見える。また農免道路に沿っては、郊外型の商店や工場が並ぶようになっている。全体として都市化のすすむ茶畑ということになる。

かつての農村としての茶畑は、一つの集落ではなかった。広大な範域のなかにいくつもの集落として点在していた。西部の段丘面に



空から見た茶畑

は中丸、滝頭、そして本茶の各集落が、そして東部の川筋には市ノ瀬、峰下、道下などの集落があった。それらのまとまりは西部の中丸では住宅地化の進行で不明瞭になって来ているが、他の集落では現在なお農業集落としての様相を残して明確である。

広大な茶畑という地域が一つの社会組織を形成し、行事や儀礼などの民俗を伝承する単位とはなっていない。集落がいくつものも分かれていくことが示すように、民俗の生成、伝承も基本的にこの集落を単位としてきた。それを示すのは集落を基礎とした社会組織の存在である。茶畑では、市域の他のムラと同様に、モヨリと呼ばれる組織がある。そのモヨリは集落を基礎にしているのである。一

つの集落が原則として一つのモヨリを形成している。各種の行事や儀礼はこのモヨリ単位で行われているし、今日の市の行政もモヨリを基礎とした区で地域を把握している。もちろん、急激な世帯数の増加、新たな住宅地の形成は、単純にモヨリに基づく区分ではなく、家々の配置と数に応じて数次にわたって改編されてきていることは言うまでもない。しかし、完全にモヨリを無視して区分し、編成するということはない。

茶畑村の伝統 茶畑は明治の町村制以降は大字であり、近世には茶畑村という村であった。すなわち支配制度の村であった。近世初頭の検地によって一つの村として把握され、年貢を責任をもって納入する年貢村請制の村となった。したがって、茶畑村として村役人が置かれていた。その点では、茶畑は一つの社会を形成していたことになる。モヨリが民俗の生成・伝承の単位だとしても、その上に存在した茶畑村を完全に無視してしまうことはできない。近世を通して茶畑村として支配された事実も重視しなければならない。そのことはいくつかの民俗として今日まで継承されている。その一つは鎮守は茶畑全体で浅間神社をまつていることである。祭祀や神社の管理は茶畑内の各区、あるいは各モヨリ単位に分担して行われているが、しかし茶畑全体としての祭礼であり、神社であるという認識は明らかに存在する。二つ目には、茶畑山の存在である。今では多くの部分を各モヨリに分けてしまっているが、それでも各モヨリから山岳委員を選出して、山の管理や山の神の祭祀を行っている。これは明らかに近世の支配単位としての茶畑村の入会山を継承するものである。

茶畑のなかに古くから居住する人々は互いに面識関係があるし、

その家の所在地も明確に認識している。これも茶畑が単なる地名表示ではないことを示している。これは幼い頃からの生活空間として茶畑が存在したことによるものであるが、それに加えて通学区域の存在も大きいであろう。人々は少なくとも深良や葛山の人々よりは同じ茶畑内に居住する人々に親しみをもち、また情報も多く持っていることは間違いない。

茶畑の開発　茶畑がいつごろ、どのようにして開発されて、人家ができ、集落が形成されたのかは明らかでない。地名としての茶畑が登場するのもそれほど古くなく、近世成立期である。しかし、今に残された景観は、茶畑が決して近世開発の新しい村落ではないことを教えてくれる。特に柏木家が近世以来居住してきた屋敷の規模や施設から判断しても、決して近世に造られたものでないことは明らかである。屋敷周囲は濠で囲われ、さらに大場川の流れを南側の防御施設として利用し、その内側には土塁を設けている。方形の屋敷は、中世のものであることは間違いない。遅れても戦国期に設けられたものと推定してよいであろう。ここに居住した柏木氏は近世を通して茶畑村の名主を世襲していた。その近世以前のあり方は不明であるが、屋敷の様相から言って、在地の小領主として茶畑の支配権を掌握しつつあったものと推測されよう。茶畑という広い領域の存在は、この柏木氏の支配を抜きには考えられない。

他方、各モヨリがどのように成立したのかも必ずしも明らかでない。現在のモヨリの大部分はすでに近世成立期に存在していたものと思われる。延宝五年（一六七七）の村明細帳には中尾、龍頭、中丸、茶畑の各組、さらにみの下、市ノ瀬の居村が記されている。このうち、中尾は現在のモヨリ名としては存在しないが、残りほぼ

現在のモヨリに対応している。茶畑組は現在の本茶のことと考えられる。したがって、中尾は現在の道上にあたるものと判断できる。これらの各モヨリはそこに居住した家々の生活・生産の互助組織として形成され、村落として成長してきたのであろう。延宝五年の記載では、組と表記されたものはいずれも二〇軒前後の家数が記されているのである。

なお、開発伝承として、チャエモン（茶右衛門）、ハタエモン（畑右衛門）、ムラエモン（村右衛門）の三人がこの地を開発したので、その三人の頭文字からとって茶畑村となったという話が伝えられているのは、他にあまり類例のない珍しい伝承である。しかも、その三人の家が現在のどの家かということについても具体的な家を比定する伝承があることは、この伝承が地域の歴史意識を示している。あるいは柏木家の登場する以前に茶畑がすでに村落として形成されていたことを伝承として伝えているのかも知れない。今後の関連伝承の収集が期待される。

第三節 民俗の特色

内容豊かな民俗　茶畑の調査によって記録することができた民俗は、第一章以下の各章で記述されるように、実に内容豊かである。多くの興味深い民俗を記述することができた。ここではそのなかでも特に注目すべきいくつかの点について紹介して、読者の参考にした。

茶畑の民俗が豊富であるのは、その範囲が広大であり、いくつも

のモヨリがそれぞれ個性をもって歴史を形成してきたことによるものと考えられよう。そのすべてのモヨリを同じように調査対象とすることはできないほど、モヨリの数は多く、しかも個性的である。

今回の調査では、いくつかのモヨリを調査重点地区として選択されていた。調査としては茶畑全域に及ぶが、特に重点地区において集中的な調査を試みたのである。その対象としたのは本茶と瀧頭であった。報告書の記述もこの二つのモヨリに関するものが多くなっている。しかし、その他のモヨリについても注目すべき民俗についてはできるだけ記述するように努力した。

山と水 茶畑の東部は箱根山である。そこは近世以来の入会山で、茶畑山と呼んできた。その管理運営についての特色は、二一名共有であったことである。その内容を記録すると共に、それを継承している山の神の祭祀や山の利用についても明らかにした。その茶畑山の山の神を「タケノヤマノカミ」と呼んでいたことも注目すべき呼称である。

また、かつて盛んであった箱根竹の伐採とそれによるパイプのラオやパイスケの製作は今では分からなくなりつつあるが、ここにその一端を明らかにできた。茶畑にはラオ屋を生業としていた人がいた。その特色ある技術と生活は裾野の民俗として重要である。

水田は大場川や泉川の水を利用する地域と深良用水の水で灌漑する地域とに分かれる。本茶、道上、峰下の水田が前者で、地下水と呼ばれる。それに対して滝頭や中丸の水田は後者である。深良用水の水は屋敷近くにも流れているので、それを洗い水としても利用してきた。カワバタという洗い場を屋敷の脇に設けて、そこで出荷用の野菜を洗い、食器を洗い、また洗濯物を洗った。近年の流水の汚染

はカワバタの利用を低下させ、農器具を洗う程度になってしまっている。

家の伝承 茶畑の家も葛山や深良と同じように、一軒一軒が周囲を屋敷林で囲んで、互いに区別している。屋敷内には屋敷神があり、屋敷続きには墓地があるのが標準的な姿である。また、屋敷墓とは別に、ヤシキセンゾサンと呼ぶ石塔をまつている家があることも注目される。家の相続継承ではやはりタイマツナギの伝承が聞かれた。

また、親の死去に伴い、子供の数だけ紙位牌を作ってもらい、それぞれ自分の家に持ち帰る。オヤネンブツは、子供が親の葬儀から七日ごとに持回りで念仏をあげてをいい、最初はその施主の家で行い、順次兄弟姉妹が順番に担当する。その念仏のことはキャクネンブツという。キャクネンブツが終わると、紙位牌を処分するという伝承があることは注目されよう。近年駿河にも分布することが分かってきた。いわゆる位牌分けの意味を考える際に注意される事例である。

駿東地方ではどこでも行われていた結婚に際してカネオヤを設定することも近年では見られなくなり、話だけになってしまったが、その具体的な様相を記録することができた。茶畑ではカネオヤは特定の地主家、有力者の家に集中する形で設定されていたという。そしてカネオヤとコブンの間での贈答を中心とした儀礼が頻繁に行われていた。

年齢集団の活躍 茶畑では子供たちや若者たちの活躍が目立った。子供たちは年中行事のさまざまな機会に活躍していた。特にサイトヤキとかドンドヤキと呼ばれる正月一四日の行事は主役であっ

た。これはもちろん市域の他のムラでも同様に見られることであるが、茶畑でもその具体相を記録することができた。子供の行事として天神講があった。正月二五日とか二月二八日とかモヨリによって日は異なるが、一軒の家を宿にして料理を作って楽しい時間を過ごしてきた。また、行事に際して集まってきた子供たちに振る舞いがあることも注目してよいであろう。

他方、青年の集まりはワキヤーシユウと呼ばれ、かつては大きな存在であったことが現在の断片的な経験話からも知られる。寝泊まりする施設として青年俱樂部があったという。その姿は伊豆から連続した寝宿を伴う若者組であったと判断できる。青年俱樂部に泊まって、夜には遊びに工夫をこらしていた様相を窺うことができるが、残念なことにすでにワキヤーシユウそのものの時代の経験者はおらず、すべて青年団に再編成されて以降の経験者の話であり、しかもそれさえも断片的である。

吉田信仰 駿東地方の特色ある信仰行事として吉田神社がある。吉田神社は特定の社殿で固定的にまつられているのではなく、多くの村落がムラ送りでもつるものである。茶畑が関係している吉田神社は茶畑以外に佐野・伊豆佐野・麦塚・二ツ屋・平松・公文名・久根・神山・石脇である。したがって、一〇年に一回順番が回ってきて、祭礼を行い、その後神輿を一年間鎮守の境内に預り、翌年に次の当番の地区に引き渡すのである。村落を超えた広い範囲に及ぶ移動は、民俗の広域化の問題として注目されよう。この吉田神社は幕末・明治初年に新たに勧請されたものであり、鎮守を中心とした神社の体系が確立している地域社会へ入り込む方法として注意すべきものである。

残された問題 以上のように、茶畑の豊富で多様な民俗をこの報告書に収録できたのであるが、残された問題も多い。そのいくつかを指摘し、今後の課題としたい。

滝頭・中丸さらに本茶の地域の水田は深良用水によって灌漑されている。深良用水の三郷のうち中郷の末端部を形成する地域である。その水の分配は特に渇水期には深刻であったものと思われる。水利慣行の詳細を記録すべきであったが、今回はいくつかのエピソードを報告するにとどまった。

家族や親族について十分に調査をし報告することができなかった。駿東から伊豆にかけてはいわゆる初生子相続が行われていたことが知られているが、茶畑についてはその存在したことの伝承は聞かれても、具体的に記述することができなかった。同様に、親夫婦と息子夫婦と別れて別棟に暮らす隠居が少数行われているが、その方式についても明確には調査できていない。

氏神は浅間神社であるが、この神社が現在の社地に移ってきたのは古いことではない。幕末のことと伝えられている。その旧地とされる地点は各モヨリから離れた谷であり、そこがどのような因縁の土地かも知りたいところである。またどのような理由で移転が行われたのか興味深い。しかし、その経緯を跡付けることは今回果たせなかった。

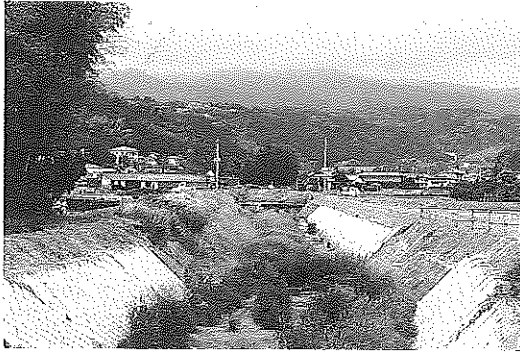
茶畑には天理教の教会がある。そして、その地域を天理町という。この天理教会の形成発展と天理町の成立について今回は記述できなかった。教会のある地域が一つの町として発展し、町名にもなっていることは興味深い問題である。

第一章 生活環境の民俗

第一節 開発と土地利用

(一) 茶畑の成立

国境のムラ 茶畑は国境のムラである。茶畑は通称境川と呼ばれる大場川の西北側に位置する。茶畑は現在の行政区域で静岡県裾野市、近世の藩制村の枠組みでは駿河国駿東郡茶畑村である。いっぽう大場川を隔てて東南側は伊豆佐野ムラである。伊豆佐野は現在の行政区域で三島市、近世の藩制村の枠組みでは伊豆国君沢郡伊豆佐野村である(図I-1、参照)。



国境の川(境川) 左側が峰下(駿河)、右側が伊豆佐野(伊豆)、後ろは箱根山。

茶畑の東側には箱根山が広がる。駿河国では茶畑より東側にはムラはない。箱根山の向こうは相模国である。茶畑は駿河国に属するが、駿河国、伊豆国、相模国、三国の境のムラであるといえよう。

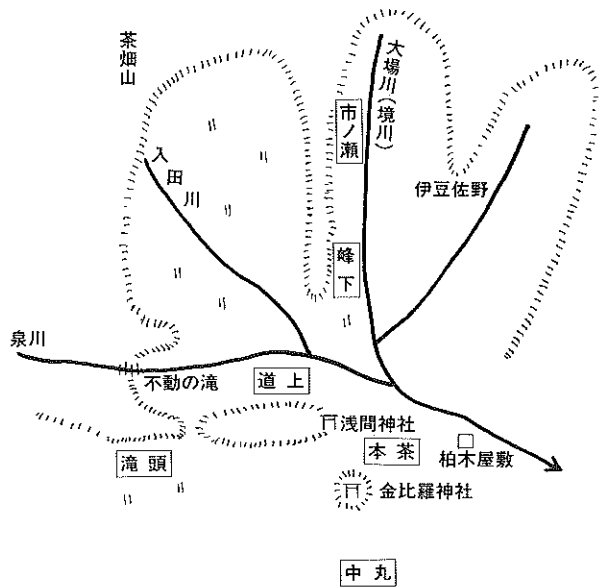


図 I - 1 茶畑の環境

中世の佐野郷 中世において茶畑を含む周辺地域は佐野郷と呼ばれていた。佐野郷は南北朝期には鎌倉田覚寺領であり、戦国期にはいと葛山に居館をかまえた葛山氏の支配下にあった。

茶畑と柏木家 茶畑という名称が登場するのは近世にはいつからである。近世の藩制村茶畑村の名主をつとめた柏木家には三千年検地帳に「駿河ノ内茶畑村」とあるのが最古のものである。

柏木家が居住した屋敷跡は現在では広場となっているが、柏木屋敷として大場川西岸に残されている。柏木屋敷は現在でも周囲が堀と土塁に囲まれた方形の屋敷であり、中世土豪屋敷を彷彿とさせる。



柏木屋敷

中世の佐野郷から近世の藩制村茶畑村が成立するに当たり、名主の柏木家が果たした役割を無視することはできないであろう。なお、柏木家についてはすでに裾野市史が刊行した『裾野市史資料叢書1 柏木甚右衛門覚書帳・湯山安右衛門日記』(一九九〇年)の「柏木甚右衛門覚書帳 解説」(菊池邦彦)を参照されたい。

モヨリ 茶畑は面積の広いムラである。明治にはいつてから形成された天理町や新興の県営住宅などを除けば、現在の茶畑の内部には六モヨリ(最寄)、市ノ瀬、峰下、道上、本茶、滝頭、中丸がある。中丸は軒数の増加により、中丸上、中丸中、中丸下に分かれているが、もともと中丸はひとつのモヨリであった。モヨリの独自性は強く、民俗の伝承は茶畑全体を単位とするより、モヨリを単位としている民俗の伝承が多い。また、現在の行政においても茶畑を単位として茶畑区がつけられているのではなく、これらモヨリごとに区が形成されている。

茶畑においてモヨリと呼ばれる村落組織がいつから形成されたのか確認することは困難であるが、すでに藩制村茶畑村名主の「柏木甚右衛門覚書帳」(一六八三年〜一七一九年)には「市之瀬」、「瀧

頭」、「平松新田」、「中尾」、「茶畑」の集落名が見える。「柏木甚右衛門覚書帳」にはモヨリという言葉を見ることはできないが、「市之瀬」は現在の市ノ瀬、「瀧頭」は現在の滝頭であろう。「平松新田」は現在の平松であり、一六九七(元禄一〇)年小田原藩から「当暮より平松新田別村二被仰付」、別村として独立している(「柏木甚右衛門覚書帳」の元禄一〇年の項)。「中尾」と「茶畑」については確定することはできないが、「柏木甚右衛門覚書帳」によれば、柏木家は「中尾」に属しているので、「中尾」は現在の本茶であろうか。また、柏木家文書には、一七五九(宝暦九)年「茶畑村神社」という茶畑にある神社を書きあげた文書が残されており、そこには「一ノ瀬組」、「瀧頭組」、「平松新田」、「中尾組」、「茶畑ヶ組」、「中丸組」の名称が見える。現在のモヨリそのままではないとはいえ、すくなくとも近世中期までには現在のモヨリの原型といえる集落が茶畑に形成されていたのである。

市ノ瀬の開発伝承 モヨリの形成については、市ノ瀬でその開発伝承を聞くことができた。市ノ瀬はすべて杉山姓であり、現在一七軒である。しかし、もともとはオオヤ、カミ、アラヤという三軒の家が住みついたのがはじまりであるという(図1-2、参照)。

この三軒の家の先祖が最初、深良から伊豆佐野の耕月寺に行こうとして来たが、この土地がよいところであるということで、ここへ住みつくことになった。それで、明治前まではお寺は深良のお寺の檀家であったといわれている。現在では、伊豆佐野の耕月寺の檀家であり、明治以降に檀那寺を移したのである。

市ノ瀬では系譜としてもすべてがオオヤ、カミ、アラヤの三軒からの分家であることが意識されている(図1-3、参照)。市ノ瀬

の一七軒のうち古い家はイエナ(家名)をもっている。イエナには由来がある。

イノシリ(⑬)はイノシリと発音されているが、本当はユノシリ(湯の尻)であるといわれている。昔このあたりで湯が湧き出たのでユノシリというようになったという。カミ(①)は以前はク

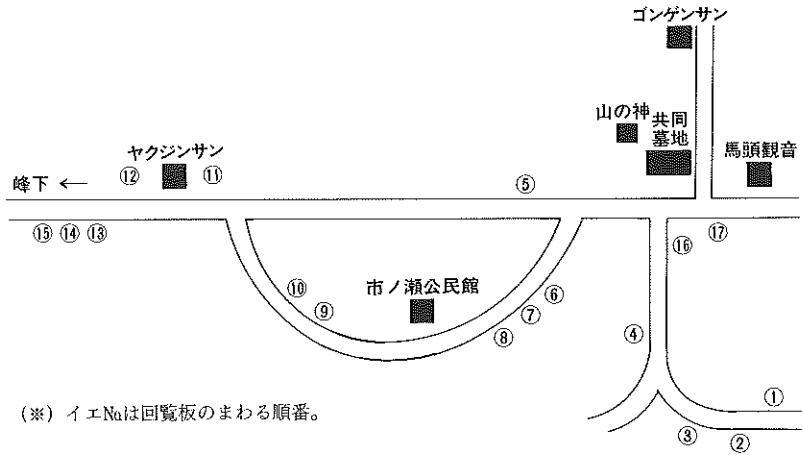


図 I - 2 市ノ瀬概念図

ボといったが、現在市ノ瀬のいちばん上にあるので、カミといって

いる。オオセギ(②)はここに堰があるのでオオセギという。ナカガワラ(⑪)はナカガワラというところにあるのでナカガワラという。ハシバ(⑩)は以前ここに伊豆佐野へ渡る橋があったのでハシ

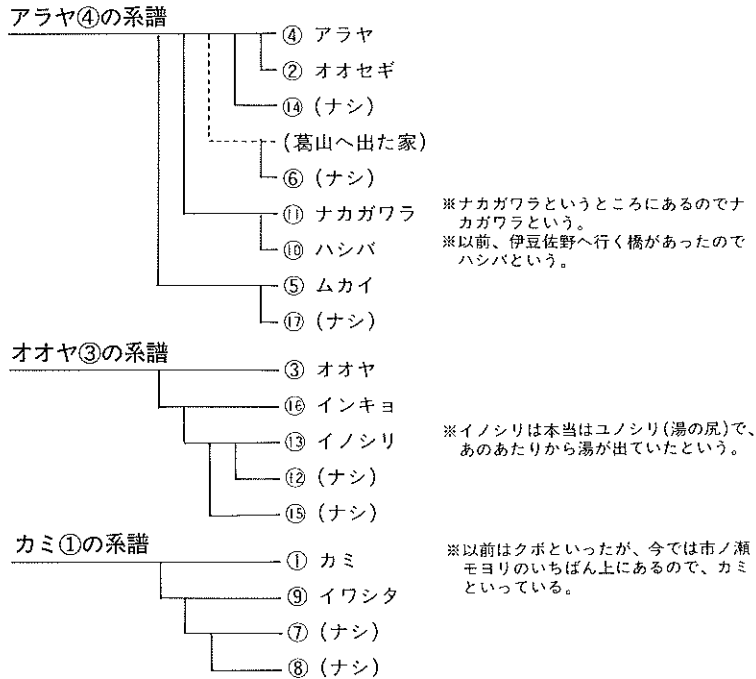


図 I - 3 市ノ瀬本分家関係

(二) 土壌と立地

サトジとヤマジ 茶畑のすぐ東側は箱根山である。茶畑は箱根山に二一一名共有という共有地をもっている。茶畑ではここを茶根山といっている。

そして、茶畑では茶畑山をはじめ箱根山の山地をヤマジ(山地)、茶畑の集落や田畑のある平地をサトジ(里地)という言い方をする。たとえばサトジのサツマ(薩摩芋)はうまくないが、ヤマジのサツマはうまくないという。また、ヤマジのサツマは硬いが、切り干しにするにはサトジのサツマのほうがよいといわれる。

水田 サトジは集落のほかは水田と畑である。茶畑における水田の拓かれかたは、深良用水との関係において二つの形態がある。一つは、大場川とそれに合流する入田川、泉川に沿った地域の水田である。モヨリとしては市ノ瀬、峰下、道上である。深良用水との対比では、用水の水を使用せず、ジスイ(地下水)といわれる大場川、入田川、泉川の水を引き水田の灌漑をおこなっている。

これらのうち入田川の付近は現在では鈴原といわれ宅地化が急速に進んでいるが、以前はまったく家のないところであった。とくにこのあたりはドブツタが多く、馬も牛も水田に入れることができなかった。一年中水があり、黒い土でデロ(泥)になっていた。田植えのときは田んぼの下に止まり木を置き、その上に足を置いていた。止まり木から足を踏み外すと胸まで潜るようなところもあった。収穫も少なく、丁寧につくってやっとな反七俵とれる程度であった。一俵は六〇kgである。

二つは、裾野市立東小学校の北東側から東側にかけて、ゴシヨカ

イドウ(茶畑の人々は「御所街道」というが、「御所垣内」か?)と呼ばれる地域の水田である。モヨリとしては滝頭である。茶畑は深良用水の井組三郷のなかでは中郷に属し、深良用水の水がゴシヨカイドウの水田を灌漑している。

ゴシヨカイドウの水田は現在では麦をつくることはないが、以前は二毛作がふつうで、冬からは麦をつくっていた。土は黒土で掘り進んで行くと砂のマサ土になる。硬い砂の固まりの土である。水はしみ込みやすいので、田植えのときには早くから水を入れ鋤で掻いてデロ(泥)にして水保ちをよくしている。収穫はふつう一反七、八俵で、丁寧につくると一反一〇俵とることができた。一反一〇俵とれることをセドリ(畝取り)といっていた。

茶畑は深良用水の中郷に属するが、水系のなかでは末端に位置するため、水に不自由することも多く、水を求めて水喧嘩がおこることもあった。ふつう田植えの前日は田んぼに水を入れるが、夜になると堰をはずして水をほかにまわすようなこともあった。すると、喧嘩になり、「てめえら、欲が深きやあー」とかといって、水のなかに落としてしまうようなこともあった。

田んぼの悪水はふつうは下の田んぼへ落とし、再び川へ落とし。ふつうは水を入れた川へ落とし、別の川へ落とそうとすると、「オマツチャア(おまえらは)、ソツチ(そちら)の川へ落とすな、コツチ(こちら)の川へ落とせ」といって揉めることもあった。

また、水がなくなり乾いた田んぼをヒソンバ(日損場)といっていた。滝頭の集落と道場山との間の水田はヒソンバになりやすいところであった。戦前のことであるが、ヒソンバのため三反で三俵しかとれない水田もあった。

なお、かつては稲の種類も晩稲が多く、たいていは一〇月一五日茶畑の浅間神社の祭りが終わってから稲刈りをしてきた。滝頭では戦前は稲を刈るとヒラボシ（平ら干し）といって、稲を刈ったあと一日中田んぼに置いて干していた。そのあと家にもって帰り足踏み脱穀機で脱穀をした。稲の掛け干しをするようになったのは戦後である。

畑 畑が多いのは滝頭、本茶、中丸である。裾野駅の東側に位置する中丸は最近では宅地化が進み、以前の景観が失われつつあるが、基本的には畑が多かった地域である。この土質は深良用水による灌漑がおこなわれている滝頭のごシヨカイドウの水田の土質とほぼ同質である。黒土で掘り進むと砂の硬いマサ土になる。水はしみ込みやすい。

本茶では集落のほかは畑が多いが、同じ本茶でも農免道路の東側から大場川までは水田が拓かれている。大場川岸の柏木屋敷も水田に囲まれている。つまり本茶では東へ行くにつれて畑から水田に転換していることになる。土質もそれにつれて変化し、東へ行くほど水がしみ込みにくいという。また、地震がおこったときも畑の方が揺れが少なく、水田の方が揺れが多いので、本茶では地震のときの揺れが柏木屋敷に近くなるほど激しい、と認識する人もいる。

岩盤 茶畑のなかでもとくに滝頭から本茶では岩盤が地表に露出したり、地面のすぐ下に岩盤が存在するばあいが多い。そのもつとも顕著な例は滝頭の不動の滝である。不動の滝は公文名から流れてくる泉川が滝頭から道上にかけての落差のある地点で形成した滝である。

また、岩盤が露出した場所を耕地にすることは不可能である。し

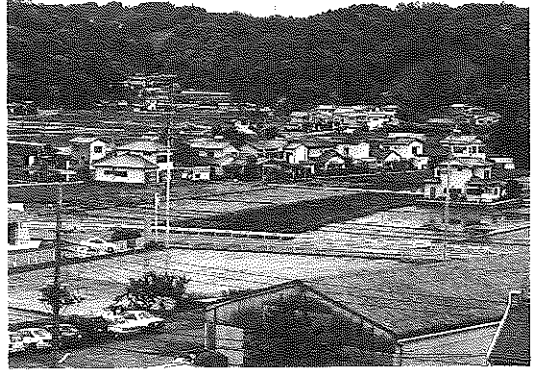
かも岩盤の存在は井戸を掘ることを不可能にする。滝頭では岩盤があるため、道場山の麓の三ヶ所を除き、ほとんどの場所で井戸を掘ることができない。

モヨリの立地 茶畑には市ノ瀬、峰下、道上、滝頭、本茶、中丸という六モヨリがあるが、それぞれ集落の立地条件が異なっている。市ノ瀬と峰下は大場川の谷に沿ってできた集落であり、大場川を隔てた伊豆佐野のムラと景観が酷似している。とくに上流の市ノ瀬では田畑の面積も減少し、山のムラの景観をもっている。道上は農免道路や宅地化の影響でその集落の景観が判然としなくなっているが、これも泉川に沿って不動の滝の下流部分の谷に拓かれた集落である。

これらに対して、畑が多く、深良用水が灌漑する水田をもつ滝頭、本茶、中丸では、平地の畑の間に集落が点在している。これらの地域は、現在農免道路が通るあたりや道上からはやや高地にあり、台地上に形成された畑作の集落である。市ノ瀬、峰下、道上が大場川や泉川の谷に拓かれた集落であるのに対して、滝頭、本茶、中丸は台地に拓かれた畑作の集落であるといえる。

宅地化の進展 現在の茶畑は急速に宅地化の波におおわれている。従来からの茶畑ムラの家に対して、新住民の家が圧倒的多数を占める。このような宅地化の進展は茶畑の立地条件に基づいている。茶畑は裾野市のなかでも比較的中心に位置すること、御殿場線裾野駅のすぐ東側に位置すること、県道三島・裾野線により三島への交通や旧国道二四六号線により沼津への交通の便がよいことなどが、その独特の立地条件である。

とくに裾野駅東側の中丸上・中丸中・中丸下、天理町などはおそ



新戸と水田の混在

らく計画的な都市計画に基づかず宅地化が進展したためであろう、宅地のありようが非常に込み入っている。このあたりはすでにムラとしての景観をとどめないうといってもよく、新興住宅地としてのおもむきを呈している。

また、農免道路を利用するところも宅地化の進展が激しい。とくに農免道路そのものに沿ったところでも、農免道路から箱根山よりの低地に鈴原団地、梶野市立向田小学校、茶畑山に青葉台団地が拓かれている。また、梶野市立向田小学校、東中学校も山の上に建設されており、かつての茶畑ムラの水田や共有地の場所に宅地や公共施設がつくられているのが現実である。

第二節 水と生活

(一) 井戸・カワバタ・水車

茶畑のなかでも滝頭と本茶は岩盤があるため、井戸を自由に掘ることができず、生活用水の利用に苦勞をしてきた。限られた井戸を共同で使用して水を汲み、またカワバタ（川端）の水を汲み生活用

水として利用してきた。現在では水道が引かれ、しかも下水道の不整備によってカワバタの水に汚水が流れ込むこともあり、井戸やカワバタへの依存度は少なくなっているが、かつては生活用水を井戸とカワバタに全面的に依拠していた。

滝頭 滝頭では井戸が東小学校の東側にひとつ、トウフヤにひとつ、シモにひとつ、といくつかあったが、数えるほどであった。それで、飲み水は井戸から汲むほかは朝早く川から汲んできた。また、滝頭では不動の滝の下に湧き水があるので、そこから汲んでくることがあった。



カワバタ・ネギを洗っている

井戸の水を利用するほかに、滝頭ではどの家でもたいていカワバタをもっている。水もよく流れ、道路に面したところにカワバタをつくっていた。洗濯などとともに濯ぎはカワバタでしたものであった。野菜や食物を洗うのもカワバタを利用していた。

現在では汚水が川に流れ込み、汚れが激しいため、手を洗うこともできないところもあり、カワバタを利用する家は少なくなった。水が白くなることもあり、これは下水の不整備によりトイレトベーパーの溶けたものが流れて交じっているとも言われている。これが水田に入る

こともあるという。

しかし、かつては川の水を飲み水としても利用していたため、常に川をきれいにしていたものであった。子供が川へ小便をすると、「水の神さんに罰があたる。チンボウが曲がっちゃう」とかいってどなられることもあった。

風呂の水は川から汲んでくるのがふつうであった。風呂の水は毎日全部をかえるのではなく、半分くらいを捨てて、その分の水を足すのがふつうであった。風呂の水汲みは家によっては子供の仕事になっていた家もあった。ふつう風呂は二ワの隅にあり、風呂の横にたらいを置いて、身体は風呂のなかで洗った。

本茶 本茶では金毘羅神社のところに井戸を掘ってあるので、本茶の家々ではここまで水を汲みにきて飲料水として使用していた。縦井戸で釣瓶で汲み上げる仕組みにしていた。水を汲みにくするのはふつうはオンナシユウ（女衆）で、汲んで帰ると水瓶に入れておいたものであった。この井戸については、金毘羅神社の下に水神の石碑（年不詳）があり、井戸を掘った人々の氏名が刻まれているが、現在ではこれを祀ることはないという。

このほか、本茶ではサイノカミド（庄司清一）の内屋敷に井戸がひとつあった。

金毘羅神社の井戸は毎年一回イドガエ（井戸替え）があった。イドガエの日取りはとくに決まっているといことはなかったが、ふつうは水が枯れる六月、七月におこなわれた。本茶全体から人が出て、井戸の中へ人が入り砂や砂利をすくった。

金毘羅神社の井戸は戦前のことであったが、本茶のなかで話し合いの結果、水道にした。金毘羅神社のところに水槽タンクをつくり、

ここからポンプで引く形式であった。戦後、裾野市になってからは、本茶でも市の水道を利用している。

本茶では、どの家でも井戸のほかにかワバタを一ヶ所はもっている。石を敷き詰め、その上に水が流れるようにしてある。現在では鍬・鎌など農機具を洗うような程度であるが、かつてはカワバタで洗濯をしたり、人參・大根など野菜を洗ったりしたものであった。

水車 茶畑では水を日常の生活用水としてのみ利用してきたのはなかった。水車をまわし、穀物を搗くための動力としても利用してきた。

現在滝頭の公民館のある裏の水路は深良用水の水が流れている。現在ではまったく面影がないが、かつてここには水車小屋があり、石臼は四つあった。滝頭の共有になっていて、一日交替で米や麦を搗くことができた。水車小屋には鍵があり、その鍵が上組・中組・下組の順に一軒一軒順番にまわってくる。順番がまわってくると、米や麦をもっていき搗くことになっていた。バツタン、バツタンとひとりですることができる水車小屋であった。

なお、この水車には上流から屍体ながれてきて車にひっかかったことがあったという。

(二) 関東大震災と水

震災による環境の変化 地震が地中の生態系を変化させることがある。

本茶では一九二三年九月一日関東大震災のあと水の流れが悪くなり、それまでは水田をつくっていたが、水田をやめ畑に転換させた。関東大震災の前までは水があるところは水田にして、水がないとこ

るは畑にしていた。ところが、震災を境にして、水田に水を入れようとしても水がどこかにもぐってしまふようになったという。その結果、本茶では大場川に近い地域では現在も水田があるが、ほかのところではほとんど水田を見ることはできない。

また、震災のときには川の水を揺すったので、川にいた蟹が川の上へあがってしまうようなこともあったという。

そのほか、震災のあと裾野駅の踏み切りのところで貨物列車が脱線転覆した事故があった。そのとき、朝鮮人がレールに油を塗ったので脱線転覆したという流言蜚語がとびかかったこともあった。

第三節 箱根山と生活

(一) 二二一名共有

茶畑山 箱根山をすぐ東側にひかえた茶畑は箱根山に共有地をもっている。現在これは二二一名共有として維持されており、茶畑山ともいわれている。

茶畑山から箱根山の高いほうの峠までもととは茶畑の山であった。戦後、茶畑ではこれを二二一名共有としたのである。同じ裾野市域でも深良や須山は財産区をつくり、共有地を維持しているが、茶畑では二二一名共有として権利を維持し、ふだんの管理は山岳委員会がおこなっている。

戦後二二一名共有とする以前に箱根山の高い方は藤田観光に売却しており、二二一名共有として維持されているのは以前からのままの状態ではない。藤田観光へ売却したときには、現金を静岡銀行沼

津支店から輸送する際にパトカーの護衛をつけてくるほど大金であったという。一軒あたり一〇万円ほども受け取ったともいわれている。ちょうどまだ馬力による輸送があったところで、一日馬力を引いて千円というころだったという。

二二一名共有とモヨリ 二二一名共有は茶畑のなかでもさらにモヨリごとに分割してある。そして、さらにモヨリによっては個人個人に分割しているばあいもある。たとえば滝頭では三三名共有であり、本茶では一七名共有である。

二二一名共有について権利をもつ家は茶畑山に祀る山の神の祭りを執りおこなう。九月一七日が山の神の祭りである。なお、茶畑では人によっては茶畑山の山の神を「タケノヤマノカミ（岳の山の神）」と呼ぶばあいもある。

山の神 山の神の祭りは氏子総代が中心になっておこなわれる。氏子総代は各モヨリから一名ずつ出る。現在では市ノ瀬一名、峰下一名、道上一名、滝頭一名、本茶一名、中丸上一名、中丸中一名、中丸下一名、合計八名である。八名のうち一名が代表となる。任期は三年一期であるが、実際は氏子総代になると交替するために次の代わりの人を頼み、各モヨリで承認を得なければならない。なお、氏子総代は山の神の祭りだけを執りおこなうのではなく、一月一七日浅間神社、八月二五日浅間神社内合社（浅間神社正面に向かって右側）の祭りも執りおこなう。

九月一七日山の神の祭りの前には必ず道刈りがおこなわれる。一九九一年のばあい九月八日に道刈りを予定したが雨のため延期となり九月一五日に道刈りがおこなわれた。朝から出て道刈りをするが出ない家ではデブソクキン（出不足金）を出さなければならない。

デブソクキンは一九九一年現在で三千円である。

九月一七日は午前中のうちから二一名共有の権利者が出て、山の神のある場所の周囲の掃除をする。以前は山の神のあるあたりの植林が小さかったためこの日に下刈りをしたが、現在では掃除をするだけである。この日は山の神で祝詞をあげ赤飯をおき戻ってくる。そのあと各モヨリごとに山の神講のオフルマイ（お振る舞い）がおこなわれる。

本茶モヨリでは二一名共有の権利をもつ一七軒が、山の神講のオフルマイの当番を毎年交替でまわしている。順番にはとくに決まりはないが、不幸があつたときには当番を交替することになっている。

滝頭モヨリでは三三軒が二一名共有の権利をもっている。二一名共有は一軒からだれでもよいので出ることになっている。二一名共有は株の形式になっているので、一軒で数株も取得しているばあいもあるが、一株でもあれば山の神講に出席する。現在では公民館で山の神講のオフルマイをしているが、かつては当番として個人個人の家を順番にまわっていた。オフルマイの当番になると近所の人を手伝いに来ていた。現在はオフルマイのために一軒千円ずつ集めているが、以前はお米を集めていた。

市ノ瀬モヨリでは二一名共有の茶畑全体でもつ山の神とは別に、市ノ瀬モヨリの山の神をもっている。そのため本茶や滝頭とはオフルマイの形式がやや異なっている。二一名共有の山の神の祭りを終わると、市ノ瀬の山の神に寄りお神酒をあげる。昔はこのときに一文商いがでたり、万才がおこなわれることもあったという。そのあと公民館でオフルマイになる。市ノ瀬の公民館のところは、かつては青年クラブであつたという。

市ノ瀬の共有地 市ノ瀬では茶畑全体でもつ二一名共有とは別に市ノ瀬だけでもつ共有地をもっていた。現在この共有地のほとんどは藤田観光に売却しており、集落の近くにわずかに残るのみである。市ノ瀬ではこの共有地を売却したとき、そのお金で二百ポルト農電といって、電気を引いた。この農電でモーターを動かす精米所もつくることができた。また、農電を引いたとき有線を市ノ瀬に引いたので、市ノ瀬のモヨリの連絡は有線を使うことが多い。

神社持ち 二一名共有のなかでも神社持ちになっている共有地がある。県住（県宮住宅）より少し奥に植林してあるところがあるが、これは浅間神社の神社持ちである。また、山の神のある周囲も植林してあるが、これも山の神の神社持ちである。

一軒前と新住民 二一名共有という形式で茶畑の住民に共有地への権利が固定されたのは明治以降のことである。このように共有地などさまざまな共有財産への権利がある特定の家々に固定されることによって、その権利の有無が事実上ムラの家の家格を意味させることがある。

滝頭と本茶についてみてみよう。一九九一年現在で裾野市が行政的に滝頭区として数える家は二〇九軒、本茶区として数える家一九二軒である。ところが、二一名共有の権利をもつ家の軒数は、滝頭モヨリが三三軒、本茶モヨリが一七軒にすぎない。この数字の格差はなぜ生じたのであろうか。それは、茶畑山への権利がおそらく明治以降のある時点で一軒前の家として存在していた家のみ固定されたからである。その後の分家や、近年著しく増加する新住民は、金銭によってこの権利を買わなければ、二一名共有へ参加することはできない。また、新しく茶畑にできた鈴原（団地）一〇一軒、

県宮住宅四〇五軒は、物理的空間としてみれば茶畑の領域内にありながらも、二一名共有の権利をもたない。

こうしたとき、たとえば本茶区一九二軒のうち、本茶モヨリの七軒のみが一軒前の資格をもち茶畑ムラの家として存在しているといえる。行政的に区として把握された家とムラの家とは重複するもの、イコールではない。本茶モヨリについていえば、一七軒を除けば他の家は区の家ではあっても、ムラの家ではなかった。一七軒だけが一軒前として認められた家格を保持していると考えることができよう。

(二) 箱根竹

茶畑からみて峠まで箱根山のもっとも高いところは箱根竹の群落がある。現在でも箱根山の各所に存在しており、箱根竹の利用が少なくなつた現在でもその様子をうかがうことができる。茶畑のみならず裾野地域の村々では、農閑期、秋から冬にかけての現金稼ぎとして箱根竹を採り、副収入としていた。

「精根かざりかせげた」 茶畑のなかでも箱根山にもっとも近い市ノ瀬のある男性（一九二二年生）によると、箱根竹は「精根かざりかせげた」という。箱根竹を採れば採るほど現金収入を増やすことができたという意味である。

箱根竹を採ってきてつくるのはパイプのラオヤパイスケ（茶畑ではパースケと発音する人もいる）が多かったが、ほかにも多くの用途があった。養蚕のときの籠をつくることもあり、これは四尺五寸の長さがある竹であればよかった。また、六尺に足りない竹は、家をつくるとき壁のなかに入れるようなこともあった。コリ（行李）

竹にすることもあった。

滝頭のある男性（一九二七年生）によると戦後まもないころでも、冬一二月箱根竹を採りに行くとき非常にいい副収入になったという。当時箱根竹を採ると一〇貫目くらいという形で計算され、一日で一円二〇銭をもらったことがあるという。そのころ、一二月暮れの一円二〇銭といえはかなりの大金であった。箱根竹で得た収入は、正月の小遣いとか、暮れの借金返済に充てるなどしていた。

肥料 終戦後の混乱で肥料がないときには、この箱根竹を肥料に使つたこともあったという。そのままでは肥料にすることはできないので、竹を焼いて灰にして肥料にした。とくにトマトはふつう毎年同じところにつくることはできないが、灰をやると同じところにトマトをつくることのできたので、灰の肥料をやつたものであつたという。

(三) 草刈り

箱根山でも峠付近のもっとも高いところは箱根竹の群落があつたが、その下は草刈り場があつた。茶畑の人々は、この草刈り場から馬の飼料にする、あるいは馬に踏ませて堆肥にするための草を刈り、屋根葺きのための萱を刈ってきていた。

草刈り場 二一名共有のなかに草刈り場があつた。草刈り場はモヨリごとにわかれていたので、茶畑ではそれぞれの草刈り場に行き、飼料にするための草を刈り、あるいは屋根を葺くための萱を刈っていた。

滝頭では現在県住があるところから上り、箱根山の中腹より上のシシロ（志々呂？）というところに草刈り場があつた。中丸も同じ

ところに草刈り場をもっていた。箱根山はそのまま高いところは箱根竹が群落をつくっている、シシロというところはその箱根竹の群落よりすぐ下側にあっていた。ここは東向きの山で陽当たりが良好であった。飼料にする草だけではなく、屋根を葺く萱もここから刈ってきていた。市ノ瀬、峰下、本茶の草刈り場は市ノ瀬から上って行くところで、タキノサワ(滝の沢)というところにあった。滝頭や中丸の草刈り場とは異なっていた。

シシロへ草刈りに行くにはニンドウバというところまでは馬力で行くことができたので馬力を使い、そこから先は馬のコニダ(小荷駄)で行った。したがって、刈った草を下ろすときにもニンドウバまではコニダグラ(小荷駄鞍)でつけてきて、ニンドウバで馬力を使い家までもってきた。家畜は茶畑ではもと馬がエラカッタ(多かった)が、徐々に牛に代わって行った。戦後は牛のコニダにするようなこともあったようだ。

ボンクサ 草刈りに行くのは夏である。期限が決められているということはなかったし、家によっても草刈りのしかたがすこしずつ異なる。

山へ草刈りに行くのは、田んぼの土手の草を刈ってからであるという人がいた。田植えを六月にするので、そのあとふつつ田畑の草刈りをした。そして、たいてい盆前までには田畑の草刈りを終わっているのがふつつであった。茶畑はお盆が八月一日である。山へ草刈りに行くのは田畑の草刈りが終わったお盆の前後からであった。

ボンクサ(盆草)といって七月三二日は山へ草刈りに行った。そして、お盆の八月一日は草刈りを休んだ。翌二日はアサクサ(朝草)といて草刈りに行った。草刈りに行くには、草刈り場が遠く、また日

中になると暑いので、朝早く起きて涼しいうちに草刈りに行った。

奉公人の場合はたとえお盆の八月一日であっても馬へ草をやらなければならぬので、その草を刈ってこなければ休むことはできなかった。それで、田んぼの土手などから草を刈ってきていた。田んぼから草を刈ってくるときには、コニダ(小荷駄)や馬力を使うことはなく、天秤棒でかついでもってきていた。

ワカイシュウ ワカイシュウ(若い衆)が仲間連れ立って草刈りに行くことも多かった。滝頭のばあい現在不動堂が青年クラブであったので、ワカイシュウがこの青年クラブへ泊まっていた。それで、朝になると青年クラブからそのまま草刈りに出かけたのである。一日に刈る草の量はコニダで馬の背に左右三把ずつ合計六把つけることのできる量であった。六把で一駄であった。

なお、箱根竹をコニダにするときには草とは異なり、四把で一駄であった。左右二把ずつ馬の背につけていた。

シシロは東向きの山であるため草を刈っているところから駿河湾がよく遠望できた。そして、シシロから沼津の大瀬を見ると、ちょうど午後二時ごろになると海の色が赤くなる。海の色が赤くなると、「ぼちぼち帰らないと暗くなる」といって、家へ帰ってきていた。

お盆を過ぎるとホシクサ(乾し草)といって草刈りの方法が変わった。草を刈ると乾燥させてからもって帰ってくる。これは草を刈るとそのまま束ねるのではなく、刈りっぱなしで山で乾かしておいて、翌日もって帰ってくるのである。このホシクサは丸めて納屋に積んでおいて冬の飼料にしていた。

秋になるとだんだんススキができてきて草が強くなってくるので、

草を刈って帰ってくると切った馬の飼料にしなければならなかった。押し切りにして切っていたが、戦後カッターが入り、カッターで草を切った馬の飼料にするようになった。

堆肥 刈ってきた草は厩に入れ飼料にすると同時に馬に踏ませた。踏ませた草は堆肥小屋へ出した。堆肥小屋へ積んでおきキッカエシ（切り返し）をして細かくしておくこと堆肥になる。そのとき、早く腐るようにと肥料で人糞をかけることもあった。また、堆肥小屋には生ゴミもここに入れるのがふつうである。

人糞は自分の家のものほか、入札によって小学校からもらってくる家もあった。ただし、わざわざ沼津・三島などへ出かけて行き、溜めからそのままかけるのではなく、ドブからかけた。ドブというのは肥溜めからさらに人糞を移して入れてあり、使った風呂の水もドブへ入れていた。

かつてはサツマがエラカッタ（多かった）ので、堆肥はサツマに入れることが多かった。そのほか、陸稲・人参・牛蒡など畑の作物に堆肥を使っていた。水田には馬に踏ませた堆肥を入れることはなかった。水田には藁を稲むらに積んでおいてそれをはずしてきて馬に踏ませて、それを水田に入れていた。

堆肥を入れるときには鍬でサクをきって堆肥と魚の粕を入れ、その上に土をかけ、サツマを挿した。サツマを挿すのは五月〜六月ごろで収穫前の麦の間に挿していた。麦の間に挿すと、麦が陽をさえずり挿したばかりのサツマが枯れなくて済むのである。

サツマの収穫は現在では早くなって九月・一〇月ごろであるが、以前は一月で霜が下りてからサツマを掘ることもあった。サツマ

を掘ると、ホリゴミ（掘り込み）といってサツマの葉や茎はそのまま土のなかに埋けていた。ホリゴミがそのまま地中で腐って堆肥になるのである。そして、サツマを掘ったすぐあとに麦を播いていた。その時期はちょうど稲刈がおわったころでもあった。

なお、ホリゴミについては、畑で陸稲をつくったあとホリゴミにするときには、草を入れた。このときも、翌年サツマをつくるときにちょうど草が腐って地が痩せないで、上質のサツマをとることができた。

屋根替え 滝頭では屋根替えの萱も草刈りの萱と同じようにシロから刈ってきた。麦播きも終わりやや暇になってから萱を刈った。これは草刈り場から自由に刈ってよかった。ふつうは屋根替えの萱を刈ると、それを丸めてそのまま山へ立てておく。そして、丸めた萱の束を四束集めて一把にした。もって帰ってくるときには、馬へ六把つけ、人間が背中一把背負ってきた。

屋根替えを実際にするのは二月の寒いころであった。萱だけではなく麦から混ぜることもあった。屋根屋にきてもらい屋根を葺いた。屋根替えには近所から手伝いにくるのがふつうであったが、モヨリや組のなかで順番で屋根替えをするようなことはなかった。茶畑には農業の合間合間に屋根屋をする家もあり、屋根替えのときには屋根屋を頼んでいた。

(四) 雑木林

箱根山には草刈り場のほか雑木林になっているところもあった。現在では雑木であったところも植林されているところがほとんどであるが、かつては雑木林も多く、茶畑の人々は雑木林を利用して、

雑木の落葉を掻き堆肥とし、また燃し木を拾い燃料とし、あるいは炭焼きとしても利用してきた。箱根山の雑木林を多目的に利用してきたといえる。

なお、茶畑では雑木のことをサツボクと発音している。

落葉を掻く 冬の一月から二月になると山の落葉を掻いてもって帰り、サツマガラ（薩摩倉）へ落葉を入れ、サツマを伏せた。そして、六月になるとサツマを挿すための蔓をとった。

落葉を掻くのは二―三名共有の山からではなく、個人持ちの山から掻いてくるばあいが多かった。それぞれクヌギや松を植えてあるところが二ヶ所から三ヶ所はあり、そこからコマンザライで落葉を掻いてきていた。

薪 燃料に使うための薪も雑木林から採ってきていた。個人個人で採りに行くが、戦後は自分の家で使う分だけではなく、燃料として売ることもあった。

雑木林から薪を採るときには馬のコニダにつけてもって帰ってきた。ふつう薪をコニダにするときには左右二把ずつ合計四把で一駄にした。ただし、薪を燃料として売ればあいには薪の束を小さめにして左右三把ずつ合計六把で一駄にして馬につけて帰ってきていた。

炭焼き 雑木林では炭焼きがおこなわれた。茶畑の地元の家々では山に籠もって炭焼きをするというのではなく、よそからきた専門の炭焼きが炭焼きをしていた。伊豆の方から専門の炭焼きがきていたという。地元の家々では雑木をもって帰り、炭焼き窯で炭を焼いて家で使っていた。

滝頭ではモヨリでひとつ炭焼き窯をもち、利用は家々で順番が

あった。滝頭の炭焼き窯は箱根山に入って専門に炭焼きをしている人につくり方を教えられたという。石を積み、その上に土を塗り、土をたたいて炭焼き窯をつくった。滝頭の炭焼き窯は一回で三〇俵くらいできる窯であった。順番で炭焼き窯を使う日を決めておき、木もそれぞれ個人個人で切っておいた上で窯に入れた。

茶畑の人のなかには戦後まで、専門の炭焼きが焼いた炭を一俵いくらの日当で馬力を使って山から出す仕事を経験した人もいる。馬力で箱根山の行けるところまで行き、馬力を通せなくなると馬で炭焼きのところまで行ったという。そして、馬の左右に三俵ずつ六俵、馬の背に一俵、自らが一俵を背負い、合計八俵を一度に出した。馬力の通ることのできるころからは、馬力を使った。

サキヤマ 山で雑木や楡林してある木を切る仕事をサキヤマといった。茶畑では製材屋に頼まれてサキヤマをすることが多かったようだ。サキヤマで切るのは夏はほとんどなく、冬が多かった。手で挽いて木を切り、コロバシ（転ばし）にしておいた。

茶畑にはサキヤマで切った材木を馬力で運んで出すことを経験している人もいる。

馬力は山の行けるところまでなので、最初馬だけでズリカン（摺り籠）というやり方で切った材木を出した。ズリカンというのは材木に籠を釘で打ち、その籠から鎖を結び、馬で運んできた。ズリカンで馬力のところまで運び、そこからは馬力で製材所までもっていった。

これら炭焼きや材木を馬力で出すのは、明らかに箱根山を東側に控えているがゆえに発達した賃仕事である。箱根山は現金収入を直接得るための重要な山であったともいえる。

(五) アラクオコシ

茶畑では箱根山の利用を、山としてのみおこなっていたわけではなかった。山を切り拓き畑としてサツマなど作物を栽培してきた。山を切り拓き畑とすることをアラクオコシ（荒く起こし）といっている。

アラクオコシ アラクオコシは植林してあった個人の山で、杉・檜の伐採をしたあと、根の腐るのを待って畑にすることをいう。二―三名共有のところをアラクオコシにすることはなく、個人の植林を伐採したあとを借りてアラクオコシにするのがふつうであった。焼畑にすることはあまりなかったようだ。

アラクオコシにするような場所ではできるだけ陽当たりのよい場所を選んだ。たとえば、現在裾野市立東中学校があるあたりは陽当たりのよい山であって、この辺りはアラクオコシには最適であった。アラクオコシにすると最初は陸稲、蕎麦を蒔き、だんだん土がこなれてくると人参、サツマを栽培するのがふつうであった。冬には麦もつくった。

カイコン 戦時中から戦後にかけて食糧事情が悪化したときには、箱根山の随所でカイコン（開墾）がおこなわれるようになった。それまでは比較的集落に近いところをアラクオコシにしていたが、カイコンの段階になると一時間ほどもかけて行かなければならない高いところまで切り拓いていた。山の神があるすぐ下のあたりまでカイコンがおこなわれていた。このような遠くでも、馬に肥料をつけて運んで行った。

カイコンは植林を伐採したあとだけではなく、草がはえていたよ

うなところまでをも畑にした。カイコンではとくにサツマを中心につくることが多かった。土質のよいところでは人参・牛蒡などをもつくることができた。

猪 カイコンした畑を荒らすのが猪である。箱根山には猿はいない。猪が荒らしにくると、一反くらの畑でもすぐに食べられてしまうという。挿したばかりのサツマを全部食べられてしまうようなこともあったという。そのために、猪対策として、猪が畑に入らないように周囲に杭を打ち針金を結わえるとか、それにコールトールを塗って防ぐとか、廃油を湿らせるとか、工夫を凝らした。畑のまわりにトタンをめぐることもあった。場所によっては猪の通り道があるので、そこへ落とし穴をつくって猪を捕ることもあったといわれる。

ハクビシン 現在では猪が出ることは滅多にないが、ハクビシンが出てきてモロコシなどを食べてしまうという。モロコシの畑に囲いをしてそれを飛び越えて食べられてしまうこともある。

ハクビシンについては、以前は須山の方にいたが、須山に芝が多くなって、そのために近年茶畑の方に出るようになったという人もいる。

第四節 四季の変化と動植物

(一) 風と気象

富士のカサゲモ 富士にカサゲモ（笠雲）がかかり、上（北）へ流れると晴れになり、下（南）へ流れると雨になる。

ナライ 北風をナライという。ナライが流れると天気が崩れる。
イナサ イナサは箱根から吹く風である。中部地方から関東地方へあがってくる台風のようにイナサが吹く。イナサが吹くと、風が強いので柿の木が倒れるようなこともある。滝頭の不動堂の横に椎の木があり、その木がイナサで倒れたことがあるという。
西風 冬に強い西風が吹くときがある。西風が吹くときには天気がよい。西風が吹くと、「三日や五日はやまにゃあー」といったりする。

虹 朝虹がかかると天気がよいという。
月と天気 月が空の真上に上る前にカサグモをとると雨になり、下るときにカサグモをとると天気になる。

(二) 魚

ウグイ 芦ノ湖にウグイがいるので、茶畑から芦ノ湖へ行き、ウグイをとりに行くこともあった。

蟹 茶畑の川には蟹がいた。現在ではほとんどいない。ビンモジリ(曇モジリ)に小糠を入れて川でとった。

ウナギ 滝頭の不動の滝の下の滝壺は現在ではゴミが溜まっていることもあるが、以前はここにウナギがいた。また、水もきれいなので蕎麦とかウドンをここで洗って食べることもできた。

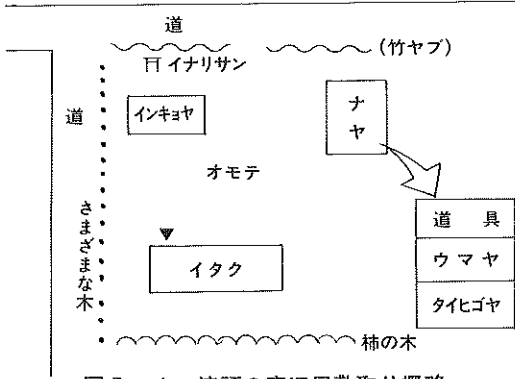
(岩 田 重 則)

第二章 社会と生活

第一節 家と屋敷

(一) 屋敷構えと付属屋

ヤシキの境界 茶畑は建て替えが進んでいて、かつての家や屋敷の姿を忠実に描き出すことはむずかしい。しかし、近年の新建築を除くと、昔からの家と暮らしを念頭に建て替えられた家も多い。そのため、調査はそこから溯っていくかたちの聞き取りである。

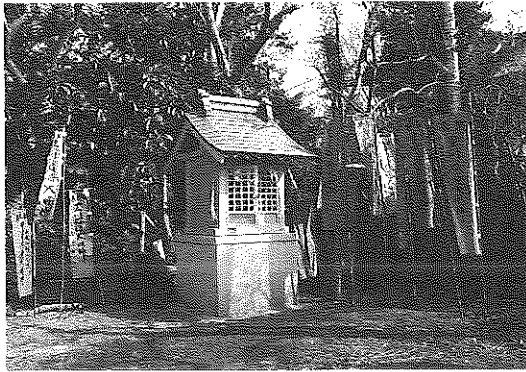


図Ⅱ-1 滝頭S家旧屋敷取り概略

宅地全体のことをヤシキという。ヤシキの境界は、「あまりはつきりさせなくても分かる」という感覚がもともとの家にはある。線引きするような区切りはないが、木を植えたり土を高く盛ったりすることで、いちおうのヤシキの境界をつくっている。道路に面して木を植えていた家は多い。境の木としては、ヒヤクメガキ、柿、竹、茶、檜、

杉、樺などさまざまであり、とくに決まった木を植えるというのではないようだ。道上のS家ではかつて道路との境に樺を一五、六本生け垣のように植えていて、なかには樹齢三〇〇年以上のものもあった。むかしはカナメをよく垣根にしたともいう。また、ウマクワズは葉の厚い木で火に強く、背も高くなるので、火除けにいいと植えられた。

オモテを囲む屋敷取り イタク(居宅)。オモヤ(母屋)、オオヤ(ともいう)の向きはまちまちである。昔は自然災害から家を守るため、南北に長い家が多かったという。このためか、今でも東向きが多いようだが、「ヤシキのつこうでどちらを向いてもいい」という。道路からの入り口と付属屋とのかねあいで西向きという家もある。



稲荷さん

関をジョウグチと呼ぶが、イタクの玄関をジョウグチという人も同じくらいの割合でいる。九二歳の清水重雄さんは「自分はヤシキに入るところをいっている」という。重きを置くのはイタクの前の広いオモテである。オモテは小麦や米の粃を干したり、養蚕に使ったり、屋根替えのときに古い葺を降ろしたり、人寄せのときに手伝いのシ(衆)が仕事をしたり、大そうじのときに

家財道具を出しておいたり、日々の暮らしに欠かせない空間である。イタクと付属屋はオモテを取り囲むようにして建てられている。ヤシキ内にまつる神様は、イナリサン（稲荷さん、稲荷神）が多い。ほかに、コンピラサン（金毘羅さん）、ハチマンサン（八幡さん）、オスワサン（お諏訪さん）などをまつる家もある。ヤシキに植えていけない木としては、「ピワはうなり声を聞きたがるので、ヤシキ内に植えてはいけない」といわれる。

付属屋いろいろ 付属屋は、ナガヤ（長屋）、コクグラ（穀蔵）、インキョヤ（隠居屋）などがある。

ナガヤにはタイヒゴヤ（堆肥小屋、タイヒベヤ、タイヒビヤともいう）とウマヤ（馬舎）とドウグベヤ（道具部屋）がある。ウマヤにはたいてい馬を二頭飼っていたが、戦中戦後に牛に変えた。ウマヤで馬や牛に踏ませた草をタイヒゴヤに積んでおいて、きりかえして堆肥にする。ナガヤを養蚕に使った家もある。ヤシキへの出入り口にあるナガヤが通り門になっているところは少なくないが、その多くは終戦後に流行ってつくった。

ソトベンジョ（外便所）もナガヤにあることが多い。たいていはウマヤかタイヒベヤのところにあり、三方を板壁で囲んで目隠しの戸がついている。しかし、昔のソトベンジョは、半分地面にうめた桶や甕の上を藁屋で覆っただけのものだった。月の光のかげんでお化けが出るように見えることがあり、子どもは夜用を足しに行くのを怖がったものだった。同じソトベンジョでも、戸のついたものはチョウツバと呼んでいた。

インキョヤはオモテに面して建てるとは限らず、イタクの裏の方に建てることもよくあった。カマヤ（台所）もつけて、独立した住



付属屋

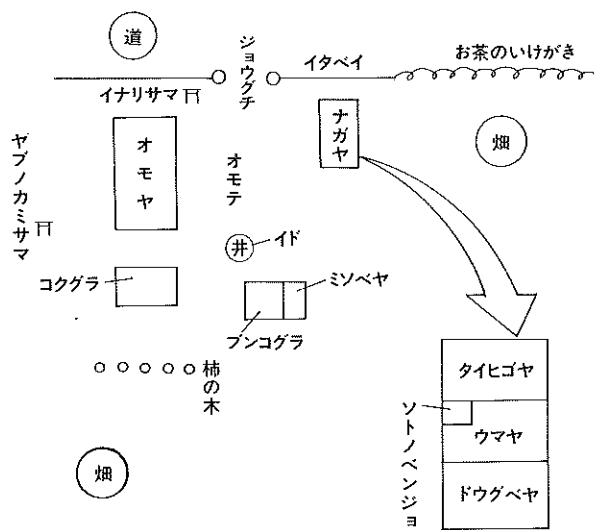
まいである。

以上が付属屋の概略であるが、付属屋の呼称には多少の混乱が見られる。ミソビヤとコクグラのある建物をもノオキ（物置）と呼んだり、ナガヤと同じ機能の建物をナヤ（納屋）という家もある。さらに、ホカエ（またはホカヤ）をナヤだとする人と、インキョヤなど人が住むようになっていく建物を目指すという人がいる。インキョヤは隠居するときにいう呼び名であってなにかのときにはべつの目的で住むこともあり、それらを含めて住めるようになっていく建物をもホカヤというということである。この場合、ホカヤではない付属屋をベツヤということもある。

屋敷取りの例

図II-2は本茶の地主だったS家の屋敷取りである。オモテを開んでイタクと付属屋が配置され、ナガヤの裏側と柿の木の奥が畑になっている。木の坂塀（昭和三三年ころから石塀にかえた）を入り口付近に立て、ヤシキのぐるり（周囲）をお茶の生け垣で囲っている。このお茶の葉をつんで自分たちの飲むお茶にした。

ナガヤにはタイヒゴヤ、ウマヤ、ドウグベヤとソトベンジョがあ



図Ⅱ-2 本茶S家屋敷取り略図

る。タイヒゴヤのズシ（屋根裏を二階にした部分）のところに畑にしいたり堆肥にするための糞を入れる。ウマヤには馬が一頭いたが、終戦後は馬をやめてウシンベ（牛）を二頭飼った。ウシンベをやめたのは昭和三四、五年である。

コクグラには小作の米を入れた。漆喰でなまこ壁だったが、関東大震災のとき壁がおちてしまった。戦争中に農協に頼まれて米を預かったことがあったが、そのとき三〇〇俵入った記憶がある。コクグラの二階にいろいろな書類があった。ブンコグラ（文庫蔵）には膳や椀があり、本茶の人が人寄せするときに貸した。モヤリジユウ

（餅をまくときの桶）はずいぶん遠くからも借りにきた。ブンコグラの横はミソベヤになっていて、みその樽、しょうゆの樽、漬物樽などを置いておく。

井戸は深さが四丈くらいあって、いい水が出た。飲み水のほかに、さかなやすいかを吊るして冷やしたりしたという。

ジョウグチのそばにイナリサマがある。かつてはカマヤの方（オモヤの裏、図Ⅱ-3参照）にあったが、鬼門の方にあるのはいけなというので、今の位置に移した。オモヤの裏側にはヤブノカミサマがある。

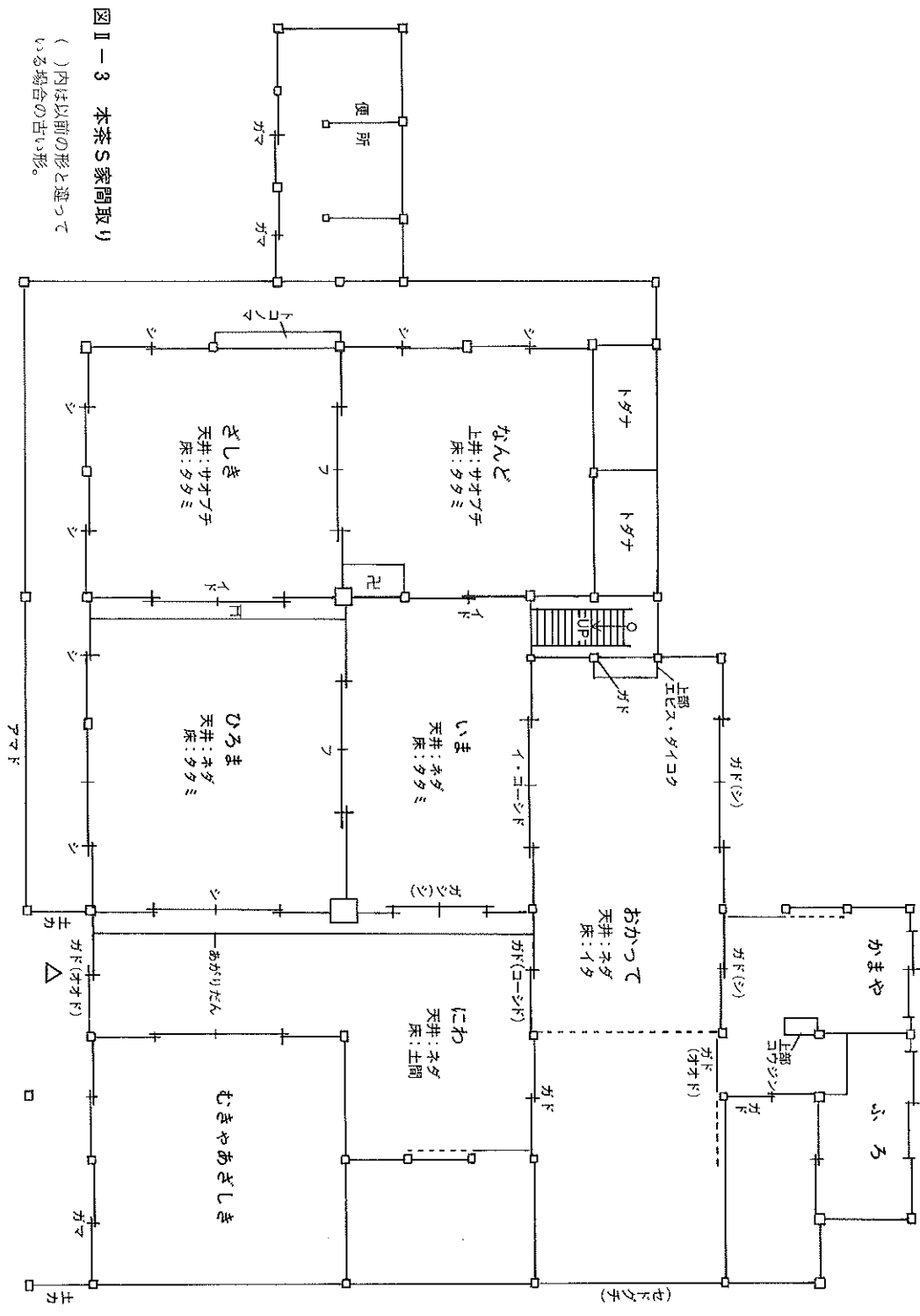
図Ⅱ-4は市ノ瀬のS家の屋敷取りである。山の傾斜を切り崩しているため道路がイタクの二階くらいの高さから降りてきていて、それが自然の境界になっている。

ヤシキの入り口にトオリ（通り。通り門）のあるナガヤがあり、オモテをはさんでイタクが向き合っている。イタクの裏にインキョヤがある。

ナガヤは戦前からこの場所であり、クサヤネ（萱葺き屋根）の平屋で、現在同様トオリをはさんでタイヒゴヤとウマヤがあった。タイヒゴヤは、春に堆肥を出したあと養蚕に使っていた。ズシには蚕のカゴなどふだん使わないものをしまっておいた。

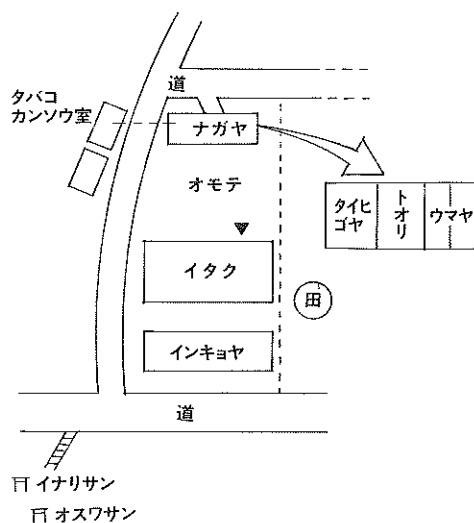
昭和二二年ころ、タバコの栽培をするようになって間もなく、タバコの仕事の便利を考えて二階建て瓦葺きの今の形に直した。一階部分はトオリを九尺（二・七メートル）から二間（三・六メートル）に広げたほかは同じ構造で、二階はすべてタバコの作業場にした。

インキョヤは、かつてモノオキと呼んで、クサヤネの平屋だった。コクグラに使い、養蚕の時期にはここで寝た。昭和一〇年に二階建



図Ⅱ-3 本茶S 家間取り

()内は以前の形と違っている場合の古い形。



図Ⅱ-4 市ノ瀬S家屋敷取り

ての現在の形に建て替えて、話者（大正元年生）が結婚したときにインキョヤとして親が住んだ。話者の息子が結婚してからは自分たち夫婦が住んでいる。カマヤもあって、独立した生活ができる設備が整っている。

道路をはさんで、タバコの乾燥室が二棟ある。昭和三二年以降にタバコを始めたときに建てた。

バス通りをわたった山の斜面にS家のイナリサンとオスワサンがまつられている。家から少し距離があるが、「慣れているのでおまつりするの苦ではない」という。

屋敷墓 古い家（昔からの家）には屋敷墓がある。かつてはヤシキが広がったので、裏に広がる畑の中に屋敷墓があった。セドグチ（裏口）のほうにあった家もある。市川静夫家の屋敷墓は今もヤシキに共に同墓地に移されているが、市川幸男家の屋敷墓は今もヤシキに残っ



屋敷墓

部屋として使えるかたちになっている。ただし、四間を全部使うことは稀で、オモチに面したふた部屋を続けて使う。

居住部分の四つの部屋の名称は、図Ⅱ-5の例にも見られるように、ザシキとナンドは決まっているが、ニワ側のふた部屋が多少違っている。オモチ側の部屋はヒロマという家が多いが、ヒロマという前にナキヤア（中居）と呼んでいたという人がいる。また、先述の清水重雄さんは、ナキヤアは畳を敷いている部屋すべてのことを指すものだという。子どものころは、オカッテが板の間で、むしろをしいてあった。よくてもゴザをしいて、畳ではなかったという。

ザシキとヒロマの前に縁側がある。今はロウカといって屋内になっっているが、古くはソトエン（外縁）であった。「ウチエンだったのはオダイジン（お大尽）くらい」という。清水重雄さんの記憶

ている。

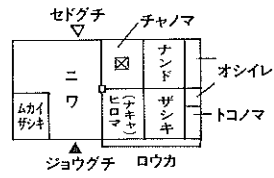
(二) 間取りと

部屋の使い方

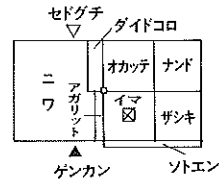
間取りと各部屋の名称

現在測れるかぎりでは、ほとんどすべてが田の字型である。土間部分はそのまま、ドマという家もあるが、多くの場合ニワと呼ぶ。居住部分は、ヨマトツバライ（四間取っ払い）といって、建具をはずせば通してひと

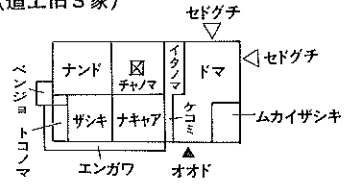
(市ノ瀬旧S家)



(滝頭旧S家)



(道上旧S家)



図Ⅱ-5 間取りと各部屋の名称

では、ソトエンのすぐ外に肥桶を置いておき、夜間は便所として使ったという。朝小便をソトベンシヨにあげ、桶はタイヒビヤにもどしておく。

ニワは農作業の便宜のために広くとってある。ニワと居住部分の境に大黒柱がある。ナカバシラ(中柱)ともいう。ニワに降りるところにアガリダン(アガリット、ケコミともいう)があるが、これも昔はオダイジンの家にしかないものだった。ロウカやアガリダンは、終戦後に今のかたちが一般的になった。

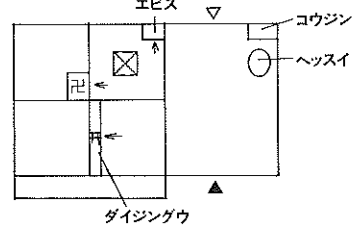
ニワの中、居住部分と反対側にムカイザシキ(向かい座敷)のある家も少なくない。財産家ではニワに女中部屋や穀蔵があるところもあった。

家への入り口は、ニワにある。玄関にあたるにはオオド(大戸)があって、日中は大きくあけられていた。オオドは夜には閉め、オオドについている小さなクグリを使って出入りする。ゲンカンまたはジョウグチという。裏口をセドグチと呼ぶ。セドグチは一(二

か所あり、ゲンカンの反対側と横の後側にあった。

屋内神や仏壇の位置 家の中の神

さまは、どの家でもほとんど同じ場所にまつられる。図Ⅱ-6でもわかるように、神さまの位置は方角よりも、間取りの中で決まっているといえる。ダイジングウサンは、ヒロマ(ナキヤア)のザシキ側の鴨居の上に、ニワに面してまつる。ニワが居住部分の左右どちらにあっても、ニワに面していることは変わらない。エビスサンは、チャノマにエンガワ(ロウカ)向きにまつる。コウジンサンはニワの奥の方にまつるが、これはヘツツイの場所によって場所と向きが決まる。



図Ⅱ-6 神仏の位置

トシガミサン(年神さん)はヒロマに棚をつくってまつる。ロクシャクダナ(六尺棚)を縄で天井から吊り、ダイジングウサンとは別にまつる。場所がないからと、ダイジングウサンの棚でまつる家もある。

仏壇は、チャノマに開くかたちでナンドに据え付けられている。

本茶S家の間取り 現在の家は八五年くらい前に建てた瓦葺きの二階建てである。瓦葺き二階建てというのは当時は珍しかったが、一階部分は建て替えた進む茶畑ではよく昔の姿をとどめているといえる。オカッテの奥の風呂はあとで足したもので、かつてはオオド(大戸)のセドグチがあった。セドグチはかつてもう一か所ニワの横についていた。オカッテの板の間は点線のところまでで、ムキヤアザシキ(ムカイザシキ)の後ろの部屋はなく、ニワが大きく広がっ

ていた。ムキヤアザシキの端に二階にあがる階段があった。

二階にはナンドとザシキの上部に畳の部屋があり、ほかは蚕の部屋になっていた。

ニワの使い方　ニワのオモテ側は農作業に使われた。オモテにむしろをしいて干しておいた米や麦を、雨が降ったときや夜にニワに取り入れる。くだつて麦米の乾燥機を置いたりした。また、蚕のために桑を置いたり、夏にはここで蚕を飼った家もある。

裏側の部分は炊事の間であった。ヘッスイ（ヘツツイ）を据え付け、ご飯を炊いたりもち米を蒸したりした。水道のなかったころは、水甕をおいて炊事や飲み水に用いた。また、農作業の合間の昼食はニワで食べた。チャノマに続くイタノマやアガリダンに腰掛けて食事をした。もちつきをニワの中ですることもある。

風呂もニワに置くことが多かった。風呂は五右衛門風呂が多かったが、五右衛門風呂の前は木の置き風呂だったという。木の風呂のときは囲わないでニワに置いた。夏には家の中では暑いからといってエンガワのところに出した。大正時代、一七、八歳の青年のころに外の風呂に入っているときに、姉さんの友だちがたずねてきて出るに連れられなくて困ったという思い出のある人もいる。木の風呂でももう少し時代が下るとニワの中で囲いをした家もある。履物をはいて風呂まで行った。建て直した家でもかつてニワだった位置に風呂場をつくることが多い。

ニワのムカイザシキは、養蚕のときに桑の貯蔵や臨時の寝室に使うことが多い。精米した米を置くこともある。

居住部分のハレとケ　居住部分の四間は、かなりはつきりとハレの場とケの場に分けられている。オモテに面したザシキとヒロマ

は人寄せなどに使うハレの場であり、ふだんはあまり使わないようにしている。裏側のナンドとチャノマはケの場で、寝室として、また食事やだんらの場として日常生活をほとんどこのふた部屋で過ごす。天井もザシキやヒロマはさおぶち天井になっているが、ナンドやチャノマは根天井になっているか、天井がなく屋根の小屋組を見せたままになっていた。

食事・だんらの場　朝夕の食事はイロリをとった。イロリはほとんどチャノマにある。イロリは三尺四方が一般的で、薪や炭をくべた。ツツカギ（自在鉤）をつるしたり、ゴトクを使ってお茶を沸かしたり、鍋でみそ汁をつくったりした。

昼食は野良仕事で忙しいし、足ごしらえもめんどうなので、ニワの奥の方のイタノマに腰をかけてとった。エンダイ（縁台）を使うこともある。

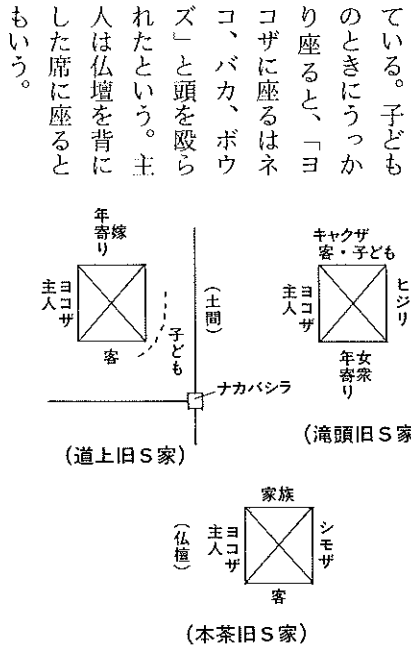
清水重雄さんの子どものころの家はイロリがオモテ側のイマ（ほかではヒロマとっている部屋）にあつて、夕食だけイロリを囲んでとり、朝食はオカッテで食べたという。夕食はたいい大きな鍋にダイコンやイモや米のだんごにイリコを入れ、みそ汁にしたものを食べた。めいめいが、ハコゼン（箱膳）で食べたが、自分が世帯を持つようになったとき（昭和三年）はもうハコゼンを使わなかったという。

オチャ（お茶）。一〇時と三時の休憩のときは、アガリダンに腰をかけて休んだ。

イロリは調理に使うほか、暖房としても大切だった。山の仕事るときは足がとて冷えるので、足袋をはいたままの足をもっていった温めたりもした。

イロリはイロリとして使わなくなっても、カメノコウという木でできた簡単なやぐらをかぶせてコタツにしたり、そのまま掘りごたつに直して、暖を取ったり食事をしたり、長い間日常生活の中心であり、だんらんの場となってきた。

図Ⅱ-7はイロリの座順である。家によって少し違っていたり、忘れてしまっていることもあるが、どこの家でも当主の座る場所はヨコザだった記憶ははっきりしている。子どものときにうっかり座ると、「ヨコザに座るはネコ、バカ、ボウズ」と頭を殴られたという。主人は仏壇を背にした席に座るともいう。



図Ⅱ-7 イロリの座順と名称
(カタカナが名称)

接客の場 ちょっとしたことならケコミ(アガリダン)です。また、雨降りするときなども足が汚れているのでチャノマまではあがらなかったという。しかし、「雑談はモシキ(燃し木)のそばだった」という人もある。冬など農作業もひまなときは、寒いことでもあるし、イロリのそばに通した。

古くからアガリダンのあった本茶の庄司好子さんは、アガリダンを自分たちの休むところとお客の腰かけるところをわけて考えてい

る。イマの前(奥の方)は自分たちでオチャのときに座り、「ちょっとした客(近所の人など)はイマの方では悪いので、ヒロマの前のアガリダンに腰かけてもらった」という。四間のうち、裏側をケの場、オモチ側をハレの場として使っている考え方が、アガリダンにも影響を与えているといえる。

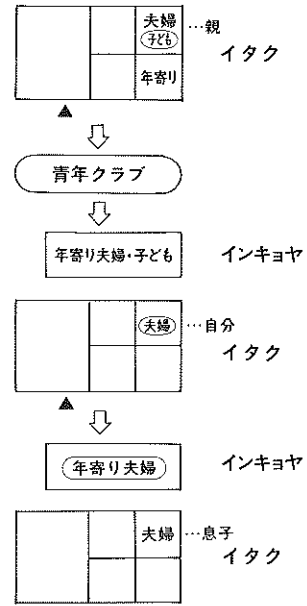
お客のときはたいいチャノマにあがってもらってイロリのそばでもてなした。イロリのどこに座ってもらうかは、「顔を見い見いすすめる」といって、人によりけりで時に応じて決める。

ザシキは接客の場としてはめったに使わない。お坊さんや親戚の主人、カネオヤサンくらいしか通さなかった。結納などの儀式のときだけ使うという人もある。

就寝の場 当主夫婦の寝る部屋は、たいいナンドであった。姑はザシキに寝る家が多いが、インキョヤがあると老夫婦はそちらに寝る。

子どもは小さいときはナンドで親といっしょに寝ることが多いが、年寄りや寝るところも多い。子どもはどちらで寝てもいいと思っていたようで、だからザシキに子どもが寝ることは珍しいことではない。しかし、インキョヤのある家では、「よっぽどのときでない」とザシキには寝せなかった」といっているから、年寄りや寝ることを許しているだけで、ザシキに寝ることを許しているのではないだろう。少し大きくなると、ムカイザシキで寝たという人もある。

図Ⅱ-8は市ノ瀬のS家の就寝の場の移り変わりである。話者が子どものときはナンドで親といっしょに寝た。青年になるとクラブで寝泊まりしていたので家にはいない。話者が結婚してからは自分がナンドに寝た。親夫婦はモノオキの二階をインキョヤにして、



図Ⅱ-8 市ノ瀬Sさんの
就寝の場の移り変わり
(○で囲んでいるのが自分)

そこに寝た。子どもは話者の親とインキョヤに寝た。長男に嫁をも
らってからは、自分たちがインキョヤに寝ている。

お産の場 お産はほとんどの場合ナンドだった。ただし、実家
のナンドという人と婚家のナンドという人がいて、どちらが早い時
期のことなのか、いつごろから始まったのかはわからない。お姑さ
んやトリアゲバアサンがとりあげてくれた。ある話者の家族(男)
が年を取ってからナンドに住まわせられて、「俺をナンドに連れて
おく。ナンドはアカ(赤ん坊)産む部屋だろうが」といって怒った
そうだ。

ザシキで産んだという人も少なくないが、このあたりはお産婆さ
んが早くから来ていて、ザシキの方が明るくていいからという指導
があったようだ。ザシキで産んだという人で、「ほんとはナンドで
産むものだが、ナンドがなかったので(店をやっている間取りがち
がう)ザシキで産んだ」という人がいた。

かつては「畳の上で子を産むものではない」といわれたが、それ

を知っていてもあまり気にせずに畳の上で産んだという。富裕な家
では畳をあげて、むしろをしき、タライで出産させたという。ザシ
キで産んだという人たちは、みな畳の上で産んでいる。

産湯は「日の当たらないところへこぼす」といわれ、床下(縁の
下)にすてる。聞き取りでは、産んだ部屋の床板をあげてこぼした
り、ザシキの床下にすてたり、風呂場に流したりまちまちだが、「む
かしは富裕な家ではわざわざ床板をはがして縁の下にすてていた」
という人があった。

後産は地にイケル(埋ける)。自分の家の墓に持って行って埋めた
り、縁の下に埋めたりした。

ハツゴ(初めての子)が産まれると、ネネミ(ねね見)といって、
お祝いを持って赤ん坊を見に行く。女が行く。ナンドまであがって、
赤ん坊を見る。しかし、ナンドまではあがらないという人もある。
お七夜に行つて、母親かお婆さんがチャノマに連れてくるのを見せ
てもらおう。

人寄せ・儀式の場 結婚式や葬式などはかつては各々の家でお
こなった。その場合、オモチに面したふた部屋(ザシキとヒロマ)
を、建具を取りはずして大きくひと部屋として使った。床の間のあ
るザシキの方が上座になる。

結婚式は、マエブルマイ(前振舞い) といってモヨリの集まりを
先にすませ、そのあとに親戚でカタメノサカズキをし、ホンゼン(本
膳)となる。カタメノサカズキはザシキの床の前の前でおこなう。
マエブルマイもホンゼンもザシキとヒロマを続けて使う。

嫁は、ゲンカンから入り、ザシキにあがる。途中で着物を着替え
る場合はナンドで着替えた。

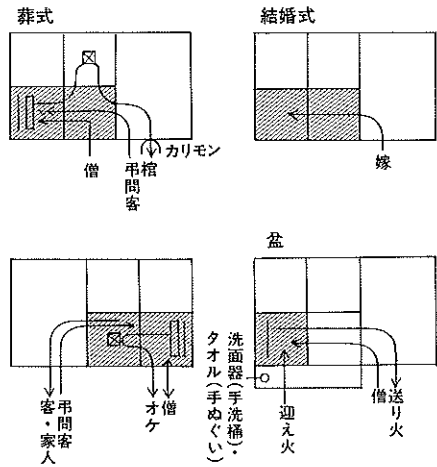


図 Ⅱ-9 結婚式、葬式、盆の人の動きと使う部屋

がるものだ」といい、葬式にくる僧はゲンカンを通らずに直接部屋に入る。そのとき、ザシキの前から入ったという家とヒロマの前に台を置いてそこから入ったという家がある。

お棺にくぎを打って準備が全部整ったところで、イロリのマッコ(端)にお棺を置いてお茶をさしあげる。それから外に出す。

お棺は今ではゲンカンに立てたカリモンをくぐって出す。「カリモンから出すものだ」という人もある。しかし、清水重雄さんは、「オケ(土葬のころはオケ)はザシキから直接出した。カリモンはゲンカンにつけておくけれど、そこからは出さない」という。弔問客や家の人はお棺とはべつにゲンカンから出る。

お棺が出たあと、手伝いの人がメカゴを足で蹴って家中ころがす。ザシキから蹴り始めて、最後にニワに向かって「それっ」とできるだけ遠くに蹴ころがす。遠くに飛ぶと、「この人は後生がいい」といわれる。

葬式も、ザシキとヒロマを続けて使う。四間全部を使ったという家もある。神棚には紙を貼り、ゲンカンにカリモン(仮門)をつけておく。

「お坊さんはエンガワからあ

お盆のときは、お坊さんはゲンカンから入る。迎え火はヤシキの入り口やカワバタに竹を三本立て、線香と花立てをおいてたいまつをたく。そのまま家にくると考える家もあるし、夕方線香を持って墓地まで行って迎える家もある。

道上のS家は、墓地まで迎えに行き、エンガワに洗面器とタオルをおいておく。招き入れる動作はしないがそこから入ってくると考える。帰りは盆棚の飾りや竹、線香、うしうまなどを持ってゲンカンから出るから、送り火の出口はゲンカンだと考えている。本茶のS家は、新盆のときは墓地に行き、背負うかっこうをして「ここにお乗んなさい」といって、そのかっこうで連れてくる。アカ(銅)でできたらしいに水を汲み、てぬぐいもそえてロウカ(エンガワ)に置き、ここで手を洗ってもらって入ってもらうという。

講の集まりで使う部屋もザシキとヒロマである。たとえば道上では、シヨジンコウ(天神講)、ハツコウ、大山講、山の神講、秋葉講、淡島講は輪番でまわるが、そのときはザシキとヒロマを使って、当番がめんどうをみる。

(三) 養蚕のときの家と付属屋の使い方

コノメとタナガイ 茶畑は戦争が激しくなるまえまで、養蚕が盛んだった。とくに大正時代に盛んで大きくやった。蚕は成長するにつれて、場所を広く取らなくてはならないため、人びとは自分のちの生活空間を明け渡した。

養蚕の方法には、コノメとタナガイがある。コノメはカゴを一枚ずつ差し込んでいく方法で、棚に何段にもカゴを入れて蚕を飼う。桑は葉だけを小さくちぎって与えた。タナガイは大きい棚で飼う。

棚は二段だけで、桑を枝のまま与えられる。場所をくうが、手間がかからないのでたくさんできた。だから、コノメのときは四間で足りたが、タナガイのときは付属屋まで棚をつくったという。また、タナガイは棚を置くだけでできるので、保温の心配のない夏は二ワに棚を置いて飼うこともできた。

このあたりは、春、夏、秋の三回飼った。養蚕の時期になると、畳をあけてへやを使う。家の使い方は養蚕の規模や付属屋の都合によってさまざまであるため、四軒の例をあげて述べてみる。

市ノ瀬S家の使い方　コノメのときでも、居住部分の四間を全部使って蚕を飼った。最初に使うのはザシキで、大きくなるにつれてヒロマも使い、さらにナンド、チャノマと広げて行った。

蚕が繭をつくるようになると、「四間どころじゃない。ズシまでオカイコがいっちゃう」というくらいで、ズシ（イタクの屋根裏）にも広げた。繭をつくるときをヒキタという。ヒキてしまうと、それまでは緑色だった蚕の体が澄んでくる。そうなるとモズを置いて繭をつくらせる。モズはきれいに繭をつくらせるために一匹ずつ入れるくぼみのあるもので、場所をとるため、カゴだけでは足りなくなつてズシにも置くことになる。ムキヤアザ（ムカイザシキ）の前に階段があつて、そこからズシに上った。

部屋が蚕でふさがれるので、二ワの隅に木のテーブルを置いて、そこで食事をした。寝る場所もなくなるので、イタクの裏のモノオキに寝た。コクグラの穀物の間に寝たものだった。昭和一〇年ころに父親が二階に住めるようにモノオキを建て直したので、それから炊事もそこでできて楽になった。

タナガイのときにはナガヤのタイヒゴヤも使った。話者は、「ナ

ガヤだつて、一年中あいてるときってないやね」という。冬の間は堆肥を入れておき、春に堆肥を畑に入れてあいたところで蚕を飼う（春、夏、秋蚕）。その間、堆肥はオモテに積んでおいて発酵させる。蚕が終わるとオモテでつくっておいいた堆肥をタイヒゴヤに入れる。

蚕に食べさせる桑は、ムキヤアザに貯蔵した。桑を切ってきて、二ワにも立てておいた。桑は毎日取ってこなくてはならなかったの、桑に雨や露がついても、二ワにいっぱい立てておいて水気をとる。それを切つてはムキヤアザにためた。

道上S家の使い方　蚕の時期になると、ナンドから使い始める。次にナキヤ（居間）を使い、ザシキはなるべく使わないようにした。

蚕で部屋がふさがっている間は、チャノマとムカイザシキにごろ寝した。話者が子どもころは（昭和初期）、養蚕していてもナンドに寝たりした。棚と棚の間の通路に寝た。「風がそよそよしているような音がして（桑を食べている音）、寝ていると気持ちよかった」という。

昭和九年にナガヤを建てて二階に住めるようになると、そこに寝た。

滝頭SA家の使い方　話者は昭和一〇年に嫁にきたが、そのころから終戦前までの記憶である。最初はナンドで飼った。コガイ（一眠）のときは共同飼いをし、それから分けて持ってきた。広がっても、ヒロマと二ワくらいを使っただけだった。夏は保温の心配がないので、二ワに台をおいてタナガイをした。蚕のために二ワを広くした。「夏には外で飼う人もいた」という。

雨の日の桑はだめなので、土間の上にむしろを敷いて桑の葉を保

存した。ダキをつくって（寄せる）ぐるりとむしろで囲み、霧を吹いておくと、葉の色が青いまま三日くらいもった。青い葉でない、蚕が食べないのでそうした。蚕のコシリ（糞）は集めて肥料にした。

滝頭SS家の使い方 明治末から大正ころの記憶である。ズシを使った。さらにザシキとイマ（ヒロマ）の畳をあげて広げた。養蚕の間、自分たち兄弟はみんなズシに寝た。「ズシに寝ると腹痛をおこさない。体の調子がよかった。兄弟たちもみんなそういついていた」という。親がどこに寝ていたかは知らないが、たいへんだったようだ。

蚕の保温 春や秋は寒いので、保温に気をつけなくてはならなかった。古い家にはオカイコ用のイロリがきつてあったものだった。イロリは畳一枚くらいの大きさで、養蚕の規模によっては全部の部屋にある家もある。

このイロリに、イロリの幅と同じ長さに切ったマイシンをすきまなくぎっしりと並べる。マイシンとは生木のこと、雑木ならなんでもよかった。その上に炭を乗せる。おこした炭を乗せて火をつけ、最後にコロモ（藁を焼いた灰）を敷きつめる。そうするといづらないでよく燃えていく。コロモをしないと煙が出してしまう。「いっぺんくれば、あがるまでもった」という。

イロリを切っていない家は、ブリキの火鉢をとどころに置いて保温した。滝頭の清水あきさんは馬の飼料の入っていた木綿の袋を広げ、それを縫いつなげてカーテンのようなものをつくって、蚕室を囲ったという。袋が白いので太陽の光は通った。

タバコのための付属屋の工夫 養蚕は戦争中に取りやめになり、終戦後はタバコの栽培が盛んになった。茶畑でも最も大きくタバコを



タバコ乾燥室 点線がハシゴをかけた状態。

栽培した市ノ瀬の杉山政雄さんは、タバコのために付属屋を改造している。

タバコは昭和二三年前から始めた。市ノ瀬は旧戸一軒のうち五軒がタバコをした。タバコの乾燥室二棟は本茶の木工橋武雄さんとふたりで建てた。ナガヤでタバコを編み（縄にタバコの葉を吊り下げる）、それを乾燥室に運ぶ。ナガヤから乾燥室までは外をぐるりと回って行かなくてはならず、たいへんなので、ナガヤを現在の二階建てに直した（写真参照）。ナガヤの二階に、乾燥室に面して引き戸がつけられ、そこから幅広のはしごをかけて乾燥室に行けるようになっていく。傾斜に建っていることによる高低差を利用したものである。

ナガヤの二階でタバコを編み、それをはしごで乾燥室に運び、乾燥したタバコはイタクのズシに運びこんで、貯蔵、葉の選定をする。イタクを建て直したときには二階建てにして、二階を貯蔵、選定に使った。乾燥室横の道路がイタクのズシ（二階）と同じくらいまで高くなって来ているので、運びこむのに便利である。

タバコの乾燥室は二階建てくらいの高さで、内部に仕切りはなく、最下部に鉄管をまわして熱を出す。棟に煙出しのような小屋根があ

り、その両コバに窓がついていて、窓の開け方で乾燥の度合いが決まる。色が黄色くあがるのがよい。

(四) 家の手入れと生活環境

屋根替え かつてはほとんどの家がクサヤネ(萱葺き屋根)だった。昭和初期の本茶では、地主の二軒が瓦葺きだったのを除けば、あとはすべてクサヤネだった。クサヤネのことを、ワラヤ、またはクサヤとも呼んだ。

クサヤネの屋根替えは冬から春の農作業が始まる前までの期間におこなった。むかしの決まりでは、萱刈るのは一月、屋根を葺くのは二月か三月ころにする。屋根替えをする間モノオキなどほかの建物に移ってはいなくてはならないので、少し暖かくなってからのほうがよく、たいていは三月にしたという。四月になってしまうと、種蒔きでいそがしくなる。

替えるときは、屋根四面を一度に替える方法がふうだった。屋根の厚さにもよるので一概にはいえませんが、萱だけだと一度葺くと三、四〇年もったという。藁を混ぜるともちが悪い。とくにいたんで雨漏りするところは、サシカエ(小さい範囲だけ抜いて葺き替える)する。

カヤムジン(萱無尽) 四面を葺くための萱を一軒で刈るのはたいへんなので、カヤムジンがあった。あったのは確かだが、その記憶が人によってまちまちである。おおまかにいえば、昭和一〇年くらいまではむかしながらのやり方でおこなわれていたが、その後かたが崩れ、なんとなくなるところと、違うかたちで続けたところがあったと考えていいだろう。なかでも本茶や中丸は早

くに消えたと考えられる。そのため、話者が見たり、実際に手掛けたりした時代によって、あたかも違うものがあった、もしくはカヤムジンがなかったように語られるのである。また、カヤバがむかしは何か所だったものが、後に別れたらしいことも人によって話が食い違うことに関係しているかもしれない。

滝頭Sさん(明治三五年生)のカヤムジンの話 昭和一〇年くらいまではカヤムジンがすっかりとあった。茶畑山は、ここは草刈り地、ここは萱刈り地というふうに使っていて、毎年一月七日(五日かもしれない)に茶畑全体が行って萱を刈った。一日で刈ってしまい、各自が一駄ずつ馬を引いて帰ってくる。

カヤムジンは組ごとで責任がある。一軒からひとりずつ、戸数だけの人数は必ず出さなくてはならなかった。滝頭の上組はその当時一五戸だったから、一五人出た。人が出せないところもあるから、働き手の多い家が二人出して人数を揃えたりした。屋根替えがモヨリうちでない年は、萱刈りに行かなくてもよかった。萱の権利を屋根替えのあるところに譲った。でも、ない年はそんなにはなかったように思う。

刈ってきた萱は、その年に屋根替えをする家に全部運び込んでしまふ。いいかげんの家(大きめの家)ではオモチに山と積んでも間に合わなくて、畑にも積んだ。置くところがない家では近所を借りて置くことがあった。

カヤムジンでは足りない家では、また刈りに行った。みんなですり取ったあとは勝手に行ってよかった。大きい家だとよその地域の余っている萱を買ったりした。公文名、久根、深良あたりから買った。そういうときは、たいていそこに住む親戚に買ってもらったも

のだった。買うものはマルツテ（東ねて）あって、使うだけになっている。

昭和一〇年を過ぎると、カヤムジンはなんとなく崩れていって、結局なくなつたが、いつということはいえない。なんとなくだから、精算してみると損した人と得した人があるだろう。

カヤムジンがなくなつたあとでもクサヤはあったので、屋根替えをするときはおおかた深良から買っていた。

市ノ瀬Sさん（大正元年生）のカヤムジンの話 昭和五年ころ、自分の家の屋根替えをしたときにはカヤムジンがあった。ひとり刈るのはたいへんなので、みんなが一駄ずつ萱を刈って、その年に屋根替えをする家へ持っていくというものだった。どういう人が入ってどうしていたのかは、自分が若い衆のときなのでわからないが、「今年屋根替えをしますので、ムジンお願いします」と頼んでおいた。みんなは秋に萱を持ってきてくれた。自分たちも刈りにいって、家のそばのたんぼに立てておいた。

道上Sさん（大正一三年生）のカヤムジンの話 カヤムジンは道上では終戦後まであった。道上の一六戸のほとんどが入っていた。基本的には家と家の個人的な関係で成り立っていて、どこかの家で葺き替えたときにムジンに入った家ができる範囲で萱を刈って運び、自分の家が替えるときにかつて運んだのと同じ量の萱をもらうかたちだった。その関係が道上のほとんどの家と個別に結ばれていて、結局はみんな手伝うようなかたちになる。誰が誰に何駄借りたかを帳面につけ、協議員（今の区長）がまわりもちで保管した。屋根葺きをするとなると、「カヤムジンをたてたい」、「カヤムジンに入ってくれ」と頼む。協議員が帳面をもとに誰が何駄かをふり

わけける。新しくまた始める人の分もつけておく。人によっては五駄も六駄も借りた家があった。持ってきてくれた分を次にその家が屋根替えするとき返して、ムジンが終了する。代がかわっても跡継ぎが返すし、自分の家がクサヤでなくなつても借りた分を返すまではカヤムジンに入っていることになる。Sさんは昭和二三年に最後のカヤムジンを返しておしまひになった。

むっている（雨もり）ところを直すことをサシカエというが、大きいサシカエのときにもカヤムジンが使えた。

カヤムジンがなかったという話 本茶のTさん（大正六年生）は、大正一二年の記憶では、カヤムジンはなかったという。自分の家は農家ではなかったので馬もないし、みんなにやってもらつたという。

滝頭のYさん（昭和二年生）は、一二月ころ農作業が少しひまになってから自分の家で萱を刈つたという。草刈り場から自由に刈つてよかった。それをマルツテ山にそのまま立てておいて、馬で一駄と自分が一把背負って持ってきた。

しかし、滝頭では、昭和三〇年ころまでカヤムジンがあったという人も数人いる。

葺き替えの準備 刈つておいた萱を全部家のそばに揃える。近所の衆に「何日に屋根替えをするのでお願いします」と断つておく。

いよいよ取りかかるとなると、家の中のものを別の建物に移すなり、むしろをかけるなりして、家具に煤がかからないようにする。畳はあげてむしろやゴザをかけておく。畳は屋根ができたあと、たたい戻す。神棚はそのままだが、神様だけははずして、よそに移す。

屋根の葺き替え 屋根替えは親戚や近所の衆が手伝った。たとえカヤムジンに入っていないなくても手伝うものだった。

まず、屋根をフカス（壊す）。屋根の上で古い萱をマルケテ（束にまとめて）落とす。子どもでも萱をはがしておとなに渡すなどできることで手伝う。落とした古い萱は、畑に持って行って肥料にしたり、ミカンバシヨ（ミカン畑）にいくらでも貰い手があつて取りきた。西浦などに親戚があると、屋根替えがあると聞いただけで無心にきたものだった。

屋根を葺くには、ぐるりを軒先の方から順に棟に向かって葺いていく。縄でわっぱ（輪）をつくって屋根の骨組みの要所にかけておき、萱を置いてオシヨウコ（親指くらいの太さの竹、ダイミヨウダケ）でおさえ、あらかじめかけてある縄で締めていく。オシヨウコが隠れるように次の束を重ねて、同じことを繰り返す。オシヨウコが雨にあたって腐ると、萱が抜けて落ちてしまう。

オシヨウコは素人でもできたが、ロッパ（軒先）はむずかしいので屋根屋がやった。茶畑には屋根屋が三人いた。職人を多く頼んだ家では、手伝いの衆は萱の束を渡したり、職人の手元をやった（屋根裏でオシヨウコを締める縄を戻す）。

屋根替えの家で手伝いの衆のごはんを用意した。朝食はめいめいで食べてくるので、昼と夜の分を用意する。お茶も出す。女の人がちが炊事の手伝いをした。

屋根葺きにかかる日数は、小さい家で三、四日、大きい家だと一週間から一〇日かかった。煤がかかるので、「イタクの屋根替えときたら、真っ黒になって顔の裏表もわからなくなっちゃう」といったものだったし、その家の人は、別の建物に移って暮らさなくて

はならないなど、たいへんだった。

屋根ができたら、手伝ってくれた人をみんな招いてイタクのザシキとヒロマで食事をふるまう。砂糖何キロといったような簡単な引き物を出す。まき餅をする家もあった。「屋根替えは普請をするようなもの」だったという。

瓦屋根の瓦の葺き替え 本茶の庄司好子さんの家では昭和四三年に瓦の葺き替えをした。このときもクサヤネの葺き替えのようにみんな手伝っておこなった。

まず、「何日にするからお願ひします」といって歩く。親戚にも頼む。本茶の組の衆とオヤコ関係の衆あわせて三〇人くらいがきた。男は古い瓦を屋根から落とす。女は食事のしたくをする。一〇時にお茶、一二時に昼食、三時にお茶を出した。オカッテとオオドの横あたりでつくる。オモテでむしろを敷いて食べたり飲んだりした。瓦を落とすのは一日でできる。

瓦を葺くのは職人の仕事である。三島の瓦屋（勝又さん）が四、五人できて、五、六日かかった。

葺き終わると、上棟式として祝った。きてくれる人はお酒などを持ってきてくれた。

大そうじ 家によって日にちは多少違うが、暮れの大そうじは冬至ころ（二〇日すぎ）にする。

オモテにむしろを敷いて、家のものを全部出し、ゴザなどをかけておく。畳をあげる。神様も全部出す。仏壇は中身だけを出す。家からっぽにしたら、雨戸を閉めて家の中だけに煤が落ちるようにしてから竹で煤払いをする。オトコダケとオンナダケを切ってきて合わせたものであるのが本式だった。神棚の煤払いは男の仕事で、女

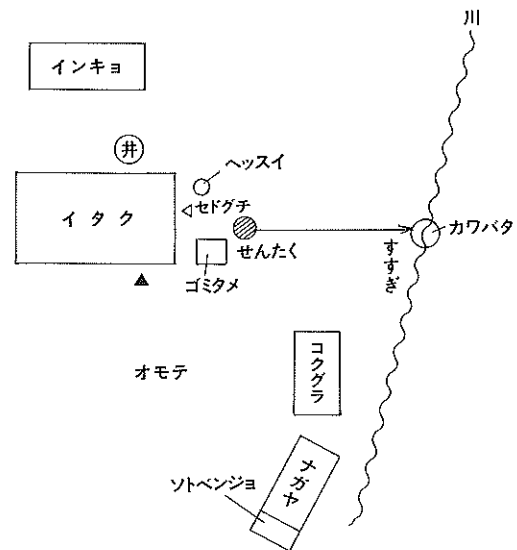
は神さんに手え出すもんでねえ」といわれた。障子を張り替え、食器もみんな洗う。朝から晩までの一日仕事だった。

神棚の札を取り替えることをオオハライといい、煤払いといっしょにする冬越のオオハライと六月三〇日の夏越のオオハライがあった。

生活の水とその利用 水道が引かれるまでは、飲み水は井戸や川から得ていた。

本茶では地主の二軒に井戸があっただけで、モヨリの人たちは金毘羅さんの井戸に汲みに行った。明治三五年生まれの柏木れんさんは、たいていは東川の水を使い、雨が降ると金毘羅さんの水を汲みにいったという。滝頭でもあまり井戸が掘れなかったので、いくつもある井戸まで汲みに行くか、朝早く川から汲んできた。不動の滝の下に湧き水があって、そこから汲むことができた。道上では山の方では井戸があったが、川に清水が流れこんでいるところがあって、井戸のない家ではそこに汲みにいった。汲んできた水は二ワにおいてある水甕に移して、飲み水や米とぎなどに使った。

飲み水以外は川の水を利用した。どの家でもカワバタを持っていて、川の水で野菜を洗ったり、洗濯のすすぎをした。本茶のS家では、川の水を家の中のカマヤに引き込んで洗いのをした。田に水を引くと水がなくなるので、東川に行つて、うどんを洗ったり、米をといたり、洗濯をしたりした。道上のS家は井戸があったが、昭和二五、六年くらいまで川で洗濯をした。図II-10はS家のカワバタの位置関係と洗濯の動線である。セドグチの外に、木の葉や牛馬の草や野菜くずをためたごみ袋がある。そのそばで洗濯板で洗濯をし、汚れた水はごみ袋のために捨てて堆肥をつくる。洗ったものはバ



図II-10 道上旧S家のカワバタと洗濯の動線

ケツに入れてカワバタに降りてすすいだ。風呂の水も川の水を使った。風呂の水は毎日取り替えるのではなく、かつては一週間ほど同じ水に入れたものだった。体をゆすつてアカを落としてから出たという。汚れた水はドブに入れて腐らせて堆肥をつくった。ドブはたいいてどの家にもあって、人糞をためておいた。

マキと炭 燃料はマキと炭を使った。毎年冬になるとマキをつくるために茶畑山で木を切った。何日行ってもどれだけ切つてもよかつた。一週間行く人も一〇日行く人もあって、働き次第でいくつにつくつてもよかつた。女の人が馬につけて運んだ。太いところは炭窯で焼いて炭をつくった。モヨリで共同の炭窯があり、お互いに使う日を決めあって自分の炭は自分で焼いた。シチリンやコタツに使

えるし、養蚕にも使った。たくさん焼いて、売った人もあった。マキはナガヤの軒下に積んでおいた。

(五) 新築

シンゾウブシンとキャアコシ　新築はシンゾウブシンといつた。このあたりではシンゾウブシンは終戦後のことで、以前はみんなキャアコシ（カイコシへ買い越し）だった。キャアコシは古い家を使って建てることである。それまで住んでいた家より広いとか、もう少しましだという家を買ってきて建て直す。買ってくる先は、裾野の旧五か村か長泉だった。

キャアコシの家は、大工が壊しに行った。番付（いろはは、一二三）をつけておいて、あとで建て直すときの目印にする。

新築の移り変わり　本茶の橋武雄さんは祖父の代からの大工である。新築はまずナガヤやモノオキなどから始まり、それからイタクも建て替えるようになった。武雄さんが復員してきた後はシンゾウブシンばかりで、それも二階建てが多かったという。また、むかしながらのヨマトッパライ（四間取っばらい）の家は昭和四〇年くらいまでで、その後ザシキヤヒロマの側とナンドの側との間に廊下をつけるようになったという。

ヨマトッパライのころは自分の山の木を使って建てた。しかし、しだいに材木屋の木で建てるようになっていった。金回りがよくなったこと、近所の衆が手伝わなくなったこと、サキヤマ（木を伐採する職人）を頼む製材屋がなくなることなどによるのだろうという。

以下、自分の山の木を使ってヨマトッパライの家を建てたときの

やり方を中心に、シンゾウブシンを記していく。

家を建てる手順　小さなところで違いはあるが、家を建てるときには次のような手順がある。

①見積もり、②製材、③地鎮祭、④きざむ、⑤ジツキ、⑥タテマエ、⑦造作、⑧ヤウツリ、⑨ヤブマチ。

タテマエまでは手伝いの衆を頼む。寒が明けてから農業が忙しくなる前まで（五月ころまで）が基礎からタテマエの時期だった。「寒のうちに普請すると火事にたたる」といって、寒のうちはしなかった。

図面を自分でつくって大工に持っていた人もある。大工は何寸角が何本必要かなどといった見積もりをする。施主が自分で自分の山に行って木を切ってくる。木を山から運ぶのは近所の衆が手伝ってくれる。製材も移動製材がきてくれたのでオモテでやってもらったり製材所に持っていたりして、自分たちですますところもあった。

元の家を壊すのは自分たちです。近所の衆や親戚を頼んで手伝ってもらう。下から壊すと楽にできた。壊す前に塩をまいてお祓いするくらいで、神主を頼むことはない。

地鎮祭　竹を四本たててシメをまわし、中に祭壇をつくって神主にお祓いしてもらう。祭壇には塩、米、水、酒、山海の珍味を供える。神主、施主、棟梁、親戚の順で玉串を奉てんして終わる。供えたものは神主に持っていくてもらう。鶯がきてくれるところもある。また、同じところに建てるので地鎮祭をしなかった家もある。

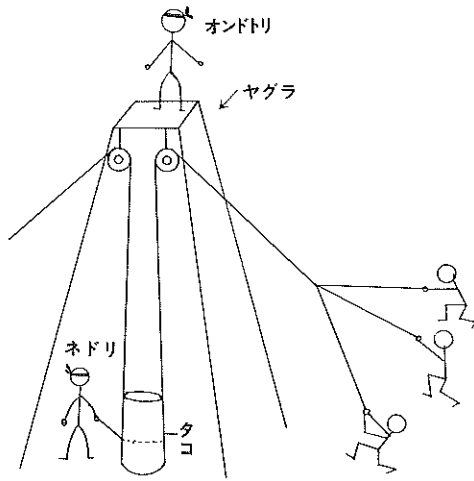
ジツキ　ジツキは木の重しで地をつき固める作業で、大工がきざみ始めてからで間に合う。きざむというのは、棟梁が墨付けをし

た材木を切ることである。

ジツキは建てる土地の状態によってかかる日数が違う。同じところに建て直した家では簡単にすませたというし、新しく別に建てた家では三日かかったという人もある。

ジツキに使う木の重しをタコという。タコは直径二四、五センチメートルの幹のところをメートルからそれ以上の長さに切って使う。樫の方がよいが、そんなに太い樫があまりないので樫で使うことが多い。

図II-11のようなやぐらを立てて、近所の衆が手伝って綱を引く。綱は先がいくつもに分かれていて、ひとりが一木ずつ引く。「ヨイサ(引く)、ヨイサ(引く)、ヤエー(綱を放す)」という掛け声をかける。ふつうはネドリという人がタコのそばでタコに綱をつけて舵を取る。オダイジンの家では、やぐらの上に登って音頭を取るオ



図II-11 ジツキのようす

ンドトリ(音頭)がいた。本格的にするときは、オンドトリやネドリは蒿がやる。しかし、たいていは素人の中でできる人がネドリをした。道上の清水一雄さんはネドリができたの

で、近所のジツキという頼まれたものだったという。

タテマエの準備 家の骨組みができあがったところで、日のいい日を選んでタテマエ(建前、建揃)をする。タテマエには棟梁をはじめとして、大工、鳶、下職の職人、近所の衆、親戚などが参加する。

施主の家では、前日から投げ餅や煮物などの料理の準備をする。食べる餅は当日つく。引き物や供え物はあらかじめ用意しておく。よばれた人はお祝いに酒などを持って行って朝から手伝う。

棟の上に足場を組んで、大工がヌサ(ノサともいう)を立てる。かつては派手にするところはヌサを立てたが、今の裾野市あたりはあまり派手ではなく、ヌサをよく立てるようになったのは終戦後である。ヌサは三本か五本立てるが、五本という家はめったにない。ヌサは三寸(九センチメートル)角、長さ一三尺(四メートル)の材の上に鶴などを描いた扇をつけて、ハタを下げたものである。ハタはサンシキ(三色)とゴシキ(五色)があり、一本の材に一色のハタをつける。芯になるヌサのハタの色は黒にするものだが、黒は不祝儀の色なので紺にすることもある。向かって左に赤、右に黄色を立てる。赤は日天、黄色は月天を表わす。この三本だけ色が決まっています。残り緑、白、青など何色でもよい。橋武雄さんの父親はヌサの上の扇を自分でつくっていたという。うすい板に鶴のほかに竜や麒麟の絵を描く。むかしはこれを外のハメのところにつけて、大工の家だという目印にしたものだった。

芯のヌサに、鏡、かもじ、櫛など女の化粧道具をつける。言い伝えでは、ある棟梁が柱をまちがって短く切ってしまった、どうしようかと考え込んでいた。夫が心配そうにしているのでわけをたずねた

奥さんが、桁の下にひじ木をつけたしたらいいと知恵を出した。おかげで無事タテマエを迎えた棟梁は、奥さんへのお礼として女の化粧道具をつけるようにした、ということである。

棟の上の足場には、ヌサのほかに弓矢を立て、お供え、四方餅、投げ餅、お神酒、塩、洗米、こぶ、するめ、海のもの（尾頭付きなど）、山のもの（時季の野菜）をお盆であげる。幣束（棟礼）を立てる。これはあとで棟木につける。このほか、棟梁送り（後述）をする家では米俵を一俵か二俵あげる。

タテマエ　タテマエはだいたい夕方始める。大きい家だと骨組みだけでいいが、小さい家だと野地（屋根を葺くための下地）までやっておく。

施主を先頭に、棟梁、大工、下職の職人、若い衆（長男）、オヤサン、媒酌人、親戚の主だった人、近所の代表などが足場にあがる。全員が一礼して、棟梁が祝詞をあげる。棟梁が塩、洗米を東西南北にまいて、弓を射る。四方餅をまいてから、さかずきをまわして一杯ほして、「おめでとうございます」という。

塩や米をまくときの文句は棟梁によって違うが、橋武雄さんの場合は次のようにいう。

《塩まき》

あらしおの　しおのやおじの　やしおじの　しおのやおあいにかみぞまします

《米まき》

ちはやぶる　かみのいがきに　こめまきて　きみがよまでも　ひさしがるらん

《四方餅》

ひとつぼや　やおよろずのますかがみ　たからをふらす　わだつみのみこと

はじめをしてから、投げ餅をする。菓子やアメもまく。みかんは落ちるとつぶれてしまうのであまりまかなくなった。

建物の中に角材を並べて席をつくり、降りてくるとそこでみんなで飲み食いをする。夜遅くまで酒を飲んで歌を歌ったりする。よばれた人は帰りに引き物ももらっていく。タテマエの供え物は棟梁が持って帰る。お供えがひとかさねのときは、下の餅を棟梁がもらう。

棟梁送り　棟梁送りはタテマエのふるまいが終わったあと棟梁が家に帰るときに行うものだが、大きなふるまいになるのでバンタビ（いつでも）あるわけではない。エエヨブシン（大きな普請）のときだけという。近年では、昭和三六年に道上の清水一雄家が、親戚の鳶に「木遣りで棟梁を送りたい」といわれておこなった。「五色を立てると、棟梁送りをしなくてはいけない」という。このときの棟梁は橋武雄さんだった。

棟梁送りをする家では、タテマエのときに足場に米俵をあげておき、帰るときにそれを荷車にくくる。本茶の庄司好子さんが大正初期に庄司家でおこなったときの話として、「コブンの人が米俵を二俵、はしごをかけて上にあげたが、力が要ってたいへんだったと聞いた」という。この俵をコシカケダワラ（腰掛け俵）といい、棟梁がその上にまたがる。ハンデェャエ（ハンダイ〈飯台〉）に投げ餅をいれて前に置く。

鳶の音頭取りが先頭に立って木遣りをやり、棟梁の車、近所の手伝いの衆が続く。近所の衆はヌサを一本ずつ持つ。道中投げ餅をま

きながら棟梁の家まで行き、棟梁のオモチに着くと、またまく。この近所も棟梁送りがあるのを知っていて、夜でも待っている。途中でまきすぎてなくなることもあったという。清水さんのときは、棟梁の車の前に鳶が八人歩いた。ひとりが提灯を持ち、ひとりが杖をついてチャリンといわせながら木遣りをした。行列のあとに組の人たちがヌサをかついで、酔っ払いながらついていった。酔っ払ってふらふらするので、途中でヌサを持つのを変わってもらう人もあった。また、屋根からまくのと掃りながらまくのとで、餅を二俵ついたという。ちなみに、ふつうは二斗くらいつく。

棟梁の家ではごちそうを用意する。料理はめいめいではなく、大皿に盛りあわせる。酒を出して、鳶、左官、建具屋、屋根屋などの職人と、送ってくれた衆にふるまい、ご祝儀を出す。ヌサは芯を残して各職人に分配する。鳶にはたいてい日天(赤)を渡す。

ヤウツリとヤブマチ 造作にかかると、手伝いはいらぬ。造作が済むと、ヤウツリ(家移り)をする。「ヤウツリをするからきてもらいたい」といっておく。棟梁や親戚がくる。あずきを入れたかゆをつくり、小皿にとって箸につけ、外まわりの柱だけにかゆをつけていく。

神様を新しい家に最初に移す。「人間ばかり新しい家に入って、神様が元のポッコ(ぼろ)じゃかわいそうだからお宮も新しくした」という人もある。あとは適当に入れて行く。

家が完成してから、棟梁、親戚、近所の主な衆などをよんで、お祝いをするのを、ヤブマチという。ヤブマチはどこでもするのはなく、エエヨブシンのときだけする。

(宮村 田鶴子)

第二節 家族と親族

子どもの仕事 昔の子どもは忙しかった。家の中の貴重な労働力として期待され、また学校でも農繁休暇のあとなどは、手を真黒にしている子どもはよく働いたと先生にほめられたものだった。子どもの仕事として第一にあげられるのは水汲みとモシキ取りだった。学校から帰るとすぐに、風呂の水などを汲んだものだったが、背が低いうちは天秤棒に下げたバケツの底を地面にぶつけてはバケツをつぶしてしかられたりしたという。モシキ取りは友達と連れ立って出かけ、ネックリという薪のとりっこをしたりして楽しい仕事だった。

百姓をしている家には馬や牛がいたので、そのカイバ(飼い葉)切りも子どもの仕事のひとつだった。馬の餌はサツマイモを切り、薬を交ぜて搗いてつくるが、最低百回は搗かなければいけないといわれ大変だった。自分のごはんも馬の餌ができてやっとありつけたものだった。このほか漬け込んだラッキョウを口の細いかめから取りだしたり、下の子の守りをしながらウドンを茹でたりと、農作業に出ているお母さんの手伝いも多かった。子どもの仕事の中には、一把いくらと小遣いももらいながらする竹磨き(竹のはかまを除く作業)のように余録のあることもあった。いずれにしても、こうした日常の仕事をしていく中で、昔の子どもは家庭生活や農作業について自然に学んでいたものだった。

嫁入りはエンツナギ 明治三五年生まれのKさんは、数え二一歳のときに長泉町竹原から滝頭へ嫁に来た。かつて実家のある竹原

から婚家へ嫁いだ人があったので、「エンツナギせよ」といわれて来たという。婚姻はこうしてエン(縁)を繋ぎながら、ムラとムラ、イエとイエの間でくりかえされていくものだった。本茶のTさんも、父親の叔母が嫁いでいた小山町の藤曲からヨメをもらった。この時は裾野と小山町が離れているため、見合いとしてヨメ方へ出向いて、ヨメの出したお茶をTさんが飲んだのを承諾の合図に、その日のうちに婚約にあたるサケをすませてしまったという。

こうした結婚は、すでに相手方の家についての事情がわかっているのどつりあいを取りやすいという利点がある。昭和四年に二三歳で、御殿場の印野村時の巢から市ノ瀬へと嫁いだ人も、その理由を「市ノ瀬に嫁いでいたおばさんの口利きで、身内なので信用した」からで、結婚前から婚家とは行き来があったという。戦前までは何らかのエン(縁)を頼って嫁ぐということが一般的だった。昭和十七年に結婚した道上のHさん(大正一一年生)も、義理の母親の兄弟の息子ということで沼津の大岡から来たという。こうして、すでに形成されていたエンを、さらに濃いものにしよという意図がこのような婚姻からうかがうことができる。本茶の小沢姓は明治以前には一軒しかなかったというが、その当時は「麦塚から嫁をもらってもりたててきた」という。嫁の実家との関係は、かつて非常に重要な意味をもっていたことが、ここからも察せられる。

アシイレと嫁の実家　婚約を意味するサケのあと、かつてはすぐに簡単なオフルマイをして嫁入りしてしまうことがあった。これをアシイレという。アシイレは正式な婚姻ではないが、サケがすめば嫁入りが決まったということなので一緒に住んでもよいことになり、サケのあとずっとアシイレをしてしまうこともあった。サケか

ら祝言までは長くて半年くらいだったが、アシイレは嫁と婚家との品定め時期でもあった。姑さんに気に入られず、アシイレ後に嫁が実家に帰されてしまったり、反対に姑さんがいばっているのに耐えられなくて、実家に戻ってしまった嫁も珍しくなかったという。正式に結婚してしまう前に猶予期間を設けるアシイレは、婚姻がイエ工土の契約であった時代に、わずかながらも、個人の意志を表すことのできる合理的な方法であったといえよう。

アシイレのあと、祝言の前には嫁はひとまず実家に帰って、改めて嫁入りとなる。実家では、それぞれ家の格にあわせた嫁入り道具を揃える。

嫁の実家は、娘に子どもができると、その子が生まれる前に子ども用の箆笥や着物、産着などを婚家に届ける。そして生まれる二、三日前には実家からデミマイ(出見舞い)といって、近所に配るアソビンモチ(餡子餅)が届けられる。さらに生まれると、ヒヤクヒトエのお宮参りにはおぶい半纏や胴着を、初節句にはヒーナサン(雛)を贈って、婚家からオフルマイに招かれる。

ナコウド三年オヤ一生　婚姻にあたってはナコウド(媒酌人)とカネオヤがたてられた。ナコウドは一般的に親戚に頼むものでムコ方とヨメ方と相方でたてる。しかしこのナコウドは住まいも速く、結婚式の手伝いや日常生活でのつきあいはほとんどない。「ナコウド三年」の言葉があるが、結婚式以後の特別なつきあいはあまりなく、むしろ結婚式を成立させるための後見役といえる。

これに対し、カネオヤは結婚した二人が、その先のムラでの生活が順調に送れるようにと頼む、文字通りのオヤで、若夫婦は以後、コ(子)あるいはコブン(子分)としての役を果たすことになる。

カネオヤからは、結婚の時に金だらいや洗面道具、化粧道具、反物（一反）などが贈られる。また結婚式の時にはこのオヤサンがサキダチとなって手伝ってくれたものだった。

この夫婦に子どもができる、カネオヤは腹帯祝として、蒸かした赤飯を添えて腹帯を贈る。さらに子どもが生まれると名付親となったり、初節句のオフルマイに招かれ、お祝いに着物を贈ったりと何かにつけて面倒をみてくれた。これに対し、コとなった夫婦も盆暮のつけとどけや、オヒマチのモチをとどけたりしたものだった。道上のSさん（大正六年生）は、暮に二升のお供えモチ、四月の節句、五月の柏の節句、一〇月のオヒマチなどの折り折りにカネオヤに、モチなどを届けたという。子どもが届けものにくくと、オヤは駄賃をくれたもので、こうしたつきあいはSさんの家ではカネオヤのジイサンが生きている間中つづいたという。

このようにカネオヤはムラの親として日常お世話になる家で、ムラでの有力な家が頼まれることが多かった。本茶では、サカイガワという屋号で呼ばれる柏木本家が旧戸の三分の一くらいの家のカネオヤとなっていた。このころのカネオヤはほぼ世襲で、オヤサンの葬式にはコブンたちがゴシアゲ（棺かつぎ）をするものだった。また道上では多くがサカイガワのシンヤ（新家Ⅱ分家）に頼んだという。こうした婚姻を契機に結ばれるオヤコの関係は、地主小作関係と密接に関係したものであったことから、戦後は次第にその意味合いが薄れていった。このため、昭和四〇年代になるとカネオヤをたてない結婚式も珍しくなくなってきたという。

相続と継承 家督を相続する長男をイセキと呼ぶ。裾野では、長男がいても初子である長女が家を継ぐことが珍しくないが、茶畑

でもそうした例はいくつもみられる。長女と長男の年齢が離れている場合に、長女に婿をとり、早くに仕事の担い手をつくらうとしたものである。また、子がなくて継ぐ人のない家では、親戚から養子を迎えて継がせることがあるが、滝頭ではこれをタイマツナギと呼んでいるという。

また茶畑では、長男が嫁をもらったのを機に、両親が隠居家をたててオモヤから移り住むことも多く、隠居を機に財布は息子夫婦に渡し、食事も別火にするという。隠居する契機は、長男の結婚ばかりでなく、長男と親の仲が良くないという場合もある。

隠居の多く行われていることはイエナ（屋号）にしばしば〇〇のインキョとあらわれることにもうかがえる。イエナはその家の成立に由来することも多い。道上の柏木蔵家はサカイガワのワカレ（分家）なのでシイヤ（新家）という。シンヤ（新家）よりさらに新しく分かれた家をアラヤというが、滝頭の山本一二家などイエナはアラヤである。

オヤネンブツと位牌分け 親の葬式のときに、子どもの人数分だけ、戒名を書いた紙位牌を任職に頼んで作ってもらう。子どもは七日ごとの親の念仏を持ちまわりであげる。それぞれの家であげる場合と、念仏は喪主の家で行って費用のみ持ちまわりとする場合とがある。この四十九日までの七日ごとの念仏をオヤネンブツといって、紙位牌はオヤネンブツがおわると川に流してしまったり、墓に埋めたり、焼いたりすることもある。

第三節 村落の形と組織

(一) 村の範囲と地域区分

語り継がれた歴史 村にはそれぞれその村の成り立ちや村名の起こりについての言い伝えが残されることが多い。茶畑では、村名の起こりを「小田原さん（小田原藩）にお茶を献上したところ、こんなにうまいお茶があるなら本茶だ」ということで本茶畑となったと伝えている。また、茶畑を形成した三軒の旧家がチャエモン（茶右衛門）、ハタエモン（畑右衛門）、ムラエモン（村右衛門）だったという話もよく聞かれる。この三軒の頭文字をとると茶畑村となる。真疑はともかく、それぞれの三軒を山本猛家、小沢秀雄家、柏木敏夫家の先祖であり、これらの家が茶畑を切り開いたと伝えている。一方、三軒の開発先祖とは別に、茶畑村の名主だった柏木家は屋



柏木屋敷跡を示す石碑

柏木家屋敷跡広場整備事業
柏木家屋敷跡広場は、静岡県コ
ミュニティ施設整備事業の補
助金により地域のコミュニティ
活動の拠点として整備したもの
です。

柏木家屋敷跡概要

柏木氏は、茶畑に鎮座する浅間
宮の神祇を勤め、天文二十年（
一五五一）頃、高山に本拠を持
つた今川氏の臣、葛山氏から神
領を安堵され、また勅進を受け
、国人領主の庇護下にあったこ
とが古文書によつてうかがい知
ることかできる。屋敷は背後に
川を控え四方に土塁と水堀を巡
らし、中世土家の形態を現在も
保っている貴重な屋敷跡である。

静岡県越前市教育委員会

柏木屋敷跡の由来案内板

ており、浅間の鍵をもっていた「本茶の田（サトジ里地）」は柏木屋敷周辺にのみあって、柏木本家と柏木康敏家の二軒のオダイヤ（地主）のものだった」といったことが言い伝えられている。先の三軒が開発の先祖と意識されるのに対して、サカイガワが村の先祖と考えられないのは、サカイガワがもとは武士であつて農民ではなかつたこととされることからであろう。柏木本家は定輪寺の檀家で、戒名は院号をもつが、分家は居士であるという。

サカイガワが管理しているという願生寺はドウバヤマ（道場山）という本茶の山にあり、村の人は願生寺に行くことを「道場山に行く」という。山号は南朝山といい、南朝方の保護をうけていたと伝えられる古い寺で、檀家はなく、柏木本家の先祖の墓があつた。行者が住みついたり、剣道の指南所があつたことからドウバ、すなわ

号をサカイガワといつて、今もその屋敷跡は柏木屋敷と呼ばれ、老人たちのゲートボール場や村民の憩いの場となつている。サカイガワとは、駿河と伊豆の境を流れる境川にちなんでつけられたイエナ（家名＝屋号）で、「天文検地のころ佐野郷と呼ばれたこのあたり一帯で一番上の庄屋だった」

「もとは浅間神社、願生寺、佐野原さんなどの管理をし



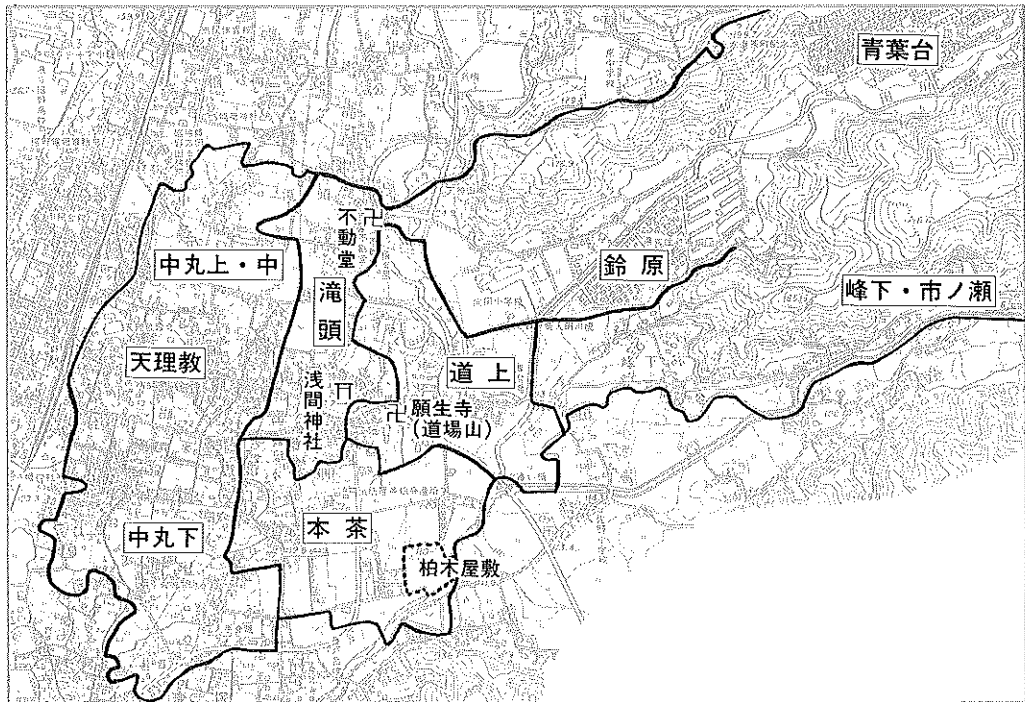
願生寺

ち道場といわれるようになったものであろう。本来は時宗で久根の安楽寺と同じ系統という。この道場山の南裾には茶畑村の鎮守、浅間神社があり、縄文中期の遺跡も残されている。

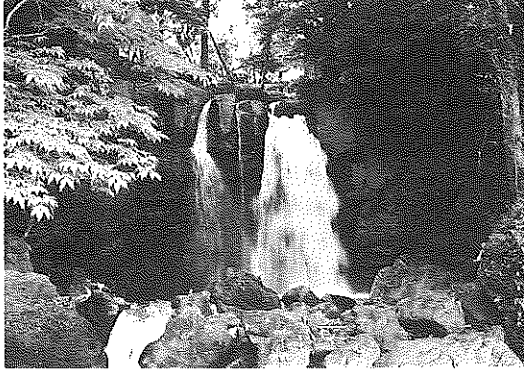
地名が歴史を語ることもある。タイコブチバと呼ばれるところはおもと寺があったといい、浅間宮が今の場所に来る前にあった場所をモトミヤと呼んでいる。峰

下のヒヤクショウブチ（百姓淵）と呼ばれるところには石碑も立っており、井戸窪、大門坂などかつての様子をうかがえる地名もある。また、清水館病院から登ったところには弘法さんが一六歳のときに来た足跡が残っているという。市ノ瀬という集落は、もと深良に住んでいた市ノ瀬という家の次三男がシシガリ（猪狩り）に来ていたところに住みついてはじまったと伝えている。そこで檀那寺も遠いからと松寿院から耕月寺に移したのだという。耕月寺の檀家はほとんどが茶畑にある。

村内区分と行政区 現在の茶畑では、浅間神社前の坂を境に、中丸・天理・滝頭の坂上、本茶・道上・峰下・市ノ瀬の坂下という二地区に分けられる。戦前は茶畑全体から一名、人民総代（のちに区長）をおいていたが、昭和三〇年代の人口の増加により区制改革



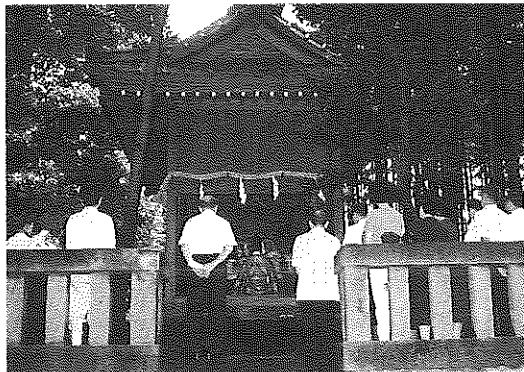
図Ⅱ-12 茶畑の行政区



不動滝

を余儀なくされ、昭和三六年に六ブロックに分けるとともに、それぞれを小区として区長をたてるようになった。新たにできた六ブロックとは、本茶道上・峰下市ノ瀬・中丸上中・中丸下・天理教・滝頭で、さらに翌三七年にはサラリーマン世帯の集中する富士見台が茶畑から分離した。その一〇年後、さらに家数が増加したため、中丸下から和泉区が、また本茶と道上、中丸上と中がそれぞれ分かれた。そのあとも昭和四六年の県営住宅完成により新たに鈴原地区も形成された。しかしこれら県営住宅や富士見台、鈴原地区は茶畑のつきあいをしておらず、浅間神社の祭りにもかかわらない。ちなみに祭礼の役割は次の九ブロックで分担する。中丸上・中丸中・中丸下・天理町・道上・滝頭・本茶・峰下市ノ瀬・和泉。昭和四五、六年当時の茶畑は八五〇戸位だったという。

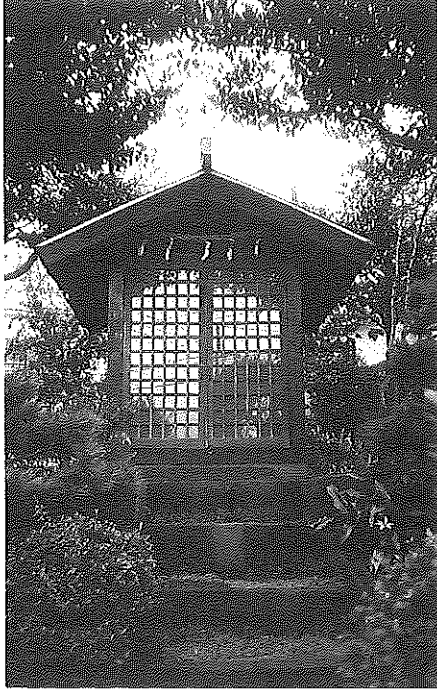
ところで道上の横山良作家は屋号をナカオといい、セーノカミ(道祖神)にも「中尾」と彫ってあることから、以前はそのあたりを中尾といっていたらしいという話をきいた。このことについて名主をつとめていた柏木家に残る文書から近世の茶畑村の村組を確認してみることにしよう。延宝五年(一六七七)の『御厨下筋茶畑村』と表書のある



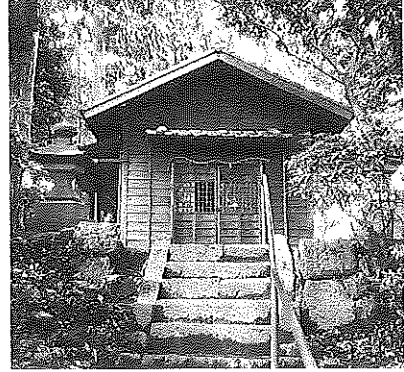
浅間神社合祀祭

村明細帳によれば、「百姓家統五通りニ罷在」として、中尾組(二一軒)、滝頭組(二五軒)、中丸組(二八軒)、茶畑組(一八軒)、平松新田(七軒)と「右之外伊豆境ニみの下井市ノ瀬と申居村式ヶ所」があると述べている。滝頭や中丸は現在と同様と考えられ、平松新田は独立している。問題は茶畑組と中尾組である。直ちには決められないが、おそらく本茶は茶畑、道上は中尾と呼ばれていたものであろう。また延宝八年(一六八〇)の『村鏡』には平松に八軒、市ノ瀬に五軒あり、他は本村として九一軒と記されている。下って延享二年(一七四五)の書上によれば、中尾三五軒、滝頭三二軒、茶畑二〇軒、仲丸三四軒、一ノ瀬五軒とされている。

レ申候哉年数相知レ不申候尤御年貢御役名主組頭百姓勘定仕一組切クミとモヨリ 前述の延享二年の書上にも「是ハ何年以前相分二百姓集り組頭取立仕候」とあるように、いつごろからこうした集落ができたのかはわからないが、江戸時代には中尾や滝頭は組と呼ばれ、それぞれから組頭を立てていた。文書には「相分レ」とあるが、おそらくは分かれたのではなく近世行政村としての茶畑村の成立以前から存在していたものであろう。こうした集落をこの裾野市域ではモヨリ



道上・十二天神



本茶の金毘羅神社

になった。合祀祭には各モヨリから役員が出るほか子供相撲がおこなわれる。浅間神社の氏子総代は三年交替でモヨリごとに出ている。また、一〇月一五日の例祭には表のようなモヨリごとの役割が決められ、それぞれ氏子総代とは別に祭典委員が出てつとめることに

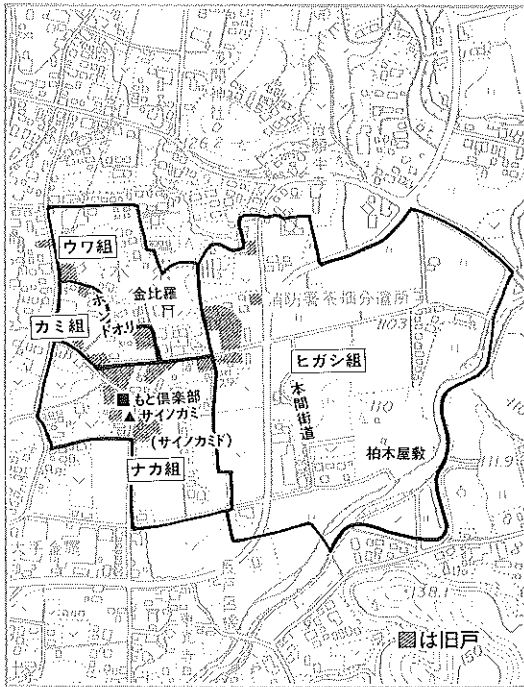
(最寄)と呼んでいる。

モヨリは今日でも人々の日常生活の基本的な単位として機能している。明治初期に行われた神社合祀で、それまでモヨリごとに祀られていた神社を浅間神社に集めてしまっただけからは、八月二五日に合祀祭(合社祭ともいう)をおこなうよう

なっている。以前は大祭の時には各モヨリの入口に「祭礼」と書いた御神燈をかかげたという。

モヨリ単位の神社が残っているところもある。本茶の金毘羅さんとは柏木屋敷にあったもので、明治四一年にモヨリが柏木家から譲り受けて祀るようになったという。小高い丘の上になつた金毘羅は、以後その土地を地主から買い取り、あるいは贈与されてモヨリの共同の財産として一月一〇日に本祭がおこなわれている。また毎月一〇日の命日にはモヨリの念仏のおばあさんが清掃し、公民館で念仏をする。

この時、組や区長から年四万円の昼食代をもらうのでお菓子などを供えている。



モヨリ内部はさらにいくつかの組に分かれる。本茶にはヒガシ、ナカ、カミ、ニシの四区があり、それぞれをチョウ(町)と呼んで

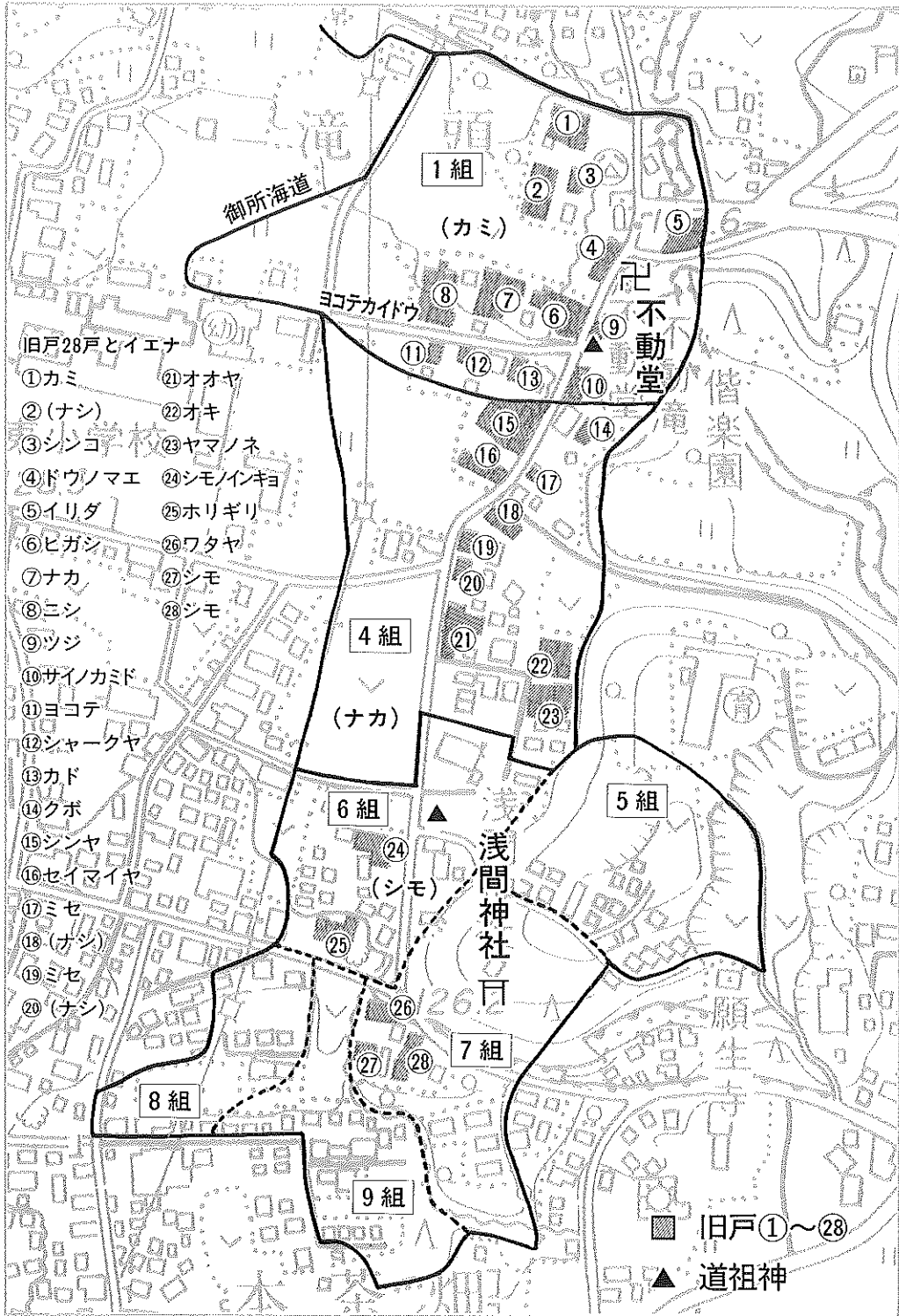
表Ⅱ-1

平成4年度浅間神社祭典委員並びに役割表(案)

(平成4年9月19日)

委員長・清水良一郎 副委員長・小沢 忠康 会計・杉山 久

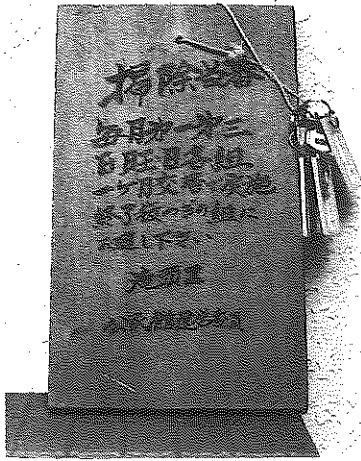
区	委員名	役割分担	作業内容	予算・その他
中丸上	富田 庄司・杉浦 勝春 原 忠義・豊田 肇夫 日永 勇・加藤たかし 高野 貞夫・穴倉 仙一 笠間 聡子	・祝宴接待 ・庶務	・富岳台園児お菓子 ・雑用(書類コピー、案内状発送等)	菓子 16,500円
中丸中	小沼 久男 石井 忠彦 柏木 政 山本藤太郎	・祝宴関係弁当等 赤飯、料理、弁当、酒、ビール つまみ、ジュース、菓子等を購入用意する	・赤飯1斗8升ヤマキ給食に注文 ・赤飯台2個を前日14日にヤマキ給食に届ける ・14日昼食分(祭典委員等) 500円×26ヶ 缶ビール ジュース 15日祝宴用(招待者等) 550円×50ヶ 酒2合ビン50本 15日直会(祭典委員代) 500円×28ヶ 酒10本 ビール2K ジュース24本 つまみ菓子等 16日弁当 500円×24ヶ 酒4本 ビール20本 つまみ ジュース	御赤飯(1.8斗) 36,000円 弁当 54,500円 酒つまみ菓子等 50,000円 ジュース 5,000円
中丸下	長田 武男・高田 敦夫 松井 和彦・桑原 肇 市川 正・杉山 伸夫 西沢 光雄・貞田 武波 室田 忠三・堀井 利弘	・花代揭示	・花代揭示方法については氏子総代に連絡して支度して下さい	
天理町	伊東 奉嘉 仲村 一郎	・献供物	・供え餅2個中丸の芹沢茂様宅に依頼 (前もって打ち合わせて下さい) ・白米1升、塩、酒1升、魚、大根3本、人参7~8本 りんご7~8ヶ、みかん20ヶ ・さかき3尺物1本、玉串25本	お供餅 10,000円 供物 13,000円
道上	杉山 弘 木川 三郎 杉山 久 小杉 幸夫	・しめなわ並びにおしめ ・来賓接待	・しめなわは清水一雄様に依頼する ・おしめは宮司様に依頼する ・しめなわの毛ばむしり	しめなわ、毛ばり(お礼、茶菓子等) 55,500円
滝頭	峰川 修一・飯東 強 桂 真由美・川崎 晴彦 山本 謙治・関 将 西田真一郎・横山 富三 中尾 功二・清水良一郎	・職 ・献燈 ・花火	・職献燈等については氏子総代と打ち合わせて支度する ・花火の注文届出 11日(昼10発) 14日(昼5発) 15日(昼30発 夜20発) ・来賓受付については和泉区と打ち合わせる 来賓用リボン50枚用意	絨燈用障子紙 5,000円 花火65発 155,200円
本茶	柏木富美子・庄司 旭 川上喜佐雄・柿島 正二 小沢 忠康・庄司 清和 船木 信和・小沢 秀雄 飛田 一男	・来賓受付 ・花棒	・福引は昼間のみ、賞品は前年度を参考にして注文 ・抽選券印刷、配布は案内状と一緒に区長依頼 ・抽選器具2台用意 ・幸運抽選は夜間実施 ・赤飯盛りつけ用アルミホイール500枚分用意する (例年三菱アルミKK注文)	リボン代 1,200円
峰下 市の瀬	杉山 直 得上 忠義 杉山 富作	・福引、賞品 ・幸運抽選		賞品 1,000本 195,000円 幸運抽選 186本 255,000円
和泉	川畑 和彦 成川 信吉 遠藤 邦昭	・来賓受付接待	・来賓接待については関係区と打ち合わせる	
全区 協力	連絡員 (責任者)		・余興(演芸会、ソフトボール大会、子供みこし ゲートボール14日) ・許可、申請書類、発信文書 ・祭典費、特別寄附金受領 (1,191戸)(99名)	



図Ⅱ-14 滝頭の組と旧戸

いる。金毘羅の祭礼にあたっては、その年の当番町を決めて一切をとりしきるようになっていた。四町になったのは昭和四九年のことです。それ以前は東・中・上の順で当番をまわし、当番の町はクミウチから寄附を集め、宿の家を決めて、そこで直会のごちそうを作ったりしたものだった。このほか、道上是十二天さんやお不動さんを祀り、滝頭も不動堂でモヨリだけの不動講を行っている。後述するように講の多くはモヨリを単位に行っており、モヨリの寄合としての役を果たしている。

滝頭の内部は、現在九組に分かれているが、以前は上・中・下の三組であった。昭和三七年に茶畑に小区制がしかれて、モヨリを一区としてそれぞれの区長をたてるようになるまでは、茶畑全体の人民総代のもとにモヨリから一、二名の協議員を出していた。滝頭はその当時、各組から一人ずつ計三名の協議員をたてており、モヨリの長はなかったという。滝頭が九組となったのは戸数の増加したのちの昭和五二年のことである。滝頭の戸数は後述する旧戸とよばれる終戦直後の農地解放の時の二八戸から、四五年間で七倍余り、二



滝頭公民館の掃除当番の板

〇〇戸近くにまで増加している。滝頭ではドンドン焼きも以前はクミごとにやってきた。場所ばかりでなく時間も異なっていて、上組は学



組が管理するゴミ集積所

校から帰った夕方に、中組は学校にいく前の朝のうちにやったという。本茶でもドンドン焼きは、クミごとにムラの三か所の入口に分かれておこなったという。ただし戸数の少ない道上一か所だった。とはいえその道上也このところ戸数が増えて、以前の組は上・下二組だったのが今は上・中・下・坂下の四組に分かれている。本茶では昭和四七年より東を一三組、西を一三組に分け、これに従来の中組、上組を加えて八組編成に変更した。

このほか昭和三〇年ごろまではモヨリごとのカヤバでカヤをとって、カヤムジン（萱無尽）をおこなっていたという。葬式などの手伝いは組が単位となるが、組がちがっても古くからそのモヨリに住む家（旧戸）は手伝いに出ることが多い。モヨリは財産区としての意味が大きく、茶畑山の権利をモヨリ毎に分けたことから、さらにモヨリとしてのまとまりが強くなっているといえる。共有については第一章第三節を参照されたい。

(二) ムラの構成員と運営

旧戸と新戸 モヨリを構成する住民の中には二種類の家がある。旧戸（キュウコ）と呼ばれる古い家と新戸（シンコ）と呼ばれる文字通り新しい家である。茶畑の場合、この旧戸新戸は明確に区別される。その基準は共有財産に対しての権利の有無であり、滝頭なら不動講議員の二八戸が旧戸となっている。本茶は明治三八年時点のモヨリの共有金の権利者は二七戸だったが、大正一年にさらに四名が加わり三一名となった。共有地のもととなるのは近世以来の入会地である茶畑山で、茶畑全体で二一名の権利者がいる。モヨリごとに山岳委員を出し、山の神を祀る。滝頭では三三名が共有に入っており、二名の山岳委員が出ている。旧戸と新戸のちがいは山の神講に入っているかいないかに最もよくあらわれる。

旧戸のつながりは強く、クミが単位となる婚礼や葬儀でも手が足りないときは旧戸同士が手伝ったり、会館で結婚式をするようになった昭和四〇年代でも旧戸は招待していたという。またムラにおける旧戸の発言力は強く、茶畑の祭礼を日曜日にしてはどうかという意見もあるが、歴史と伝統は重んずるべきであるとする旧戸の意向から、今も一〇月一五日はかわらないという。

地主と小作 茶畑では大きい農家のことをオデヤ（お大家）と呼んだ。オデヤはよくカネオヤを頼まれ、奉公人を使っていた。本茶では名主をしていた柏木本家にカネオヤを頼んだ家が多く、未だに盆や正月のツケトドケは欠かさないといい。また本茶の田はこのサカイガワと柏木康利家（屋号ウチャシキ）のものだったといいい、ウチャシキの地所には本茶のヤマシテンノウが祀られている。

一方、道上では柏木屋敷のシンヤである柏木ちゑ家をカネオヤとした家が多い。柏木ちゑ家は屋号をシンヤといい、八代前にサカイガワから九〇石をもらって分家したという。

カネオヤはオヤサン、オヤブンともいって小作のコブンとは日常生活のさまざまな場面がかかわりあいをもっていた。コブンは盆暮のほかオヒマチやセツクの際につけとどけをしたり、暮のお供えをとどけたり、あるいはオヤブンの家の冠婚葬祭に手伝いに出たりと、農作業や、その他声がかかればいつでも出向いたものだった。サカイガワのコブンは本茶に一〇軒ぐらいあり、その法事には直接の家であるウチャシキやシンヤのコブンも参列する。一方、オヤの方もコブンの結婚にあたっては反物や洗面道具などを贈り、さらに子どもができるお腹帯をあげたり出産祝い、初節句の祝いを贈ったりと何かと面倒をみるものだった。

こうしたオヤブン・コブン関係は地主小作関係の崩壊した戦後には次第にうすれていくこととなり、カネオヤをたてない家もふえてきている。すでに昭和二年生まれのＹさんも自分の経験として小作米を納めたことはなく、父親がもっていたのを見たことがある程度という。その頃田んぼの小作は米で、畑の小作は金で地主のところへ持っていったという。本茶ではどんなに豊作でも八俵しかとれず、小作料は五割以上で「四俵済し」とか「四俵半済し」といわれた。小作の子どもたちは学校を出ると奉公に出た。大正六年生まれのＳさんは米屋の小僧に出て、兵隊検査のころは名古屋にいたという。小作は秋はなるべく早く稲刈りをして二毛作の麦をまいたり、茶畑山を一里も登って畑の開墾をしたり、あるいは暮から正月にかけては箱根竹を切って売ったりして稼いだという。

終戦で、それまで借りていた土地が解放となって小作の生活は大きくかわった。シンヤ（柏木ちゑ家）のもっていた道場山の畑は借りていた小作の手に渡って、その後ここに借家をたてた人もあった。また戦後天理町では天理教所有の土地が大きくなったが、これは解放で土地を手に入れた小作人からの売却によるものであったという。滝頭の山本一家も農地解放前には二〇町歩ほどの山林をもっていて、コブンの家が正月のおかざりを作りに来たり、餅つきに来たりしていた。この家では昭和一五、六年ごろに共有の山の権利をコブンに売り渡してしまったという。

ムラの役職 前述したように茶畑が大区だった昭和三六年までは茶畑全体の長として人民総代がおかれ、各モヨリから一〜二名の協議員がでていた。人民総代のころにはその下に常使がおかれてすべての連絡を担っていた。人民総代はのちに区長と呼ばれるようになるが、昭和三六年の茶畑臨時総会で翌三七年より小区制に移行することを決定し、以後モヨリを小区としてそれぞれに区長をおくようになった。

区長以下の役員について滝頭の例をあげておく。区長一名、副区長一名（組長のうちから出る）、組長九名（各組より）、監査二名（前年度会計、副区長）、顧問一名（前年度区長または副区長）で、組長からは副区長、総務、会計各一名と防災、衛生、体育各二名が兼務となる。それぞれ任期は一年であるが再任は妨げない。またこのほかに大区（茶畑）の役員として浅間神社の氏子総代一名と市消防団員二名が出る。現在は監査を除く各役員に三〇〇〇円から一万円の手当が支給される。さらに滝頭では公民館運営のために、運営委員長（区長）、公民館長（区長兼務も可）、総務係、会計係を各一名

と公民館委員七名をおいている。

本茶畑の『共有金明細簿』（以下『明細簿』）によれば大正年間のモヨリの役職は「最寄総代」の四人で、総代は引継書類五冊とモヨリの共有金を一月に引き継いでいたことがわかる。この総代は文字通りモヨリのことは何でも世話をしていたので、昭和五年度の項には「世話係」と出てきたりする。また記録上は昭和一〇年からは「最寄組長」として三名になっている。協議員とは行政上の役職名であり、モヨリ内部ではこのように総代、世話係と呼んでいたのである。

ムラの集会所 モヨリにはそれぞれの集会所としての公民館が設置されている。これらの公民館は、多くの場合、その前身が若者たちの宿として使用されたクラブ（倶楽部）であった。クラブは一七歳から二二、三歳くらいの青年たちが寝泊まりした宿で、百姓仕事や食事をそれぞれの家ですませたあと集まってくる場所だった。本茶の現在の公民館は昭和四八年一二月に完成したもので、建設にあたっては区費以外にモヨリ住民が月掛をして集めた。新築することになったのはその前年にそれまでの集会所が焼失してしまったため、前



滝頭公民館

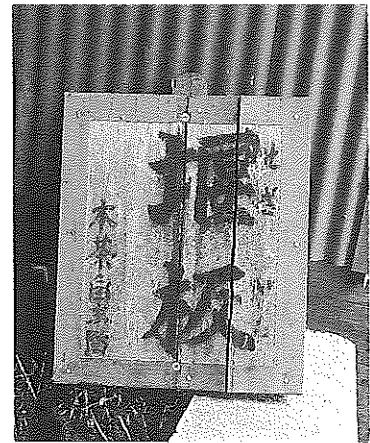
年にそれまでの集会所が焼失してしまったため、前



公民館使用申し込み(本茶)

の集会所は昭和五年に、それまで若者たちがクラブとして貸りていた庄司家の空家をモヨリでもらいうけて現在地へ移転したものだ。その当時の大きさは六帖二間に八帖一間で、土地はその後昭和十四年になって本茶モヨリ三名が共同購入した。モヨリの財産となつた集会所は、以後青年の宿としてだけでなく、農産物の共同集荷場などモヨリの人々のさまざまな集まりに利用されてきた。道上の公民館も昭和三〇年ごろにできる前はやはりクラブであったが、そのクラブをつくる時には道場山にあった不動堂を現在地へもってきたという。滝頭の現在の公民館は昭和五七年に完成したものだ。それ以前はモヨリの寄合は不動堂でおこなっていた。公民館の土地は旧戸二八人の共有地なので、区費から今もその地代を支払っている。

ムラの寄合 昭和六二年度の滝頭区の申し合わせ事項の「しおり」には、定例総会について「九月、十一月、三月とし日程は組長



モヨリで管理する堰板

われるようになる以前、ムラでの寄り合いは「講」と呼ばれていた。本茶の記録ノートには「初講」「暮講」「最寄講」という文字がみ

られる。「最寄講」の中には風祭や山の神、諸神の各講が含まれる。「講」とはすなわちオフルマイのことで、飲み食いしながらモヨリの運営について話しあうというのがムラにおける寄合のやり方だった。本茶の『明細簿』昭和一四年の項には「三月廿五日夜、諸神講(当番小沢善吉郎)ノ節協議事項」として、四月一日に新たに発足する消防団のことが記されている。同じく『明細簿』の昭和一八年一月一七日の協議事項として「諸神講廃止シテ常会ニテ神祭ヲ行フ事」と決議しているが、いずれにしろ諸神講は公的に常会という名前にかわっただけで、その後も続けられた。諸神講は三月と二月に開かれ、八月の風祭りの時には山道造りも同時に行われた。正月は初集会で、山の権利者のみ山の神講が一月と九月に行われた。このほか滝頭では不動講が旧戸二八軒の寄合であり、道上下では毎月一回宿に集まって観音講をひらいていた。こうした講が特定の神仏を祀ることを第一の目的としているのに対し、諸神講は諸人講と

会で決め区民に連絡する」とあり、区総会には「全員の出席を必要とするが都合により欠席する者は組長に連絡し委任する」としている。このように「区総会」といったことは使

も書くくらいで単なる集まりであったことが明らかである。寄合は公民館のできる前はクラブや中丸下のようにカンノンサンの堂、滝頭の不動堂などで開かれていた。

ムライリ 茶畑のモヨリにはそれぞれに共有財産があるため、仲間入りするにはそれなりの儀礼と義務を果たすことが求められる。『明細簿』大正一一年の記録によれば、この年の三月六日に三人の新加入者があり、それぞれ五円ずつを本茶モヨリに納めている。さらに「右新加入者ハ植林地參拾壹円五拾銭 集會所金拾円 惣計金四拾壹円五拾銭ニテ加名ス右ノ金額ヲ大正拾壹年ヨリ同拾貳年拾貳月迄ニ無利息ヲ以テ金納スル事」とあり、仲間入りにあたってはかなりお金のかかったことがわかる。加入内金の五円は昭和二年の記録にもかわらない。

また滝頭では公民館を建設するにあたってモヨリの人々が寄附を集めたことから、転入者には相応の分担金を定めている。昭和六一年度の一二期総会において、昭和六二年年度の転入者は持家なら九万円、借家なら五千円を納めることとなり、反対に転出者については八万円を返済するとある。

第四節 共有と共同

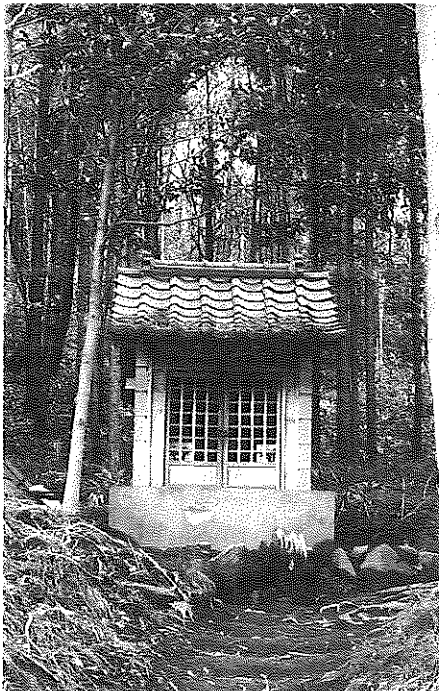
(一) 茶畑山をめぐる共有と共同

本茶区で昭和五九年一月にまとめた『本茶畑の沿革』には、本茶区と茶畑村に関する歴史が細かく記述されている。このうち茶畑山については柏木武氏が大正初期泉村山野の統一事件を中心に今日

に至るまでの経緯を記している。

茶畑山が箱根山の上の高い峠のほうまで茶畑のものになったのは、江戸時代に山論のおこった折に、相手伊豆佐野の名主が答えられなかった境界を示すことのできた茶畑村の名主のおかげであると、ムラの人たちは言い伝えている。その茶畑山が大正はじめにはまた争論のもととなるが、結局茶畑村の人々の権利が認められた。こうした歴史的な背景もあって、茶畑村の人々の山への思いは強く、今なお各モヨリから山岳委員を出して山の道と山の神の管理をつづけている。

山の権利者は二一名。一月一七日と九月一七日に山の神の祭りをおこなう。一月は初講ともいい、九月の祭りの時は朝八時ごろモヨリごとに公民館にあつまりミチツクリをし、一〇時ごろから山の神さんの前で神主を呼んで祭りをする。そのあとは講に入っている人だけで山の神講のオフルマイをモヨリごとに催す。平成三年のミ



市ノ瀬の山の神

チツクリは滝頭では九月八日に予定していたが雨が降ったので九月一日に行行った。出ないうちはデブソクキン（出不足金）三〇〇円を支払う。道上では以前は下刈りは全員が出ていたが、五、六年前から半分ずつ一年おきに出るようになった。

茶畑山は戦後、山の上の方を藤田観光に売却し、下のほうをモヨリごとに分割した。その時の二一名でさらにモヨリの山を分けたが、山の神のまわりの土地五反ほどと浅間神社のジンジャモチの土地は今も二一名の共有となっている。御殿場の財産区が茶畑の山を買って植林しているが、その道代を年一回御殿場の衆にもらいに行く手前、ミチツクリはしなくてはいけないという。

山の神の祭りは氏子総代が中心となり、総代は各モヨリから一名、計八名が出る。浅間神社の神主がお敷いをしたあと、供えた赤飯をたべ酒を飲んで山をおりる。以前はヤマミチツクリで刈った草を堆肥にしていたが今はやっていないという。峰下では旧戸の一七、八軒が米を一合ずつ持ち寄って家並順に当番となってオフルミヤールを

(二) 社寺をめぐる共有と共同

社寺を祀る際、古くからの家が新しい家に対して特権的な地位を主張することは珍しくないが、茶畑でそれが最も顕著にあらわれているのが滝頭における不動祭祀である。耕月寺の隠居寺だったという不動堂は延宝五年の書上にも「村始方御座候様ニ申伝候」とあるもので、旧戸の二八戸だけで祀っている。「もとのシ（衆）でなければ滝頭の不動さんは祀れない」といい、不動堂の周辺一帯、現在の公民館の土地も二八戸の共有となっている。世話人三人は三



滝頭の不動講（1992年2月不動堂にて）

る。つまり、一代に一回はつとめる計算になるが運がいいと二回、三回となる。一巡すると籤をひきなおす。平成三年がちょうどひきなおしの年だった。この不動堂はもとは滝の沢というところにあつたといわれ、明治時代に滝の沢の山論に勝訴したのを機に耕月寺の分家寺のあつた現在地へ移して祀るようになったという。このため不動堂の建っている土地だけは今も耕月寺の所有となっている。二八日のホンビは年寄が念仏をする。

本茶の金毘羅も当初は三戸共有の山に祀っていたが、ここでは旧戸新戸の別なくモヨリ全体の神様として祀っている。各組ごとに当番をつとめ本祭を一月一〇日に区内全体で、また毎月一〇日は年寄が念仏をおこなう。他のモヨリの神様は茶畑の鎮守である浅間さんに合祀したため八月二五日に合祀（社）祭を行うようになったが、

神社でない弘法さんやお釈迦さんは今も別に祀っている。願生寺の弘法さんは二月二日に、お釈迦さんは四月八日が祭日で、もとは道上、本茶、峰下、市ノ瀬、中丸、滝頭の五つのモヨリで祀っていたが今では坂下のうち主に道上で祀っているという。弘法さんは昔は大祭で芝居などもかかったという。



峰下の大日堂

第五節 ムラの集団構成

(一) 近隣集団とモヨリ

モヨリの神様 前述のようにモヨリ毎に神様を祀ることがあり、モヨリは信仰的な集団の単位として表われる場合がある。これは、モヨリの人々が力を合わせて生きていかなくは生きられないといった時代の名残りともいえる。滝頭の不動講は旧戸二八戸で祀っ



葬式組の手伝いの女衆のキチュー（1991年滝頭）

を構成していた頃には、墓地も共同であった。滝頭の共同墓地は明治四三、四年頃に作ったという。

講とモヨリ 不動講がそうであるように、何かを集団で祀る際は「講」という組織を形成するもので、茶畑ではモヨリ毎のこうした講が寄り合いの場でもあった。特に山の神の祭りは茶畑二一一名共有の権利者にとっては合同で行なう重要な祭りであるが、その後のオフルマイはモヨリごとにおこなわれる。一月と九月の一七日に開催されるが、一月については初講とあって、モヨリの家数がほぼ旧戸と同じだったころには新年の寄り合いを兼ねていた。

講と名のつくものには他に、百姓のオフルマイと呼ばれたショジョン講（諸神・諸人講）があるが、もとは寄り合いとして機能していたこの講も今は月並念仏になり、年寄りのあつまりになった。この

諸神講、山の神講に風祭を加えて本茶では最寄講と呼んでいた。これらは信仰を媒介としながらも、そのオフルマイでモヨリの人々（戸主たち）が集まることに大きな意味をもっていた。

またモヨリごとに代参をおこなう講もあった。大山講は毎年二月の節分に、神奈川県伊勢原の大山神社に代参者が豆まきに参加してくる。一晚、麓の宿坊でお籠りをしてきた代参者が戻ると講の人々は宿にあつまりオフルマイをした。清水の秋葉さんへは毎年一二月一五、六日ごろの三日間の例祭に代参者を出す。代参者が代表してうけてきた荒神のお札は講中の人が集まってオフルマイをしたところで配られる。

葬式組 昭和五二年の本茶モヨリにおける総会の決議事項に



天理町共同墓地



天理町の共同墓地の脇に立てられた看板

は、役員選出について定めた項目の次に葬式の穴掘りについて「穴掘りの順番制をやめ輿揚が責任をもってこれを行ふ」と定めている。かように、モヨリにおいて葬式組の存在は重要な問題なのである。昭和六二年に滝頭が作成した「しおり」にも目次の五項目めに「滝頭区葬儀要領」が登場する。この要領は昭和五年に制定し、六三年二月に改定されたものである。内容は次のようになっている。

- 1 組長は 組内の区民が亡くなった場合は、速やかに区長に氏名、年齢、通夜、葬儀の日時、場所などを連絡する。区長は各組長に伝達する。又組長は組内に伝達する。
 - 2 葬儀は 組単位で行なう但し葬儀の規模により、施主からの申出があった場合、組長は、隣組に応援を依頼する。
 - 3 組長は 施主と協議のうえ、葬儀委員長となり、葬儀の運営を司る。
 - 4 区長 組長は、通夜並びに、葬儀に参列する。
 - 5 香典は、特に規定せず、個人の自由で任せる。
 - 6 香典返しは、市の、申合せに従い、自粛する。以上
- こうしたとりきめはモヨリの戸数が増え、組が多くなったために改めてつくられたもので、それ以前は文章化されず慣習としてモヨリやその中のクミの人たちによって行われていた。滝頭では上中下組の三組だった当時には、葬式にはモヨリ中が参列していた。全戸から男衆、女衆ともに出て手伝ったり飲み食いしたりで三日かかったという。道上一も一五軒だった頃は全戸で結婚式も葬式も行っていった。またその際に使うお膳などは、お不動さんの晩に持ち寄った月掛の積立金で共同購入した。また葬式当日は米が大量にいるのでモヨリの一五軒は各々一升ずつもちよって助け合ったものだった。現

在この道上は六五、六戸に増えてしまったため、葬儀の手伝いは組ごとにするが、この場合手伝い合う組がきまっています、たとえば四組に死者があると一組か二組の人に手伝いをたのむ。また組単位で足りない場合に旧戸が応援をたのまれることも多い。

組の人たちは亡くなった日の晩に喪家に集まって役割を分担するが、重要なのは二人一組で親戚へしらせに行くヒトとアナホリであった。しらせる先が多い場合はヒトを何組もたてねばならず、残った人たちは準備に追われた。アナホリはロクシヤクと呼ばれ最低四人。他にコシアゲも四人つけたが前述のように本茶では昭和五二年より、それまでモヨリが管理する帳面の順番によって出していたアナホリをやめて、コシアゲが兼務するようになっていく。

結婚式 結婚式を自宅で行っていたころには、これも近所の手伝いがあったとこそできるといふものだった。昭和一七年におこなわれた道上の例では二部屋しかない自宅で①親類の本膳②近所の衆③青年④お手伝いの女衆と、何回にもわけて宴会をしたという。その料理をつくってくれたのもモヨリの人たちであった。また近所の娘たちも客の接待に来てくれて、かつての結婚式はモヨリをあげての行事だった。こうした手伝いのとりまとめを道上ではオヤサン（カネオヤ）がサキダチでやってくれたものだったという。結婚式場を使うようになって近所の手伝いはいらなくなったが、昭和四〇年代までは旧戸は必ず披露宴に呼ばれたものだった。

結婚したあとは出産の際にも、産婆さんにたのむようになるまでは近所のおばさんをトリアゲバアサンにたのんで手伝ってもらったり、子どもの祝いに近所の女衆に来てもらったりした。生まれる二、三日前には嫁の実家から組の人たちに、デミマイとよばれる餅が配

られたりもした。

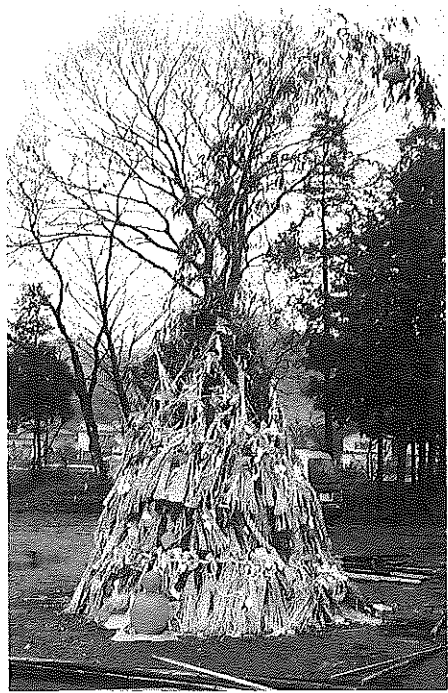
(二) 年齢集団

子どもの仲間 年齢や性別によってもそれぞれに講と呼ばれる集まりがあり、神祭りを通してモヨリ内での親睦を強めている。子どもたちは一月二五日、上級生の家を借りて天神講をひらく。小学校一年から六年までの子どもの行事だが、新たに一年生に入る子どもは毎年この天神講で子どもの仲間入りをさせてもらうという。この日はそれぞれが米二合ほどとお金を少し持ち寄って、自分たちで作った夕飯を食べながら遊んだ。



サイノカミ (滝頭)

子どもの行事といえば、誰の心にもなつかしい思い出として残っているのが、正月のサイノカミさんのドンドン焼きであろう。一月七日、各家へ子どもたちが集団でまわってお飾りを集める。このお飾りやスス払いの竹などを使って、サイノカミさんのところに小屋がけをする。この小屋をサイノカミの家と呼んだりして、小学校に入って天神講で子どもの仲間入りをした子たちからこの小屋に泊り込んで、夜なべでお飾りのとりっこをした。お飾りはたくさんある方が盛大な



本茶のドンドン焼き (1993年柏木屋敷にて)

ドンドン焼きになるので、となりのモヨリやとなりのクミととりあいをしたものだ。サイノカミさんにはお飾りのほか古いお札や書初め、古いお雛様なども納めた。

いよいよ一月一四日、米の粉でつくった団子をドンドン焼の火で焼いて食べ、子どもの健康を祈ったものだ。ドンドン焼きは、無病息災を祈ってこの団子を焼くことが行事の中心なので、ダンゴ焼きとも呼ばれる。ドンドン焼きの単位はモヨリが小さい道場などでは一か所だが、本茶は三か所、滝頭は二か所といった具合にモヨリの中をいくつかのクミに分けて行うところもある。この場合はモヨリの古くからのクミがその基準となる。滝頭ではカミとナカでは火をつける時間も学校に行く前と帰ってからと違ったという。また現在は学校が休みの一五日に行っている。

子どもたちの集団は、最近子ども会という組織化されたものになり組み込まれるようになったが、この子ども会主催の行事がモヨリご

とにいろいろ行われる。その一つとして浅間神社の八月の合社祭の子供相撲があげられる。氏子総代が寄附や景品を集めて子ども会が主催して行われている。

ワカインシュと青年 茶畑の青年たちは一七歳くらいから二二、三歳くらいまでの間は倶楽部と呼ばれる若者宿に寝泊りした。昭和一五、六年ごろまではここで夜の長くなる一月から三月の間、夜学を開いて勉強したこともあったが、基本的には倶楽部は、モヨリに共に生きる若者たちが親睦を深める場であった。終戦のころまではかなり大勢が泊まっていたといい、男の子は皆その仲間に入りたくて早く泊まりに行きたかったものだという。本茶では個人の家の六畳一間くらいを借りていたが、立ちのきを迫られてから現在の公民館のところに移った。また滝頭では不動堂を倶楽部として借りて昭和三〇年ごろまで泊まっていた。倶楽部へは女子青年団に大きい布団をつくってもらって各自運び込み、毎晩家で夕食を食べたあと集まっては酒など飲みながら話をしたりしたものだった。倶楽部には蚊もノミも出たが、学校を出たばかりの新人りはコワカインシュと呼ばれ、この倶楽部でもまれて成長したという。夏から秋にはあちこちでひらかれる祭りに倶楽部からそろって出かけ、歩いて千福や富岡まで遊びに行くのが楽しみだった。長男が結婚すると家に二、三男の居場所がなくなるのでそのために泊ったという人もあるが、「うちでオヤジやオフクロの顔みててもしょうがない」という青年っぽい気分が倶楽部での生活を維持した面もあったようで、人によつては「自分は真面目だったから倶楽部には泊まらなかつた」と話す人もあった。いずれにしても昭和三三年に結婚する前に泊まるのをやめたという滝頭の人が、さいごは三人しか仲間がいなくて、

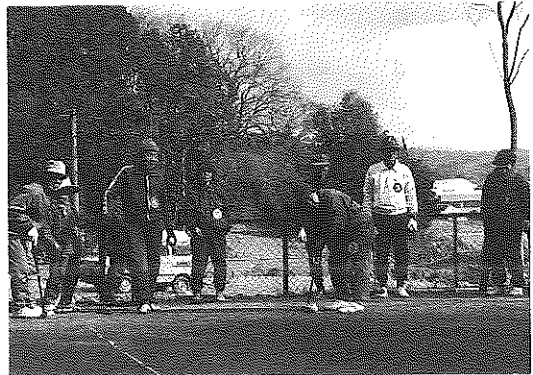
不動堂に一人になってしまった時などこわかった、と話しているように次第に泊まる人がなくなつてこの宿の習慣も消えてしまった。また、この倶楽部は本来モヨリ内で百姓をしている青年が泊まるものとされてきたようで、たとえば親ゆずりの大工で百姓とのつきあいはあまりなかったというような若者は加わっていないかった。

女衆の淡島講

男の子は子どものうちはドンドン焼きに天神講、青年になれば、倶楽部や祭り、そして戸主になればさまざまなモヨリの行事や講、寄り合いと、集まり親睦を深める機会がいろいろに用意されたが、結婚すればムラを出ていってしまう女の子たちにはそうした機会はほとんどなかった。そんな女性にとって、初めて公に集まってオフルマイの機会が与えられるのが結婚したのちに仲間入りする淡島講である。女の神様、安産の神様といわれる淡島様を祀るこの講は、かつては宿で六月と十一月の農家の忙しい月を除いて、毎月淡島様の掛軸をかけてオフルマイをした。今はほとんど公民館で婦人会の総会とともに行われるが、女たちが公然と集まって飲み食いしながら遊べる楽しみの行事にはかわりがない。昔は子ども呼んで御飯を食べさせてあげたものだったという。女性たちの集まりとしてはこの他に、佐野のミツイシ出身の女性たちが行うミツイシ講が道上で行われるなど、出身地を同じくする女性たちによるものなどもみられる。

年寄りとお念仏

子どもの仲間が子ども会となったように、年寄りの仲間が老人会として公に組織されるようになってからは、予算がつくので旅行に出かけたりと老人たちの行動範囲は広がった。本茶の老人会では一月に河口湖へ一泊旅行、三月には伊東でゲートボールの県東部大会があつて二泊で出かけたという話をきいた。



倶楽部のゲートボール場でプレーするお年寄り

れて入るといふ。このほかお彼岸、月並などの念仏があり当番をきめてお茶菓子を用意する。また葬式のあつた家には七日七日に念仏にいく。中丸と滝頭では老人会がそれぞれ一日と二日に浅間神社の掃除をうけもっている。

第六節 世間との交流

(一) 買い物

魚は沼津の静浦や馬込から自転車やオートバイにリヤカーをつけて売りに来た。刺身、シラス、ホッケ、アジ、イワシ、イルカなどを持ってきた。刺身はモノビのときだけ買った。またエビ、シラス

は蒲原からも売りに来た。三島からは三日おきぐらいにしょうゆ、酢、はちみつなどを売りに来ていたが、味噌やしょうゆはほとんど自家製だった。麴は近年になって自家製でなく三島の新宿の麴屋さんへ行つて米と取り替えてきたりするようになった。このほか、サツマは田舎の人が山から持ってきてくれたり、高山の置き薬がまわってきたり、市ノ瀬からは呉服の行商なども来て、ムラの中にはいつもさまざまな行商人が入っていた。

一方、裾野の町に近い茶畑では、必要なものは町に出ればすぐにそろった。平松の呉服屋、ゲタや、タビや、肉屋、豆腐屋も魚屋も買いに行きさえすればよかった。とはいえ、今とちがってそう何でも買うというわけにはいかなかったから、肉屋はあつても牛肉など買つてたべた記憶はないという人が一般で、むしろ山でハト、キジ、ウサギなどを自分でとつて食べていた。また、町が近いため葬儀屋の関与が裾野地域の他の地区より早い時期から始まつたり、産婆さんが町から来てくれたりした。裾野で最初の産婆さんは明治三十九年生の芹沢チエさんで今も平松に健在という。チエさんが初めてとりあげたのも本茶の子どもだった。当時、車で宣伝に来て広告していたのを見て、きってもらったのだという。このほか二本松の杉山しげさん、その姪の水口みつ子さんなどが茶畑では産婆さんとしてよく知られている。

百姓をしている家はほとんどが馬持ちだったが、バクロウから買うと高くなるので借金してわざわざ北海道や青森まで買いにいったという。バクロウは峰下にいたが、山梨の馬を売買していたらしいという。またラオ伐りであちこちへ出かけることも多かった。箱根の方へは犬をつれて一人で行ったが、伊豆の竹を伐りに行った

るときは、二、三人で泊まりこみで出かけたという。戦後はヤミウリで御殿場や須山の方に魚やだしを売りに行った人もあった。

(二) 神仏を介した人々の交流

流頭公民館下にあるラッカ（羅漢）塚は四国など方々を歩いてきた人が一つずつたてたものという。神仏を介して人々は各地へ出かけ、また各地からムラへとやって来た。道上の不動の祭りには周辺の村からお念仏の人たちが来て念仏を唱えていたというが、祭りなどは殊に人々の交流がはかれる場であった。毎年三月二八日には茶畑や伊豆佐野、麦塚などを順にまわる吉田神社の祭礼がある。吉田神社は村々が共同で祭祀するもので、輿にのせて神社ごと毎年順番に村々をまわしていく。平成五年は佐野から茶畑へと吉田神社



吉田神社祭礼（1993年3月）

がまわされ、茶畑では四月三日に村中をまわしたのち四日に本祭を行った。

村に入ってくる民間宗教者によって屋敷に神仏を祀ったりすることもある。本茶のある家では親の病気を治すために麦塚の宗教者にモノをみてもらって四〇年くらい前から八幡様を祀りはじめたという。茶畑の人々が神参りとして最もひんぱんに出かけるのはやは



吉田神社引き継ぎ式（1993年3月）

り三島の明神さんで、安産祈願や七五三には三島大社に出かけるのが一般的である。また葬式の時は忌中位牌を浜へ持って行って流すハマオリを行うが、そのあとは浜の近くの料理屋で精進おとしを行ったりもする。生活に今のような余裕のなかった時代には、神仏を口実にした物見遊山は人々の楽しみの一つでもあったのである。

（齋藤 弘美）

第三章 時間と民俗

第一節 生活の時間・生産の時間

(一) 茶畑の生業

かつて、茶畑の生業は基本的には農業だった。水田による稲作と裏作の麦作、畑の陸稲や種々根菜類及び蕎麦などの食用穀類が主要作物とされた。また、養蚕も加わり、畑のかなりの部分を桑が占めていた時代があった。

こうした農業に加えて、タケキリ（竹切り）のように、農閑期を利用したカセギ（賃取り労働）の仕事も経済生活を支えていた。

農業と賃取り労働が一体とならなければ生活は苦しく、近代以降は、両者混合の生活形態が地域の一般的な暮らしとなって継続してきたのだった。

以下、このような茶畑の生業を背景とした地域の暮らしを、一年という時間の経過にしたがって眺めてみたが、そこには地域の生業のありようの歴史を反映した複雑さと、暮らしたの姿のさまが表れている。

(二) 稲作の一年

茶畑の水田 「たんぼでは生活できない」といわれてきた。本茶に限っていえば、この地区の水田面積は一二町三反四畝だったと

いう。戦前の本茶は「百姓ばっか」二四、五軒（現在は三〇〇軒）だったが、一戸あたりの水田面積はわずかなものであった。自家保有の米の量も少なく、「六月の農の頃に米が残っていれば上等」などといったという。

このように、一戸辺りの水田面積が少ないのは茶畑全体に共通した問題で、こうした不利益を補うべく、茶畑地域に共通した農業形態が営まれてきた。

水は箱根用水とジスイ（地水）の両方が使用されてきた。

大正一二年の大震災直後のことである。この時は、以後三年間はど水が無くなってしまい、川の中に草が生えてしまうということがあったが、地水を利用して急場をしのいだという。

水田の土質については、硬い土質の田と柔らかい田を区別している。カンソウダ（乾燥田）とかカンデンチ（乾田地）あるいはハタケダ（畑田）などと呼ばれる土地は土質の硬い土地で良質の田とされた。反対に柔らかい土質の田はドブツタあるいはハデヤーと称され、こうした土地は農作業も困難であるし、良くない田として位置付けられている。これはいわゆる湿田で、作業の困難さを例えた「女泣かせのフカンボー」などの言葉もある。ハデヤー対策としては「肥料を余分にくれる」などしたものだという。そのほか、コサと呼ばれる日陰の田なども、出来の悪い田として嫌われた。

しかし、一般的には、茶畑の田の土質は良好とされている。

種もみと苗代 稲の収穫終了後の、秋から冬を経て春に至るまでの期間は、稲作に関しての特別な作業はなかった。秋にマンガを使っていいいに取った稲もみを、鼠に食べられないようにしたり、あるいは温度湿度の変化で変質しないようにブリキ缶に入れるなど

して、気配りをしつつ蔵や納屋に保管することが重要だった。保管すべき種もみの量は一反につき五升くらいを目安にして保管しておいた。

農耕儀礼は、正月一日に、「ウナイゾメ」を行っていた。田に一鍬を入れ、その年の米の豊作を祈願したものである。また、この日はオソナエワリ（正月の供え餅を割る）も行う。一般的には「仕事（農作業）始め」の日の認識となっているようだ。

しかし、こうした農耕儀礼もかなり前から行われなくなっている。その一因には、かつてはこの時期水田の裏作として田には麦がまかれ、その育成期間にあたっていたからであった。

苗代への種もみまきは五月三日と決まっていたので、特別に事情がない限り、この日に合わせた種々準備が整えられた。

四月の末頃、納屋からもみを取り出し、エンスイセン（塩水選）を行い、良いもみの選定を行った。エンスイセンはかつては共同で行ったこともあったが、後にはたいてい個人個人で行っていた。水に混ぜる塩の量は、卵を浮かべてみて、卵の一部分が見えるか見えないかに沈む（あるいは浮かぶ）くらいの濃度を基準とした。選定されたもみは、その後カマスに入れ四日間ほど川に沈めて置き、発芽直前の状態にした。

苗代に使用する田は、水利が良く、しかも深過ぎない土質の所が選ばれ、それは毎年決まった場所であった。苗代用の田には、秋、レンゲ草をまいておき、耕作の時には土の中にこれを混ぜて埋め込み、苗代の肥料とした。

苗床は四尺位の中で短冊型に盛り上げて作り、床と床の間には一尺位の中の作業時の歩行用の溝を切った。水をはって、土には水を

十分含ませておき、床土が水で浮かばないような注意が必要だった。もみまき後は水の管理がおもな仕事となった。「水は干さず、深水にせず」といい、適度な水量を保たせた。

余ったもみを炒ったものをヤコメ（焼き米）と呼び、かつては苗代作り終了後にこれを食べていたものだったと聞くが、現在はヤコメ作りはほとんど行われなくなっている。かつてのように苗代育成でなくなっており、もみを薬品漬けにしてしまうので危険で食べられないのである。

苗代の苗の管理にはズイムシ取りがあった。ズイムシ（ずい虫・蛾類）は苗の葉の裏側に卵を生み付けてあるので、棒で苗を静かにはらって卵を見つけだし、取り除いた。この仕事には子供も手伝いとして駆り出されたものであるという。



シロナラシと田植え

田植え　かつて田植えは五月一五日を基準にして、この日を境に始められていた。

イイダウエ（結い田植え）といい、「今日は自分の家、明日は隣の家」という具合に、田を起こしたりシロナラシする馬や実際の田植え人足となるソートメ（女衆）を提供し合って、組内が共同で植えた。（本奈）

田植えは、縄張り法で、



縄張り田植え

のキヨさんは歌がうまく、諸方（シヨホウ・各地）で頼まれて歌いに出掛けていたそうである。

かつては御殿場の川島田あたりからソートメさんに来てもらって植えたこともあったというが、それほど頻繁なことではなかったようだ。

田植えの日の一日 田植えの日は朝が早い。朝五時にはイイ（結い）を頼んでいる家まで呼びに出掛け、自宅まで来てもらったうえでアサメシ（朝食）を食べてもらう。

ヒルメシ（昼飯）までの間に約一反五畝くらいを植えて、ヒルメシは家で食べた。田植えの日はふだんよりご馳走で、オコワ（強めし）を蒸したり、モチ（餅）をついたり、おかずには野菜や魚を付けたものだったという。

水のかかる入り口（水口）から植え始め、次第に下がるといって植え方をとった。たいてい二、三人の組になり、縄張り役二人、苗運び一人の役のほかはソートメ（植え手）となった。植

えながら歌う田植え歌は、だれが歌うともなく自然に口をついて歌われたものだったという。本茶のサイノカミドの庄司麻一さん（大正元年生まれ）の母親



田植え

が主な作業となる。水不足の時には、本茶内では交替制をとってカケバン（かけ番）を決めた。カケバンは朝と晩に田を順番に回り、水を入れたり、止めたりする者である。

田の草とり 稲の生育が順調に始まってからは「田の草とり」が主な仕事である。一番草から三番草まで、草が目立つようになるのと除くというマメ（きちょうめん）さが要求された。

田の草取りの道具や方法は年々改良されて、変わってきた。初めは田の中をのたって歩きながら（這うような姿勢で）、手の指を使ってとったり、土の中に埋め込んだりしていたが、その後は鉄製の曲がった刃が指のように付いた「ガンツメ」を使用するようになった。その後、さらに「田ころがし」が考案されたので、腰を曲げなくても田の草とりが出来るようになって、作業は楽になったという。

田植えの時はユウジャ（午後二時頃の軽い食事）もとっている。

暗くなるまでの一日を終えて、ソートメさん達には自宅に来てもらい、お風呂に入ってもらい身体をきれいにしてから、酒を一杯飲みながらのユーマシ（夕食）をとってもらうことが習わしだった。

ミズカケ（水かけ）

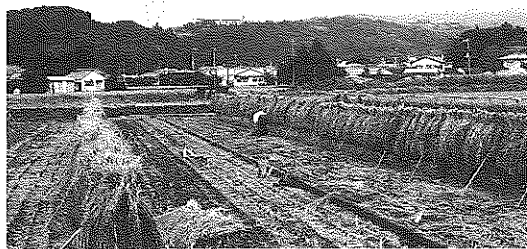
田植え後の管理はミズカケ

近年は除草剤を使用するようになり、田の草とりの作業は行われなくなっている。

しかし、田の草取りには、単に草を取り除くということだけでなく、水中の土を起こして稲の周囲に酸素を送るという効用もある。除草剤を散布するだけでは物足りないという思いも残っているようだ。また、かつては草取りと同時に、稲の中に紛れ込んで伸びている稗などを抜き取るということも行われていたものである。

八月ころになるとウンカ（カメムシ目・半翅類・ウンカ科で浮塵子と書く）が発生したのでウンカ防除が行われた。田に水を張り、竹の筒に入れた油（石油）を株間にポタポタと流しておいて、その後、棒などで稲をはらってウンカを水中に落とす作業であった。

刈り入れ・脱穀 稲刈りは浅間神社のお祭り（一〇月一五日）



稲刈り

のころが目安とされて始められた（本茶の場合）。作業はウチニズウ（家人数）で行うことが多く、ノコギリ鎌を使い一株一株を刈った。かつてはデボシ（地干し）であったため、刈ったらその場に稲束を倒して置いたままにして、約三日間ほど乾燥させた。足を組み、竹の棒に干すウシ（稲架）は、その後に行うようになった方法である。デボシで乾燥させた後、大束にまるって（束ねて）、馬力で

家まで運んだ。家には足踏みの脱穀機（アシブミ）があった。アシブミ以前は麦打ち台で脱穀したものだという。

脱穀の後、もみは筵の上に広げ、やはり三日間くらい干す。ムシロボシと呼んだ。ムシロボシはオモテ（屋敷内の広場）を使い、一日の内に何回もひっくりかえすなどして、まんべんなく乾燥するように心掛けていた。

もみは、指でねじって皮が剥けるくらいまで乾燥させれば良いとされた。

粳すりはカラウス（唐臼）で行った。近くの庄司清吉家（本茶）には水車があったので、そのカラウスでやってもらい、米を粳すりの礼として払った。

（三） 稼ぎのタケキリ（竹切り）

夏を中心にした稲作の一年が終わると、冬の期間の仕事のタケキリが始まる。いわゆる「半稼半農」のこの地域では、タケキリが、大多数の農家の経済を支える大きな稼ぎ収入となってきた。タケキリを行う者の中には、それを専業にする者も居たが、しかし、それを冬の稼ぎとして、山にかけ竹を切ってきた人々も多い。ここでは、茶畑におけるタケキリをめぐる冬の稼ぎの暮らしを見てみようと思う。

シノダケ タケキリの竹は、シノダケと称される箱根西麓一帯に自生している細い竹で、これは当初、家や土蔵の建築時に壁土の中に使用するコマイダケとして切り出されていた。しかし、後にはパイプのラオ部分の竹として使用されるようになり、茶畑にはラオ屋なども現れ始めた。またアメリカ輸出用の、葬式のトモダケにも

こうした竹が使用され、そのために切り出ししていたこともあったと聞く。本茶天理教町のあたりには「パイスケ屋」と呼ばれた竹職人が多く、竹を購入して、パイスケ作りをして生業としていた。

タケキリの時期 タケキリの時期は一月半ばから一二月の末、いわゆる正月直前まで行っていた。「秋を片付けてから」と、タケキリの始めの頃に言ったものだが、稲の収穫を済ませてから一刻も早く稼ぎに出掛けたという気持ちが込められていた。

正月から三月までは、そのまま春までタケキリを続ける家、モシキ（燃料の木）採りの稼ぎを行う家、山で落葉などをかいて春の肥料の準備をする家など、それぞれの事情で異なっていた。

ウミダイラ タケキリの場所は箱根峠の西のウミダイラ（海平）あたりが多かった。専門のタケキリになると、西山（愛鷹山）から、湯河原や真鶴、国府津など神奈川県の方まで竹を求めて歩いている。

カセギ 庄司麻一さん（大正元年生まれ）は、戦後、まだ若い時タケキリに行っている。長さ四尺五寸のものと長さ六尺もの二種類を小束に丸って（丸く束ねて）、馬につけて日帰りをして、約二五〇円の稼ぎになったと記憶している。

ラオ屋の暮らし 本茶の柏木重雄さん（大正四年生まれ）は長いこと「ラオ屋」を生業としてきた。重雄さんは滝頭の生まれだが、八歳の時、義務教育を受けるために本茶に移り住んだ。その頃家族は、父親の友蔵と叔父の栄吉を中心に、山の神の近くへ開墾のために入っていた（移住開墾と呼んでいる）のだった。重雄さんの弟妹は山の開墾地で生まれたという。重雄さんは、そうした環境に育って、小学校の頃からタケキリを始めていたという。その重雄さんに

タケキリの暮らしと、ラオ屋の暮らしと技術を聞いてみた。

山行き 竹の質が良くて、切り出すのに適当な時期は正月から二月にかけての頃だった。三月に入って切った竹には、家に持ってきた後に虫が入ってしまい、竹に穴を空けられてしまうことが多いのだという。この良い時期を「竹の時期」と呼んで、天気さえ良ければいつでも山に出掛けていた。

この時期の山行きは出発が朝五時だった。アサメシ（朝飯）は、バクメシ（麦飯）をどんぶり三杯、ナメミソ（金山寺）、ヌカツケ（糠漬）、オミオツケ（味噌汁）を食べ、出発。三時間半くらい歩いてようやく山に着く。そこでまずヒルメシ（昼飯）を食べる。ヒルメシは弁当イザロ（竹を編んだ籠の弁当箱）に五合くらいのものでいい。おかずにはナメミソ、大根のヌカツケ、梅干しくらいのものだった。ヒルメシは四分の三位を食べて、ユウジャのために残しておく。その後、二時から三時まではタケキリの仕事となる。といっても、時間は時計を持っているわけではないから、日時計でだいたい時間を計ったものである。帰宅時間は太陽が大瀬（沼津市）のハナ（端）から外れた頃合を確認して決めた。

夏の山行きは、朝はもっと早く、午前二時起き、ミツボシサン（夜明けの星）を見ながら三時には家を出た。夜明けは山に到着した後だったという。

重雄さんは夏の山行きのことでよく思い出すことがある。八月の「明神さんのお祭り」の頃であった。お祭りにも行けず、山に行くのはみっともないから、なるべく人に会わないように早く出掛けたものだったのだという。帰る頃には、三島の方に花火があがるのが見えたので、うらやましく思いながら眺めたものだったそうだ。

タケキリの道具と野良着 古くは、タケキリにはワラジガケで出掛けた。後にはズックの裏側に鋌を打ってある山行き用の履物ができ、それを買って履いた。ズボンをはきキャハン（脚半）を巻いた。上体はシャツ。寒い日はハンテン（半てん）と、頭には手ぬぐいのホッカブリ。軍手は必需品だった。

道具はヤセウマ（背負子）を背負い、ナタガマ（鉦鎌）と鋸をつけて、腰にはトブクロ（砥石袋）に砥石を入れて出掛けた。ナタガマは地元の鍛冶屋で作ったものでなければ使い物にならなかったという。売り鎌はあまいのだという。つまり、竹の良い物を選別した上で、なるべく余計にとるために地中に潜った部分から切り取るので、丈夫なナタガマが必要だったのである。

約三日間のタケキリで一万本の竹を切れた。

ラオ作り 竹を持ち帰ってから、家でのラオ作りとなる。夜なべ仕事である。一本の竹から三、四本のラオを取る。これをコギリ（小切り）と呼んだ。コギリには、巾八分位の、厚みの薄いノコギリを使用した。ラオの長さは五寸五分、三分の一の部分に節がくるようにとる。節に付いている袴は包丁で、竹をくるくる回しながら削り取る。カワトリ（皮とり）と呼んでいる。節は焼け火箸で突いて穴を開けた。

ラオ竹が取れたら、水洗いをしてきれいにする。芋を洗うように、水車で二、三時間回して洗う。その後、乾燥させた。

干し上がったラオ竹は、湯で、あくぬきを行う。この際、三島の紺屋で買ってきた薬品（ヘマチン、硫酸鉄）を入れ、竹を黒く染める。そして、再び乾燥させた。

仕上げの作業の前に竹の曲りを矯正するためのタメの作業があ

る。矯正の木枠にはめて、火鉢の火で温めながら真っ直ぐに直す。仕上げはガラ（磨き車）を回して、臘を入れ、二時間ぐらいの間ツヤ出しを行う。

ラオ問屋 こうして作られたラオを購入する「箱根竹品株式会社」があって、柏木さん達のラオを扱ってくれていた。京都のラオ問屋にも出荷していた。

箱根竹が枯れたこと 昭和七、八年頃のことだったという。箱根のシノダケに実がついて枯れたことがあった。その際、柏木さん達は、シノダケを求めて伊豆方面まで行ったものだったという。

柏木さんのラオ屋のその後 戦後、柏木さんはラオが売れなくなったので、ステッキやペン軸を作ったこともあった。しかし、それも旨くはゆかず、昭和三九年前ころ鉄工場なども建てている。

（杉村 齊）

表Ⅲ-1 茶畑の農耕暦と年中行事等

	稲	竹切り、麦、サツマ	年 中 行 事	(祭 礼 等)	(農 耕 儀 礼)
上旬			正月三日、七草粥(7日)、芳粥(11日)	金比羅さん	初山(4日)
1月中旬		↑ 竹	二番正月	山の神講(17日)	初山(由打ち11日)
下旬		切 麦		不動講(毎月28日)	サイトヤキ 柿の木たたき
上旬		り)	節分、初午	大山講	ヤッカガン
2月中旬					
下旬				お弘法さん	
上旬					
3月中旬					
下旬			彼岸	お粥引継(28日)	
上旬			ヒナ節句(3日)	お粥(3日)	
4月中旬					
下旬	↑ 種もみ(エシイ)				
上旬	↑ 苗代		五月節句(5日)		八十八夜
5月中旬					
下旬					カチキ休み
上旬	シロカキ				
6月中旬	↓ 田植え				
下旬	除草、一番草取り			夏越しのオオハライ(30日)	農休み
上旬	二番草取り				マンガ洗い
7月中旬	三番草取り				
下旬			七夕		七夕を田に立てる
上旬	ウンカ防除		盆(1日~3日)		風祭り
8月中旬					
下旬				合社祭(25日)	
上旬					
9月中旬			十五夜(旧8月15日)	山の神講(17日)	
下旬			彼岸		
上旬	稲刈り		十三夜(旧9月13日)	浅間神社例大祭(15日)	
10月中旬	↓ 稲干し				
上旬	↓ 脱穀				
11月中旬	↓ もみすり	↑ (竹			
下旬		切 麦		お粥講(旧10月20日)	
上旬					
12月中旬					
下旬			正月準備(ススハキ、餅つき、お飾り作り)	お粥(浅間神社31日)、お粥(31日)	

第二節 一日の生活

(一) 仕事の一日

草刈りの一日 夏は山へ草刈りに行った。青年倶楽部に泊まっていたので、倶楽部からそのまま朝の草刈りに行った。山へ行くのと、駿河湾までよく見える。午後二時頃になると、ちょうど沼津の大瀬の辺りの海の色が赤くなる。海の色が赤くなってくると、「ぼちぼち帰らないと暗くなる」と言つて帰ってきた。アサクサ(朝草)といつてお盆のときには、朝四時に起きて草を刈りに行き、昼前には帰ってきた。遠くて暑いので、朝早いうちに起きて出掛け、涼しいうちに刈つて帰ってくるのである。

ヒネンブツ 本茶ではヒネンブツ(日念仏)といつて、旧暦の六月八日の日の出から日の入りまでテントウネンブツ(天道念仏)を申す。本茶の公民館で十三仏のおヒョウゴさん(掛軸)を掛け、供え物をして念仏のおばあさん達が交代で鉦を叩く。オテントウ(お天道)さんが出る前に行つて念仏を始め、昼に一時間の休憩をとり、日没まで絶え間なく念仏を唱える。ヒネンブツはオテントウさんに感謝するためにする。また、豊作、モヨリの健康、家内安全を願つて行うという。

このほか、ヤシヨクネンブツ(夜食念仏)といつて、自宅で夕飯を食べてからヤドに集まり、寝る直前まで念仏を唱えたこともあった。これは途中で、夜食をもらつて食べたのでヤシヨクネンブツと言つていた。

(二) 食事と生活

食事の回数 一日に四回から五回食べる。とくに、田植え時分は忙しいので朝早くから働く。アサメシは午前五時、オチャを一〇時にとり、オヒルあるいはヒルメシは午前一一時半から正午の間、午後三時にヨウジャあるいはオウウジャを食べ、パンゲまたはユウハンは午後六時頃食べる。普段は、アサメシは午前七時、ヒルメシは正午、ユウハンは午後六時だが、日が短いときには午後五時頃食べた。ユウハンは家によつても違うが、遅い家では午後七時頃食べる。

アサメシ 「アサメシメエ(朝飯前)にラオの仕事」、「メシだよ」、「マンマだよ」、などという。朝御飯のときに三回分まとめて炊いておく。家によつて違いはあるが、米と麦をだいたい五対五から六対四くらいの割合で混ぜる。麦は挽き割りを使い、朝煮てエマシたものと米を混ぜて炊く。あるいは精米所で搗いてもらい、夜のイト(間)にエマシておいたものに米を混ぜて炊く。戦時中には、御飯にコーリヤン(トウモロコシ)やサツマ、人參、大根、ジャガイモなどを混ぜて量を増やした。温かいイトはおいしいが、冷めるとまずくなった。これにおみおつけ(味噌汁)、お新香(漬物)、煮物、ナツパなどをつけた。おみおつけの具は、大根とか里芋とかナツパあるいは豆腐を豆腐屋で買って入れた。漬物は水菜や小松菜、白菜、大根などを味噌漬けや塩漬けにした。ナツパはキャベツやト(ナツパの脇芽の部分で、色が変わる)を茹でてカツプシ(鯉節)をかけ、その上から醤油をかけて食べた。

オヒル 朝の御飯に金山寺味噌や梅干し、朝のおかずの残り物で簡単にすませた。

ヨウジャ あるいはオウウジャともいう。サツマを煮たり、団子を作ったりした。サツマを煮ておけば、ヨウジャに限らず間食などとして食べたりすることができる。

バンゲ やはり朝の残り物で食べるが、足りないときにはオスイトンとかうどん、蕎麦を煮た。また、御飯に野菜を入れて煮るオジヤにして食べたりした。オスイトンは、醤油味の出汁に茄子など時期の野菜を入れ、うどん粉を箸でかきまぜて固くならないようにして掬って入れる。うどんはうどん玉を買ってきた。

蕎麦はソバを作って精米所で粉にし、ツクネ(イモ)を入れてつなぎにして打つ。あるいは、うどん粉一升と蕎麦粉一升くらいずつとを混ぜ、ツクネイモを擦ってつなぎにしそれで固さをみながら打つ。茹でて、椎茸、玉葱、葱、油揚げ、人参などを入れたつゆをかけて食べる。

弁当 山へ仕事に行くときには、弁当を持って朝五時頃に出かけた。おかずは梅干し、漬物、シヤケ、里芋や佃煮など。弁当箱いっぱい御飯を入れ、おかずは別に持った。これをオヒルとオウウジャとに分けて食べた。水は水筒、あるいは一升瓶に入れて持っていた。山では水は苦勞して汲んだので、一度にたくさん入るものを持っていた。

モロコシ トウモロコシは焼いて味つけをししないで食べたが、今では茹でて食べている。かつてはモロコシダングといって、モロコシを干して粒をとり、石臼で挽いて粉にし、お湯を入れて掻き回しながら団子状にした。これをユロリ(團如裏)の上にテッキを載せて、焼いて食べた。これは砂糖をつけたりして食べる。また、団子を茹でたり蒸かしたりもした。御飯代わりにしたり、ヨウジャに

食べたりする。粉がぼっとんぼっとんしたものだっただ。

サツマ 山で作ったサツマイモの方がおいしい。おもに蒸かして食べるので、きらさないようにしている。てんぷらにもする。今では、農家の人が持ってきてくれる。

蒸かして食べるものと、切り干しにして食べるものでは種類が違ふ。切り干しはねっとりしたもので、煮るのは菜である。

二番米 米をこいで(脱穀をして)トウシで通したときに出る小粒の米をニバンゴメ(二番米)といい、これを粉にして餅に入れたりして食べるが、粳餅はおいしくない。二番米が入っている餅も、正月用の餅にした。餡こを入れたアンビンにしたり、押し餅にしたりする。アンビンモチは、お節供のときに作る。

水の利用 井戸はだいたいの家にあつたが、富士山の地層が続いていて水脈の上は水が湧くので井戸が掘れたが、水脈以外のところは水が出ないので井戸のある家に汲みに行った。水が出るときには、音がするほど流れた。また共同井戸は、飲み水として使う。生活用水は、日中みんなが使って汚れてしまうので、朝早く川の水を汲んでおいた。

井戸の水がなくなったときには、西瓜や魚などをミカゴ(目籠)に入れて、穴から下げて井戸を冷蔵庫代わりにした。

滝頭の上組では、簡易水道が引かれる前、厚利化成の前にある共同井戸を使っていたが、水量は冬少なく、夏多かった。田んぼからしみてきた水で、とてもきれいだっただが浅かった。釣瓶の縄はしゅる縄で、一年に一回、井戸仲間が一日がかりで直した。井戸水が冬に溜れると、滝壺の下にいい湧き水があつたのでそれを汲んできた。また、子どもの頃は暑い夏に冷たい水を汲んでこいといわ

れて汲んできて、砂糖水にして飲んだこともあった。

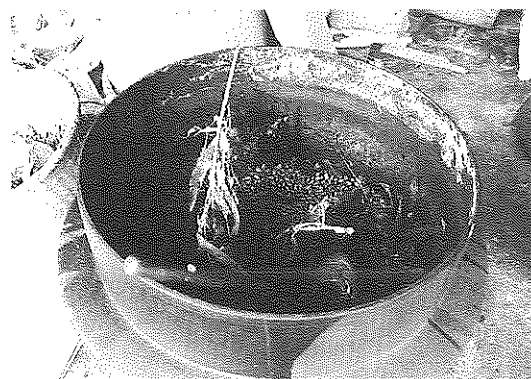
魚屋 沼津の馬込から、自転車やオートバイにリヤカーをつけて行商にきた。お刺身、シラス、ホッケ、アジ、イワシ、イルカなどを持ってきた。お刺身はモノビのときだけ買った。イルカはごぼうや人参をいれて味噌煮にした。

川魚 かつて泉川にはホタル、カワニナがたくさんいた。また、五月にはアカッパラ(ウグイ)をヨリバ(魚の集まるところ)にブツチャー(ブツチャー竹で作った三〇センチほどの漁具の中にカエルのむいたのを餌にする)を仕組んで捕まえた。カニはカニモジリで捕まえた。カニの甲羅は一〇センチほどであった。アカッパラは茹で焙り、醤油をつけて食べた。甘露煮にもした。

お茶 ヤシキの生け垣には茶を植え、自宅で飲むお茶に利用している。カネオヤの家ではコブンが茶摘みをテングツテくれたので、その摘んだ茶をコブンにも分けた。

醤油 絞り賃が高くてたくさん作らなかったが、醤油がなかった時代には自家製だった。明治三九年生まれの女性が嫁に来た時分には、その家のおばあさんが作っていたので一緒に作ったが、ほとんど見ていたくらいだったという。

味噌の作り方 現在でも自家製の味噌を作っている家がある。味噌は九月に作るが、それは北海道から大豆が入荷する時期だからである。かつては、自家製の大豆を使っていた。大豆と米麴を混ぜる割合は、煮た大豆一斗に対して米麴一斗である。塩は一升に対して二合入れるので、二斗の大豆と米麴には、四升の塩が必要となる。これを樽に詰めて、半年くらい置く。以下にその作り方の概略を述べる。



味噌作り 笹を入れて防腐剤代わりにする。

- ① 米の麴を作る。粳米を二斗(これは大豆と同量)二日間冷やかし、それを蒸かす。湯が煮立ってから、米を食べてみて食べられる程度の固さにする。一旦冷まして、買ってきた麴菌を混ぜる。これを笹(ししや)を敷いた箱へ二センチメートルくらいの厚さに広げ、麴をねせる。ねせてから三日目くらいにハナが米粒に白くつく。このときの温度調整が難しく、箱五枚でも六枚でも積んで蒸か釜(かま)を掛ける。寒いときには、さらに布団を掛ける。一昨年末ではこれは自家製だったが、今は三島の新宿の麴屋さんへ行つて米と米麴とを取り替えてくる。
- ② 大豆を煮る。大豆はむかしは二斗使ったが、今は一斗二、三升くらいに減らした。大豆を洗って一晩冷やしてから、一日煮る。豆を煮るときには、釜に焦げつくので笹の葉を底に敷いて行う。煮こぼれない程度の水で、一日中煮る。煮た豆を餅搗(もちう)ぎに使う白に入れて杵(こ)でよくつぶし、粒が残らないようにする。
- ③ つぶした豆は、あとで保存する便宜上半分にあたる一斗くらいずつに前もって分けておく。豆一升につき塩二合を入れ、さらに一斗ずつに分けた米麴も入れてそれらを合わせ、その中に塩を二合

入れる。丁寧に掻き混ぜて樽に入れる。半年くらい味噌部屋に置いておくと、食べられるようになる。

(松田香代子)

第三節 一年の生活

(一) 年中行事

ススハライ ススハライはススハキとも呼ばれたが、現在は大掃除という呼び方になっている。また、かつては今よりもっといねいに、大々的にススハライをしたという。

たいてい、一二月二〇日頃、あるいは二〇日過ぎに行っていた。竹を切って束ねたもので家の中のススハキを行うのだが、昔は家の中で囲炉裏に灯を燃したので煤が多く、これはもっとも大変な仕事となった。

また、家中の畳を上げて、これを叩いて埃を出すなどもした。終了後、ススハキダングと称して、団子を作って食べることもあった。

餅つきとお飾り 正月の餅は二八日から三〇日についた。二九日につくことを「クンチモチ」と呼んで忌む習慣があった。ク(九)は「苦」に通じ、良くないという意味であった。クンチモチを忌む習慣は、茶畑に限らず、かなり広範囲で聞くことができる。

また、餅は「東の方角」に向かってつくものだ、という風習があることを聞く。他の地域で、その年の「恵方」に向かってつくという事を聞いたが、これと同類のことからだと考えられる。東の方角

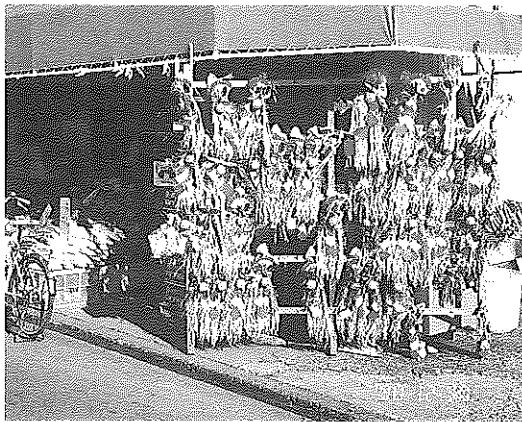
は、すなわち「太陽」の上がる方角である。太陽が上がる方向を良いとする習慣は多い。

餅をついたら、正月用のお供えを作る。お供えは丸餅の二段重ねで、床の間に飾るものももっとも大きく作り、そのほか家中の神様や仏様に飾るものは小さめのお供えとする。二飾りを基本の供え方とするので、一ヶ所のお供えに合計四個の餅が必要となる。

雑煮用に食べる餅は角餅に切っておいた。

正月のお飾りもまた三〇日に飾ることが習わしとなっている。大晦日に、せっぱつまって飾るものではないとされる。「一夜かざり」といい、これを忌む。

お飾りは玄関に飾るものをもっとも大きく作り、そのほか屋敷内、家の中の神様のものは小さく作る。本茶、ヤマギシ(柏木家のイエ



店で売られているお飾り

ナ)の場合、コンピラ様、ダイジン様、墓地など、実にたくさん作っている。

「ホカザリ(穂飾り)」と呼ぶ稲穂つきの注連縄を作った。神棚、荒神の注連縄は一年中付けておいた。そのほか、納屋、便所、牛小屋などにも付けた。

お飾りの形は、藁を

基本にした「ワカザリ（輪飾り）」で、これにウラジロ、ユズリハなどの緑色の葉とダイダイ（橙）、炭を半紙に包んだものをつけ、紅白のオシメ（幣そく）を左右対称に飾ったものである。かつては自家製の藁を使用し、山や庭で採ったウラジロなどで、自分が作ったものだったが、現在では店で売っているものを買って使う家が増えていく。

大晦日は「ミソカソバ（晦日蕎麦）」を食べる。昔は家で手打ちにして作っていたものだが、今は買ってきて食べるという。にんじん、ねぎ、鳥肉だし汁の蕎麦だった。

正月 元旦には初参りで浅間神社に行くことが習わしとなっている。その際、神棚の古い「お札」を持参し、オカガリ（浅間神社内でたく篝火）の火で燃す。しかし、オタナサマ（大神宮を指す）のお札は燃さず、屋根棟に上げるといふ家もある。オタナサマのお札を梁に縛り付けて置けば、火事の災難から逃れられると信じられている。

正月三が日は、男が雑煮を作り、家の中や屋敷内の神（オタナサマ、恵比寿、荒神、稲荷、秋葉など）へのお供えをした。この「男の正月」は、近年まで行っていた家もあるが、かなり昔から行わなくなった家が多い。

初山 正月四日をハツヤマ（初山）としている。餅一切れを半紙に包んで、山に持参し供えてくる。その際に、樫の木（カツノキであることが多い）の棒を切り取って持ち帰り、神棚に上げておき、小正月の時のナリモツソ（柿の木を叩く成木賣め）に使用する。これを行うのは男と決まっていた。

また、この日は「坊さんの年始の日」となっており、家の中の各

所の供え餅を下げる。「坊さんが年始に来る前に下るせ」といわれ、朝一番に下げたものだったという。

ゴカンニチ（正月五日） 五日をゴカンニチと称している。この日は特別なことは行われず、休みとすることが多かったようである。

七草粥 ナナクサガイ（七草粥）と呼んでいる。比較的近年まで、かなりの家で行われていた年中行事で、現在も行っている家もみられる。

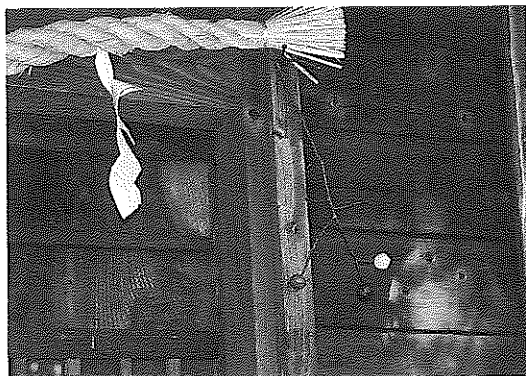
現在は一般的にいわれる春の七草は摘まず、薩摩芋や餅を入れた粥を作って食べることが多いようである。しかし、大根や芹などの菜をきざむ際には、昔ながらの唱えごとを唱えてきざみ、六日の晩に粥の準備をする習わしは続けられている。唱えごとは次のようなものである。

「七草なづな、菜切り包丁まな板、唐土の鳥と日本の鳥が、日本の土地に渡らぬ先に、合わせてバツタバタ」

この唱えごとは、地域により、伝承者により若干異なるが、ほぼ似通った文言である。また、唱えごとを言う際、まな板などを包丁の背の部分で叩きながら唱えるという形は一様である。

この日はまた「正月飾り」を回収する日でもある。子供達を中心となって、各戸を回り正月飾りを集める。二番正月のサイトヤキで燃すためである。昔は正月飾りのほかに、ススハライで使用した竹も集め、「サイの神の家」を作り、集めたお飾りを入れ、よその部落の子供に盗まれないよう男の子が泊まり込んだりしたというが、今は行われない。

二番正月 正月に対してニバンショウガツ（二番正月）と呼び、



神社にも飾る小正月の団子花

小正月（大正月に対する）という呼び方は少ない。また、二番正月の主行事のサイトヤキから、「サイトヤキ」と称する人が多い。この呼称については、「昔は、ドンドンヤキとかダングヤキ（団子焼き）と呼んでいたものだったが、近頃になってサイトヤキと呼ぶようになった」という人もいなど、一定したものではないようである。

二番正月は「団子を作る日」と言われる。一四日の晩、各家では団子を作り、次の日のサイトヤキに持っていく用意をする。団子は長い竹の棒に刺し、これをサイトヤキの火であぶって食べる。やはり現在ではあまり行われなくなっているが、かつての団子作りはダングボク（団子木）に飾り付けるためのものであった。枝振りの良い木を選んで切り、枝の先端に俵、小判、芋、人参などのさまざまな農産収穫物の形の団子を飾り付け、これをニワ（土間）に据えた。サイトヤキを行う日は部落によって異なる。一四日の晩に行う所、一五日の早朝行う所などがあるが、それぞれの都合によって日を決めているようだ。またサイトヤキの場所も、かつてはサイの神近くの広場で行っていたというが、現在は休耕中の田を借りて行っている。田は広く、防災上安全な場所だからである。サイトヤキには、

オンビと呼ばれる竹を中央に立て、周囲に七日の日に集めておいた正月飾りを盛り上げて、これに火を付けて燃す。オンビにはダルマなどをくくり付けて飾る。

サイトヤキの炎で、さまざまな物を燃す。古くなった神棚のお札、三嶋大社への初詣で買った一年前の破魔矢や絵馬、書き初めの習字など。サイトヤキの火は「風邪をひかない、字がうまく書けるようになる、歯が丈夫になる」など、さまざまな火の効用が伝えられている。

昔は一五日の早朝に「ナリモウソウ」を行っていた。暮れの内に山で切って置いたカツノキを神棚から下ろし、十文字に割った棒の先端にアズキガユ（小豆粥）を付け、庭に生えている柿の木や実のなる木を叩いて回るものである。子供がこれを行い、その際大声で唱えごとを言う。次のようである。

「柿の木、柿の木、なるか、なんにゃーか、千百俵、なると申せ、高いとけ（所へ）なると、鳥が取るぞ、低いとけなると、子供が取るぞ、ちゅうとけ（中くらいの所へ）、たーんと（たくさん）なれ」

二十日正月 正月の二〇日をハツカシヨウガツ（二〇日正月）といい、この日で正月も終わりだとする。特別なことはしないが、「二〇日正月目が覚めた」などと言う。

天神講 一月二五日。

かつて、この日には子供中心となって「天神講」が開かれていた。小学校一年から六年までの児童が中心であった。米二合ずつを上級生の家に持ち寄り、自分たちで料理し、出来た料理は床の間に供え、その後みんなで食べるという行事であったが、今は行われていない。

次郎朔日

二月一日をジロウツイタチとするが、昔は、餅をつい

たくらいなもので特別なことをしなかった。現在ではジロウツイタチの言葉も知らないものが多いと聞く。

初午 二月の午の日を「お稲荷様」と呼んで行事を行う。

初午（滝頭・芹沢豊孝家）

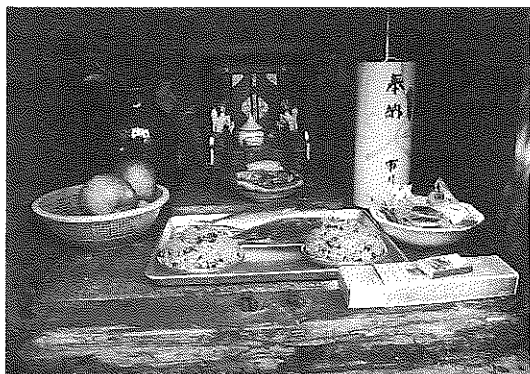
屋敷神として稲荷神（豊川稲荷、伏見稲荷など）をまつる家では、祠の前に赤、青、黄のハタ（のぼり）に

「稲荷大明神」と墨で大書きし、年月日、家の者の名前等を書き入れて立てる。

お供えには、朝は赤飯、夕には稲荷寿司などを供える。この日、稲荷寿司を作ることは、広く一般的に行われていることのようにある。また、油揚げ、生魚の供物も一般的である。

稲荷にあげられたハタを近所同士で交換して立てる習慣もある。

初午、稲荷様の供物



節分 曆通りの春分の前日に行う。「マメマキ」と呼ぶ。

炒った豆を庭に向かって「鬼は外」、座敷に向かって「福は内」と叫びつつ豆をまく。この夜を年取りの夜とし、「年の数だけ豆を食べる」という習わしがある。

かつて、ヤッカガシと呼ばれる、害虫、害鳥除けのまじないが、節分の夜に行われていた。棒に刺した鱈の頭に唾を吐きかけながら「カラスノクチャヤキ（鳥の口焼き）、ヘビノクチャヤキ（蛇の口焼き）」と唱え、これをヒジロ（囲炉裏）で焼き、トンボグチ（玄関）に刺して魔除けとする。トンボグチに刺す際にも次のような言葉を唱えた。

「ヤッカガシモ、ソウロウ、ナガナガモ、ソウロウ、トナリノバアサン、ヘヲヒツテ、ウン、クサイ」

また、この夜は、マメガラ（大豆の殻）やなすの殻を薪として飯を炊き、神棚に供えた。豆は「マメで働く（健康で働く）」、なすは「ナスガラセ（借金を返済する）」といわれる。

大山講 二月三日には大山講が開かれた。農家の代表者が大山神社（神奈川県伊勢原市）に代参し、御札を貰って帰り、これを講中に配る。講当番の家では食事を用意してオフルマイを開く。大山講でいただいて来るお札は「山の神、田の神」とされ、一年の豊饒祈願を行う。

不動講 二月二八日は不動講のホンビ（本日）とされ、行われている。

滝頭の不動様の土地は、同地区二八軒で所有し、彼等が順番でヤド（当番）を担当し講が開催される。二八年に一度ヤドが回ってくるが、一巡したところでクジを引き直して次の順番を決めている。

「二代に一度はヤドを務める」といわれている。井戸世話人及び会計係を決め、これは、三年期限で交代して務め、運営する。

前日(二七日)には準備が始まる。午前中は境内の掃除、木の枝うち、公園の掃除、ヒョウゴ(軸)を回すこと等が行われる。午後六時からヤドの家でヒョウゴを拝む。かつては不動堂で行っていたものであった。終戦後は二八戸以外もお参りにきていた。また、花火を上げたり、映画を上映したり、あるいは浪速節を興行したりもしていたという。

ヤドではオフルマイがある。経費は二八人で持つが、ヤドの家の負担もある。ニンジン、ゴボウ、イモなどの煮物をオヒラに盛って食べ、終了の後は次の当番にヒョウゴを持って帰ってもらい、散会となる。

ホンビには、午前一一時から念仏が唱えられる。

ヨシダサン(三月二八日、四月三日) 幕末に大流行したと伝えられる疫病払いのため京都の吉田神社を勧請し、以来、「ヨシダサン」と呼ばれ、行われてきた祭りは、茶畑を含めた広域一〇カ郷で毎年盛大に催されており、氏神社祭典を除いては、ムラの最大行事となっている。一〇カ郷は石脇、佐野、茶畑、伊豆佐野(三島)、麦塚、ニッ谷、平松、公文名、久根、神山(御殿場)、岩波となっており、裾野市域を越えた広い範囲での祭典となっている。しかし、各村においては、年中行事というものの、一〇年間に一度回ってくるのみの当番であるため、他村が当番を行っている九年間は、代表者が参加するにとどまる。

ヨシダサンの祭典ホンビ(本日)は四月三日であるが、三月二八日から「ウケワタシ」(受け渡し、あるいはヒキツギと呼ばれる)等

の準備が始まる。

ヨシダサンを据え置き神社としてお祭りしている地区は一〇カ郷には無く、各地区を「御輿」が順送りにされて回る。したがって、祭りホンビ前に、前年の祭典開催区から「御輿」を引き継ぐ行事であるウケワタシは、自分の村へ神を迎え入れるという意味を持つ極めて重要な行事と考えられている。

茶畑は前年の当番区の佐野から「御輿」を引き継ぐ。ウケワタシの場所は天理教の教会近くの踏切と決まっています、ここで「渡せ」「渡さない」などと大騒ぎをして、ようやく引き継ぐこととなる。ウケワタシ終了後、浅間神社に安置される。

四月三日のホンビには御輿は八人から一〇人の人間で担ぎ、オサンバコ(賽銭箱)を担ぐ者、旗を持つ者、太鼓を叩く者などと共に行列を組み、「ロッコンショウジョウ(六根清浄)」の掛け声と共に村内を練り清めて回る。

以後一年間「御輿」は茶畑に鎮座することとなる。茶畑からの引き継ぎは翌年の三月となる。ウケワタシ場所は峰下の境川に架かる「上橋」(うえのはし)で、伊豆佐野に引き継がれる。

節句 四月三日が女の子の節句である。「神武さんの節句」と呼び、「お雛様に菱餅と寿司を供える」(庄司好子さん、本茶)という。

雛人形は嫁の実家から贈られ、毎年飾ることが習わしとなっているが、誕生後初めて迎えるハツゼック(初節句)は、カネオヤ(鉄漿親)、仲人、親戚、モヨリ(最寄)を招いての盛大なおフルマイ(お振る舞い)を催す。

かつてオフルマイは自宅の座敷で行われていたものだが、現在は年々派手になり、宴会専門の会場を借りて行うことなども一般的に

なりつつある。

節句 五月五日は男の子の節句とされ、嫁の実家や親戚などから贈られた「武者絵ののぼり」や「鯉のぼり」を立てて祝う。

やはり女の子の節句と同様に、男子の場合も長男の場合は盛大なおフルマイを開き、カネオヤ、仲人、親戚、モヨリ（近所）を招く。

これを初節句と呼ぶ。長男の初節句は鯉のぼりの棹の先端に杉の葉を飾る。

稲作の作業も「五月節句前には種蒔きを終わらせておく」といい、この行事を一つの目安としていた。五月節句が過ぎれば、いよいよ本格的な水田の仕事が始められるのである。「五月、六月は雨が降っても、蓑、傘つけて田に出る」と言われ、休み無しの忙しい日々が待っていたものである。「雨が激しく降って休める日が楽しみだった」と聞く。

田植えと休み 五月から六月にかけては農作業が一年で一番忙しいときである。苗代への種蒔きに始まり、水田準備、田植えと続くために、年中行事も少なくなる。しかし、疲労した体を休めるため、農作業の一段落がついた時点で種々の休み日を設けて、これを節目としている。

カチキヤスミは五月の末頃であった。かつて、田植え前の水田には山から刈ってきた草や柴などを肥料として入れた。いわゆる緑肥であるが、これをカチキと呼んでいた。カチキはオオアシ（大足）を用いて、フンゴム（踏み込む）ことで土中に埋め込んだ。この作業で一応田植え準備は整い、カチキヤスミを取ったものである。

七月初旬によく田植えが終了する。そこでコヤスミ（小休み）

とマンガアライ（馬鍬洗い）の休みをとった。七月九日がコヤスミで、この日は半日休みとした。「半日は馬の草を刈れ」と年寄りから言われたものである。一〇日がマンガアライである。耕作や田植えに使用した馬鍬等の農具を洗って納屋に納め一日を休んだものである。小麦饅頭などを作って食べることもマンガアライの日の楽しみだったようだ。

天王祭り 田植え終了の頃は気温も上がり、人にも農作物にも様々な疫病が蔓延し易くなる。天王祭りはそうした夏の疫病払いのための祭りであるが、裾野市域は三島市などに比較して祭礼例が少ない。

本茶のヤマイシテンノウは七月一五日が祭日である。お神酒、餅、果物、菓子供えて祭り、昔は子供相撲なども行っていたようである。集まった子供達には菓子を分けたりもしていた。

七夕 七夕は七月七日ではなく、七月二十七日に行っている。期日が変則的であるのは、田植え等の農作業が繁忙期であること、八月の初旬に盆があることなどの理由によるものと思われる。

七夕に様々な色の短冊に願いを書き込んで、竹に結び付けて家の軒先に立てる。短冊作りは子供の役割ということが多く、七夕が子供の行事という認識は一般的であるようだ。七夕終了後、短冊を付けたままの竹は田に立てた。これを立てると稲に虫が付かないという伝承がある。田を所有しない者は川に流したという。

盆行事 茶畑の盆は八月一日盆である。盆は八月三日までだが、七月三十一日には墓地に行つて線香をあげ、ショウリョウサン（精霊さん）と一緒に家に帰ってくるという、いわゆる精霊迎えが行われる。精霊を迎える前に、家の玄関以外の入り口には水を張った洗面

器を置き、てぬぐいを用意しておく。精霊さんをそこで迎えるのだという。この間に家では盆棚が設定される。仏壇とは別に祭壇を作り、位牌を出し、竹を渡して収穫物などを吊るす。位牌の下にはマコモを編んで敷き、キュウリやナスで作った牛や馬を置いた。精霊さんが牛や馬に乗ってこられるといわれている。

精霊を迎えるムカエビ（迎え火）をたいた。現在は地面でタキギなどを燃すだけで、簡略化してしまっているが、かつては、玄関先に三本の竹を中央の竹が高くなるようにして斜めに突き刺し、竹の先端にアカシ（松の根など、油を含んだ木）を付けて燃やした。七月三十一日、八月一日、二日と毎日一本ずつ燃し、最後の三日には、精霊さんを送った後であるからといい、地面で火をたいている。

盆の間にも山へ行つて草を刈る仕事は続けられたが、一日の日だけはボンクサ（盆草）刈りを休んだ。

「八月二日は仏さんがおみやげを買いに行く日」といわれ、朝、祭壇には赤飯や食べ物を買って供え、お金も添えて置いた。

八月三日は精霊送りが行われる。朝、祭壇や祭壇に上げたものを、マコモに包んでまとめ、川に持って行って流した。精霊送りは朝早く行うことが良いとされ、滝頭では「一番船に乗せてやろうよ」と言いながら、滝に行つて流したものだということ。

盆がこの時期になったのは、かつて養蚕をやっていた頃からだといわれている。養蚕が一段落する時期が丁度この頃だったから、という理由であった。

家に亡くなったものが出て初めて迎えるニイボン（新盆）には、砂糖とか麩を持って行くことが習わしだったというが、現在ではお金が普通になったという。



浅間神社合社祭の子供すもう

合社祭 八月二五日は浅間神社において、ゴウシャサイ（合社祭）が行われる。合社祭は、明治初期に、天理、中丸、滝頭、本茶、峰下、市ノ瀬、道上の各部落や各個人によって祀られていた小祠の神々を集めて、当時の村社に祀ったことから始められた祭である。

茶畑の祭典には八月の合社祭と一〇月の浅間神社祭の二大祭典があるが、これらを盛大に行うために各部落からは祭典委員が選出されて、彼らが祭の進行全体を取り仕切っている。

合社祭の特色は子供相撲が開かれることである。戦前は盛んで、よその地域からも参加の子供が集まったという。

彼岸 秋分の日を中心にして七日間を秋の彼岸としている。春分の日の春彼岸と同様に寺参りが行われる。彼岸に入ることを「イリ」、彼岸の中日を「ナカ」、彼岸の終了する日を「アケ」と称するが、この言い方は広く一般的な呼称である。

彼岸の供物には、イリ、ナカ、アケとそれぞれ別な物を作って供え、食べる習慣がある。「イリばたまちに、アケだんご、ナカビまんじゅう」などの言い方があるが、これは地域や家庭によって異なる場合もある。また茶畑では、「ホトケさんは、お茶のご飯が好き」

といつて、オチャハンを作つて供える例も見られる。

中日には親戚が墓参りに来る日といい、この日寿司をツケル（作る）家が多い。

滝頭地区の老人会では、秋彼岸のイリの日に集まって戦歿者慰霊祭が行われている。

月見（十五夜、十三夜） 十五夜は旧暦の八月一五日に行われ

る。その日が秋の彼岸にかかった場合は、一月遅れの旧暦九月一五日に変更される。「十五夜が彼岸にかかる」と火元にかかる」という伝承がある。

縁側に机などを出し、ススキ、ケイトウなど野の花を飾り、ナシ、クリ、ブドウなどの果実、サトイモやサツマイモなどの収穫物、ダンゴを供える。この時飾る野の花を「ダンゴバナ」とも称している。

かつては、供え物のダンゴを子供達が盗みっこする「ダンゴツキ（団子突き）」が行われた。子供にとって、よその家のダンゴを棒で突いてとることが、月見の最大の楽しみだったという。

十五夜の供物を大根畑に持って行って祀ると、大根が良くできると言われている。

十三夜は旧暦の九月一三日に行う。「片月見（ダンゴ）は食べるもんじゃない」と言われ、十五夜を祭つた家では必ず行われていた。

山の神講 山の神の祭は九月一七日に行われる。

茶畑には山岳委員会が組織されていて、山の神と山の道を管理している。山岳委員には、各地区から選出された代表者が出る。滝頭の場合、一年交替、二年任期で選出されている。

山の神の祭前には道刈りが行われる。山に神までの道の草を刈ったり、荒れた道を整備する作業だが、これに参加できなかったもの

には三〇〇〇円のデブソクキン（出不足金）が科せられる。

九月一七日の山の神祭には、赤飯を供え、山の神前で祝詞を上げて帰る。この後、各モヨリでは、山の神講が開催される。

かつて、山の神付近の山林には植林がなされていたので、祭の日には、山の下刈りも行っていたというが、今はその作業はなくなっている。

浅間神社例大祭

一〇月一五日は浅間神社の例大祭のホンビ

（本日）である。一四日はヨイマツリ（宵祭）。祭典委員、総代らが集まって、祭の準備を行う。石段前には御神灯を付けたり、ハナ飾りを付けたりという準備がある。かつて、部落の入り口にも御神灯を掲げ、「祭礼」と書いた門を作ったりもしていたという。

一五日が本祭。午前一〇時から神事。後、拝殿内にて直会。午後は全戸に配布してあったクジのクジビキ。このクジビキは、ある時期、祭が衰退したことから、賑やかに復興するために考え出されたもので新しい行事だと聞いた。また、この日、大人はソフトボール、子供は子供御輿を担いで村内を巡幸する行事も恒例となっている。夜は、裾野出身の歌手による歌の興行や、地元の人達によるのど自慢なども開かれる。

こうした祭礼全体を指揮する祭典委員は、宮世話人とも呼ばれ、かつては地域の旧家の者が委員の任に任じたものだが、今では順番制をとるようになったという。

エビス講

旧暦一〇月二〇日をエビス講としている。

昔は「おエビスさんはゲヤ（外屋）の神様」とか「おエビスさんは人に目立つ所が嫌い」滝頭・清水なおさん）などと言われ、普段はゲヤの庇の下に飾り、エビス講の日には床の間に祀ったという。

この日、エビス、ダイコクを下ろし、米俵二俵を並べ、台を載せ、この上にお祀りした。「ゲヤへ、北向きに祀れ」と言った。こうすると「キタコラ、キタコラ」と言っ、エビス様が稼いでくれるのだと言われている。

エビス講の供物は豊富で、赤飯、大根、果物、尾頭付きの魚、「御縁があるように」と、古銭など、数々のものが供えられた。ミカンは、子供たちが下げて食べた。また、商家などを回るとミカンが貰え、子供の楽しみの一つだったという。

(杉村 斉)

第四節 一生の生活

(一) 産育

1 妊娠と出産前

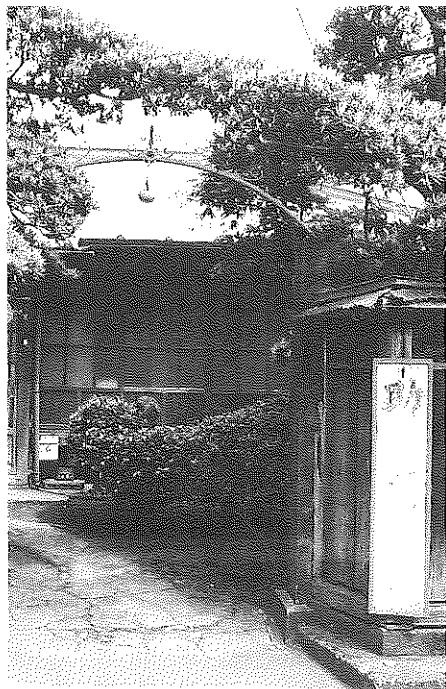
妊娠 女性が自分の体調の変調を知るのは、毎月のもの(月経)がとまったときである。子どもができると、食べ物が変わるのでわかるという。妊娠がわかると、まず夫に告げる。また妊娠中は、沢庵のオコウコのまじりになったものを味噌漬けにしておかずにし、湯づけの御飯でじゃぶじゃぶと食べた。塩辛いものは食べてはいけないといわれた。

また子どもを無事出産するために、妊婦とその夫には多くの禁忌が課せられている。たとえば、妊婦は重労働をしてはいけない・乗り物に乗ってはいけない・揺らしてはいけない・足踏みもしてはいけないなどという。また力を落とす(落胆する)ものではないとい

うのは、大声をあげて泣くと、生まれた子どもが言葉が不自由になるからであると説明されている。高い所に手を上げるとチの腺が切れる。井など大きな器で飲むと、口の大きい子が生まれるともいう。またよく言われるのが葬式での禁忌で、どうしても参列するときには、身持ちの人は鏡を帯の間に挟んでおけば、野辺の送りをしてもよいという。また、妊婦の夫の場合もコシアゲをしてはならないが、やむを得ないときには餅を撒けばよいという。このほか、妊婦の夫はシシ刈りをしてはならない・兎を撃ってはいけない・鳥を撃つとアカサカの子(お尻がひとつしかない子)が生まれるといつた、殺生に関する禁忌が多い。

トリアゲバアサンからお産婆さんへ かつて、助産婦という出産の手助けをしてくれる専門職がいなかった時代には、近所の手慣れた年寄りのおばあさんや嫁ぎ先のおばあさんが子どもを取り上げてくれた。こういうおばあさんのことを、茶畑ではトリアゲバアサンと呼んでいる。しかし、茶畑のように裾野市内でも市街地化が最も早い地域では、お産婆さんの出現の時期も早かった。

現在、平松に在住する芹沢チエさんは明治三十九年生まれで、裾野市で最も早く助産院を開業した人である。芹沢さんが数えの二四歳、昭和四年のことである。芹沢さんは乳を揉んだり、逆子の子どももの位置を直すのが上手であるといわれ、今も現役である。芹沢さんに一番最初に子どもを取り上げてもらったのは、本茶に住む芹沢さんと同年齢の女性である。芹沢さんにとっても初めて取り上げた子どもで、その子の小学校入学のお祝いにも結婚式にも招かれたという。また、お産婆さんは出産前には一か月に一回診察をし、出産後も一週間子どもに湯を浴びせに来てくれたりした。出産時には人力車で



平松の助産院

送迎するか、人力車がないときには自転車で送迎するかした。このように、現在出産の話を書くことができる茶畑の女性の多くは、お産婆さんの手助けによる出産を経験している。

とはいえ、そういった中でもすべてがお産婆さんに子どもを取り上げられたわけではなく、第一子と第二子は夫の祖母に取り上げてもらい、第三子以降の子どもたちがお産婆さんの世話になっているという女性もいる。また、カネオヤ（後述）となってたくさんのコブンをかかえる家では、その家のおばあさんがコブン衆の子どもたちを取り上げることもあったようだ。こういったトリアゲバアサンとの付き合いは、三年とか五年といった子どもの成育儀礼にもなって長かった。逆に、お産婆さんのような専門職ともなると、診療代を支払うことでその場限りの付き合いで終わった。

ハラオビイワイ 最初の子どものことをハツッコとかハツノコ、ハツゴ（初子）というが、このハツッコの出産には多くの安産

祈願の儀礼がともなう。中でもカネオヤやお産婆さんが関わる最初の儀礼は、このハラオビイワイである。ハラオビイワイ（腹帯祝い）とかオビイワイといわれる儀礼は、五か月目の戌の日に腹帯をお産婆さんに締めてもらうというものである。犬のお産が軽いのでそれにあやかって、戌の日を選ぶのだという。腹帯は、妊娠を知ったカネオヤ、あるいは在所の親から妊婦に贈られる。このとき、カネオヤが腹帯に赤飯を添えてくれるが、子どもが生まれる家でも赤飯を炊いて組の人に配った。

なお、腹帯は紅白のセットになっていて、赤い腹帯は二、三尺程度の形だけのものに対し、白い腹帯は実際締める一反の布になっている。白いほうには、お産婆さんが角に赤い糸で、七五三の針目で縫い取りをしたり「寿」と書いたりするか、赤い布を一寸か二寸くらい縫いつけたりしてくれる。

安産祈願 淡島講は安産を願う嫁たちの講で、滝頭では六、一月以外の月に一回行われている。講員は一五人ほどで、お産の神様である淡島さんが描かれたオヒョウゴを掛けて講を行い、かつては子どもたちも呼んで御飯を食べさせたという。また道上では、毎月二八日に道上の公民館で午後七時から淡島講をやっている。講員は一人前で、太鼓をはたくという。

このほかに、明神さん（三島大社）や小田原の道了さん（大雄山最乗寺）に安産祈願に出掛ける人もいたようだが、そういう遠隔地に行くのはまれであった。

デミマイ ハツッコが生まれる直前（一か月くらい前から二、三日前までの間）の大安の日に、在所からアンピンモチ（中に餡が入っている餅）を半紙にくるんで持ってくる。あるいは、四つの

重箱に四八個の餅を詰めて持ってくる。大きな餅ほどよいとされ、安産と「餠」^{もち}入りをかけて安産祈願を願う。このほか、紅白の餅を搗いて重箱に入れて持ってくる場合もあり、この餅は直径八センチくらいの丸い餅である。また、「マンジュウ五つ」といって、組中の家一軒につき饅頭を五個ずつ配る。今は、大福餅を菓子屋で箱に詰めてもらって持ってくる人もいる。デミマイの餅がさまざまなのは、妊婦の在所の習慣の違いにもよるのも一因であろう。

出産の準備 いよいよ子どもが生まれるにあたって、母親となる女性は自分の着物をこわして(ほどいて)も、一つ身のジバン(襦袢)に一つ身着物とおむつだけは用意しておこうと準備を進める。また在所からは、産着やボンシンのような着物のほか、箆笥などの家具が贈られる。また、子どもを産むときには、嫁が実家に帰ることもあったようだ。このときには、二週間くらい大事にもらったという。

2 出産

出産の場 かつてお産をする場所はナンド(納戸)と決まっております、布団を取り上げ、畳をあげてぼろや筵を敷き、天井から綱を吊るして、それに纏まってしゃがんで産んでいた。「畳の上で子を産むものではない」といい、ナンドは蠟燭の明かりだけで「アカ(子ども)を産む部屋」であるという意識が強かった。しかし、それでは暗く、産むほうもたいへんであった。医学知識のある産婆の指導によって、産室は暗いナンドから明るいザシキ(座敷)へ、板の間にぼろの敷物から畳に布団へと改良されていった。産むときには、しゃがむのではなく、布団の上に寝て腰枕をあて、ノウボン(脳盆)

に汚れ物がみんな落ちるように工夫して楽に産めるようになった。それでも汚れるのを気にする家では、ザシキに莫産を敷き、その上に普通の布団を敷き、さらにその布団の上にぼろとかを敷いた。また、ザシキに布団を敷き、その上にポッコをたくさん敷いた家もあった。お産のための布団は、汚れてもかまわないようにと、最近になって作られるようになったものである。

また、ハツッコのときに常に周到に用意して出産できるとは限らない。第二、第三子のときには、妊婦も慣れているという油断から、急に産気づいて産婆が産間に間に合わなかったということも度々あった。妊婦は、「障子の骨が見えなくなるまで、辛くても耐えるものだ」といわれたものだった。慣れた人には、自分で湯を沸かし、近所のおばあさんにちよつと来てもらって産んだという人もいる。

臍の緒は、トリアゲバアサンやお産婆さんがコヘルなどで挟んでから缺で切った。産婦の臍の所は晒を巻いておいた。臍の緒は、とれるとお産婆さんが箱に入れてくれるので、そのまま保管しておく。その子どもが病気になるって死にそうになったとき、それを湯に浸して飲むと効果があるという。

産湯は莫産を敷いて、湯を入れたたらいを置き、お産婆さんが生まれたばかりの子どもを入れてくれる。臍の切り口に黄色い粉のようなものを付け、傷口を布でくるんでくれる。その後で、秤で体重を計ってくれる。

ナンドで出産したときは、産婦はそのままナンドで寝るようになり、上の子どもたちは寝る部屋がないので、二階に上がって過ごすことになる。

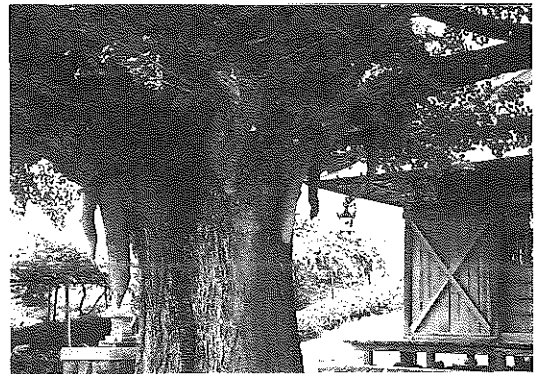
ウブメシ　ウブメシはウブの御飯のことで、生まれた子どもがオオグラシ（大暮らし）ができるようにと、神さんに供えるものであるという。その家のおばあさんが、子どもが生まれるとすぐに御飯を一升くらい炊く。お釜の蓋を裏返してその上に御飯を山盛り載せ、床の間に供える。また神供として器に御飯を高く盛り上げて、神棚（ダイジングウさん）にも供える。これは家の人も食べるが、産婦はお粥のようなものを食べる。

産湯と後産の始末　産湯は日の当たらないところへこぼすのが決まりであるが、産室の畳を上げ床板を上げて縁の下に捨てる。鬼門を避けてうっちゃる、がしゃつとあけない、などという。また、そういうことを気にしないで風呂場に捨てた家もある。

袍衣などの後産や汚れ物は、夫やその家の男衆が紙やいらぬいポッコに包んで、その家の墓地に持って行って隅に埋ける。あるいは、産室の床板を上げて産湯とともに埋けるともいう。

乳付けと産婦の食事　現在では初乳を赤ん坊にやっているが、かつてはミズツチはいけないといって、初乳を絞ってナンテンや柿の木の下に捨てた。生まれた子に最初にあげる乳は、脱脂綿に砂糖水とセンプリをしめしてやった。これは、お腹にいけば苦くなるといふ。また、乳が出なくなるときには、お粥をたいたり、牛乳を買って薄めて赤ん坊に飲ませたりした。昭和一九年に第三子を出産した人は、買った牛乳が半分くらい腐っていたこともあったという。また、近所の女の人達が乳をくれにきてくれたりした。

乳が出ない人は、長泉町下土狩にある大銀杏や峰下の大銀杏に出乳祈願に行った。峰下の大日堂の境内に植わっている大銀杏は、樹齢が一八〇年以上はある。この枝垂れ銀杏には大きな乳房（気根）



峰下大日堂の大銀杏の気根

がたくさん垂れ下がっており、乳が出ない人がゴシユクガン（御宿願）をかけるという。白い大きな布で乳房をかたどって作り、この木の乳房に吊り下げている。無事子どもが育ったときには、願はたしにする。

産後と産の禁忌　出産後は、人により家により床についている期間はさまざまだが、一般的には一週間から一〇日間くらいは寝ていたようである。また、床から起きても二週間くらいはゆっくりして、三週間くらいはぶらぶらしてあまり仕事をしないでいたという。とくに、産後に水を使うと頭がワーンとなる、血の病になるといふので使わなかったという女性もいる。また最も多くいわれたのは、産後二三日間は何もするな、針を持つような細かい仕事をするな、つまり神経を使うようなことはしてはいけないということである。その間に何かすると歳をとってから病気になるといわれた。そして、もとの体にもどるまでは七五日かかるともいっている。

また、出産に伴う穢れ観からか、起きるまで（床上げまで）は、

神棚に水なども供えてはいけなさとされ、出産後四〇日くらいは実家に行つてはいけなともいう。なお、床上げには風呂に入った。

お七夜と名付け 子どもは生まれてから七日目に、お産婆さんにブンノクボ（盆の窪—うなじの窪み）だけ残して産毛を剃つてもらう。こののち、アカメシ（赤い御飯）を炊いて、カネオヤ、在所の親、お産婆さんと呼んで、オフルミヤ（お振る舞い）をする。

このとき子どもの仲間入りもし、御祝儀も出した。また、祝いを盛大にやらなくても、コブンはオヤブんに何かしらお祝いの品を持っていったものだった。お産婆さんでも初めて取り上げた子の祝いに呼ばれたときには、三輪車を贈つたりした人もいる。このお振る舞いするとき、おみおつけ（味噌汁）の中に石を入れ、お膳を作つて生まれたばかりの子どもの前に置いておくという。

この日は、名付けをする日でもある。多くは、生まれた子どもの親がつけ、名前を書いた紙を神棚の下に貼つておく。このほか、三島大社や知り合いの神主に頼んでつけてもらつたり、オオヤのおばあさんに画数を見てつけてもらつたりした。

ネネミマイ お七夜が過ぎると、ネネミマイ、ネネミなどいって、近所の女衆や組の人達、懇意にしている人、親戚などが、子どもの顔を見にくる。「おめでとう」などと言って、布を八尺とか農作物、御祝儀などを持ってくる。これに対して簡単なもので返礼する。これは、ハツッコのときだけの儀礼である。

ハシワタシ 生後五〇日目にハシワタシをする。この日までは家の外に子どもを出さなかった。

ヒヤクヒトエ 生後一〇一日目にお宮参り、つまり氏神さん参りをする。祝い着を着せて、姑か嫁が子どもを抱いて浅間神社に行

き、神主に御祓をしてもらう。この祝い着は、嫁の在所から贈つてきたもので、赤・青・黄色など五色の色糸で背のところに縫い取りがしてあり、紋付きの着物である。このほか、在所からはおびい半纏や胴着を贈つてくる。この後、親戚、在所の親、カネオヤ、仲人などと呼んでお振る舞いをする。子どものお振る舞いをするという。お産婆さんには、この日診察代を支払い、それにお祝いの品を添える。

なお、お宮参りには嫁は行つてはいけないという人もいる。オリモンのするイト（間）は、神社に行けないというのである。

3 成長過程

初節供 男の子の節供は五月五日、女の子は四月三日に行うが、男の子も四月三日にやることもある。男の子にはヒイナさん（神武さんや鍾馗さん、弁慶や金太郎などの人形）と幟（内幟）や鯉幟（外幟）を、女の子にはお宮さん、御殿雛、内裏雛などの雛人形が贈られる。

ハツッコのときには、ヒイナさんを贈つてくれた人を招いてお振る舞いをする。また、モヨリやカネオヤ、仲人さん、お産婆さん、在所の両親なども招いてお膳を出す。なお、滝頭では上・中・下の組ごとに女の子には雛人形、男の子には柏餅（上新粉の餅を柏の葉でくるんだもの）を贈った。現在は、御祝儀をあげる。今でも組毎に行つており、新しく定住した人も付き合がある。御祝儀をもらった家では、贈つてくれた人々を呼んでもてなす。ハツッコ以外の子どもときには、家や親類だけで行う。なお、初節供は子どもの仲間入りをする日であるというが、組の子どもを呼んでお振る舞いを

することはしない。

初誕生 誕生後まる一年前に歩いた子どもには、糯米一升を背負わせて歩かせる（まねをする）。また、歯が早く生えてもよくないという。

初密 子どもが生まれてから初めてよその家を訪れたとき、ハツキヤクといってその家の人が祝儀袋にお金を入れてくれる。この中には豆なども入っている。

七五三 男は五歳、女は七歳のとき祝う。あるいは、三歳と七歳に祝うが、このときに嫁の在所からは祝いやが贈られる。子どものお振る舞いはあまりやらない。

疱瘡神 疱瘡になったときは、ホウソウマンジュウ（疱瘡饅頭）を米の粉で作り、赤い点をひとつ表面につける。サンダラ（棧俵）の上にその饅頭をいくつか載せ、木の杵を作ってサンダラを吊るし、木杵の四隅を縄で吊るして一つにまとめ、ナカバシラのところを釘などでかける。このときホウソウマンジュウは、くっついたり重ねたりすることを忌む。ホウソウマンジュウは治ると、食べてしまう。

また、ホウソガミ（疱瘡神）はサンダラに竹の棒の幣束を立て、紙の人形を載せる。人形は男の子ならば四角い袂、女の子ならば袂の袂にする。サンダラ正面には、鳥居、徳利、ナンテンなどを切り抜いた紙を下げ、これを三本の縄で吊るす。

種痘のかさぶたがとれたときには、道祖神の前に納めるか川に流す。それと同時に、子どもにユカケ（湯掛け）を行って祓い清める。ユカケは、桶に棧俵ひとつ入れてその上に子どもを腰掛けさせ、子どもの頭の上にもうひとつ棧俵を載せる。子どもの頭の上で、ヤブコウジを煮出した湯を笹で振って、祓い清める。ホウソミマイ（疱

瘡見舞い）は、滝頭の場合上・中・下の組毎で行う。また、道上ではハツノコに限って、ヨメの在所からホウソウマンジュウを重箱いっぱい詰めて持ってくる。これをモヨリ中に、一軒につき二、三個ずつ配る。

子どもの行事 サイトヤキあるいはドンドヤキは、かつては子どもたちが一月七日にはお飾りを集め、そのお飾りでサイノカミの家を作った。お飾りを集める際に一、二銭ずつ寄付も集め、お飾りのほかに羽子板、羽根、達磨などを買ってオンベにつけて飾った。本茶の小学二年から六年生までの子どもたちは、一月七日の三島大社のお田植え祭に行つて達磨を買ってきた。子どもたちは、ドンドヤキまでの間に他の組の子たちと集めたお飾りの盗みっこをしたものだった。

一月一四日には、ドンドヤキをする。この火で焼いた団子を食べると病気になるというわれている。この行事が子どもたち中心であるのは、サイノカミが子どもの成長の無事を見守ってくれたり、子守をしてくれたりする子どもの神様だからである。

滝頭では、初午に各家のお稲荷さんに奉納する幡にその家の子どもの名前を書いて幡の交換をする。丈夫に育つようと願って、子どもの名前を書くのである。

願生寺では、二月二日がお弘法さんの祭で子どもに食事を振る舞う日であった。この日は、子どもは「何膳でも食える」といい、オチャハン（茶飯）の御飯に鯛や豆腐の味噌汁、オヒラ（人参、ごぼう、昆布、こんにゃく）、なますなどのおかずがついたので、茶畑の子どもは「タダメシ食える」と言つて他地区の子どもたちまで引き連れて願生寺にやってきました。新聞紙にくるんで土産に持ってい



浅間神社の土俵で遊ぶ

く子もいた。このときには、子どもたちは親から一〇〜一五銭くらいのお小遣いをもらえる楽しみもあった。

天神さんも子どもの神さんで、かつて峰下では二月二八日に天神講をやり、当番がお振る舞いをした。またこの日は、その年に生まれた子どもが、子どもの仲間入りをさせてもらう日で

もある。滝頭では、一月二五日に、小学校一〜六年生の子どもが米二合程とお金を少し持ち寄り、上級生の家に集まる。それを使って、みんなで料理をして夕飯を食べた。借りた家の床の間で作った料理を供えた。

このほか、多くの祭で子ども相撲が奉納されている。たとえば、八月四日の峰下の大日堂の祭、八月二五日の浅間神社の合社祭などである。現在ではなくなってしまうが、七月一五日の本祭のヤマインテンノウの祭もある。子どもが神様に相撲を奉納することが、大切な行事となっているのである。

青年団 小学校を卒業すると、かつてはワキヤーシユウ（若い衆）に入った。昭和三年生まれの男性の頃は青年団と呼び、滝頭には不動堂の前に青年倶楽部があった。小学校を卒業してから青年団に入り、だいたい二五歳くらいで結婚するまでいる。農作業や食事は家に帰ってするが、寝泊まりだけは青年倶楽部でした。寝坊して

しまつて、目が高くなってから起き出して恥ずかしい思いをしたこともあったという。また、寝ている仲間を戸板に載せて、こっそり共同墓地に置いてくるといふ悪戯もした。祝言のときに、後ろの障子に穴をあけて嫁の帯上げをとってしまったり、帯を解いてしまったりした。若い衆は、柿や西瓜を盗むなどの悪さもしたものだ。ヨバイもしたらしい。そうと行って見つかって、逆に待ち構えていて下肥をかけられた、という話も残っている。また、米久の肉屋の上にあるカフェーに行くのが楽しみで、竹伐りで小遣いを貯めてはたまに遊びに行ったりした。

八月二五日には合社祭があり、そのときには必ず青年相撲があった。草相撲で、坂上と坂下の対抗戦とし、横綱はなかったので一番は大関であった。大関は、景品につづらももらった。練習はブラクブラクでやり、滝頭の場合は青年倶楽部のところの大きな樫の木の下に土俵を作って練習した。練習は、農作業が暇になった頃からやった。景品は、青年が商店を回って歩いて寄付を募った。八百屋からは西瓜というように、ほとんどが品物であった。相撲は裾野市内では深良がさかんで、大仁町では大々的にやっていたという。

一〇月一五日の浅間神社の秋祭りや、敬老会には芝居や踊り、音頭などの出し物のほか活動（活動写真・映画）もやった。敬老会は小学校の講堂でやった。これらの出し物は、各ブラクごとに分担して、たとえば滝頭青年団として演目をいくつかがやった。内容としては、戦争中ならば兵隊に關した出し物やマドロスなどで、終戦後までやっていたという。

(二) 婚姻

1 縁談の成立

通婚圏 一般に、御殿場市や小山町方面からもらうヨメにいいヨメが多いという。実際、明治末年生まれの女性でも御殿場市から嫁いできた人がいる。また、同年齢の人では長泉町からヨメにきたという人もいる。茶畑地区の場合、モヨリ内あるいは旧村内という狭い範囲からヨメをもらうのではなく、早い時期から広い範囲でヨメもらいをしていたといえる。

また、モヨリからヨメに出すときには静かに簡単に行かせるが、よそからのヨメもらいは賑やかにやったともいう。

クチキキ 以前は結婚といえば見合い結婚が普通で、恋愛結婚はまれであった。見合い結婚の場合、まずハシワタシと呼ばれる者が、クチをさき男女を引き合わせた。こうして、話がまとまってから初めて仲人を探すことになる。この仲人とは別に、男女を引き合わせ話をまとめるまでの役割の人をクチキキともいう。たとえば、昭和四年二三歳のとき現御殿場市印野から嫁いできた女性は、市ノ瀬の叔母のクチキキによった。身内なので信用してヨメに来たという。また滝頭へ二一歳でヨメに来た人は長泉町竹原の出身で、かつて婚家から竹原の家に嫁いだ人がいて、そのエンツナギせよといわれてやってきたという。

見合い 一九四〇年代までに結婚した人の多くは、見合い結婚であった。見合いは、仲人がムコを連れてヨメ方の家に行くことが多い。親が決めた相手と見合いをしても、普通は断らずに親の言いなりで結婚したものだ。たとえば、昭和一六年に小山町からヨメを迎

えた男性は、父親の叔母が小山町藤曲にいて、その夫にヨメの家まで連れて行ってもらったという。このときには、ムコとその人と二人だけで行ったが、雨が降っていてジンジバシヨリをしたのを覚えていいる。いっぽうヨメ方では、仲人とヨメの両親が待っていた。

見合いの席で、ヨメが入れたお茶をムコが飲んだら承諾したという暗黙の了解の約束ごとがあった。しかし、このような見合いはそんなに古いことではなく、かつては親が勝手に決めた相手と祝言のときに初めて顔を合わせたということのほうが多かった。それで、祝言をしたあとで実家に戻ってしまうヨメも少なくなかった。

仲人 祝言の際の仲人は、ムコ方とヨメ方、双方一組ずつ計二組が必要である。後述するカネオヤと違い、仲人とは祝言のときのみのお付き合いである。それでも仲人は、むかしからの付き合いが深い家に頼む。一般に、自分の子ども同数の回数だけ仲人を務めれば、一人前の恩返しができることになるといわれる。また、仲人はやりすぎると身上を傾けるともいって、二、三軒やれば恩返ししたとみなされる。

カネオヤ カネオヤはオヤサン、オヤブンなどとも呼ばれ、旧家でオダイヤの人がやるのでほぼ決まっていた。このカネオヤと仮の親子関係を結んでいるのがコブンあるいはコなどと呼ばれている家である。オヤ・コの関係を結ぶのは、戦争前に地主であった家の小作をしていたというつながりからくることもあり、名字もオヤの名字を名乗ることがままあった。このカネオヤという呼称は、結婚後の女性がつけるカネ（鉄漿）、つまりお歯黒をつけたことからきている。そのため、祝言のときにはオヤサンがその道具の名残りとして金だらいをくれたものだという。

とくに茶畑で多くの家のカネオヤを務めたのが、サカイガワというエーナ(家名)で知られている柏木本家であった。たとえば茶畑のうち本茶のコブンは一〇軒ほどあり、旧戸の約三分の一くらいにあたった。本茶の別の地主である庄司家の本家も、カネオヤをサカイガワに頼んでいた。サカイガワの法事ときにはそのコブンだけではなく、サカイガワの直接の分家であるウチャシキ(柏木康利家)やシンヤ(柏木巖家)のコブンを参列する。また、オヤサンの葬式ときには、コブンがコシアゲをするものであるともいう。現在サカイガワは屋敷跡は残っているが、跡継ぎは沼津市内に転出してしまっている。本茶の柏木輝雄さん夫婦のカネオヤはサカイガワであるが、インキョの家と跡継ぎである沼津の本家との両方とお付き合いをしている。輝雄さんの下の二人の娘は、仲人を沼津の本家に頼んだこともあって、その付き合いは代々続いている。つまり、カネオヤは代々世襲で務めたものだった。なお、シンヤである柏木巖家も道上的カネオヤを何軒か務めた。この中には本家のコブンの家もあり、お祝いには膳一式を持っていったものだという。このほか、本茶では前述の庄司本家のシャーノカミドもカネオヤを多く務めている。

カネオヤは、ヨメが実家に出席してくるとヨメを仲人の家かオヤの家に一か月から二か月くらいおいておく。この間に、婚家とヨメの間を幾度も行ったり来たりして、苦勞して仲介をする。モヨリでも、みんなでヨメの面倒をみる。子どもがあっても出てきてしまうものだとい、婚家と折り合いが悪くなったヨメの面倒を最後まで見る役でもある。

祝言のときには、カネオヤは新夫婦に金だら、洗面用具、口紅

などの化粧用具、反物一反のほか、茶箆などの家具を贈った。また、この夫婦に子どもができる、ハラオビワイに紅白の腹帯を贈る。子どもが生まれた後では、名付け親になることもあり、三つのお祝いには着物を贈った。

一方、コブンもカネオヤに対しては盆と正月の付け届けを欠かさなかった。具体的には、正月にオタルといって二升搗きのお供え用の餅を持ってコブンが挨拶に行ったり、五月には節供用のし餅を、一〇月の浅間神社の祭には餠こを持って行ったりした。また、暮れにはコブンがカネオヤの家に行つて、正月用のお飾りを作ったり、餅搗きをしたりした。新夫婦の子どものお七夜や初節供にはカネオヤを必ず招き、子どものお振る舞いをしたものだった。しかしカネオヤとコブンの関係は、一般的には戦後まもなく消滅してしまつた。

サケ サケとかサケスマシなどというのは、今という結論にあたり、祝言の日取りや参列する人数を具体的に決める日でもある。小山町からヨメをもらった大正四年生まれの男性は、家が離れていいため見合いで承諾した後すぐにサケになつたという。本来は、日取りを決めてヨメの在所で行うものとされていた。ムコ方からは、ムコ、ムコの両親、親戚代表、仲人、オヤサンが、ヨメ方からは家人のほか、おもな親戚の人達などが出迎え、ムコ方よりも多い人数になるようにした。また、オシヨウバン(お相伴)という司会役もいた。このときムコ方が持参した柳樽でサカズキゴトの儀式をする。ムコ、ヨメ、仲人、オヤサン、オサメの仲人の順に盃をあける。しかし、オヤコの固めのサカズキゴトではなく、相手の盃につきあうだけのものだったという人もいる。ヒジロ(囲炉裏)の自在鉤からやかんをかけて薪を置き、足をかけて座って簡単にすませたが、お膳

はこしらえた。これらはすべて、仲人の指図に従ってやったという。

このサケのときに、前述したように祝言の日取りを決める。先の場合、七月二三日にサケをして八月五日に祝言をあげた。このように、サケの後はあまりイト(間)をおかないで、だいたい一か月くらいの間をおく程度にするという。なお、ヨメさんが茶を出すとその座はおしまいになる。これは、サケや祝言の後にも必ず行う。

アシイレ　アシイレ(足入れ婚)とは正式な祝言ではなく、仮の祝言の後すぐに婚家の一員として家族と生活を共にすることである。多くは、サケの後すぐに簡単なお振る舞いをして嫁入りをすませてしまう。姑に気に入られないときは、このアシイレの最中にヨメが実家に帰されることもあった。つまり、婚家にとってヨメは大切な労働力の一助となると同時に、ヨメの試験期間でもあるわけだ。アシイレが済んで共同生活を送ってもヨメにとっては安心できない時期なのである。また、ヨメはハツッコを産んで初めて籍を入れてもらうという場合も、決して珍しくなかった。もっとも、サケから本祝言までは長くて半年くらいしか間をおかなかった。サケが済んだら(嫁入りが決まったら)祝言は早くしたほうがよいといわれていた。また、アシイレをして婚家で生活していても、祝言の前には一度実家に帰り、実家から嫁入りするようにしていた。

嫁入り道具　嫁入りより前に、道具送りを先に行う。箆笥や鏡台などの家具、布団や夜具、つづらなどを馬力や人力の荷車で運ぶ。この他、カネオヤからはたらきなどの洗面具、化粧道具、反物などが贈られるのは前述したとおりである。なお、戦争中には点数制の配給で嫁入り道具を思うように買えず、嫁いでから箆笥を買ってもらったという女性もいる。

2 祝言

婿入り　まず、ムコの仲人(男)と親類総代がムコを連れてヨメの仲人の家に行く。ここからヨメの仲人に連れられて、ヨメの家へ迎えに行く。人数は、ムコ方から三人で行ったときには、ヨメ方は五人で来るようにと、ムコ方より多くしかも奇数になるようにする。これはサケのときに決めておき、五人で行ったときには七人であるというようにする。

ヨメの実家では、ムコ方はムコ、ムコの仲人、親類総代、ヨメ方ではヨメ、ヨメの父親、親類総代、コショウツケ(小姓付け)、ヨメの仲人という構成員でサカズキゴトをする。なお、コショウツケはヨメの介添え役である。このときは、お膳も出る。

この膳の間に、ムコはヨメの仲人に連れられてヨメ方の近所での挨拶回りをする。半紙を三つ折りにし、一寸五分くらいの幅の半紙で帯をして、自分(ムコ)の名字を書いたのし紙をつける。これを、お盆に載せて風呂敷にくるんで持って行く。挨拶する家に入ると、風呂敷包みをといてそれを渡して行く。これらは、ヨメ方の仲人が準備しておいた。

こうして挨拶回りが済んだムコ方は、ヨメ方より一足先に祝言の本席へ戻ってくる。

嫁入り　次に、ヨメ方の行列はヨメとヨメ方の仲人夫婦、両親などで、在所を出てからまずムコ方の仲人の家に寄る。ここでお茶をもらう。あるいはお膳が用意されており、夜になってからムコの家に入るようにここで時間を調整して出発する。仲人の家に寄った後、カネオヤの家に寄ってからムコの家に向かった人もいる。ムコの家の玄関前では、家紋入りの弓張り提灯を持った男女の子どもと、

モヨリ（最寄）のおモヤク（重役）が待っている。ヨメが家の門をくぐると同時に、子ども達はそれぞれが持っていた提灯を交換する。なお、この子どもたちが雄蝶雌蝶をする。また、行列には荷担ぎ役がついて荷を馬に載せて持って行ったが、やがて自動車に変わった。荷担ぎ役は、木膳のお振る舞いの末席に座ったものだった。

道上では一〇年ほど前までは、ヨメをもらう家で祝言をあげるのが普通であった。嫁入り行列には、ニモチ（荷持ち）道上の場合にはヨメ方の近所の者が務める、ヨメの両親、シンセキ、兄弟が加わる。行列は婚家に入る前にまず浅間神社に参り、その後、仲人とともに道上全戸にカオミセ（顔見せ）に回ってヨメの名入りの手拭いを置いてくる。婚家と同組の各戸へは最後に回り、それが終わって初めて婚家の玄関をくぐったものだった。

嫁入りのとき持参するミヤゲ（土産）は、サケのときムコが何か持ってくるので、それに見合った品物を用意する。嫁ぎ先の家中の人達それぞれにミヤゲを持って行く。反物とか布団かわなどを台の上に載せて持参する。またチャブクロ（茶袋）に米一升と茶を入れ、これも台の上に載せて持って行く。米一升というのは、「一生ここにいる」という意味であるという。婚家に入ると、まず机の上にこれらの品々を載せ、最初に参列者全員に見てもらおうのである。このチャブクロには、大豆などの豆類を入れて持って行くともいい、「マメに暮らすように」という意味が込められているという。あるいは、ヨメの在所の母親が米が一、二升くらい入るコブクロ（米袋）を作って持たせてくれた。コブクロは葬式で米を持参するときにも使われ、嫁入りるときに持って行くものだとも限らないようである。

ヨメは、白無垢を着て高島田を結った上に角隠しをしてきた。祝

言の後の近所の人のお振る舞いには、江戸褌に着替えた。

サカズキゴト 祝言の場は、ほとんどがムコ方の家のザシキ（座敷）であった。たいていの家では八畳と八畳（あるいは六畳）の二間続きの部屋を持っていて、その部屋をあてていた。ザシキには床の間がついていて、そこにヨメ方が持参したミヤゲを置いたりした。サカズキゴトをするときの座順はイエによりモヨリにより多様だが、多くは上座中央向かって左にムコ、右にヨメが座り、その両側にカネオヤ夫婦が分かれて座った。また部屋の両側上座に近いところに、ムコ側にはムコの仲人夫婦、ヨメ側にはヨメの仲人夫婦というようにそれぞれ並び、ムコ側の下座にいくに従って親類総代、親、末席には司会役のオシヨウバン（お相伴）が座った。また、ヨメ側も同様に並び、末席にコシヨウツケ（小姓付け）が座った。こういう並び方で、ミョウトサカズキ（夫婦盃）、オヤサンとのサカズキ、親子の固めのサカズキを雄蝶雌蝶の媒酌で行う。あるいは、夫婦の三三九度で雄蝶雌蝶があけた後、盃は仲人、親、親戚という順に回り、最後に親子の固めのサカズキとなることもある。また、サカズキゴトはムコとヨメだけで交わす三三九度だけという場合もあり、そのときには床の間のあるザシキの真ん中の畳一枚に、ムコとヨメが向かい合って座り、サカズキゴトをする。このときには、親は同席しないという。

サカズキゴトに使う盃はモヨリの共有物であったが、公民館の火事で焼失してしまったというところもある。サカズキゴトは小型のものから始まり、最後には洗面器ほどの大きさのオツモリの盃で終わったものだった。

なお雄蝶雌蝶をしてくれた子どもにも御祝儀を出す、それはヨ

メ方の親が用意した。

サカズキゴトの後は、親類縁者で行う本膳となる。この本膳の招待客も、ムコ方ヨメ方ともに七、九、一三人といった奇数人数とし縁起をかつぐ。また、オシヨウバンにも座ってもらう。ヨメッコはラクザ（楽座）となり、前もってムコ方で頼んでおいた髪結いさんに髻に直してもらう。本膳の料理は、奥にクチトリ（口取りざかな）、手前に膳が置かれる形となる。膳はオチツキの吸い物（丸餅入り）、ネギシラガ（白髪葱をまとめ一本を紐にしてしばったもので、「共に白髪の生えるまで」の意味）、はす、かまぼこ、羊羹かきんとん、なます、オヒラ、酒など七、八品がつく。クチトリは普通鯛の尾頭付きだが、海老でもよく、男衆が庭先で焼いた。またお吸い物は歯固めのお吸い物でもあり、餅か大根のようなものを中身にし、それに一品がつく。明治以前には、お歯黒をつけたものだったという。膳、椀などの一式は本家筋にあたる家がいち所持しており、三〇組ほどは揃えていて分家の祝言の際には無償で貸し出し、二の膳くらいまでやれた。これらの料理はすべて、近所の女衆が手伝って支度をしてくれた。

お振る舞い 祝言の手伝いは、準備、当日、後片付けと三日はかかるが、近所の女衆によってすべて賄われてきた。この近所の人達を呼んでのオフルミヤ（お振る舞い）を、祝言の後引き続いて行った。モヨリによってその日取りは違いますが、本膳の後にすぐ行う場合と、祝言の翌日に行う場合があった。これには、親戚やオテンダイの女衆、あるいはモヨリ全戸の人達を呼んだ。ヒキモノ（引き出物）には、お金や前掛けを贈った。本膳と同様、お振る舞いもヨメがお茶を全員に出して終わりになった。また、若い衆のお振る舞

いをする場合にはその翌日にしたが、若い衆のお振る舞いをしない家もあった。また、マエブルマイといって、嫁入りより先に親戚や近所の人達のお振る舞いをしてしまう場合もあった。

なお、ヨメさんが来ると、近所の人達や子ども達が祝言の最中にヨメの顔を見に来たものだった。

カオミセ ヨメの近所への挨拶回りで、手拭いにヨメの名前を書いて組や隣近所とオモナシユウ（主な衆）に配った。カオミセは組内だけに行く程度のもので、ヨメが仲人に連れられタオルを配るが、かつては半紙を配った。膳に半紙を載せ、その上にジュウカケ（重掛け）という金糸の刺繍入りの掛け物を被せて持ち、これを配って歩いた。

現在ではヨメの挨拶回りをしなくなったが、それでも祝言の前にムコが来て手拭いを配って挨拶をしている。

オチツキノボタモチ 祝言の翌日、近所の女衆が見守る中でヨメがぼた餅を作る。叩いてつぶした御飯をまるめ、餡こを煮た鍋に握って入れてまぶした。ヨメが最初の一個を作ると、近所の女衆がヨメといっしょにぼた餅を作り始める。祝言の翌日は、このぼた餅を食べることになっている。本来は、この後で女衆のお振る舞いとなるのである。

ミツメ ミツメとかミツツメといって、嫁入りしてから三日目に最初の里帰りをする。このときは、実家に夫婦で挨拶に行き、泊まらずに帰ってくる。また、夫婦ではなく姑と一緒にコシヨウ（小姓）も付けて、日帰りで実家へ帰るともいう。

(三) 厄年と年祝い

厄年 厄年は男が四二歳で、女が一九歳と三三歳である。このときには、オコワを蒸かして食べるという。また厄年の人は、節分のときに歳の数だけ四つ角に豆とか金を撒いてくる。帰って来るときには、決して振り向いてはいけないともいう。厄年の年のダンゴヤキ(サイトヤキ)には、団子を竹に挿して火で焼く。また、カゼノカミさんといって大きな団子を作り、それを食べると長生きをするという。このときには、厄年の男女が菓子やみかんを子ども達などに配って厄祓いをする。

正月の三が日の雑煮は、男とくに年男が作る。また、神様へのお供えも男が行う。

年祝い 還暦、喜寿、米寿とある。

(四) 葬送と墓

1 臨終から葬式準備まで

死の予兆 烏が異常な鳴き方をしたときには、「カラスナキが悪い」といって、死人が出る予兆とみなされる。このカラスナキの聞き分けをできる人もいて、死の予兆を敏感に感じとることもある。また、夢見が悪いとかカラスナキがよくないとか、田植えの夢はよくないなどともいって、不吉なことが起こる前兆とされている。

マクラメシとマクラダンゴ 人が亡くなるとすぐに北枕になおし、死者の胸には刃物を置いて魔除とする。また、おばあさんたちが御飯を炊いて死者が使っていた茶碗に小盛りにし、そこに箸をたててマクラメシ(枕飯)にする。さらに、米をとがずに水で冷やか



滝頭の葬式組の手伝い

して擦りつぶし、その粉で団子を三個作る。あるいは、米の粉に湯を入れて溶き、団子を三個作る。この黒っぽい団子のことをマクラダンゴ(枕団子)あるいはミツボダンゴ(三粒団子)という。団子は二〇個作るともいう。死者の枕元には、このマクラメシとミツボダンゴ、コウバナ一本を供える。コウバナはシキビの花のことで、匂いが強くホトケ(死者)の魔除になるといわれている。

シニミマイ モヨリあるいは組で急に人が亡くなったときは、組長からイイツギ(言い継ぎ)で組中に回して亡くなったことを知らせる。そうすると、まずミマイ(見舞い)あるいはシニミマイ(死に見舞い)といいて、死者の出た家に挨拶に行く。このときには、何も持たずにお悔やみだけを言ってくる。しかし年寄りの場合には、長い間の付き合いで何か見舞いの品物を持っていくこともある。

葬式組 前述したよう

に、死者が出るとまず向こう三軒隣、組長、区長あたりを連絡をする。連絡を受けた区長や組長が、モヨリの全戸に連絡を回した。「〇〇の方が亡くなったので、今晚七時までに来てくれ」と、一戸一戸歩きながら言って回った。あるいは、イイツギで回した。こうして、モヨリあるいは組毎の単位で葬式のさまざまな世

話をする。たとえば道中は現在六五、六戸であるが、葬式を出す施主の意向によって手伝いが一組になるか二組になるか違ってくる。もともと、道中のブランクがかって一四戸のときには全戸が手伝った。また、滝頭でも全戸で手伝っていたが、現在では組毎でそれぞれ手伝う。

各家では個別にミマイを済ませるが、亡くなった日の晩、手伝いをする組では必ず一戸からひとり出てきて施主の家に集まり、葬式の役割分担をする。おおよそ、区長が葬儀委員長となり、組長が死者の近所、親戚の者にヒト、アナホリ、コシアゲ、葬具の準備などの役を割り振り、葬列の役割も誰が何を持つかなどを読み上げる。たとえば、二人一組で死の通知をするヒト、土葬のときの名残でアナホリあるいはロクシヤクといわれる役が最低四人、棺を担ぐコシアゲ四人、コシアゲ用の食事などの用意をする飯炊き、香奠を預かる帳場が二、三人、葬具を購入する係が二、三人、寺との連絡係が二人などで、そのほかの人達は分担して葬具の準備をすることになっている。こういうことを決めてから、酒を飲んで解散をする。

死の通知 死者の出家家の親戚への死亡通知をすることをヒトニイクといい、必ず二人一組で行う。この通知者をヒトという。かつて知らせに行った範囲は、御殿場市、沼津市、三島市などで、その口上は「○○さんが亡くなったので、それについて○日の○時に葬式をします」といった内容を述べた。目的地へは、自転車や電車、後には自動車などを使って行ったが、遠い所へは電報で済ませてしまう。また、ときには通知先で食事を御馳走になったりもする。二人一組なのは、オチ（落ち度）があつてはいけないからだと説明されており、施主の礼儀であるともいう。親戚が多く六、七

組がヒトに出てしまうと、残った人達で葬式の準備をしなければならぬので大変だった。

寺への知らせも二人一組のヒトで、この二人の場合には知らせるだけではなく、当日の僧侶の人数の確認や寺の持ち物を持っていく手伝いなどもする。

現在では、ヒトニイクことはしないで電話で済ませてしまう。知らせる内容は、出棺・火葬場・告別式・キチュウなどの時刻で、寺への知らせも今では電話連絡することが多い。

葬具の準備 葬式の日の朝、年寄りが藁細工などの葬具を手分けして作る。また、竹やコウバナを採りに行く。二、三メートルのオトコダケをカリモン用に二本、ハタ用に四本、ヘビ用に二本、テングイ用に一本などと採ってくる。このほか、棺は六尺大で大工に作ってもらう。一般的にはネガン（寝棺）だが、天理教はタチガン（立棺）である。以前は、棺も自家製の箱を作ったという。また、コウバナの花立ては孟宗竹で一对作り、台も十文字に切り込んでしっかりとしたものを作る。位牌は、施主の家に置くもの、野辺送りで墓に置いてくるもの、ハマオリで流してしまうものと三つ必要となる。

カリモン（仮門）は、施主の家の玄関の前に立てる竹製の門で、出棺のあとは野辺送りについて行って墓に立ててくるものである。また、テングイ（天蓋）は死者に直接日光が当たらないようにするという意図があり、もとは棺をしっかりと覆うほどの大きさだったが、次第に小さくなって現在では三〇センチ四方ほどの傘状のものとなった。これは、各モヨリあるいは寺に保管されている。多くは、檀那寺である耕月寺のものを利用している。あるいはヒヨケとも

いって、葬儀屋から借りてくることもある。このほか、ハナダンゴやハナセンベイの竹串も削って一〇本くらいずつ作る。団子は上から二、四、二個というように数を分けて挿す。串の本数は挿す団子の数によって決まっている。ハナセンベイは小麦粉でできた薄い煎餅で、串の先を割って挟む。ハナダンゴの台は藁製で直径一〇センチくらいで、寺に常備してあり、それを一対借りてくる。出棺時にハナセンベイとともに藁つとに挿して祭壇に供える。ハナダンゴはたいがいホトケにつくものだという。

現在は、道具作りは火葬している間に支度をする。竹は一〇本必要となる。その内訳は、ほうき、松明、提灯、竜、花籠などを二本ずつで、銘旗にはふつう一本の竹を用意する。また、野膳、位牌、遺影のほか竜、花籠も一対ずつ作る。生花を挿す花籠は、籠屋で作ってもらい、竹の元を切ってクツを作る。

藁細工は藁を叩かずに、ジャ（竜、蛇）やコシアゲが履くアシナカゾウリなどを作る。ジャとかへびとかいわれる藁製の蛇状のものは雌雄二匹作り、竹竿の先に付ける。これは魔除の意味があるという。ジャは埋葬する際に墓に立ててくるか、棺の上に載せて一緒に埋めてしまう。またアシナカゾウリは綾のかわらない草履で、コシアゲの人数分の四足作る。

なお長寿（七五歳以上）で亡くなった人の場合は、ハナカゴ（花籠）がつく。これは、野辺の送りのとき途中の辻で振るいながら歩くもので、長寿を祝うものであるという。竹で籠を作って金銀の色紙を貼り、その中に赤い穴に紐を通した五円玉や五〇円玉、赤いテープをつけた一〇円玉や一〇〇円玉などの小銭と鉛玉を入れておく。これを辻で振るってお金を撒くが、それを拾うと長生きにあやかれる

るといふ。また、そのお金が魔除をかねるともいふ。これは本来神道ではやらないというが、滝頭のT家では土地の習慣に従って行った。また、神道では銘旗が青・黄・赤・白・黒の五色の旗に変わるが、そのほかの葬具はおおむね同じである。

アナホリ 土葬の頃は、葬式の朝、アナホリ（穴掘り役）がオヒル（昼食）と酒を持って墓地へ出掛けて行き、だいたい六尺くらいの穴を掘った。昼食は、ザコニ、ザクビラ（人参等の煮物）などでその場で食べ、酒は仕事中に飲んだり、撒いて清めたりするのに使った。また、穴掘りが済んだらその場で五合酒を飲む。火葬の今日では、カロウトの蓋を開けるのが仕事となっている。滝頭では、上・中・下の組毎にアナホリ役となり、葬式を出す組以外の組がある。たとえば、上組のときには中、というようにそのときによって違う。組の人はたいがい一戸につきひとりが出るが、だいたい七、八人くらいになる。現在では九組に分かれているので、その組単位で行う。なお、妊婦のいる家はアナホリからはずす。

2 トムライの儀礼

葬式のことをトムライといい、三〇年くらい前（一九六〇年代）までは土葬だった。土葬の場合には、午後二時頃に自宅でトムライをしたが、狭い家では寺の本堂を借りてやった。ここでは、土葬の時代に行われたトムライの儀礼を中心に、現在と比較しながら記述していく。

お通夜 オツウヤ（お通夜）は、トムライの前夜に僧侶が枕経をあげる。この枕経をあげるようになったのは、比較的最近のことだといふ。通夜の日は、友引の日を避け、友引の日は支度もしない

で翌日にまわす。この通夜の晩に、葬式組の役割分担を決めることもあり、段取りや道具、持ち物などの確認をする。

湯灌 トムライの日の午前中に、湯灌をし死装束を着せて納棺をすませておく。湯灌をするのは、死者の子ども達やおもな親戚で、観音経を唱えながらたらいを使って行う。死装束はこの日の朝、年寄りが晒で手甲、着物、脚半、頭陀袋^{ズタタゴ}などをへらや物差しを使わずに縫う。逆に、普段の日にへらや物差しを使わずに着物を縫うことを忌む。帯は輪にしないで結びにする。なお、死装束は二〇年くらい前から葬具屋が用意してくれる。葬具屋は駅の近辺にあり、裾野市内には二軒ある。また、死者には善光寺で買ってきてもらったオケチミヤク(お血脈)を持たせて送りだした。オケチミヤクは、数珠、灰、米ぬか、六文銭をおひねりにしたものと、いっしょに頭陀袋に入れる。

キチュウミマイ トムライの日の朝に、参列者や手伝いの組の人達は一軒につき米一升を持参する。現在では、ひとり一升で夫婦では二升持つていくことになっている。また、何升かはその家のギリによって違うというモヨリもある。この米はキチュウ(後述)のときに食べたりするものだが、四十九日までの間に持つていけばよいともいう。また、オヒラ、お刺身、味噌汁、がんもどき、酢の物などのおかずを何か一つ持つていく。あるいは、味噌、醤油などを買うのでおかず代としていくらか持つていく。このときばかりは、米がたくさん集まるので、モヨリ中の子どもまでやって来て昼から食べたものだという。現在では、米を持つていく慣行はやめてしまった。ちなみに御殿場市ではキチュウにぼた餅が出る。また、田方郡下では一膳目に赤飯、二膳目に茶飯が出る。この辺りではむしろ「か

えて食べると重なる」といって、おかわりをするのを忌むので、二杯目は食べない。またかつては糯米を持参したこともあり、「仏さんの出る前に音させる」といって、野辺送りの出発前にはトモチを搗く。料理と同時に、餅を六、七升搗くのである。

出棺 湯灌が済むと納棺となる。棺の蓋を叩くのかかつては石を用いたが、今では木槌になった。棺は長く綯った縄で十文字に縛る。納棺が済むといよいよ出棺である。まず僧の読経は、曹洞宗の場合ふつう三人くらいで行い、経を参列者全員で唱和する。御詠歌はしない。この経の間に、引導をわたす。

こうして引導がわたされると、棺をイロリのヨコザに置く。この棺の上に、その家の跡継ぎの嫁が別れのお茶を置く。そうすると、ただちに出棺する。これは現在でも出棺の直前に行われる。

コシアゲは棺担ぎで、施主方の近所の人、身近な人、懇意にしている人達などがする。あるいはコシアゲは一部世襲であるともいう。コシアゲは四人で、ザシキ(座敷)の中からアシナカ(足半草履)を履き、棺を梯子のような台に載せて担ぐ。棺はザシキから出て、玄関の外に備えてあるカリモンを必ずぐぐって出る。棺が建物から出ると同時に、手伝いの人達が、家の中から外に向かって足や手でメカゴをケカラガシ(蹴り転がし)ながら、玄関へ追い出す。それと同時に、ほうきで掃き出す。これは清めの意味だという。なお、日常生活の中では、人が家を出る時に掃き出すものではないという。

二ワに出た葬列は、左回りに三周回る。シカバナはこのとき棺の前後左右について一緒に回る。シカバナを持つのはおもな親戚であるが、これは棺を守るといふ意味があるという。また、長寿者のトムライでハナカゴがつく場合には、ここでまず一回それを振り回し

て籠の中の金や飴をばら撒き、人々にそれらを拾ってもらう。その間に、僧が経をあげている。いよいよ家を出るときに、門の外でコシアゲは履いていたアシナカを足から放り投げて脱ぎ捨ててしまう。

なお、火葬の場合には先に火葬を済ませてしまい、一度お骨になって家にもどり、施主の家で午後一時頃告別式を行う。それから土葬と同様、野辺送りをして墓地に向かう。あるいは、野辺送りをして寺の本堂で告別式を行い、墓地へと向かって納骨となる。

野辺送り 寺で告別式をしない場合は、直接墓地に行く。墓地へ行く道順は決まっておらず、長寿者につくハナカゴは人が集まって待っている途中の辻で振るって金を撒く。野辺送りの行列は宗旨・宗派によって若干の差異はあるが、およそ以下のような構成になっている。①松明②提灯③リュウ④ハナカゴ（長寿者の場合）⑤紙旗四本⑥施主花⑦写真⑧棺服（箱入り）⑨野膳⑩野位牌⑪棺⑫シカバナ（シホウバナ）⑬親族。このほか道被いとしてほうきが先頭につくこともあり、最後尾にカリモンがつくこともある。また火葬では、①カネハタキ（鉦はたき）②松明③花・仏壇供物④野膳⑤写真⑥位牌⑦オゴツ（お骨）・コシアゲ・ジャ（蛇）・テンガイ（天蓋）⑧シカバナ（お骨の四方を守る）⑨紙旗四本⑩親戚という場合もある。曹洞宗の野辺送りには、お囃子がつく。

墓地の入口には、先回りをしたカリモンを立てておき、それをくぐって墓地に入る。アナホリによって掘られた穴に棺を下ろすときには、コシアゲが棺に巻いてある縄の端をそれぞれ持って四隅から下ろす。身近な人から土をかけ、送りに参列した人はみんな土をかける。最後に、コシアゲが埋めてしまう。このときリュウ（へび）、



トムライが済んだ後の墓（峰下の共同墓地）

ハタなど腐ってしまうものも一緒に埋めることもある。土饅頭を作り、その上に石を置き、その上にヒオイ（ヒヨケあるいはテンガイともいう）をかける。白木の位牌をその下か前に置いて、野膳を供える。この位牌は、死者の戒名が書かれている紙を貼ったものである。また、蓮の造花を

棺が埋められている辺りの地面にぐるりと囲んで挿し、埋葬を済ませる。コウバナ、蠟燭をたててきれいに飾り、埋葬を済ませる。

なお、亡くなった長寿者のテンガイについている布は、取って割いて分ける。これを子どもたちの着物の上げのところに結んでおき、長生きにあやかる呪いにした。

ハマオリ 埋葬を済ませた後、近くの川でハマオリ（浜降り）をする。かつては沼津の浜まで行ってハマオクリ（浜送り）をしたというが、たとえば滝頭の場合には不動の滝の下で行う。川の真ん中、あるいは際に石を積んでノイハイ（野位牌）を置き、その前に蠟燭と線香を立てて水を置く。笹やコウバナでその水を位牌にかけ、岸が上がってから、その場で酒を飲み豆腐やむすび、菓子などを食べて身を清める。最後に石を投げて位牌を川に流し、そのまま

帰る。このときの世話をするのが、ハマオリの役である。滝頭の場合、現在では滝まで下りずに上の忠魂碑のところまで同じ装置を作って同様のことをし、最後に上から位牌を落とす。

ハマオリのときに流す位牌は川に流すと汚れるというので、耕月寺の六地藏の所へ納めるようにした。そのほかの位牌も同様にして納めている。また、かつてハマオリのキチュウイハイ（忌中位牌）をわざわざ沼津の浜へ持って行って流していた家では、帰ってくるときに浜の石を二、三個拾ってきて墓に供えていた。

キチュウ　ハマオリから帰ってくると、施主の家で精進落としをする。これをキチュウ（忌中）とかキチュウバライ（忌中祓い）といい、施主の家では参列者に「キチュウをいただきます」といって、オチャハン（お茶飯）の御飯を食べさせる。現在ではモヨリの公民館で行われるが、酒、ジュースなどの飲み物のほか、吸い物、お新香、大根と人参のなます、ちくわ・こんにゃく・里芋・椎茸・がんもどき・人参の煮物をモヨリの女衆がトムライの前日から用意する。

子どものトムライ　子が親より先に死ぬことをサカサという。名前もついていない赤ん坊が死んだときには、トムライもしないで家の墓に埋めた。しかし、三歳の子どものときには葬式を出し、墓も作った。その家の誰かのネンカイ（年回）のときに一緒に供養して墓石を建てた。このとき赤ん坊の墓石も一緒に建てたという家もある。

火葬　一九七五年一〇月一日に、裾野市の火葬場がオープンするまでは、土葬も多く見られた。それまでは、とくに肺結核などの伝染病死者の死体をノヤキ（野焼き）するための場所が各共同墓地

に付随していた。この火葬場は、やがて裾野市が深良のコイジに統合し、そこでノヤキにした。通夜の後、僧侶の出棺回向もせずに、燃し木持参で出棺していった。

3 供養と先祖祭祀

位牌分けとオヤネンブツ　葬式の当日に檀那寺の住職に、亡くなった人の子どもの人数分だけ位牌を作ってもらう。この位牌は、紙に死者の戒名を書いてもらったものを木の板の位牌に貼り、各自家を持ち帰る。現在では、子ども達の要不要にかかわらず、住職が子ども的人数分の紙位牌を用意するという。また、家によってはこれを貼ったり貼らなかったりしている。

親の位牌をもらった子ども達が、七日ごとに持ち回りで順番に念仏をあげてくれることをオヤネンブツ（親念仏）という。ヒトナノカ（ひと七目）は施主の家で行われ、それ以外の家で行われるときにはキャクネンブツ（客念仏）と呼んでいる。各自の家では、近所の念仏のおばあさん達に来てもらって念仏をあげてもらう。また、七日ごとのすべての念仏を施主の家で行い、その費用を子ども達が持ち回るといった方法をとる場合もある。キャクネンブツの内容は、施主の家であげるものと同じものである。

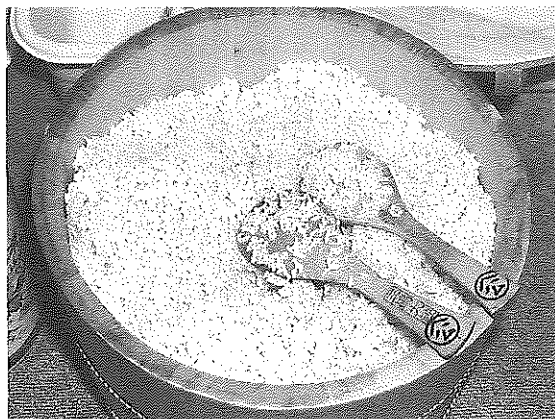
オヤネンブツをあげた翌日、位牌に笹で水をかけて送る。または、紙位牌を持って施主の家に行く。あるいは、四十九日までの念仏が終わってから紙位牌を川に流してしまう。墓に持って行って納めてしまうか、掘って埋めたり焼いたりする、などときまぎらであったが、現在では四十九日が過ぎると、耕月寺の六地藏のところへ納めてしまう。

25日
昼 御飯 (伊)
おとし
おとし
みそ汁
肴 物

夜
お御飯
フシカツ
みそ汁
肴 物

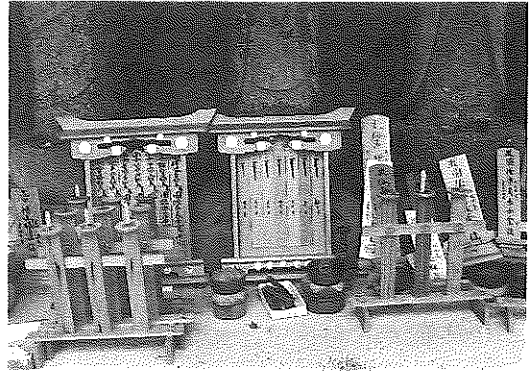
26日
昼 (160) 火葬場 (200)
おとし 梅 切り肉 大盛り (1-1.9)
飯館 (200) 加場
おとし 吸物 肴 物

夜
茶 飯
おとし
煮 上げ 人形 煮物
みそ汁 切り 煮物
肴 物



キチュウ

- 左上 葬式の献立表
- 左下 女衆による準備
- 右上 キチュウに必ずつくオチャハン
- 右下 公民館でのキチュウ



七本塔婆を六地藏に納める（三島市佐野 耕月寺）

七日ごとの念仏 葬式

七日の夕方から始まり、基本的には七日ごとに念仏のおばあさん達がその家と呼ばれて四種類くらい念仏を申す。シヨナノカ（初七日）、フタナノカ（ふた七日）、ミナノカ（み七日）をやり、ヨナノカ（よ七日）は縁起が悪いと避けて、イツナノカ（いつ七日つまり三十五日）をやって、場所によってはムナノカ（む七日）

もやらずに四十九日の念仏をやって終わる。念仏をあげるのは、道下では全域で一五人、本茶や滝頭では組毎とその集団の範囲と規模はまちまちだが、だいたい一〇人前後のおばあさん達のグループである。

施主の家には、七本塔婆といって小振りの七本の塔婆がセットになったものがある。この塔婆を、四十九日までの七日ごとの念仏が終わる毎に一本一本裏返していく。この七本塔婆は、四十九日の日に茶畑の人達は墓へ、伊豆佐野の人達は耕月寺の六地藏のところへ納めるといふ。

四十九日までの禁忌 四十九日までは仏壇にあげる線香は、「道に迷わないように」と一本ずつあげるといふ。また、施主の家では四十九日までは針を持ってはならない。「針を持つなら他の屋根棟の下で」といふ。

四十九日 四十九日餅といって、一升三合の米から四十九個の餅とヒザモチあるいはヒザノモチといわれる少し大きめの餅を二個作って寺へ持って行く。二つのヒザノモチというのは、一つがホトケ（死者）に、一つがガキ（餓鬼）に供えるためであるという。ヒザノモチが一個の場合もある。これらの餅は、餡こを入れず必ず手で搗いて作る。手で搗くとつゆに入れても餅が溶けない。竹製の籠に杉や檜の葉を敷いてまず四十九個の餅を入れ、その上に二個のヒザノモチを載せる。今では、菓子屋に作ってもらう家もある。

この四十九餅を納めるのは、ゴナノカ（ご七日つまり三十五日）あたりからでもよい。早く持っていくても、「ホトケさんがアタマ支える」から大丈夫なのだという。あるいは「ミツキゴシ（三月越し）はいけない」、つまり亡くなった月の翌翌月である三か月目に入ってはいけないといふ、たいがい二か月目で四十九日の念仏を済ませてしまう。むしろ早めなら良く、このときに墓の片付けをしてしまう。

四十九日の念仏の後、死者の子ども達の取り持ちで葬式で世話になった近所の人達や親戚、念仏のお婆さん達に食事をしてもらう。またアナホリには、別に礼をする。

ヒヤッカランチ 死後百日目をヒヤッカランチ（百か日）といい、やはり念仏をあげてもらって墓参りする。

ニイボン お盆にホトケさんを墓から迎えてくるときには、家人が背中に背負うようにして家まで連れてきて、ロウカ（廊下）から家の中に入る。このとき、ホトケさんの足を洗う洗面器と拭うためのタオルを縁側に用意しておく。また、ニイボン（新盆）には必ず縁側に提灯を下げてホトケさんの目印とする。

ニイボンの念仏は、念仏講のおばあさん達が施主に頼まれなくても、必ず念仏をしに回る。亡くなったときの年齢の高い順に何時からと決め、前もってその家に伝えておく。回るのは、盆の初日の八月一日である。

なお、一五年程前まではニイボンの家に砂糖か麩を持って行ったが、現在ではお金を持っていくことが多い。

一周忌 一周忌のことをイッスイキとも呼ぶ。このときも、念仏講のおばあさん達に寄ってもらい、念仏をあげてもらおう。また、このときまでは家内から死者の出た家であらゆる禁忌を守っている。たとえば、一年間は神様の行事を行わない、その家で正月の注連飾りをしないなどである。逆に新しいホトケのある家からは、モミ・タネをもらってはいけないなどともいっている。一九九三年は茶畑にヨシダさんが巡ってきた年だが、この神輿が村中を巡行した際には、忌のかかっている家ではオモチに出ないで家の中から神輿を静かに見送っていた。

ネンカイ 法事のことをネンカイ(年回)と呼ぶ。イッスイキの後、三年、七年、一三年、一七年、二三年、二七年、三三年、五〇年後に供養の法要をする。家内で二、三年の間に複数のセンゾ(先祖)のトキブツ(法要をするホトケ)が続くときは、翌年、翌翌年のトキブツを「ひっばって」やって、一度に行うことも許される。ただし、一周忌だけは、他のトキブツと重ねるものではないという。また、当年のトキブツを翌(翌)年に先送りして、他のトキブツと同時に行うことはできない。つまり、年忌が早い方に合わせて時期は遅れないように注意するのである。

ネンカイの念仏は、十三仏のヒョウゴ(紙製から西陣のものまで

いろいろの掛軸)を掛け、一三個の餛この入らない餅を作って供えに行く。

五十年忌 最終年忌は五〇年で、トリバライという。五〇年をやる時、神さんになるといい、ホトケさんでなくなるといい。生の杉の木を伐り、先に葉をつけたまま削って塔婆を作る。この塔婆に、檀那寺の住職に戒名を書いてもらい、墓に立ててくる。古い位牌は川へ流したり燃やしたりしたが、今は耕月寺の六地藏のところへ納めると住職がまとめて燃やしてくれる。



トリバライの塔婆

なお、浅間神社の西側参道脇墓地には、以下のような五十年忌の供養に建てた石灯籠がある。

(正面) 奉造立石燈籠施主
(右側面) 舎兄 輝雲凜光上座

□会

各霊

阿姉 玉印智寶大姉

(左側面)

駿州上石田村完倉伊左衛門

寛保二 壬戌天四月十九日建

法名 隆進院宗本日行居士

(裏面)

来癸亥四月十九日

右者当実父芝月洞雲居士

五十之遠忌預成発願

我已老憶寿量□□(欠)

4 墓制

墓と墓地 現在、墓地はモヨリごとの共有のものがあり、とくに火葬になってからはほとんどこの共同墓地に埋められている。し



屋敷墓(市の瀬)

かし、古い墓にはヤシキ(屋敷)の際や個人所有の田畑の中、あるいは小高い小山の中などに残っているものも多く、共同墓地になる以前には個別に埋葬していたと推測される。なお、茶畑では一般に、墓地のことをオハカ(お墓)といっている。

屋敷墓 古い家にはヤシキに墓地がある。たとえは滝頭の市川姓のうち幸男



本茶 柏木商店横の共有の屋敷墓

家(屋号ニシ)、静夫家(屋号ナカ)、高雄家(屋号ヒガシ)は本分家関係にあり、旧家に属する。これらの三軒には、セド(背戸)の方にあるヤシキに隣接している畑に墓地がある。幸男家で最も古い墓は、寛永一三(一六三六)年のものであるという。

同じく滝頭の山本一家の墓は、浅間神社西側参道脇にいくつか並んでいるうちのおキ(奥)にあるものである。これはこの山が山本家の所有地であり、やはりヤシキ地にある墓だといえる。山本家では、このほかに滝頭の共同墓地にも新しい墓があるので、浅間神社にある墓を「下の墓」、共同墓地にある墓を「上の墓」と区別して呼んでいる。

また、本茶の柏木商店裏にある墓地は七軒の共有墓地で、これをキュウハカ(旧墓)とよんでいる。七軒の内訳は、本茶の小沢正信家(理作家)、小沢忠雄家、小沢光徳家、小沢繁家の小沢姓四軒と芹沢茂夫家、山本真家などである(あと一軒は不明)。この墓地の中で一番新しい石塔は、明治元年のものだという。また、耕月寺第一五世住職の墓も一基含まれており、この七軒のうちに住職の生家が含まれているのであろう。キュウハカに対してシンハカ(新墓)というのは、現在使われている共同墓地である。シンハカ同様、彼

岸と盆、正月には墓参りをする。

屋敷墓と先祖 旧家には、古い墓のほかにはセンゾさんといわれる屋敷神を祀る家が続く。たとえば、本茶の小沢正信家は屋敷地の西南隅にヤシキセンゾさんといわれる石塔がある。もとは門前の東北隅に祀られていたが、家人が病気がかかったときにモノミ（民間宗教者）にみてもらって移動したという。

また、同じく本茶の柏木敏夫家（屋号ヤマイシ）にも、旧屋敷地に旧墓とヤマイシテンノウ（山石天王）といわれる屋敷神が祀られている。現在、地所は柏木



柏木敏夫家（ヤマイシ）の屋敷墓

康利家のものであるが、天王はヤマイシのものであるのでお祭りを続けている。このほか農免道路に面したカツマクハイツ前の水田にある石塔も、センゾさんと呼ばれている。もとの所有者は小沢秀雄家だが、水田を売却してほかの所有者に移っても、秀雄さんがハナ

ゾさんは移動するものではなく、その家の子孫がその場所で祀り続けるものだという意識が強い。

共同墓地 共同墓地は、各モヨリごとに持っている。滝頭のように、新旧ふたつの墓地を持つモヨリもある。また本茶、中丸、天



滝頭の共同墓地 命日の墓参り。

理町の三つのモヨリがまともまっている墓地もある。この場合それぞれ区画が分かれていて、互いに混在していない。道上と峰下も共同墓地が、一方のモヨリの墓は混じり合っている。

土葬は終戦後くらいまでだったというが、はつきりと火葬になったのは裾野市の火葬場ができてからであった。したがって、共同

墓地は土葬時代からのものであり、その成立の経緯はまちまちであ



天理町の共同墓地

る。たとえば、本茶の共同墓地はもとは庄司善高家（屋号シャーノカミド）の土地だった。共同墓地は山を削って作った。土地を提供した代償として、シャーノカミドでは土葬のときのアナホリやコシアゲなどの役が免除されたという。現在では、火葬になったのでそういうことはやらなくなった。

滝頭にはかつて十六羅漢塚の北側に墓地があつたが、明治四三、四年頃共同墓地を作ってそちらに墓も移した。もとは滝の東側辺りはずっと墓地だった。従ってそこに少し残っているのは、比較的古い墓地（市川、山本、清水家のもの）であるという。

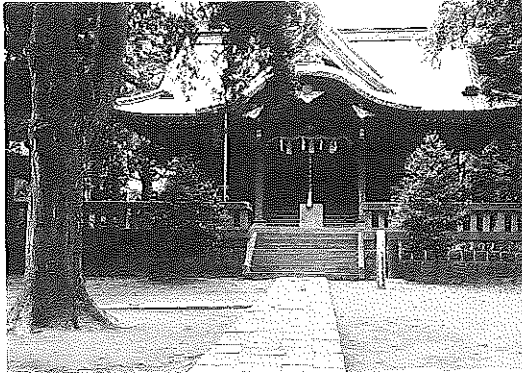
（松 田 香代子）

第四章 信仰

第一節 神社と小祠

(一) 茶畑全体でまつる神

浅間神社 茶畑の氏神である。茶畑は、天理、中丸中、中丸上、中丸下、和泉、本茶畑、滝頭、道上、市の瀬・峰下、の九区からなっており、この各区から一人ずつ氏子総代が選ばれる。その中から総代会長一人が互選で決められている。なお、鈴原、県住、青葉台は新興住宅でこの氏子会には加入していない。



茶畑・浅間神社

もともと、この浅間神社は、裾野東中学校の南、モトミヤというところにあったが、安政の大地震により壊れたため、現地点に移動したといわれる。また、入田川の方、現在の県住の方に浅間神社のモトミヤがあったといういい伝えもある。

神主は沼津の浅間神社の



モトミヤの灯籠

宮司もしている清水孝雄氏である。

神社費は各区で一戸あたりいくらか決まった金額を集めて大区長がとりまとめ神社の会計係へ納めている。現在、一戸あたり百円程度でそれほど高いものではない。神社費はそのときどきの神社の修繕や行事の費用などにつかう。

浅間神社の財産としては茶畑山に山林二町歩がある。なお、この浅間神社の祭礼としては一年間のうち、八月の合社祭と一〇月の例大祭とが、とくに盛大なものとされている。また、一〇年に一回まわってくる吉田神社の祭礼も盛大で、それは四月に行われる。これらの祭礼執行のためにとくに祭典委員というのが、各区二、三名ずつ選ばれている。全員で平成四年度は五四名いる。一年間の行事は次のとおりである。

一月一日 元旦祭 一二月三一日の大晦日を前に社殿を掃除しておいて、三一日には大祓式を行う。そして夜の一二時、つまり元日の午前零時から氏子の人たちの初詣ではじまる。氏子会の役員は前日から神社につめていて参拝者に甘酒や酒のサービスなどする。

二月一日 建国祭

二月一七日 祈年祭（春祭）

三月下旬 年度末で大区の総会があり、会計報告をする。

四月三日 （一〇年に一回ずつだが、吉田神社の祭りが行われる。

平成五年に行われた。）

六月三〇日 夏越の祓

八月二五日 合社祭 明治のはじめに各部落にあった小祠を集めて浅間神社に合祠した。その合祠した合社さんの神々をまつ。浅

間神社のまつりでは、一年のうちでこの八月の合社祭と一〇月の例大祭の二つが盛大なものとされている。この八月の合社祭には子供相撲が催される。

一〇月一五日 例大祭 午前二〇時から一時間ばかり神事がある。献饌は洗米、酒、二段重ねの餅、腹合わせの鯛、大根、キャベツなどの野菜、りんごやみかんなどの果物、などである。これとは別に赤飯一斗八升を炊き参拝者に一握りずつ配る。神事への参加者は、神職三名、氏子総代、各区長、祭典委員長、裾野市神社総代会長、市議会議員代表、民生委員、老人会代表、農業委員会代表、入田川水域水利組合代表、一般代表などである。神事が終了すると社務所で直会がある。

余興としては、子供みこしを出したり、ソフトボール大会、それにゲートボール大会などをこの祭りの前後に開催して人集めをしている。カラオケ大会もする。余興は青年団が中心にやってきた。むかしは芝居や映画などをやった。むかしの飾りつけははでで、祭りのために電気屋にたのんだ。参道から舞台などに配線をした。提灯は各家にあり、ロウソクをとめて入口にかざった。屋台もたくさん出ていた。最近も少しだけ出てきている。子供みこしはこころ一〇年く

らいだが、福引きも一〇年くらい前からはじめた。

一月二三日 新穀感謝祭

なお、この氏神浅間神社の祭礼というわけではないが、一〇年に一回の割合で吉田神社の祭礼というのが、行われている。ちょうど平成五年がその年にあたっている。

吉田神社 吉田神社というのは、とくに一つの場所にまつられている神社ではなく、この近隣の村々を順番に巡っている神さまである。いい伝えによると、祭神は、武美賀槌命、天兒屋根命、伊波比主命、比売神の四柱で、いまからおよそ二一〇年前、この一帯で悪疫が流行した。そのとき各村で相談し茶畑村の新左衛門と佐野村の玄意という二人が代表として京都へ行った。そして神社管領に願い出て吉田神社の分霊をおおいできたところ靈験あらたかにも悪疫は終息した。それ以来、その吉田神社の分霊をまつているのだという。



吉田神社の神輿

一〇ヶ村を一年ごとにまわっており、その順番は、佐野↓茶畑↓伊豆佐野（三島市）↓麦塚↓二ツ屋↓平松↓公文名↓久根↓神山↓石脇↓（ふたたび佐野）となっている。平成五年には佐野の若者たちが吉田神社の神輿二台をかついで三月二八日に茶畑へやってきた。むかしはこのときもみあってよくけんかしたものだという。佐野

の若者たちが、佐野の浅間神社に納めてあった吉田さんの神輿をか
ついで茶畑の浅間神社まで運んでくるのだが、部落の入口では茶畑
の若者たちがそれをうけとろうとしてもみあう。佐野の若者たちは
そこでは吉田さんを渡そうとはしない。それでもみあいよく喧嘩
をしたものだという。現在、五〇代、六〇代の人たちの若いころは
よくやったものだというのが、最近ではもうあまり喧嘩はしなくな
った。

四月三日と四日が吉田神社の祭りである。三日に若者たちが二台
の神輿をかついで茶畑の各区をねりまわる。荒れる神さままで有名で
このときもあちこちで喧嘩をよくしたものだという。各区では神輿
をかつぐ若者たちに休んでもらい酒など飲んでもらう。浅間神社で
は素人のど自慢のカラオケ大会をやったり、地方の芸能人を呼んだ
りして余興をする。神輿は、本祭のときは浅間神社に納めておくが
終われば、一年間合社さんの方に納めておき翌年、次の伊豆佐
野へと渡す。

山の神の神社 県住の方角のずっと奥の方に山の神の神社がま
つられている。この本茶の在来戸の特定の二一戸が山の神講をつ
くってまつっている。この山の神さまにはその所有する山林が二町
歩以上もありその山林の権利者が二一一名と決まっている。祭りは
一月と九月の一七日で、この日は植林の下刈りがてらみんなで参り
神事を行う。おふるまいは滝頭、本茶、道上など各区ごとに別々に
行う。一戸で米一合ずつ出しおふるまいの当番は家並順に交代でそ
れぞれやっている。

(二) 地区ごとにまつる神

金比羅神社 現在、本茶地区でまつられている。もともとは柏木
屋敷の柏木氏がまつっていたのをちに区でまつるようになったと
いわれる。一月一〇日が祭りで、幟を立ててまつる。本茶の中には
東組、中組、上組の三つの組があり、それぞれ当番にあたった組で
順番にまつられている。一戸あたり夫婦二人が出て当番の家で女性
料理をつくるなどする。費用は寄付や区の会費などでまかなう。飲
食は神社にみんな集まってする。子供たちには太鼓をたたいて呼び、
お菓子などをあげる。

五月の連休のころには下のプールに魚を放して釣り大会などを催
している。

夏祭といってお盆にはやぐらを組んで盆踊りをやるようになって
た。本茶の組でおでんやラムネなどを売る屋台を出す。寄付も集ま
るので名前を貼り出す。この五月の釣りと盆踊りとは最近になって
はじめた行事だが、むかしから、盆のならびには風祭かまじりをやってい
た。ここでは、八月一日が盆で、お精霊しょうりょうさんを七月三十一日に迎え
て八月三日に送るが、八月四日に金比羅神社にみんな集まって神主
さんも呼んで、風の被害がないようにと五穀豊穡を祈って祭りをし
た。現在では公民館でやるようになっていいる。

峰下の駒形神社 峰下の家々によってまつられている。

滝頭のサイの神 滝頭の集落の北の方と南の方と道路傍に二ヶ
所にまつられている。一月一五日のドンド焼きでまつる。正月のお
飾りを集めてぐるりと家のようにこしらえてだるまなどをたくさん
吊しておく。現在では不動の滝のところの川のそばの広場でドンド

焼きをやっている。区長会と子供会とが一緒にやっている。

本家のサイの神　上組と中組のサイの神は集落の南の三叉路のところであり、東組のサイの神は境川の近くの道路傍にある。一月七日ころに子供たちが正月のお飾りや古いお札などを集めてまわる。それでむかしはサイの神のところは小屋のようなものをつつた。一月一四日にそこでサイト焼きをした。団子を焼いて食べると病気になるのか、書初めを焼いて高く上がると字が上手になるといった。むかしは、東組の方と、上組・中組の方とおたがいにお飾りの餅などを盗みに来られないように子どもたちが見張りに立ったりしたという。現在では両方ともいっしょに柏木屋敷あとのグラウンドでサイト焼きをやっている。

市ノ瀬のサイの神　集落のなかほどのバス停のところにまつられている。石像で文政二年造立の銘文がある。正月七日に子どもたちが正月の松かざりを各家をまわって集めてきてサイの神の上に屋根のようにしつらえる。家のようにつくる。一月一四日にそれを燃やして、そのとき団子を焼いて食べる。風邪をひかないとかしあわせにくらせるなどという。

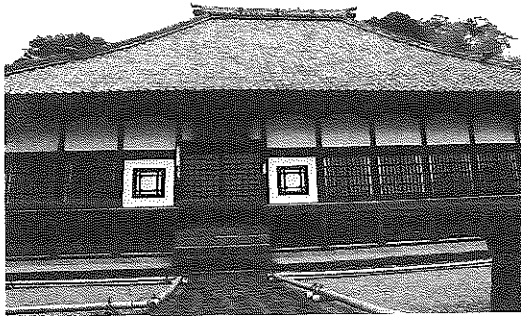
道上のサイの神　集落のなかほどの三叉路のところにある。子供たちが正月のお飾りなどを各家をまわって集めて歩き、サイの神の石像をかこうようにして屋根がけのようにする。むかしは、一四日の晩に子どもたちが一晩泊まった。今は泊まることはしない。子ども会の人たちでどんど焼きをしている。竹の棒に団子をはきんで焼いて食べる。

第二節 寺院と堂

(一) 寺院

耕月寺　茶畑には檀家寺の類はない。この寺は三島市域の伊豆佐野にある。茶畑の家々はほとんどが古くからこの伊豆佐野の曹洞宗耕月寺の檀家である。耕月寺は桃園の定輪寺の末寺である。

なお、市ノ瀬だけは、現在ではもう耕月寺の檀家になっているが、もともとは深良から二、三男がこの地へ出てきて開いたところだといひ伝えている。はじめは三戸でここに来て開いたという。今は一七戸あるがみんな杉山姓である。それではじめは檀那寺はもと深良の松寿院の檀家であった。しかし、明治になって、現在の古老で明



伊豆佐野・耕月寺

治二〇〇三〇年代生まれの人たちの父親にあたる人たちのころ、深良の寺では遠くて不便だからと何度も深良の寺へお願いして、近くの耕月寺へと檀那寺を変更してもらったという。

願生寺　この寺は一時無住だったが、現在は住職が入っている。むかしは行者が住みついていたこともあったという。檀家寺の類ではなく祈禱寺の類のよう



滝頭・不動堂

である。しかし、ここには不動さんと弘法さんとがまつられてあった。むかしは、二月二日がお弘法さんの日といって願生寺で子供たちに食事をふるまう日だった。この日は子供たちは何膳でも食えるといい、ご飯にいわし、なます、みそしるなどがついた。茶畑の子供たちはタダメシが食えるといって、他の地区の子供までもひきつれて願生寺へとやってきたものだという。不動さんは今は公民館に移されている。また、境内には唯念名号碑が建てられており、そこには天保一四年の銘がみられ、茶畑だけでなく近隣各村の念仏講中の連名がみられる。

(二) 堂

滝頭の不動 滝頭の集落の北はずれに近いあたりにある。ここには不動の滝もあり、また道路をはさんで、羅漢塚と公民館もある。不動はその所有の土地もあり滝頭の二八戸持ちで不動講でまつている。世話人は勝又治男さん、清水武さん、橋正雄さんがつとめている。世話人は年輩の人が選ばれている。まつりは毎年二月二十八日で、在来戸の二八戸が順番にヤドをするので二八年に一回まわってくる。一代

のうち一度はヤドをする計算になるといっている。一巡するとくじをひきなおしてまた順番にヤドをする。ヤドを不動さんのヒョウゴがまわる。昼の一時ごろから不動堂で念仏がある。寺の住職などは呼ばないでやる。ただこの不動堂は、むかし明治のころ耕月寺の分院だったともいう。清水あきさんの持っているメモによると、念仏の順番は次のとおりである。

お不動尊祭り

- 一、ざんげ文 三回
- 二、南無阿弥陀仏 一〇回以上
- 三、不動尊 一五回以上

のうまくさんまんだ ばあさらだん せんだんまあからしゃつた そわたや うんたらたかんまん

- 四、お釈迦様 三回(四月八日は五回)
- 五、摩訶般若波羅密多心経 二回
- 六、延命十句観音経 一五回
- 七、おしまいに、南無大慈悲観世音菩薩をとなえる。
- 八、南無阿弥陀仏 一〇回以上
- 八、普回向

願わくば、このくどくをもってあまねくいっさいに及し、我らと衆生とみなともに仏道を成ぜんことを祈りたてまつる。かんにしくどく平等世界いっさいどうはほつばだいしん往生極樂
平成四年二月二十八日

なお、この日は赤飯のおにぎりをたくさんつくり、果物や菓子などのおみやげを念仏にきたお婆さんたちに配る。費用は不動さんの

お賽銭や土地代の収入その他があるのでそれでまかなえる。みんな
で食べる料理では、豚肉や鳥肉にこんにやくなどの煮物をつくり、
それを肴に酒を飲む。ヤドの家とその近所とで手伝って料理をつく
る。そうじなども前日からやり、あとかたづけもヤドの家とその近
所とです。最近は仕出し屋から料理をとるようになってきたとこ
ろである。

この、二月二十八日のまつり以外にも、月並み念仏といって、念仏
講のお婆さんたちが毎月一回不動堂で念仏をあげている。

また、それらとは別に、三月の春の彼岸の中日にこの不動堂の近
くの公民館で大東亜戦争の英霊をまつっている。もと東小学校に天
皇・皇后の御真影をまつっており、忠魂碑も建ててあったのだが、
終戦のあとマッカーサーの指令で、忠魂碑は埋めてしまわなければ
いけないといわれたという。そこで埋めないで不動さんのところへ
移した。それから毎年春三月の彼岸に戦死者をまつることにした。
もと泉村の出身の戦死者すべての英霊をまつっているという。公民
館ができるまでは忠魂碑の前で行っていた。現在たてられている石
碑の碑文によると、昭和五年忠魂碑を東小学校に建立、昭和一四年
殉戦勇士之碑建立、昭和三年忠魂碑を現在地へ移転、平成二年平
和の碑を傷痍軍人会で建立、と記されている。

また、公民館の隣で、不動堂と道路をはさんだ向かい側に石仏や
石塔の類が草むらの中にくつかみられるが、そこは羅漢塚と呼ば
れている。一六羅漢とも呼ばれているが、とくにそこをまつる行事
は現在はない。このあたりは明治のころには墓地だったともいわれ
ている。

(三) 講

滝頭の講 滝頭には山の神講、不動講、念仏講、淡島講などが
ある。山の神講と不動講については先にのべたとおりである。

念仏講は、月並み念仏といって毎月不動堂へ集まって念仏をあげ
ている。日は決めないで当番の者の都合に合わせて連絡をして集ま
る。メンバーは年寄りの女性で今は九人くらいになっている。観音
さんのや南無阿弥陀仏のおヒョウゴがあり、それらを掛けて念仏を
あげる。滝頭の家で葬式があったり年忌の家があるとこの念仏講の
者が行って念仏をあげてあげる。

淡島講は女の神さまをまつる講で安産の神さまといわれる。六月
と十一月以外の月に一回ずつ集まる。むかしは一ヶ月ごとに淡島さ
んの姿が描かれた掛軸をまわしていた。むかしは子供たちを呼んで
ご飯をごちそうしていたりしたという。現在の講員は一五人ほどに
なっている。

また、滝頭の集落なかほどの道路傍に、秋葉神社の石灯籠と馬頭
観音の石碑が建っており、それらの講もかつてはあったらしい、秋
葉さまについては次のような伝えもある。

大正一二年の大地震のとき、秋葉さまの石灯籠が倒壊したことが
あるが、そのときたしか清水まささんの父親の夢に石が散乱してい
る場面があらわれどうしても立てないと訴える声を聞いたという。
不審に思った父親は区長に頼んでサトミチツクリの召集をしてもら
い、秋葉さまのところへ行ってみると、案の上、石灯籠がひっくり
かえていたという。

本茶の講

本茶には、山の神講、念仏講、秋葉講、淡島講、観

音講、諸神講などがある。山の神講は神社の項でのべたとおりである。念仏講はだいたい七〇歳くらいのお婆さんたちでつくっている。毎月一〇日に金比羅さんの掃除をして戦死者のまつりをし念仏をあげる。またオテントサンネンブツといって日照りがつづいたときなど、公民館で日の出から日の入りまで念仏を唱える。一三仏のヒョウゴなどを出し交代で鉦をたたいて一日中念仏をあげる。この念仏講では葬式や新盆、年忌の家に招かれて念仏をあげている。

秋葉講は現在一〇数名の講員がいる。毎年二月の一五、六日ころが秋葉神社の例祭で、このとき秋葉講ではくじ引きで代参者三、四名を決めお札をうけに行く。帰ってきたら代参者の家に集まって食事のふるまいがあり、お札を配る。

淡島講は安産祈願のための婦人たちの講である。

観音講は四月一七日が縁日で馬をもっていた人が入っていた。馬頭観音をまつる。

諸神講というのはいろいろな神さまをまとめてまつるといふ講でむかし米をあつめてヤドでごちそうをつくったりしたという。

これらはいずれも現在では活動が停滞してきているようで詳しいことははっきりしない。

道上の講 道中には大山講、観音講、明神講、念仏講がある。

大山講では神奈川県伊勢原市の大山神社に農家の者が代参してお札をもらって来る。代参者はくじ引きで決める。二月三日に大山神社の豆まきに参加してその晩は神社のふもとにある坊へ一晚おこもりをした。大山講の神様である大山祇命は山の神であり田の神であるといわれている。掛軸もある。代参者が帰るとヤドにあたる家へ集まりごちそうを食べ、お札を配る。

観音講はむかしは毎月一回行われていた。ヤドとなる家の都合で日付は決めた。農家の男衆が集まって馬頭観音の姿のかいてある掛軸をおがみ、飲み食いをした。家畜の供養の意味もあった。

明神講は四月五、九日ころに三島大社で行われる花見まつりのとき、四月五日に三島大社へ行ってお祓いをしてもらう。お金をあずかった人にはお札をもらってきて配る。世話人は柏木ちるさんの家からひきついで現在は清水一雄さんの家でやっている。世話人は八月一六日に三島大社の直会によばれて参加する。

念仏講ではヒネンブツといって公会堂に集まって念仏をあげる。とくに日付けはなく、何かあったとき世話人が声をかけて行う。現在メンバーのお婆さんが一五人いる。また葬式や年忌の家に呼ばれて念仏をあげる。

市ノ瀬の講 市ノ瀬では観音、地藏、山の神、サイの神を地区の全戸でまつっている。個別の講というよりも地区の全戸がまとめてそれらの神仏のまつりをしている。

観音さんは公民館に安置してある。杉山慎吾さんの家のむかしの人が四国の霊場巡りをしてきて百番の観音さんとして持ち帰ったものだという。いぼの神さんだともいいいぼがよくとれる。いぼができたときには、年齢と名前を言ってお願いする。誰か他の人に頼まれてお願いしてあげることもある。うまくいぼがとれると、必ず新しい大豆をお礼まいりに供える。不思議と必ずききめがあるという。地藏さんもこの公民館にまつてある。

七月二四日が地藏さんのまつりだが、この日にこの公民館にまつてある観音さんも庚申さんも一緒にまつる。この公民館はむかしはお堂だった。そのころから中には神さま仏さまがずらりとなら

んでいた。青年たちがクラブみたいここによく集まり寝泊まりしたものだ。相撲をとったり、力石をあげて力競べをしたりした。七月二四日には今でもみんなこの公民館に集まる。念仏をあげたり飲んだり食べたり甘酒をこしらえてふるまったり子供に菓子やくだものをあげたりする。もとは順番に当番の家で料理をつくったりしたが、今は料理は買ってきている。

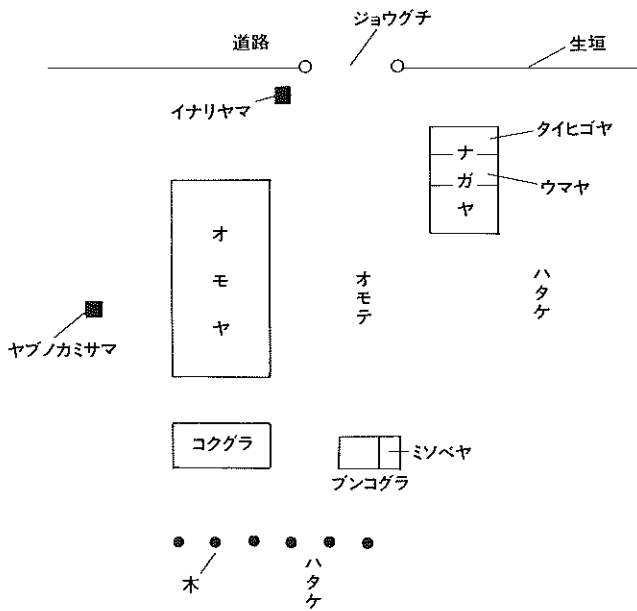
山の神さんは一月一七日と九月一七日がまつりの日で、山の神講というのがある。これは市ノ瀬だけで本茶全体の山の神とは別である。神社は集落の上の方の山の中にある。むかしは当番の家がヤドをしてごちそうをつくったりして講ぶるまいをしていた。現在ではお店から料理をとり公民館で行っている。費用は家々で均等に合っている。ここでは弓矢をつかったりする行事はない。

なお、集落の上の方の道路傍に馬頭観音の石碑が建てられているが、これは市ノ瀬と峰下と麦塚の三つの地区が合同してまつっている。正月五日がまつりの日で三つの地区で順番に当番の役をする。おまわりは馬頭観音のところまで、そのあとは公民館に集まってごちそうをふるまう。三つの地区から集まった人に飲み食いしてもらう。この馬頭観音は茶畑山の方へ通じる道路傍にあるのでこの三つの地区が一緒にまつたのだろうという。

第四節 家ごとにまつる神仏

家ごとにそれぞれ屋敷の中や家屋の中にまつられている神仏もある。典型的な例をあげておこう。

本茶の庄司清一氏の家の神仏 屋敷の様子はおよそ図IV-1のとおりであるが、屋敷にまつられているのがイナリサマとヤブノカミサマである。また家屋の中にはザシキにダイジンクウサマ、オカッテにオエベスサマとダイコクサマ、カマヤにコウジンサマがまつられている。仏壇はイマにある。お供えはイナリサマには初午に幟と赤飯、仏壇には毎日ごはんをあげる。ダイジンクウサマはお正月で、正月には家の中の神さますべてに餅を供える。三ヶ日は毎日供え、そのあと七日正月、一日正月、二〇日正月、一五日正月にもあげる。



図IV-1 屋敷内の呼び名 (庄司清一氏の家)

道上の清水一雄氏の家の神仏　この家では代々ホウソウダナを作ってきた。いい伝えによると、天保一三年生まれの曾祖父から明治生まれの祖父へ、さらに明治生まれの父へ、そして自分へと伝えられたという。近所の子供たちのために頼まれて作る。種痘したときなどに作る。カツの木を二つに割って藁をまいて棚を作る。幣束を立てて四方から又サを下げる。又サは下までとどくくらい長くする。男の子のときは紙の鳥居を棚の前につりさげる。女の子のときは紙で作った振袖人形をつりさげる。紙で御神酒、お供え、菊の花を作り棚の前に半紙を下げてそこへ貼る。

サンダワラを二つ作る。たらいにお湯をいれ、ヤブコウジとねずみのフンをいれる。たらいの底にサンダワラを一つ敷き、子供を座らせ頭の上にもう一つのサンダワラをのせ、ササで頭にお湯をかけてやる。そのあと、サイノカミへホウソウダナとサンダワラを持っていっておさめる。ホウソウダナを作ると嫁の実家からおまんじゅうを持ってきてくれる。上に紅で赤く小さく染めたまんじゅうでホウソウマンジュウという。

また、この家ではコンピラサマを屋内でダイジングウサマのところに一緒にまつているが、これはむかし道場山の自分の家の土地にどこからかお札が舞ってきてそこに落ち、強い風が吹いてもその札が動かなかったのものでその場所にまつりはじめたという。その後、保育園の建設工事のために家の中へと移した。現在は一月一〇日に赤飯をたいて供えている。

(新谷尚紀)

付録一 茶畑・柏木家文書1

延宝五年

御厨下筋茶畑村

巳十一月

御殿場御札場迄四里拾貳町貳拾貳間
 下土狩御蔵場迄壹里拾貳町貳拾六間
 村方巳午ノ方麦塚村迄七町拾六間
 村方未申ノ方水窪村迄廿壹町五拾貳間
 村方戌亥ノ方佐野村迄九町五拾六間
 村方子丑ノ方公文名村迄拾貳町貳拾貳間
 村方辰巳ノ方伊豆佐野村迄七八町
 豆州三嶋宮之前御札場迄壹里貳拾町四拾九間
 駿州沼津三枚橋御札場迄貳里貳拾町四拾七間

一茶畑村之内 東西千三百五拾七間
 南北七百六拾六間

一百姓家統五通りニ罷在候

わけ

中尾組 東西へ百貳拾四間 家数貳拾壹軒
 南北へ百五拾貳間

瀧頭組 東西へ六拾壹間 家数貳拾五軒
 南北へ貳百五拾八間

中丸組 東西へ百拾貳間 家数貳拾八軒
 南北へ貳百間

茶畑組 東西へ九拾四間 家数拾八軒
 南北へ五拾八間

平松新田 東西へ貳拾三間 家数七軒
 南北へ四拾間

右之外伊豆境ニ(維)みの下並市ノ瀬と申居村式ヶ所御座候
 一百姓家数合百貳拾壹軒

式軒 名主

三拾七軒 本百姓
 内四軒組頭

貳拾三軒 中百姓

四拾壹軒 柄在家

壹軒 本百姓之内 村足輕

壹軒 本百姓之内 白案

壹軒 中百姓之内 白案

壹軒 柄在家之内 白案

壹軒 柄在家之内 医者

壹軒 柄在家之内 桶屋

壹軒 柄在家之内 定使

九軒 草切

壹軒 平松新田 組頭

壹軒 草切之内 桶屋

一田畑反別百拾町六反拾歩

内田畑四反七畝拾壹歩 寺社免

田方五拾壹町九反壹畝歩

内拾五町八反余箱根堀貫水掛り畑成田

わけ

九畝廿三歩 亥年川成並 丑年溝代

壹畝廿六歩 寅年屋敷二成

拾九町六反五畝拾貳歩 水田二而 麦作不仕候

拾町九反八畝廿八歩 麦作仕候分

畑方三拾八町三反五畝廿壹歩

わけ

拾三町八反壹畝廿歩 箱根堀貫水二而 亥子兩年畑成田

四畝廿三歩 子年地水二而畑成田

壹反式畝五歩 亥子兩年堰溝代

残式拾四町三反七畝三歩

一畑反別式拾五町八反五畝廿四歩 平松分

わけ

壹反式畝廿歩 亥年^方年、堰代

拾三町九反四畝三歩 箱根堀貫水二而年、畑成田

残拾壹町七反九畝壹歩

一高五百式拾九石四斗式升七合 先高

内五拾式石三斗 平松新田

一高七百拾四石七斗式升八合 今高

内百六石八斗七升七合 平松新田分

一野畑三町壹反九畝廿八歩 本村分

一野畑九反壹畝拾七歩 子年見遣候

一下、田八畝廿九歩 子年見遣候

一野畑三反廿七歩 平松新田分

一下畑九反三畝拾六歩 子年見遣候

一馬數合百貳疋 内貳疋牛

一当村用水此水本文名村境瀧頭堰方取申候、但瀧頭・中丸・茶畑・

中尾二而遣申候、此道法式三町又者七八町程も御座候、則本田志

町式反「^{破堤}」畑成田三町余かけ申候、右之本川段々公文名村□余

茶畑村田地中を通り伊豆境之川へ落合申候、此川筋二高サ五丈余

之瀧壹ヶ所御座候、但箱根堀貫水も少落合通り申川二而御座候

一当村本田仕付申水本山大谷川其外谷々水落合申候

此水わけ

一高堰 長五間半かこ五間付芝 老町四反余かけ申候

一す、あら堰 長九間かこ堰 山入並 向田川東本田八町余り申候

一宮下堰 長五間半かこ堰 向田川西本田五町余かけ申候

一材木田堰 樋前つか方かませき迄百五間樋方むかい五間前ノ田本田六町四反歩程かけ申候
まち長九間

但せき道法中程ニ長五間余之樋壹ヶ所御座候、右之樋者先年御公儀様方被下候、並 山出人足村々へ被仰付尤御奉〔^(虫食)〕

一山入三町余かけ申井堰かにか窪並菅沢あふみ沢かね引場と申ニ自分之小せき共御座候

右五ヶ所之井堰此水本東山大谷並此川筋ニ毎年川除場御座候
一伊豆境峰下ニ而之用水伊豆・駿河境之川方峰下せきニ而取申候、則本田貳町余かけ申候

一同市之瀬ニ而之用水伊豆境大沢方市之瀬せき〔^(敬指)〕、則本田九反余かけ申候

一伊豆・駿河境川此水本東山大沢そぶと申方茶畑村之内市之瀬・峰下本村名主甚右衛門前方麦塚村伊豆嶋田村脇へ通り申候、但そぶより麦塚村境迄此道法貳里拾貳三丁御座候、此川筋ニ毎年川除場御座候、右之井堰川除普請仕人足貳百四五拾人程宛毎年入申候、年ニ方人足多少御座候

一畑成田仕付申水三間新川方取申候、此水箱根堀貫水深良村々内かろう戸ニ而木瀬川へ落合參候川石脇村之上佐野せき方取申候、則〔^(虫指)〕のみき橋久根村・公文名村・茶畑村通り伊豆嶋田村之内堰原せき

へ落申候、此道法佐野堰方堰原迄壹里四五丁程御座候、此水茶畑村畑成田拾町余かけ申候、佐野堰方道法貳拾三町程余〔^(敬指)〕之内八幡脇迄三間川之水取申候、八幡脇方段々道〔^(敬指)〕三町又ハ六七町程余茶畑村分畑成田へかけ、茶畑村之内平松新田畑成田拾三町余かけ申候水佐野堰方道法貳拾四町又ハ三拾丁も余三間堀よりかけ申候、則平松新田用水ニも遣申候

一佐野堰場所長五拾六間皆石岩之上ニ而籠せきニ仕候、水節ニ遣申度籠押なし日數五十日之内五〔^(虫指)〕も三度人足出し仕直し申候、右何も井堰普請之儀御公儀様より御奉行人被仰付御配府次第村々方人足出普請仕候、但人足壹人ニ付一日ニ御扶持米貳合五勺宛被下候

一平松新田居村方西之方三間川通り申候、則川方西ニ座頭之供養塚石塔壹ツ御座候並川方東之方平松と申九尺廻り松壹本御座候

一茶畑村なかに山壹ツ御座候、此山大サ東西へ八拾〔^(敬指)〕南北へ百貳拾六間則山之上ニ畑御座候

一公文名村境茶畑村之内長五間半之橋壹ヶ所先年御公儀様方被下候並引入足村々江被仰付御奉行人も被仰付被下候

一馬之草苅場当村方東山公文名境かまとう坂あいしやう原神なか松はたほこ大谷もぢり杉し〔^(虫指)〕かにかが窪ごさの尾いち場たいら牛坂まご〔^(敬指)〕うしろ山丸塚瀧之沢方市之瀬筋迄、此道法当村方壹里又ハ

壹里拾四五町程御座候、右之山ニ而草かり敷かやもかり申候

一薪取申場当村東山北ハはたほこ大谷方南ハ伊豆境大沢迄東ハいもたいら山伏峠りうのふ嶽並そぶ迄西ハ右之草山境ふとか尾筋迄此〔^(敬指)〕当村方壹里半又ハ貳里余も御座候

一右之内もちり杉はたほこ大谷しいなしごさの尾此筋へ公文名村入込ニ參候

- 一 同はたほこ大谷筋へ久根村、内横道長尾之者入込ニ参候、久根村之内下村之者ハ公文名村一所ニも入申候
- 一 同大谷筋へ佐野村入込ニ参薪斗取申候
- 一 同大谷筋へ伊豆嶋田村之者新取申儀も御座候
- 一 同市之瀬道筋へ麦塚村入込ニ参薪かや苧敷草かり申候
- 一 同市之瀬道筋へ伊豆嶋田村之内堰原ニツ屋新田之者参薪斗取申候
- 一 当村之内中丸之者佐野下原ニ而馬之草かり申儀も御座候
- 一 当村之者伊豆佐野山江参馬草苧敷かり申儀〔破損〕
- 一 平松新田之者沼津領富沢村並定輪寺西山〔破損〕馬草苧敷かやかり申儀ニ御座候、此道法老里又ハ老里半も御座候
- 一 当村百姓作之間ニ右之当村山ニ而新伐三嶋・沼津へ付出し売申候、近年ハ伐荒シ能木無御座候
- 一 御蔵米払高御配府次第高ヲ出シ三嶋・沼津へ付届ケ申候
- 一 箱根御番所御扶持方米参候節ハ御配府次第付届ケ〔破損〕
- 一 御〔虫損〕場へ御米御用之節御配府次第下土狩御蔵より付届ケ申候
- 一 井堰川除人足御割付次第毎年出シ申候、但人足老人ニ付一日ニ御扶持米貳合五勺宛被下候
- 一 下土狩御蔵普請之節ハ御割付次第竹木菅縄人足出シ申候
- 一 同御蔵棚木並繕人足共ニ出シ申候
- 一 水窪・伊豆嶋田御拾分一場御普請之節竹木か〔破損〕縄人足出シ申候
- 一 薪諸色三嶋・沼津へ出シ申節ハ御拾分一指上ケ通り申候
- 一 箱根御関所棚木並繕人足共ニ御配府次第出シ申候
- 一 御鈴場御屋敷御破損普請之節繩所人足御配府次第出シ申候
- 一 神山村大橋懸り申節御配府次第人足出シ申候

- 一〔虫損〕之橋木引人足御配府次第出シ申候
- 一 御鷹通衆御厨下筋ニ被下御座候節ハ御宿ニハ入用之人足御配府次第遣シ申候
- 一 御用之鳥もち御配府次第毎年納申候
- 一 御用之山枡御配府次第毎年納申候、但山枡式斗五合ニ付代百文ツ、被下候
- 一 御用之渋、柿御配府次第毎年納申候
- 一 富士山麓方槻御材木出申節引人足御配府次〔破損〕下筋方出シ申候、則此人足山本迄牛ヲ雇目用金勘定次第出申候、則御公儀様方御扶持方被下候、牛老足ニ付一日ニ大豆老升牛方老人ニ付一日ニ口ふち方七合五勺ツ、被下候
- 一 御用之山芋御配府次第毎年納申候
- 一 山手役米老石宛毎年御蔵へ納申候
- 一 家置薪之代金貳両余毎年納申候、但家数ふゑへり迄〔虫損〕之儀も御座候
- 一 ぬかわり縄延之代金老兩三分余毎年納申候
- 一 御国廻り衆十年前以前寛文七年末ノ年御通被成候覚
- 一 溝口源右衛門様
- 一 山形孫四郎様
- 一 堀主膳様
- 一 右三人衆豆州三嶋方伊豆嶋田・佐野通り神山迄馬〔破損〕御返場竹之下通り相州へ御通り被成候、則人馬神山村へ相〔破損〕荷物諸事竹下迄付送り申候
- 一 箱根筋道橋造り人足出シ申儀も御座候
- 一 酒包舟橋懸り申節人足出シ申儀も御座候

一朝鮮人御通り被成候節人馬小田原相詰登り小田原方三嶋迄下りハ小田原方藤沢迄、御朱印之人馬駄賃伝馬其外小田原ニ而御用之人足出し相勤申候

一御上洛被為遊候節御登りハ小田原方三嶋迄御下りハ小田原方藤沢迄人馬相立、其外小田原迄御用之人足並名主共小田原へ罷越相勤申候

一富士浅間 宮立 高サ七尺 但板葺ニ而御座候 横四尺

此宮村始方御座候様ニ申伝候

森 東西式拾間 但 七尺廻り松九本 南北六拾老間 但 五尺七八寸廻り杉老本

五尺八寸廻り檜老本 七尺五寸廻りいてう老本 外ニ小木共御座候

下々田三畝拾歩右之宮免御指置

一八幡 宮立 高サ三尺 但板葺ニ御座候 横老尺六寸

右之八幡村始方御座候様ニ伝候、ゑんぎも無御座候

森 東西五間 但 五六尺廻り松式本 南北式拾五間 但 五尺廻り杉老本 外ニ小木共御座候

下畑式畝廿歩右之宮免御指置

一八幡 宮立 高サ式尺八寸 但板葺ニ御座候 横三尺六尺

右之八幡村始方御座候様ニ申伝候、ゑん義(ママ)も無御座候

但神之木七尺廻り之杉老本御座候

一十二天 宮立 高四尺三寸 但板葺ニ而御座候 横式尺八寸

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、ゑん義(ママ)も無御座候

森 東西拾間 但 七八尺廻り松四本 南北拾五間 但 七尺廻りしい老本 外ニ小木共御座候

一神明 宮立 高式尺三寸 但板葺ニ而御座候 横老尺式寸

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、ゑん義(ママ)も無御座候

森 東西四間 但 七八尺廻り松三本 南北七間 但 外ニ小木共御座候

一大日堂 よこ式間 立三間 但かや葺ニ而御座候

右之堂村始方御座候様ニ申伝候、ゑん儀(ママ)も無御座候、則大日如来御長三尺老寸立像にて古伝ニ御座候得共何分御作者知レ不申候

森 東西八間 但 六七尺廻り松式本 南北拾五間 但 外ニ小木共御座候

一駒方 宮立 高式尺 横老尺式寸 但板葺ニ而御座候

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、ゑん儀(ママ)も無御座候

森 東西拾間 但 六七尺廻り松四本 南北八間 但 外ニ小木共御座候

一 不動堂 内ニ宮立 高三尺式寸 但板葺ニ而御座候
横式尺五寸

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、(ママ) ゑん儀も無御座候

森 東西拾四間 但五尺七寸廻り松四本
南北四拾間 五尺廻り杉壹本

外ニ小木共竹も御座候

一天神 宮立 高式尺六寸 但板葺ニ而御座候
横式尺六寸

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、(ママ) ゑん儀も無御座候

森 東西拾三間 但小木共御座候
南北式間

一金山 宮立 高三尺式寸 但板葺ニ而御座候
横式尺

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、(ママ) ゑん儀も無御座候

森 東西拾間 但六七尺廻り松式本
南北八間 外ニ小木共御座候

一 舍護神 宮立 高三尺 但板葺ニ而御座候
横式尺八寸

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、(ママ) ゑん儀も無御座候

森 東西五間 但小木共御座候
南北拾三間

御座之尾

一 山神 宮立 高壹尺八寸 但板葺ニ而御座候
横式尺

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、(ママ) ゑん儀も無御座候

森 東西式拾八間 但七八尺廻りしいの木式本
南北拾四間 外ニ小木共御座候

宮内

一 山神 宮立 高壹尺八寸 但板葺ニ而御座候
横式尺

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、(ママ) ゑん儀も無御座候

森 東西八間 但三尺四尺廻り松四本
南北式拾間 外ニ小木共御座候

見な□□

一 山神 宮立 高式尺壹寸 但板葺ニ而御座候
横式尺壹寸

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、(ママ) ゑん儀も無御座候

森 東西拾間 但六尺四五寸廻り松三本
南北拾式間 外ニ小木とも御座候

市之瀬

一 山神 宮立 高式尺 但板葺ニ而御座候
横式尺

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、(ママ) ゑん儀も無御座候

森 東西四間 但六尺廻り松式本
南北八間 外ニ小木共御座候

一時宗遊行派南長山願称寺本尊座膝之弥陀御長三尺木仏ニ而春日之
御作ニ御座候、此寺開山豆州三嶋西福寺方但阿弥と申沙門參、延
文元丙中(破損) 開闢仕候、当年迄三百式拾壹年之寺ニ而御座候、開山
方当往迄拾九世本寺相州藤沢清浄光寺ニ而御座候

延宝五年巳十一月

茶畑村

名主

甚右衛門

同

三之丞

組頭

留兵衛

安田勘左衛門様

同

惣左衛門

同

伝左衛門

組頭

新兵衛

同

文左衛門

同

佐右衛門

平松新田組頭

徳右衛門

付録二 茶畑・柏木家文書2

延寶八年

駿州駿河郡小泉庄茶畑村鏡之帳

申ノ正月

御殿場御札場迄四里拾式丁廿貳間
 下土狩御蔵場迄壹里拾式丁廿六間
 麦塚村まで七町拾六間
 水久保村まで式拾壹町五拾貳間
 富沢村まで^{マヤ}
 一當村方道法
 佐野村迄拾九丁五拾六間
 公文名村迄拾式丁式拾貳間
 豆州伊豆佐野村迄七八丁
 豆州三嶋宮之前御札場迄壹里廿丁四拾九間
 駿州沼津三枚橋御札場迄式里廿丁四拾七間

一茶畑村之内 東西壹里廿丁三拾貳間
南北拾九丁三拾壹間

東ハ豆州伊豆佐野境迄
西ハ伊豆嶋田之内ニツ屋新田
並佐野村境まで
南ハ麦塚村並ニいつ嶋田境迄
北ハ公文名村境まで

一百姓家續むらくニ御座候

此わけ

八軒

平松ニ罷在候
但シ東西江廿三間、南北江四拾間

五軒

市之瀬と申ニ罷有候
東西江五拾間、南北江拾四間

九拾壹軒

本村ニ罷有候

一百姓家数合百四軒

わけ

貳軒

名主

四拾八軒

本百姓

内 四軒

組頭年々番持仕候

壹軒

村足輕 源左衛門

壹軒

白樂 作左衛門

四拾六軒

無田之者

内 三軒

鍛冶 七兵衛
十右衛門

善兵衛

貳軒

白樂 与祖右衛門
久兵衛

老軒 いしや 勘弥

老軒 定使

八軒 平松新田

内 老軒 組頭

一 田畑反別百拾町六反拾歩

内

田畑四反七畝拾老歩 寺社免

田方五拾老町九反老畝歩

内 拾五町八反余 箱根堀貫水ニて畑成田
三拾六町余 本田

内 廿六町余 ふけ田ニて麦作不申分

畑方廿七町八反八畝拾六歩

平松分

田方拾四町老反八畝廿老歩 箱根堀貫水ニて畑成田

同断

畑方拾六町九反八畝廿八歩

外二

野畑三町五反老畝拾八歩

一 高四百六拾石三升六合 先高

一 高九百七拾貳石七斗七升四合 今高

内 三石八斗八升八合 寺社免

百九拾七石六斗七升七合 平松新田分

一 馬数合百老疋

一 牛老疋

一 当村用水此水本文名村境瀧頭境方取申候、堰場所長サ拾八間、

かご堰ニ仕候、此道法二三丁、又者七八丁余も御座候、則本田式

町余並ニ畑成田三町余かけ申候、右之本川段、公文名村方參、茶

畑村田地之中を通り、伊豆境之川江落合申候、此川筋ニ高サ五丈

余ノ瀧老ヶ所御座候、但シ箱根堀貫水も少落合通り申候、右之田

江かけ申水不足仕候得者公文名村之内みかどせきと申堰を切、水

引申候、居村ニ寄外之水を遣申者も御座候

一 当村本田仕付申水大谷川其外谷々方落合申水ニ而御座候

此わけ

一 山入本田四町七反余かけ申堰かになが窪・藤沢・鏡沢・かね引場と

申ニ自分之小堰ニて有之水かけ申候

一 高堰方取申水堰口方段、宮上本田老町六反余かけ申候、但堰場所

長五間半ニてかご堰並 五間ハ付芝ニ仕候

一 ず、原堰方取申水堰口方段、山入並ニ向田川東本田拾町余江かけ

申候、但シ堰場所長サ九間かご堰ニ御座候

一 宮下堰方取申水道法式三丁程參向田川西本田五町五反余かけ申

候、但堰場所長サ五間かご堰ニ仕候

一 柿木田堰方申水道法五六丁程參前田ニて本田六町五反余かけ申

候、但堰場所長サ九間芝上手ニせぎ申候、並ニ百拾間程付芝之処

有之候、則堰道法中程ニ長五間余之樋老ヶ所御座候、右之樋木先

年方取替候節ハ、御公義様へ申上候得者被下候、並ニ山方引人足

御奉行人共被仰付被下候

右五ヶ所之堰此水本大谷川筋ニて御座候、此川筋ニ毎年川除場御

座候

一 伊豆境市之瀨ニ而用申水伊豆・駿河境川方老之瀨堰ニ而取申候、

則本田九反余江かけ申候

一 伊豆境峯下堰方取申水堰口方段、峰下本田式町余江かけ申候

- 一 伊豆・駿河境之川此水本そぶと申より大沢壺之瀬通、則麦塚村脇江通り申候、当村境之分道法式里式丁余此川筋ニ毎年川除御座候
- 一 当村井堰川除人足年々二百式三十人程ツ、毎年入申候、年々寄大出水申候へ者人足大分ニ入申候
- 一 畑成田拾貳町余へかけ申水茶畑村之内八まん脇ニ而三間川之水取申候、本堰方道法三十式三丁参田地ニかゝり申候
- 一 野添堀此水本文名村之内ニて堰仕取申候、並久根・公文名村畑成田へ掛候水大雨之節払堀ニて御座候
- 一 茶畑村之内平松新田畑成田拾四町余へ掛申水三間堀り筋本堰方道法三拾四五丁又ハ壺里余も参りかけ申候、則平松新田之者用水も遣申候
- 一 畑成田植附申時分てりつよく候て水不足仕候得者、堰掘人足並ニかろう戸方段々堰落ニ人足出シ、一日ニ七八度十度も落申候人足大分ニ入申候
- 一 茶畑村なかに山壺ツ御座候、此大サ東西へ八拾間南北江百廿六間、則山之上ニ畑御座候
- 一 当村之内ニ長五間余之橋壺ヶ所御座候、但作場へ之道並ニ山道ニ而御座候、右之橋木先年御公義様方被下候、御奉行並ニ引人足共ニ被仰付被下候、其外小橋数多御座候
- 一 草かり敷かやかり申山村方東北ハかるたう坂相生原神なり、松大谷御座之尾壺場平筋うしろ山瀧之沢壺之瀬筋、此道法村方式拾四五丁又ハ壺里余も御座候
- 一 薪取申場右之山たけニ而北ハ大谷南ハ伊豆境大沢迄東ハ芋だいら龍のふかたけ山伏到下並ニそぶ迄、村方道法壺里半又ハ式里余も御座候

- 一 茶畑村之者馬之草かりニ佐野村之内並ニ式木松新田之内江参候儀も御座候
- 一 かり敷苧ニ大野之内今里野・須山野・陣場野・駒門野・神山野、右之内ニ而かり申儀も御座候、此道法村方式里又ハ三里程も御座候
- 一 寸々き入用之節深山村・印野村山之内ニ而かり申儀も御座候、此道法三里半余御座候
- 一 草かり敷かや木かりニ沼津領桃園村定輪寺分並ニ富沢村山へも参りかり申儀も御座候、此道法壺里又ハ壺里半も御座候
- 一 茶畑村之者草苧敷苧ニ伊豆分之山江伊豆佐野村通り沢地村近所迄も参苧申儀も御座候
- 一 百性諸作ニ者作之間ニ右之山ニ而薪をきり、先年ハ三嶋・沼津江付出シ売申候得共、只今者木無御座候ニ付篠かや木かり少ツ、売申儀も御座候
- 一 御蔵米払申儀御蔵衆方御配府次第第三嶋・沼津江付届ケ申候
- 一 箱根御番所御扶持米参候節ハ御蔵衆方御配府次第馬ヲ出シ下土狩村御蔵より箱根迄付届ケ申候
- 一 御厨御蔵米下土狩へ参候節御蔵衆ケ御配府次第馬ヲ出シ三嶋・沼津江払申候
- 一 井堰川除人足御割付次第毎年出し申候
- 一 下土狩御蔵普請之節御割付次第竹木繩かや人足共ニ出申候
- 一 同御蔵柵木並ニ詰人足共御配府次第出申候
- 一 同御蔵番切米壺ヶ年ニ米七斗四升ツ、毎年出シ但シ兩人ニ渡申候
- 一 水久保・伊豆嶋田両所之御拾分一場御普請之節竹木繩かや人足共ニ御配府次第出申候
- 一 箱根御番所柵木並ニ詰人足御配府次第出シ申候

一御殿場御屋敷ニテ御普請被遊候節繩竹人足御配府次第出申候
一御用之鳥もち御配府次第毎年納申候

一御用之柿渋御配府次第毎年納申候

一下郷村々橋木引人足御配府次第出申候

一富士山方御用之御材木出シ人足御配府次第出申儀も御座候

一山役米老石宛毎年御藏江納申候

一家並薪之代御金ニテ毎年納申候

一富士浅間 宮立 高廿七尺 但シ板葺ニ而御座候
横四尺

此宮村始方御座候様ニ申伝候、ゑんぎの儀も無御座候

森 東西江式拾間 四五尺廻り杉五本
南北へ六拾壹間 但し 六七尺廻り松四五本

外ニ小木共御座候

社領下々田老反老畝拾式步 御指置

一八幡 宮立 高三尺 但し板葺ニ而御座候
横老尺六寸

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、ゑんぎも儀も無御座候

森 東西へ五間 但し 五尺廻り松式本
南北へ井五間 其外小木小松御座候

社領下田老畝廿五步 御指置

一八幡 宮立 高式尺八寸 但し板葺ニ而御座候
横三尺

右之宮村始方御座候様申伝ニゑんぎも無御座候

神之木七尺廻り之杉老本御座候

一十二天 宮立 高四尺三寸 但し板葺ニ而御座候
横式尺八寸

右之宮村始方御座候様申伝候、ゑんぎも無御座候

森 東西へ八間 但し 七八尺廻り之松式本
南北へ拾式間 其外小木共御座候

一神明 宮立 高式尺三寸 但板ほこらニ御座候
横老尺式寸

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、ゑんぎも無御座候

森 東西へ四間 但し 七八尺廻り松式本
南北へ七間 外ニ小木共御座候

一大日堂 横式間 但かや葺ニ而御座候
立三間

右之堂村始方御座候様ニ申伝候、ゑんぎも無御座候、則大日如
來御長三尺老寸立仏ニ而古仏に御座候得共、何之御作共相知れ

不申候

森 東西へ八間 但し 六七尺廻り松式本
南北へ拾五間 外ニ小木共御座候

下畑老反式畝拾式步 御指置

一駒方 宮立 高式尺 但板ほこらニ御座候
横老尺式寸

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、ゑんぎも無御座候

森 東西へ拾間 但し 六七尺廻り松式本
南北へ八間 外ニ小木共御座候

一不動 宮立 高三尺式寸 但し板ほこらニ御座候
横式尺五寸

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、ゑんぎも無御座候

森 東西へ拾四間 但し 四五尺廻松三本
南北へ拾四間 外二小木共御座候

一天神 宮立 高式尺六寸 但板ほこらニ御座候
横卷尺六寸

右之宮村始方御座候様申伝候、ゑんぎも無御座候

森 東西へ拾三間 但小木共御座候
南北へ式間

一金山 宮立 高三尺式寸 但板ほこらニ御座候
横式尺

右之宮村始方御座候様申伝候、ゑんぎも無御座候

森 東西江拾間 但し 六七尺廻松式本
南北江八間 外二小木共御座候

一舎護神 宮立 高三尺 但板ほこらニ御座候
横卷尺八寸

右之宮村始方御座候様ニ申伝候、ゑんぎも無御座候

森 東西へ五間 但し小木共御座候
南北へ拾三間

一山神 宮立 高卷尺八寸 但板ほこらニ御座候
横卷尺

右之宮村始方御座候様申伝候、ゑんぎも無御座候

森 東西へ式拾間 但し 七八尺廻椎式本
南北へ拾四間 外二小木共御座候

一山神 宮立 高卷尺八寸 但板ほこらニ御座候
横卷尺

右之宮村始方御座候様申伝候、ゑんぎも無御座候

森 東西へ八間 但 三四尺廻松四本
南北へ廿間 外二小木共御座候

一山神 宮立 高式尺卷寸 但板ほこらニ御座候
横卷尺卷寸

右之宮村始方御座候様申伝候、ゑんぎも無御座候

森 東西へ拾間 但 五六尺廻松三本
南北へ拾式間 外二小木共御座候

一山神 宮立 高式尺 但板ほこらニ御座候
横卷尺

右之宮村始方御座候様申伝候、ゑんぎも無御座候

森 東西四間 但 六七尺廻り松式本
南北へ四間 外二小木共御座候

一山神 宮立 高式尺 但板ほこらニ御座候
横卷尺

右之宮村始^(ハ脱カ)御座候様申伝候、ゑんぎも無御座候

森 東西へ四間 但松小木共御座候
南北へ五間

社領下田老敵拾歩 御指置

宮数ノ拾六ヶ所

一時宗遊行流南長山願称寺本尊座藏^(マツ)之弥陀御長三尺木仏ニ而、則春日之御作ニ御座候と申伝候、此寺開山豆州三嶋西福寺方但阿弥と申沙門參、延文元丙申年開闢仕候、当年迄三百式拾五年之寺ニ而御座候、開山方当住まで拾九世、本寺ハ相州藤沢清浄光寺ニ而御座候

一 当村先年駿河権現様御蔵入之節、御代官長野九左衛門殿頭ニ井出志摩守殿、次ニ安藤弥平次殿、次ニ森川六左衛門殿御代官被成候、其以後紀州様式三年程御取被遊候、其節御代官右之長野九左衛門殿被成候、其後駿河大納言様御蔵入ニ罷成り御代官篠原小右衛門殿被成候、其次則御家中朝比奈弥太郎殿五年程御取被成、其後ハ江戸御蔵入ニ罷成り、今宮惣左衛門殿御代官老年被成候、前々御地頭御代官方代々之義申伝承、如斯ニ書付差上申候、其以後四拾八年以前酉ノ年方殿様御知行ニ罷成申候

茶畑村

延宝八年

名主 甚右衛門

中正月

同 三之丞

組頭 新兵衛

同 伝左衛門

同 惣左衛門

同 文右衛門

平松新田

徳右衛門

梅元佐次右衛門様

大嶋伝右衛門様

付録三 茶畑・柏木家文書3

延享貳年

駿列駿東郡御厨小泉庄茶畑村 諸色書上帳
平松新田

丑五月 小田原宿迄九里六町四十八間

覚

壹軒 名主

四軒 組頭

一家数合百貳拾五軒 内 四拾五軒 小百姓

壹軒 医師

七拾四軒 無田門屋借地

一田反別五拾壹町九反壹畝歩

訳

箱根湖水掛り

拾四町七反壹畝四歩 内

上田五町六反壹畝廿壹歩
中田四町六反貳畝廿三歩
下田四町三反三畝廿四歩
下地分 壹反貳畝廿六歩

当村山沢地水掛り古田 上田六町三反五畝歩
中田八町四反六歩

三拾七町壹反九畝廿六歩 内 下田拾壹町壹反六畝拾七歩

下地分

下田六町九反四畝拾五歩(破損)
下々田四町三反三畝十八口

内

上田中田合六町五反余 麦作仕候分

中田下田合五町余 川筋地窪水入水損場

中田下田

下地分 合貳拾五町五反歩 麦作不仕うたり深田
下田下々田

一畑成田 中田七畝歩 中畑成 箱根湖水掛り
下田壹反三畝廿五歩不畑成

一畑成田下田壹畝廿五歩 下々畑成 地水掛り

一当村之儀川筋三筋御座候、水損川降大破之節ハ御小奉行様御付神
山村・岩波村・石脇村・佐野村・公文名村・稲荷村・茶畑村・平
松新田・麦塚村・伊豆嶋田村・二ッ屋新田・水窪村・上土狩村・
下土狩村・竹原村迄都合拾五ヶ村下郷組合人足ニ而御普請被遊被
下候

瀧頭川 但深良村・久根村・公文名村方落合

宮内川 但大谷洞方山沢所々落合申候

豆州境川 但山峠三国境そぶ沼方境川大沢(破損)落合申候

一当村東西南北方角

東ハ相州境山峠峰通境ニ御座候

南八豆州境山峠三國境そぶ沼之流境川大沢通一ノ瀬筋、下ハ麦塚村境長とろと申境川ニ御座候、川向伊豆佐野村・麦塚村境広地御座候

西ハ平松新田境御座候

北ハ旗鉾山峠方尾根道通駿州深良村山境

右尾根道方瀧頭山橋道迄公文名村境御座候、稲荷村境広地御座候

一 当村方所々道法

麦塚村迄七町拾六間

平松新田迄八町拾間

公文名村迄拾貳町貳拾貳間

佐野村御高札場迄拾九町五拾六間

水窪村迄拾壹町五拾貳間

下土狩村御藏場迄壹里拾貳町貳拾六間

箱根湖水割堀水門口迄三里八町拾間

御殿場村御高札場迄四里拾貳町貳拾〔破損〕

駿州沼津宿迄貳里貳拾町

豆州三嶋宿迄壹里貳拾町

相州小田原宿迄九里六町四拾八間

一 当村橋数大小五拾七ヶ所

内

槻橋壹ヶ所長五間半但橋幅三尺 名所瀧頭山橋

壹尺五寸角式本木橋

此川瀧頭川 但深良村・久根村・公文名村川筋落合流申候

是ハ宮内広地向田広地古田拾四町三反七畝余之作場江通路仕候、

茶畑山北之方馬草苜敷苜取候通路橋ニ而御座候、尤右之場所江通

路仕候道筋外ニ無御座候

右橋之儀稲葉美濃守様御代方懸候節ハ御材木御願申上御厨御材ニ而被下置候由申伝候、当御代元禄九子年今里村御林ニ而槻御材木

被下置候、曳人足之儀神山村・岩波村・石脇村・佐野村・公文名

村・稲荷村・茶畑村・平松新田・麦塚村・伊豆嶋田村・二ッ屋新

田・水窪村・上土狩村・下土狩村・竹原村迄下郷組合人足被下

置、御小奉行様御付引届申候、尤〔破損〕九子年被下置候槻御材木朽

損只今壹本有〔破損〕村ニ而添木仕通路仕候

石橋壹ヶ所 但長四間半 名所 渡り場

橋幅三尺

此川右瀧頭川下前々ハ渡場ニ而御座候、四年以前寛保二戌年石橋

仕候、尤右諸入用人足石屋賃共茶畑村一村ニ而懸申候、是ハ山崎

広地古田十五町余作場江通路仕候、又ハ茶畑山南之方馬草苜敷苜

取通路仕候

石橋壹ヶ所 幅 三尺 名所 仲丸出口

長 三間余

此川三間堀新川平松新田・麦塚村・伊豆嶋田村湖水懸り用水川、

但石脇上佐野堰方用水流參候、前々ハ八木橋ニ而御座候所、四年

以前寛保二戌年石橋ニ仕候、尤前々方村入用ニ而修復仕候、石橋

ニ仕候節も村入用ニ而仕候

五拾ヶ所 石橋ニ而御座候
残五拾四ヶ所内式ヶ所 木橋ニ而御座候
式ヶ所 土橋ニ而御座候

是ハ不残広地之内作場通路橋ニ而用水川筋〔破損〕村ニ而懸替修復

仕候、古来方有来候橋^二而御座候

一当村堰敷拾壹ヶ所人足割合之義下郷組合、神山村・岩波村・石脇村・佐野村・公文名村・稻荷村・茶畑村・平松新田・麦塚村・伊豆嶋田村・二ツ屋新田・水窪村・上土狩村・下土狩村・竹原村迄村組割合人足^二而仕候

樋掛堰 高堰 鈴原堰 高場堰

柿木田堰 一ノ瀬堰 峰下堰 米田堰

船橋川堰 境川堰 瀧頭堰 但枕木長四間三尺廻り松木^二而御座候、村^二而懸替申候

御上方被下候儀無御座候

右堰之内瀧頭堰之儀

五月中^二夜公文名村三角用水堰江引申候、一日一夜龍頭堰江番水^二取申候

一堤巻ヶ所

是ハ当御代御願申上、貞享四卯年人足五百人被下置御小奉行様御付出来仕候、尤御小奉行人水窪村御拾分所より御役人勝保忠兵衛殿・鈴木次兵衛殿御差図^二而出来仕候、人足之儀ハ竈新田・萩蕉村・沼田村・二子村・中山村・中清水村・駒門村・相坂村^並下郷組合神山村・岩波村・石脇村・佐野村・公文名村・稻荷村・茶畑村・平松新田^{〔敬損〕}村伊豆嶋田村・二ツ屋新田・水窪村・上土狩村・下土狩村・竹原村^{〔敬損〕}合共被仰付候、御代官様酒井田八郎兵衛様・赤沢喜太夫様御^{〔敬損〕}一桶巻ヶ所 長五間半 名所道上

是ハ稻葉美濃守様御代方御願申上御厨御林^二而槻御材木被下置候、曳人足之儀ハ御小奉行様御附下郷村組神山村・岩波村・石脇村・佐野村・公文名村・稻荷村・茶畑村・平松新田・麦塚村・伊

豆嶋田村・二ツ屋新田・水窪村・上土狩村・下土狩村・竹原村迄

組合人足被下置候由申候、当御代元禄五申年神山村御林^二而槻御材木被下置候、曳人足之儀御小奉行様御附右之村組人足被下置茶畑村迄引届ヶ申候、唯今有之候樋木享保十一年深山村御林^二而槻御材木被下置御小奉行様御附是又右之村組人足^二而引届ヶ申候、御小奉行郡御組坪田仁左衛門殿御越被遊候

一当村箱根湖水掛り石脇村上佐野堰方水引申候、及卷里余候川筋^二而水引悪敷用水之節ハ稻葉美濃守様御代方御役人様御越御見分^二而用水引申候、当御代も郡御組御小奉行様御見分^二而用水引申候、尤御越不遊候年も御座候

一右堰之儀、稻葉美濃守様御代方下郷組合人足被下^{〔敬損〕}御小奉行^{〔敬損〕}御附井堰被遊被下候、当御代^二も下郷^{〔敬損〕}神山村・岩波村・石脇村・佐野村・公文名村・稻荷村・茶^{〔敬損〕}平松新田・麦塚村・伊豆嶋田村・二ツ屋新田・水窪村・上土狩^{〔敬損〕}下土狩村・竹原村迄村組人足^二而百姓寄合普請^二仕御小奉行様御願申上御見分^二而井堰仕候年も御座候処、御小奉行様御願申上候儀中絶仕罷在之処、別而私共村方水引悪敷百姓迷惑仕候^二付四年以前寛保^二戊年方右佐野堰並川筋之義御小奉行様御願申上御見分之上右之村組人足^二而百姓寄合普請^二仕候

一宝永三戌年湖水掛り御田地旱損御救米式拾五石拜借被仰付五年賊^二上納仕候、尤村中大小之百姓へ割渡帳面印形取置申候

一宝永四亥年早損御救米三拾石拜借被仰付拾年賦^二上納仕候、尤村中大小之百姓江割渡帳面印形取置申候

一享保十八年丑正月方米穀直段高直^二而小百姓無田及渴命候^二付、同二月方麦前飢人御扶持米被下置候様^二御願申上候

但男老人二付一日老合宛
女老人二付一日五勺宛

一元文四年未正月方米穀直段高直^二而小百姓無田及渴命候^二付、同
二月方麦前飢人御扶持米被下置^{〔(破損)〕}

一御願申上候 但男老人二付一日老合宛
女老人二付一日五勺宛

一享保十八丑年旱損御用捨米式石六斗御割付表^二而被下置候

一寛保二戌年畑作大違^二付永式貫七百三拾七文御割付^二而御用捨御
引被下候

一元禄十六未年江戸本庄御屋敷御材木御厨神山村・今里村御林^二而
槻御材木御出被遊候、曳人足御厨御領分江高割^二被仰付候、但牛
引出方沼津黒瀬迄引届ケ申候、公文名村・茶畑村・麦塚村・伊豆
嶋田村・水窪村・上土狩村・竹原村迄三嶋宿助郷役相勤申候^二付
半役^二被仰付候、尤御扶持米ハ不被下候

一宝永二酉年小田原御城御天守御材木御厨印野村山之内黒塚山^二而
槻御材木御出シ被遊候、曳人足之儀御厨御領分江被仰付候、牛引
出方之義三嶋宿助郷役相勤申候^二付半役^二被仰付候、御厨花戸出
^{〔(發損)〕}百式拾文
^二被遊酒匂川流^二御取被遊候、但シ牛老足^二付^{〔(發損)〕}百式拾文
宛被下置候

一箱根湖水掛り人足諸入用水配給分共水懸高割^二而御領分神山村・
岩波村・石脇村・佐野村・公文名村・稻荷村・茶畑村・平松新
田・麦塚村・伊豆嶋田村・二ツ屋新田・水窪村・上土狩村・下土
狩村・竹原村迄拾五ヶ村、稲葉紀伊守様御知行所、深良村・久根
村・一色村、大久保直之丞様御知行所御宿村、松平數馬様御知行

所葛山村・金沢村、松平數馬様
安藤伝吉様 御知行所上ヶ田村、内藤越前守様御

知行所千福村・定輪寺村、秋山主殿様御知行所富沢村、
酒井越中 曾我伊賀
稲葉紀伊

守様 曾我伊賀守様
守様 御知行所納米里村、
山岡五郎作様 御知行所中土狩村、安藤伝

吉様御知行所新宿村、
酒井越中守様
山岡五郎作様 御知行所伏見村迄拾四ヶ村都

合廿九ヶ村^二而割合相勤申候

一当村^二大工老人御座候、水窪村・伊豆嶋田村御拾分所御普請之節
御扶持米被下、大工役^二罷出候、其外御用同断^{〔(破損)〕}

右御拾分所御役所間敷其外破損之節又ハ賄方^{〔(發損)〕}之誤不奉存候、
水久保村・伊豆嶋田村御役所御修^{〔(發損)〕}之節右御役所様方御注進
被遊村方江地方御役所様御触相廻申候、其以後水窪村・伊豆嶋田
村名主其御入用之品諸色割府仕相廻シ申候^二付、割府之通相勤申
候

一当村医師老人 鍛冶老人 桶屋老人 伯楽式人御座候

一箱根御関所御柵木之内片^二而結柵之分下郷組合神山村・岩波村・
石脇村・佐野村・公文名村・稻荷村・茶畑村・平松新田・麦塚
村・伊豆嶋田村・二ツ屋新田・水窪村・上土狩村・下土狩村・竹
原村迄拾五ヶ村^二而修復立替結替任候、稲葉美濃守様御代方被仰
付候年数之義相知レ不申候、尤下土狩村之儀公文名方竹原迄助郷
一統^二相勤申候

一箱根湖水堀抜用水筋元禄元年辰暮方駿州沼津宿御代官小長谷勘左
衛門様御支配^二罷成、水配堰役人御料^二而御宿村名主平次郎下役

水番両式人小田原領^二而茶畑村名主甚右衛門下役水門番式人都合
六人被仰付相勤申候、右水配^{破損}老人給分四人^{破損}「^{破損}」都合八人扶持下
役老人金式^{破損}而宛都合八両^{破損}「^{破損}」村方高割小田原領拾五ヶ村御他領
拾四ヶ村都^{破損}「^{破損}」九ヶ村高割被仰付年來相勤候、段々御代官様御
替り被遊候

一 右水配之内平次郎病死仕此半半右衛門代罷成宝永四亥年水懸り下
郷・中郷・上郷三筋相別水論仕、御評定様^二而御裁許被下置、右
水配人相止三筋^二而水配六人仕立用水引候様^二被仰付候、其節駿
府御代官能勢権兵衛様御支配罷成、翌年子年三筋^二而水配役六人
老人給分三人扶持宛拾八人扶持、下役三人老人給分金式而宛六両、
上役下役給分水懸り高割^二而差出シ申候、右御裁許書佐野村預り
所持仕候

一 湖水懸り諸普請水配給共水懸り村方困窮仕、水配上役三人下役三
人仕給分減候様^二享保年中駿府御代官小林又左衛門様奉願上候
処、水懸り村方御支配相替豆州三嶋宿御代官山田治右衛門様御支
配罷成、右水配願書御引渡被遊享保十一年三嶋宿御役所^二而三
筋^二而水配役三人老人^二付給分三人扶持宛九人^{破損}「^{破損}」下役三人老
人^二付給分金式而宛六両、都合六^{破損}「^{破損}」相勤申候給分水懸り高割
を以御領分拾五ヶ村^{破損}「^{破損}」拾四ヶ村都合廿九ヶ村^二而指出シ申候、
尤只今勤候水配役人上記^二而上役深良村名主源藏下役同村百姓彦
十郎、中郷^二而上役茶畑村名主文次郎下役公文名村百姓半内、下
郷^二而上役新宿村名主甚五兵衛下役相克不申候

一箱根湖水掛り村数

御領分拾五ヶ村神山村・岩波村・石脇村・佐野村・公文名村・稲
荷村・茶畑村・平松新田・麦塚村・伊豆嶋田村・二ッ屋新田・水

窪村・上土狩村・下土狩村・竹原村、御他領拾四ヶ村稲葉紀伊守
様御知行所深良村・久根村・一色村、大久保直之丞様御知行所御
宿村、松平數馬様御知行所葛山村・金沢村、^{松平數馬様}御知行所
上ヶ田村、内藤越前守様御知行所千福村・定輪寺村、秋山主殿様

御知行所富沢村、^{酒井越中守様}曾我伊賀守様御知行所納米里村、^{曾我伊賀守様}山岡五郎作様
^{稲葉紀伊守様}

御知行所中土狩村、安藤伝吉様御知行^{破損}「^{破損}」新宿村、^{酒井越中守様}山岡五郎作様
御知行所伏見村、都合^{破損}「^{破損}」拾四ヶ村

一箱根湖水堀抜寛文六年午八月堀切同十年戌四月五年^二而成就仕
候、寛文十一亥年方村々用水引申候、但シ亥年方当丑ノ年迄七拾
五年^二罷成候

一 右堀抜間数七百七拾七間

内 五拾七間 湖水方堀抜口迄割堀
七百七拾間 深良村山之内堀抜、但シ六尺四方

一箱根御関所御柵木惣御普請天和年中御公儀様御入用^二而丈夫^二御
改御普請御座候由申伝候、稲葉美濃守様御代ハ雜木六七寸廻丸太
立所間數木数少ク申伝候、結替立替之義^{貼紙}「不被仰付候年も御座候
由又者被仰付候年も御座候由申伝候」、何年以前方初而結替被仰
付候哉不奉存候

一 右御柵木三千七百本余之内五百本余四寸五分角土台立櫓^二通残而
三千式百本余七八寸廻丸太長八尺余老尺余堀立横木式通片竹結^二
御座候^{破損}「^{破損}」竹結之所修復片替年々御領分神山村^{破損}「^{破損}」石脇村・
佐野村・公文名村・稲荷村・茶畑村・平松新田^{破損}「^{破損}」伊豆嶋田村・

二ツ屋新田・水窪村・上土狩村・下土狩村・竹原村^(破損)高割^二而相勤申候

一当村之儀田畑諸作之間小百姓無田山稼仕候

訳

榎新小竹茅薄稲葉美濃守様御代方御拾分錢伊豆嶋田村・水窪村御役所江差上三嶋・沼津江壳申候、尤何年以前方右御拾分錢差上申候哉相知し不申候

一居久根並内林松木雜木唐竹内竹之儀御願御免^二□水窪村・伊豆嶋田村御役所江御拾分錢差上三嶋・沼津江壳申候

一紙三ツまた中買之儀御領分神山村・相坂村・中山村・中清水村・駒門村・印野村・深山村・下和田村、御他領深良村・千福村・葛山村、都合拾壹ヶ村方買集豆州修善寺村同国立野村紙漉方江壳申候百姓壹人御座候

中買小百姓 作^(破損)

右御拾分錢三ツまた壹駄^二付錢三百式拾四^(破損)伊豆嶋田村・水窪村御役所江差上申候

一杉檜古来ハ無御座候処、当御代居久根並内林仕立申候処、村役人相改御願申上御拾分錢木主水窪村・伊豆嶋田村御役所江差上三嶋・沼津江壳申候

古来方御免^二而年數相知し不申候

一居久根内林竹木百姓家作之節勝手次第伐普請仕候

一田植夫食米奉願上候得者稲葉美濃守様御代方壹割半之利足^二而拝借仕候由申伝候、当御代^二も拝借奉願上候得者金子^二而御貸^二被下候儀も御座候、唯今拝借仕候御米之義享保九辰年方年、拝借仕返上納仕候

一箱根金奉願上候得者村相応拝借被仰付壹割五分之利足を加へ年賊二上納仕候

稲葉美濃守様御知行之節方被下候得共年數相知し不^(破損)

一名主給五厘引 但^{御年貢本来}御引被下候

本永^二而

一名主役高壹人 三拾石引候様^二被仰付候

一名主屋敷壹反四畝拾五步壹人分御免被下候

一富士山砂降御上地罷成、宝永五子年伊奈半左衛門様御支配被仰付候、八九年御料所^二而享保元年申年御戻シ村^二被仰付候

一伊奈半左衛門様御支配之節八畑方納大豆浮役小物成御救免被^下候

一伊奈半左衛門様御支配^二成、宝永五子年砂払御救金拾八兩式分錢

九百式拾八文被下置、村中大小之百姓江割渡帳面印形取置申候

一伊奈半左衛門様御支配之節、宝永七寅年琉球人御通之節統人馬役被仰付候、翌年正徳元年卯年朝鮮人御通之節上下統人馬役被^(破損)

被仰付候、^(破損)富士川舟橋役相勤申候、尤前々方相勤申候^(破損)御関所御棚木

役相勤御役相重り惣百姓半^(破損)仕候得共、御訴訟可仕間も無御

座、右御役相勤申候

一正徳四年年琉球人統人馬役被仰付迷惑仕候^二付、享保三戌年江戸

表通中御奉行様江罷出重役御訴訟申上候得共、無御吟味相延申候

一享保三戌年琉球人統人馬役被仰付候^二付翌年亥四月江戸表江罷出

道中御奉行様江重役訴状差上候所、御吟味可被成下訴状御請取被

下候処、右訴状之内箱根御棚木役三嶋宿助郷役而役相勤、琉球人

統人馬役朝鮮人富士川船橋役統人馬役御棚木役旁、御役相重候訳

在之候^二付、唐人役御用懸り御奉行様別^二御立被遊道中御奉行様

方訴状御返シ被遊候

一 同六月江戸表江罷下唐人役御用掛御奉行様大久保下野守様・奥野忠兵衛様御両所江訴状式本差上申候所、訴状之表御尋被遊御吟味可被成(破損)「」(破損)、忝本之訴状御公儀様御留置、忝本ハ御吟味「」可被遣由被仰聞罷歸り候

一 同子二月豆州三嶋宿御役所へ河原清兵衛様江私共重役御吟味相渡、三嶋御役所ニ而御手代阿部幸右衛門殿と申御役人御吟味被遊口上書差上ケ申候、江戸表へ可被遣被仰渡候

一 享保四亥年朝鮮人役舞坂方江戸迄往来請負ニ被仰付候、質銀同丑四月小田原江御取立御公儀様江上納被遊被下候、尤高百石ニ付金三分銀五匁宛私共村ニ而金六匁忝分永式百式拾式文上納仕候

一 享保九年辰五月道中筋宿場助郷勤方御吟味ニ付、長谷川庄五郎様御通り被遊候ニ付、拙者共重役訴状三嶋宿ニ而差上申候、御聞届ケ訴状御請取、江戸表ニ而御相談可被成下被仰付候、江戸表へ追訴不能出御沙汰も無御座相延罷在候

一元文二年巳八月江戸表江罷出道中御奉「」(破損)松岡佐渡守様重役訴状差上申所訴状御「」(破損)早速成御吟味も難被成由ニ而罷歸り候様被仰付候、重而御沙汰可有之と罷歸り候所、同九月訴状御返シ箱根御柵木之儀御公儀様御役共難究由重役筋御了簡無之候、其節江戸詰仕不申御吟味不奉願相延罷在候

一元禄十三辰年飢人御扶持米麦前被下置候

但シ 男老人ニ付一日壹合宛 被下置候
女老人ニ付一日五勺宛

一元禄十四巳年飢人御扶持米麦前被下置候

但シ 男老人ニ付一日壹合宛 被下置候
女老人ニ付一日五勺宛

一元文三年烟方大違ニ而永八貫貳百拾三文御割付ニ而御用捨御引被下候

一元文四年烟方大違ニ而永四貫百六文御割付ニ而御用捨御引被下候

一 当村川除並堰籠小唐竹式千六百九拾六本(破損)人用ニ御座候
一 下土狩村御蔵普請之節諸色人足等下郷「」(破損)組合村方田高割ニ而相勸申候、尤年数之儀相知不申候、委細之義ハ下土狩村方書上可申上候

一 同御蔵番式人給米田高割ニ而組合村方一同ニ差出申候、組合村方銘々村付之義ハ下土狩村方書上申候
一 同御蔵米納御用ニ付、小田原方御足輕衆様方御越之節、野菜新田夫組合村方割合ニ而一同ニ差出シ申候、組合村方銘々村付之義ハ下土狩村方書上申候

一 箱根御関所御用米下土狩村御蔵方附送り、御配府次第出シ申候
一 茶畑山伊豆境一ノ瀬洞通ニ而麦塚村人会犯草薪家茅茹申候
一 同一ノ瀬山筋ニ而堰原新田二ツ屋新田入会薪一品取申候

一 同北之方御座之尾山方旗鉢山迄之内最寄々ニ而公文名村・久根村入会諸色取申候
一 茶畑山大谷洞之内ニ而佐野村之者入会薪一品取申(破損)尤二本松新田ハ入不申候

一 鉄炮六挺

訳

小頭無御座候
鉄炮壹挺玉目式匁八分 持主 惣兵衛

右同断
三挺獵師筒 内 鉄炮壹挺玉目式匁八分 持主 甚兵衛

右同断
鉄炮壹挺玉目式匁八分 持主 清三郎

三挺 内

壹挺玉目三奴 小頭無御座候 持主 祖左衛門

右同断 持主 佐右衛門

右同断 持主 又四郎

一 村中百姓共之義ニ付小田原江^(破損)仕出シ又ハ御願之筋出来仕候節、小田原江名主組頭五人組迄御用ニ而參候節、路用等当人差出シ相賄申候

一 箱根掘抜寛文十一亥年成就仕候ニ付中筋用水新川駿木橋佐野村宿堀分り口方川幅三間通堰原落合迄長式千式百五拾式間新川被仰付中筋用水取申候、依之新川ニ而水引悪敷稲葉美濃守様御代方御役人様御越御世話被成下候

一 箱根湖水佐野堰懸り川筋之内江用水不^(破損)罷出堰番仕候湖水懸り御田地主役ニ相^(破損)申候

一 箱根湖水懸り御田地植付候節方毎日天氣次第佐野村用水入口迄人足三人番帳ニ而罷越水引參候、是ハ散田小作之者相勤申候、一日ニ式三度も參候

一 右湖水懸り用水不足之節ハ百姓相談仕井懸り之内百姓番々ニ而毎日式人罷出用水届急候御田地方番掛ケ用水御田地江懸ケ申候、散田小作之者相勤申候

一 当村郡之義古来方駿東郡と唱候処ニ延宝年中方駿河郡と唱申候処、元禄七戌年六月方駿東郡と誌事書物等ニ相認申様ニ御配府廻り候

一 享保元申年方御仲間被仰付高千石ニ付壹人六分三厘御朱印高ニ而相勤申候

一 宝永三戌ノ正月相州大川通川除御普請有之御用人足御領分江被仰候、御厨之義遠方^(破損)ニ付相州高懸リ三分一ニ被仰付候、神山村方^(破損)百三拾八人之内式拾式人茶畑村江被仰付^(破損)請所

江相勤申候、壹人ニ付日用錢百文宛被下候、尤丁場割も御用捨之由及頼候

一 元禄十五年南都大佛之勤金高百石ニ付金壹分宛被仰付候、下郷拾五ヶ村ニ而金拾兩三分錢式拾七文之内金壹兩式分錢式百五拾文茶畑村ニ而午十月小田原江上納仕候

一 元禄十四年巳五月照統雨乞小田原玉瀧坊ニ被仰付被下候、御礼之義上御厨ニ而名主兩人罷出候様ニ被仰付候

一 享保四亥年朝鮮人役駿府御代官小林又左衛門様御尋之由ニ付、御厨御領分村々名主組頭壹人宛小田原へ御召御吟味被遊、箱根御柵木結替修復一村切ニ相認書付差上申候、駿府御役所江被連被下候、但シ柵木百七拾壹本五分諸色入用代五拾式貫四百三拾三文茶畑村ニ而相勤申候

一 享保十八丑年はやり風ニ而相煩候節村^(破損)松原大明神様方御祈禱御札被下候

一 享保年中下土狩村御藏方御年貢米小田原廻シ被遊候、伊豆戸田浦ニ而破船ニ付御藏御代官様並御足輕衆戸田村江度々御越被遊候、人足諸入用小田原方御私被下候由ニ候

一 稲葉美濃守様御代鳥もち相納候処、天和元酉年方御先代稲葉丹後守様御代御免被遊候

一 右御先代山のいも天和二年御免被遊候
一 右御先代種元米四拾壹表年々御貸シ被遊候処、御当代ハ御貸シ不
被遊候

一右御先代村方井堰人足志人ニ付米式合五勺宛被下候義も御座候

一右御先代御年貢米表切三斗五升表切ニ御座候処、天和三亥年方御

用捨ニ而三斗七升之勘定ニ被仰付候

一当村定使志人給米八俵、但村高割ニ仕百〔發損〕中候

一茶畑村百姓家統五通り罷在候

此説

中尾組家数三拾五軒

是ハ何年以前相分レ申候哉年数相知不申候、尤御年貢御役名

主組頭百姓勘定仕一組切ニ百姓集り組頭取立仕候

瀧頭組家数三拾貳軒

右同断

茶畑組家数三拾軒

是ハ何年以前相分レ申候哉年数相知不申候、尤御年貢御役名主

組百姓勘定仕一組切百姓集り組頭取立仕候

仲丸組家数三拾四軒

右同断

一ノ瀬組家数五軒

右同断

右之通村ニ而取扱候通書付差上申候以上

延享二年丑六月 茶畑村

横井平助様 名主 文治郎

谷川祖左衛門様 組頭 弥七

同 義右衛門

同 庄左衛門

同 喜太郎

百姓代 太郎左衛門

覚

一田方拾四町壹反八畝式拾壹步 平松新田 湖水懸り

一畑成田四反九畝三步 同断

一当村堰三ヶ所 但赤石堰並三間堀入口堰式ヶ所

右堰之枕木等ハ無御座候、何年以前出来仕候哉年数相知不申候

一当村東西南北方角 東ハ茶畑村 但南ハ伊豆嶋田村

西ハ二ツ屋新田

北ハ二本松新田・稲荷村

一当村橋数大小拾四ヶ所

橋壹ヶ所 幅式尺七寸長三間 名所 二本松新田境

但シ石橋

此川上ハ佐野村小柄沢川ニツ屋新田用水引申候川ニ而御座候、是

ハ御他領千福村・葛山村・御宿村方三嶋宿往来橋ニ而御座候、古

米者渡場ニ而御座候四〔發損〕寛保二戌年石橋ニ仕候、尤人足並石

屋賃共〔發損〕ニ而仕候、脇村方出銭手伝等無御座候

橋壹ヶ所 幅式尺八寸 長壹間 名所 座頭塚上

但シ石橋

此川平松新田用水川ニ而御座候、古来者土橋ニ而御座候処ニ度々

破損仕候ニ付三年前寛保三亥年石橋ニ仕候、古来方村入用ニ而

仕候、右石橋ニ仕候節も村入用ニ仕候、此橋神山村・深良村・久

根村・公文名村・三嶋宿・沼津宿江之往来橋ニ御座候

残橋拾式ヶ所 但 八ヶ所石橋 橋幅三尺
四ヶ所土橋 長四尺
右同断

右ハ広地之内并堀用水引候小堀ニ而御座候、尤広地江人馬通路仕候橋ニ而御座候

一 当村用水不足之節ハ佐野堰方三間堀通石脇村・佐野村・久根村・公文名村・稲荷村・茶畑村堰々水払田地仕付、初方昼夜三人宛ニ而五六度ツ、堰弘参湖水引参候、此道法志里余御座候、御田地地〔破損〕番帳ニ而相勤申候

一 右用水不足之節者堰番之儀毎日地主役〔破損〕申候

一 佐野堰並川筋之義稲葉美濃守様御代方御小奉行様御見分之上堰々仕候由申伝候、当御代ニも御小奉行様御見分ニ而右堰仕候節も御座候、然ル処ニ中絶仕候罷在村方百姓寄合普請ニ而ハ漏水多ク別而私共村水末ニ而難義仕候ニ付、四年以前寛保ニ戌年方御小奉行様御見分奉願堰々仕候

一 右用水引候節ハ稲葉美濃守様御代方御役人様御見分之上用水引候由申伝候、当御代ニも御小奉行様御見分ニ而用水引申候、又老御見分ニ御越不被遊候年も御座候

一 当村井堰人足之義神山村・岩波村・石脇村・佐野村・公文名村・稲荷村・茶畑村・平松新田・麦塚村・伊豆嶋田村・二ッ屋新田・水窪村・上土狩村・下土狩村・竹原村迄村組一同ニ割合ニ而堰々仕候

一 箱根湖水懸り諸入用水配給分共ニ高割ニ相勤申候御領分神山村・岩波村・石脇村・佐野村・公文名村〔破損〕茶畑村・平松新田・麦塚村・伊豆嶋田村・二ッ屋村〔破損〕上土狩村・下土狩村・竹原村

迄拾五ヶ村

稲葉紀伊守様御知行所深良村・久根村・一色村、大久保直之丞様御

知行所御宿村、松平数馬様御知行所葛山村・金沢村、安藤傳吉様 松平数馬様

知行所上ヶ田村、内藤越前守様御知行所千福村・定輪寺村、秋山主

殿様御知行所富沢村、酒井越中守様 曾我伊賀守様 稲葉紀伊守様御知行所納米里村、山岡五郎作様

御知行所中土狩村、安藤傳吉様御知行所新宿村、酒井越中守様 山岡五郎作様御

知行所伏見村迄都合都合式拾九ヶ村ニ而相勤申候

一 箱根御関所御柵木役神山村・岩波村・石脇村・佐野村・公文名村・稲荷村・茶畑村・平松新田・麦塚村・伊豆嶋田村・二ッ屋新田・水窪村・上土狩村・下土狩村・竹原村迄村組一同ニ相勤申候、尤何年以前方相勤来候哉年数相知不申候

一 三嶋宿助郷役之儀元禄七戌年方被仰付〔破損〕上土狩村・水窪村・伊豆嶋田村・麦塚村・茶畑村〔破損〕稲葉紀伊守様御知行所久根村

都合八ヶ村組合相勤申候

一 下土狩村御蔵御普請之節村組一同ニ相勤申候、委細之儀者下土狩村方書上申候

一 下土狩村御蔵番人給分其外御用村組一同ニ相勤申候、委細之儀ハ下土狩村方書上申候

一 御厨御林ニ而御材木御出シ被遊候節ハ神山村・岩波村・石脇村・佐野村・公文名村・稲荷村・茶畑村・平松新田・麦塚村・伊豆嶋田村・二ッ屋新田・水窪村・上土狩村・下土狩村・竹原村迄村組一同ニ相勤申候

一水窪村・伊豆嶋田村御檢分所御普請村組一同ニ相勤申候、委細之儀ハ伊豆嶋田村・水窪村方書上申候

一宝永三戌年御当代早損御救米九俵拜借被仰付五年賦ニ上納仕候

一宝永四亥年御当代早損御救米式拾(破損)「(破損)」仰付拾年賦ニ上納仕候

一享保十八年丑正月方米穀直段高直ニ而小百姓無田及渴命候、同丑二月方麦前飢人御扶持米被下候

但 男老入ニ付一日壹合宛 被下置候
女老入ニ付一日五勺宛

一元文四未年正月方米穀直段高直ニ而小百姓無田及渴命候、同丑二月方麦前飢人御扶持米被下置候

但シ 男老入ニ付一日壹合宛 被下置候
女老入ニ付一日五勺宛

一富士山砂降御上地罷成伊奈半左衛門様御支配被仰付畑方納大豆浮役小物成御救免被遊候

一享保十八年早損之節御用捨米老石五斗御割付表ニ而御引被下候

一元文三年畑方大違ニ而永老貫百四拾七文御割付表ニ而御用捨御引被下候

一元文四未年畑方大違ニ而永五百七拾三文御割付ニ而御用捨御引被下候

一寛保二戌年畑作大違ニ而永老貫五百(破損)「(破損)」御割付ニ而御引被下候

一百姓家作之節居久根内林竹木伐候而普請仕候
一当村百姓家数式拾三軒持高式拾三石余無田借地多有之入作田畑散田仕渡世仕候者多御座候

一当村御厨往来道筋御候ニ付草履草鞋其外相応物商売仕渡世仕候

一入会山之義茶畑村伊奈半左衛門様御支配之節山論仕立会絵図被仰

付候、絵図之内最寄ニ而薪田畑肥草取中候、勿論大野原江も入会諸色取中候

一当村大工老入御座候 水窪村・伊豆嶋田村御檢分所御普請之節八御扶持米被下大工役ニ罷出候、其外御用同断

右御詰方御役所間數其外破損之節又ハ賄方新古之訳下奉存候、水久保村・伊豆嶋田村御役所御修復破損之節右御役所様方御注進被遊、村方江地方御役所様方御触相廻申候、其以後水窪村・伊豆嶋田村名主(破損)「(破損)」品諸色割符仕相廻申候ニ付割符之通相(破損)「(破損)」

一当村紺屋老入御座候、瓶役永百式拾(破損)「(破損)」文年々上納仕候、何年以前方紺屋相勤来申候哉、又者瓶役何年以前方被仰付候哉、相知不申候

一当村鍛冶老入御座候

一当村之儀元来茶畑村附之新田ニ而何年以前開免仕候哉相知不申候、五拾年以前元禄九子年迄茶畑村名主支配ニ被仰付罷在候処、

元禄十丑年別村ニ被仰付名主相立罷在候処、式拾老年以前享保十年巳八月平松新田名主徳右衛門欠落仕候ニ付、同巳年茶畑村名主又四郎支配ニ被仰付候

一当村家数式拾五軒内 老軒 組頭 四軒 小百姓 二十軒 無田

一鉄炮志挺玉目式匆八分 小頭組親之義無御座候 持主 治兵衛

右之通村ニ而取扱候通書付差上申候、以上

延享貳年丑六月 平松新田

名主

文次郎

組頭

助右衛門

百姓代

喜八

横井平助様

谷川祖左衛門様

付録四 茶畑・柏木家文書 4

相定申若者条日之事

一年々正月十一日初出会可仕、且平日臨時出入共同様遅参不参無之様、相互ニ中合早々罷出へき事

一御法度之儀者何事ニ不寄急度相守、別而博奕並賭之諸勝負之儀一切仕間敷候、若又心得違之者有之候ハ、見付次第御役方へ相届ヶ殿敷可申付事

一隣村祭礼其外御座候節深切ニ世話いたし喧嘩口論出来不申様取計申可申、尤無^申至来いたし候節者早々掛附候様可致、不宜義者荷^担一切致間敷候、並^申歸り之節互待合罷歸り可申候事

一隣村若者不義之義類御座候節者、外若者へも得と相掛合、其上ニ而取計^人勘弁ニ決而致間敷候

一他所者不及申村内ニ而も喧嘩口論決而間敷候事、若又無^致義有之候ハ、中老江掛合之上勘弁可請事

一他村^方新入之若者有之候ハ、初出会之場所へ罷出披露可致候事
一差廻し錢之義無滯急度さし出し可申候、若又相滯候者有之候ハ、
村作法を以仕置可申付候事

一戲病ふて寐等一切致間敷候、別而奉公相勤^メ候者^者勤^天向太切ニ相心得可申候事

一人之難義を不厭何事ニよらず徒事決而致間敷候、万一心得違之者有之候ハ、内々中老江可相届、隱置脇よりあらわるゝにおひては、本人ハ不及申見逃候者まで急度可申付候事

一御趣意筋者不及申自立候風俗決而致間敷候、且又聊之義ニ事寄無益之呑喰一切致間敷候、並不被招振舞江押入一切無用之事

右之条々急度相守可申候、以上

(付記) 柏木家文書に残された下書から天保十三年六月の文書と推定される。

付録五 『駿河記』 駿東郡茶畑村 (桑原藤泰 文化三年完結)

【茶畑】寛永改高四百六拾石三斗六升 高六拾九石三斗九升六合

畑方 平松新田 至沼津 三里半。麦塚より北に六町入。

田額七百五拾七石六斗三合 小田原領 田額百九拾七石六斗

七升七合 小里分村平松新田

○富士浅間社 大社地八十末社在 除地九斗老升式合

○大日社 除地六斗式升 ○駒形社

○十二天社 ○山神社 除地壹斗三升三合

○八幡宮 除地壹斗八升三合 ○左宮司社 ○金山社

○神明宮 ○天神社

○南朝山巖唱寺 時宗 藤沢清浄光寺末 除地二石四斗
建武二年十二月十二日官軍に戦死。其靈
菩提の爲に、南朝の僧來て一字を建と云。

○五大山大聖庵 洞家 豆州江月寺末 十六羅漢石仏置

○滝不動 南岸石壁より溪水落つ。三島加茂川源なり。大聖庵
立之。

○界川 豆州志小川郷尾川と号す。源茶畑村山中へ三里と。神
川と合し伊豆島田にて神川東へ流。東界川は小水にて難分。

千貫樋より玉川丸池へ入、夫より水多し。曲流なり。久米田戸
田畑中に至て僅の小舟を浮べ、的場の下にて狩野川へ入。

○十三塚 茶畑平松の界にあり。建武二年乙亥十二月十二日足柄
合戦官軍戦死の地なり。

大小の塚二つあり。小塚は先年里人塚を発しに、石櫃に片石の蓋
あり。内に朽骨計りにて分明ならず。また元の如く埋置しと云。古
五輪あり。村老は中将為冬卿の御塚なりと云伝へたり。親塚と云は

あまたの亡卒を集て埋たると見ゆ。総て不浄の者あたりへ行ば必祟
をなすとて里人恐れあへり。又俗に座頭塚と云。此辺をむかしは佐
野原と唱へしにやあらん。

大平記卷十四ノ表 七十三云前文略 佐野原へ引退く。仁木・細河・今

川・荒川・高・上杉・武藏・相摸の兵共三万騎にて追懸たり。是
にて中書王の股肱の臣下と憑み思食たりける、二条中将為冬討れ
給ければ右衛門佐助 義の兵共返合々々三百騎所々にて討死す。是を

も願ず引立たる官軍ども、我先にと落行ける程に、佐野原にもた
まり得ず、伊豆の府にも支へずして、搦手の寄手三百余騎は海道
を西へ落て行。

為冬卿 冷泉定家卿四代孫。正二位大納言御子左為世卿三男也。
左中将正四位下。

編集後記

調査報告書第四集「茶畑の民俗」を発刊できた事をまずもって報告させていただきますと共に、発刊に当り調査に協力していただきました方々にお礼の言葉を申し上げる次第です。

「葛山の民俗」、「深良の民俗」と、これらの民俗調査を通じて感ずる事は、生活の中での水資源の重要性及び確保、相互扶助、信仰に基づく年中行事等、これら自然と一体となった生活様式を見る事ができます。

この様に市内全域に於いて共通した生活や自然を大事にするといった気持ちですが、現在の裾野市を育んでいるものと思われれます。

現在の生活の中で一部は消滅してしまったものも有る様ですが、市史編さん事業としましては、消滅してしまった事象や、現在残っている事象を後世に伝え残す事は重要であると再認識し、皆様方のご協力、ご指導を仰ぎ、より良い市史を目指していく所存であります。今後とも市史編さん事業にご協力、ご指導の程、宜しくお願ひ申し上げます。

裾野市教育委員会

市史編さん室長 藤森 秋親

裾野市史編さん関係者

市史編さん専門委員

代表 有光 友學

高橋 敏

中野 國雄

福田アジオ

安田 常雄

四方 一瀨

横浜国立大学教育学部教授

国立歴史民俗博物館教授

日本考古学協会会員

新潟大学人文学部教授

電気通信大学教授

国士舘大学教授

市史編さん調査委員

井口 俊靖

石田 義明

岩崎 信夫

岩田 重則

菊池 邦彦

齋藤 弘美

坂本 紀子

柴 雅房

新谷 尚紀

加藤学園暁秀中学校教諭

静岡県立立花山高等学校教諭

都立目黒高等学校教諭

早稲田大学大学院文学研究科
博士課程

都立航空工業高等専門学校
助教授

日本民俗学会会員

早稲田大学大学院文学研究科
修士課程

静岡県立沼津城北高等学校教諭

国立歴史民俗博物館助教授

杉村 斉

三島市教育委員会三島市郷土館
学芸員

関根 省治

仁藤 敦史

東島 誠

松崎 真吾

松田香代子

湯川 郁子

伊東 誠司

宮村田鶴子

西川 尚男

植松甲子男

杉山 光正

加藤 信雄

水口 清文

歌崎 久作

田口 勝夫

水口 忠栄

石脇村

佐野村

大畑村

二ツ屋新田

定輪寺村

富沢村

伊豆島田村

地区協力委員

(旧村名)

沼津市立長井崎中学校教諭

日本民俗学会会員

博士課程

一橋大学大学院社会学研究科博士課程

一橋大学大学院社会学研究科

日本民俗学会会員

常勤講師

神奈川県立平塚江南高等学校

国史学専攻修士課程

東京大学大学院人文学部研究科

国立歴史民俗博物館歴史研究部助手

静岡県立富士宮北高等学校教諭

静岡県立沼津城北高等学校教諭

裾野市史調査報告書第四集

茶畑の民俗

平成五年十月二十五日

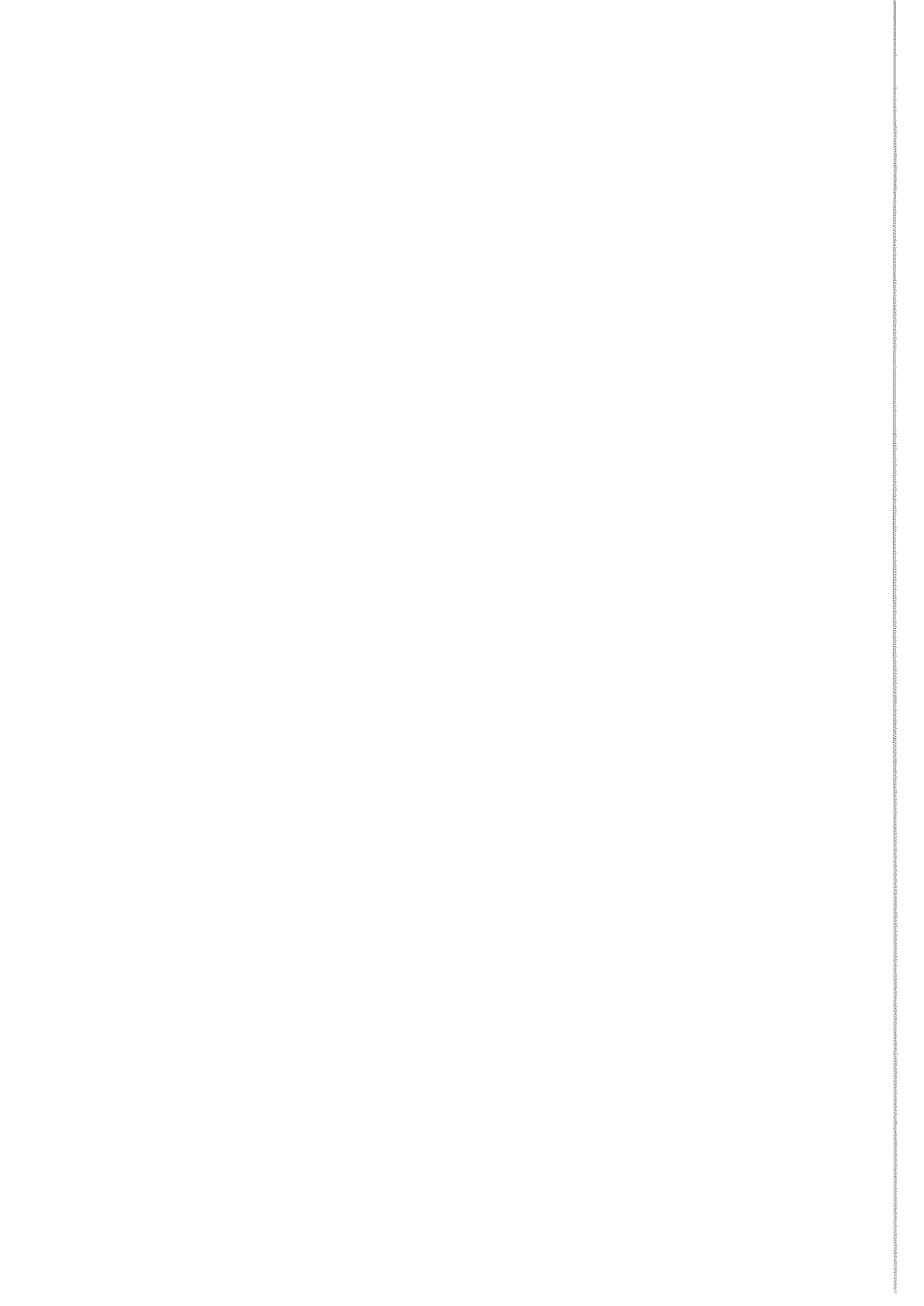
編集 裾野市史専門委員会
発行 裾野市教育委員会市史編さん室

裾野市茶畑三九九
電話〇五五九一九三二七〇

印刷 みどり美術印刷株式会社

題字 裾野市史編さん委員会副委員長

勝 又 壽



トリバライ ……101
 ドンドヤキ(ドンド焼き)
 ……86, 107
 ドンドンヤキ(ドンドン焼き)
 ……50, 58, 59, 60, 75
 トンボグチ ……76

〈な〉

苗代 ……63, 64
 直会 ……50, 80
 ナカ ……79
 中郷 ……10
 ナカバシラ ……27
 ナガヤ ……23
 ナキャア ……26
 ナコウド(仲人) ……42, 77, 88
 ナタガマ ……68
 名付け親 ……89
 夏越の祓 ……106
 ナナクサガイ(七草粥) ……74
 七本塔婆 ……100
 ナライ ……21
 成木責め ……74
 ナリモウソウ ……75
 ナリモツ ……74
 ナヤ ……23
 ナンド ……26, 83

〈に〉

ニイボン ……79, 100
 西風 ……21
 二一名共有 ……14, 15
 ニバンショウガツ(二番正月)
 ……74, 75
 二百ボルト農電 ……15
 ニモチ ……91
 ニワ ……13, 26, 75, 96

〈ぬ〉

ヌサ ……39

〈ね〉

ネネミ ……30
 ネネミマイ ……85
 ネンカイ ……98, 101
 年中行事 ……73, 74
 念仏 ……47
 念仏講 ……110

〈の〉

ノイハイ ……97
 農耕儀礼 ……64
 農地解放 ……52
 ノコギリ ……68
 ノコギリ鎌 ……66
 ノサ ……39
 野辺送り ……94, 97
 ノヤキ ……98
 野良着 ……68

〈は〉

媒酌人 ……42
 パイスケ(屋) ……16, 67
 ハクビシン ……20
 バクロウ ……61
 ハコゼン ……28
 箱根竹 ……16, 51, 68
 箱根山 ……54
 ハシワタシ ……85, 88
 ハタ ……76, 94
 ハタケダ ……63
 ハチマンサン ……23
 初午 ……76, 86
 ハツカショウガツ
 (二十日正月) ……75

ハツキャク ……86
 初講 ……53, 54, 56
 初集会 ……53
 ハツゼツク(初節句)
 ……42, 43, 51, 77, 78, 85, 89

初誕生 ……86
 ハツッコ ……82, 90
 初詣で ……105
 ハツヤマ ……74
 ハデヤー ……63
 馬頭観音 ……112
 ハナカゴ ……95, 96, 97
 ハナセンベイ ……95
 ハナダンゴ ……95
 ハマオリ ……62, 94, 97
 ハラオビワイ ……82, 89
 馬力 ……19
 春の七草 ……74
 ハンテン ……68

〈ひ〉

ヒーナサン(雛) ……42
 彼岸 ……79
 ヒキツギ ……77

ヒキモノ ……92
 ヒザノモチ ……100
 ヒジロ ……76, 89
 ヒソンバ(日損場) ……10
 ヒト ……58, 94
 一月遅れ ……80
 ヒトニイク ……94
 ヒネンブツ ……70, 111
 火鉢 ……33
 ヒャクショウブチ(百姓淵) ……45
 ヒャクヒトエ ……42, 85
 ヒャッカランチ ……100
 ヒョウゴ ……77
 ヒラボシ(平ら干し) ……11
 ヒルメシ ……65, 67
 ヒロマ ……26
 ビンモジリ(曇モジリ) ……21

〈ふ〉

深良用水 ……10, 13
 フカンボー ……63
 藤田観光 ……14, 15
 婦人会 ……60
 付属屋 ……23
 不動講 ……50, 53, 56, 76, 109, 110
 不動堂 ……17, 50, 53, 55, 59, 77
 不動の滝 ……11, 107
 風呂 ……28
 ブンコグラ ……24
 ブンノクボ ……85

〈へ〉

臍の緒 ……83
 ヘツツイ ……27
 ベツヤ ……23
 ヘビ ……94
 弁当イザロ ……67

〈ほ〉

坊さんの年始 ……74
 豊饒祈願 ……76
 ホウソウダナ ……113
 ホウソウマンジュウ
 (疱瘡饅頭) ……86
 ホウソガミ(疱瘡神) ……86
 ホウソマイ(疱瘡見舞い) ……86
 ホカエ(ホカヤ) ……23
 ホカザリ ……73
 ホシクサ(乾し草) ……17
 ぼたもち ……79

常会……………53
 正月……………73
 正月飾り……………74
 正月三が日……………74
 小区……………52
 ジョウグチ……………22
 常使……………52
 松寿院……………108
 精進おとし……………62
 醤油……………72
 精霊送り……………79
 ショウリョンサン……………78
 定輪寺……………108
 精霊迎え……………78
 女子青年団……………59
 諸人(神)講……………53, 56, 57, 111
 ジロウツイタチ(次郎朔日)……………76
 シンコ(新戸)……………51
 神社持ち……………15
 新住民……………11
 シンゾウブシン……………38
 シンハカ……………102
 人民総代……………45, 52
 神武さんの節句……………77
 シンヤ(新家=分家)……………43

<す>
 水車……………13, 66
 水車小屋……………13
 水神……………13
 水田……………63
 ズシ……………24
 ススハキ……………73
 ススハキダンゴ……………73
 ススハライ(煤払い)……………36, 74
 炭窯……………37
 炭焼き……………19
 ズリカン(摺り罐)……………19

<せ>
 生業……………63
 青年クラブ(青年倶楽部)
 ………………15, 17, 70, 87
 青年相撲……………87
 セーノカミ(道祖神)……………46
 赤飯……………76, 79, 81
 セック(節句)……………51, 77
 節分……………76
 セドグチ……………26
 セドリ(畝取り)……………10

浅間神社……………14, 44, 45, 46, 47,
 55, 59, 60, 80, 105
 センゾさん……………103

<そ>
 総会……………57
 葬儀……………51
 葬儀屋……………61
 葬式……………50, 60, 62
 葬式組……………57, 93
 雑煮……………74
 ソートメ……………64, 65
 ソトエン……………26
 ソトベンジョ……………23
 蕎麦……………71

<た>
 大区……………52
 ダイコク(ダイコクサマ)
 ………………81, 112
 大黒柱……………27
 ダイコブチバ……………45
 代参……………57
 ダイジングウサマ
 (ダイジングウサン)……………27, 112
 堆肥……………18
 タイヒゴヤ(堆肥小屋)……………18, 23
 タイヒビヤ……………23
 タイヒベヤ……………23
 タイマツナギ……………43
 田植え……………64, 65, 78
 滝頭青年団……………87
 タケキリ……………63, 66, 67, 68
 竹の時期……………67
 タケノヤマノカミ
 (岳の山の神)……………14
 脱穀……………66
 脱穀機……………66
 タテマエ……………38
 タナガイ……………31
 七夕……………78
 種蒔き……………78
 種もみ……………63, 64
 田の神……………76
 田の草とり……………65, 66
 タバコ……………24
 タンク……………13
 ダンゴ(だんご、団子)
 ………………73, 75, 79, 80
 ダンゴツキ……………80

ダンゴバナ……………80
 ダンゴボク……………75
 ダンゴヤキ(ダンゴ焼き)
 ………………59, 75, 93

<ち>
 乳付け……………84
 チボシ……………66
 茶畑山……………14, 50, 51, 54, 55
 チャブクロ……………91
 忠魂碑……………110
 注連縄……………73
 チョウ(町)……………47
 チョウツバ……………23
 長男……………78

<つ>
 月並(み)念仏……………56, 110
 月見……………80
 ツツカギ……………28

<て>
 デブソクキン(出不足金)
 ………………14, 15, 55, 80
 デミマイ……………42, 58, 82
 テンガイ……………94, 97
 天神講……………58, 60, 75
 天神さん……………87
 テントウネンブツ
 (天道念仏)……………70
 天王祭り……………78

<と>
 ドウグベヤ……………23
 ドウバヤマ(道場山)
 ………………44, 45, 52, 53
 当番町……………50
 棟梁送り……………40
 道了さん(大雄山最乗寺)……………82
 トオリ……………24
 トキブツ……………101
 トシガミサン……………27
 年取り……………76
 ドブ……………18
 トブクロ……………68
 ドブツタ……………10, 63
 トムライ……………95
 トモダケ……………66
 トモチ……………96
 トリアゲバアサン……………58, 81

カワトリ……………68
カワバタ(川端)……………12, 13, 37
願生寺……………44, 56, 108
カンソウダ……………63
元旦……………74
ガンヅメ……………65
カンデンチ……………63
関東大震災……………13
観音講……………53, 110

〈き〉

キチュウ……………96, 98, 99
忌中位牌……………62
キチュウミマイ……………96
キッカエシ(切り返し)……………18
祈年祭……………106
キャアコシ……………38
キャクネンブツ……………98
キャハン……………68
旧戸(キュウコ)
……………43, 50, 51, 55, 58
キュウハカ……………102
旧暦……………80
協議員……………50
共同井戸……………71
共同集荷場……………53
共同墓地……………56, 103
共有地……………51, 53

〈く〉

草刈り場……………16, 17
クサヤネ……………24, 34
区総会……………53
クチキキ……………88
クチトリ……………92
区長……………47, 52
区費……………53
クミ(組)……………46, 47, 50, 51, 57, 59
組頭……………46
クラブ(倶楽部)
……………52, 53, 54, 59, 60
暮講……………53
クンチモチ……………73

〈け〉

ゲートボール……………60
ケコミ……………27
結婚式……………43, 51, 58
ゲヤ……………80
建国祭……………105

県住(県営住宅)……………15

〈こ〉

コ……………88
講……………50, 53, 56, 60
耕月寺……………8, 45, 55, 108
合祀祭……………47, 55
ゴウシャサイ(合社祭)
……………47, 55, 59, 79, 87, 105
コウジンサマ(コウジンサン)
……………27, 112
弘法さん……………60
公民館……………47, 52, 53, 54
五右衛門風呂……………28
五月節句……………78
ゴカンニチ……………74
コギリ……………68
コクグラ……………23
コサ……………63
コシアゲ
……………43, 58, 81, 89, 94, 95, 96, 104
小正月……………75
コショウツケ……………90, 91
ゴショウカイドウ……………10, 11
子ども会……………59
子供相撲……………59, 78, 79, 87
子供のお振る舞い……………89
子供の仲間入り……………85
子供みこし……………106
コニダ(小荷駄)……………17, 19
コニダグラ(小荷駄鞍)……………17
コノメ……………31
コブクロ……………91
コブン(子分)
……………42, 43, 51, 72, 82, 85, 88
コマイダケ……………66
駒形神社……………107
コマンザライ……………19
小麦饅頭……………78
コヤスミ……………78
コリ(行李)……………16
コロバシ(転ばし)……………19
コロモ……………33
コワカイシュ……………59
金毘羅……………50, 55
コンピラサマ(コンピラサン)
……………23, 113
金比(毘)羅神社……………13, 107
婚礼……………51

〈さ〉

財産区……………50, 51
祭典委員……………47, 79, 105
サイトヤキ(サイト焼き)
……………74, 75, 108
サイノカミ(サイの神)
……………58, 59, 74, 75, 86, 107
サカイガワ……………43, 44, 51
境川……………7
サカズキゴト……………89, 91
サキヤマ……………19
サク……………18
サケ……………42, 89
ザシキ……………26, 83, 96
ザツボク……………19
サツマ……………18, 19
サツマグラ(薩摩倉)……………19
サトジ(里地)……………10, 44
佐野郷……………7, 8
佐野原さん……………44
山岳委員……………51, 54
山岳委員会……………14, 80
三三名共有……………14
サンダワラ……………113
産婆さん……………58, 61

〈し〉

シカバナ……………96
仕事(農作業)始め……………64
四十九日……………100
ジスイ(地水)……………10, 63
七五三……………62, 86
ジツキ……………38
湿田……………63
死装束……………96
シニミマイ……………93
シノダケ……………66
下刈り……………55
シャツ……………68
集会所……………52, 53
祝言……………42, 90
十五夜……………80
十三仏……………70
十三夜……………80
十七名共有……………14
十二天さん……………50
出棺……………96
出産祝い……………51
出乳祈願……………84
春分……………76

〈あ〉
 アカシ……………79
 アカメシ……………85
 アガリダン……………27
 アガリット……………27
 秋葉講……………110
 アケ……………79
 アサクサ(朝草) ……17, 70
 朝虹……………21
 アサメシ……………65, 67
 アシイレ……………42, 90
 アシナカ……………96
 アシナカゾウリ……………95
 アズキガユ……………75
 後産……………84
 アナホリ(穴掘り)
 ……57, 58, 94, 95, 104
 アラクオコシ(荒く起こし)…20
 淡島講……………60, 82, 110
 安産祈願……………62
 アンビンモチ……………42, 71, 82

 〈い〉
 イイ……………65
 イイダウエ……………64
 イイツギ……………93
 イエナ(家名=屋号) ……9, 43, 44
 泉村山野の統一事件……………54
 イセキ……………43
 イタク……………22
 一夜かざり……………73
 イッスイキ……………101
 イドガエ(井戸替え)……………13
 井戸世話人……………77
 イナサ……………21
 稲作……………63, 78
 イナリサン(イナリサマ)
 ……23, 112
 猪……………20
 位牌……………79
 いほの神さん……………111
 イリ……………79
 入会地……………51
 イロリ……………28, 96
 イロリの座順……………29
 インキョ……………43
 インキョヤ(隠居家) ……23, 43

 〈う〉
 ウケワタシ……………77

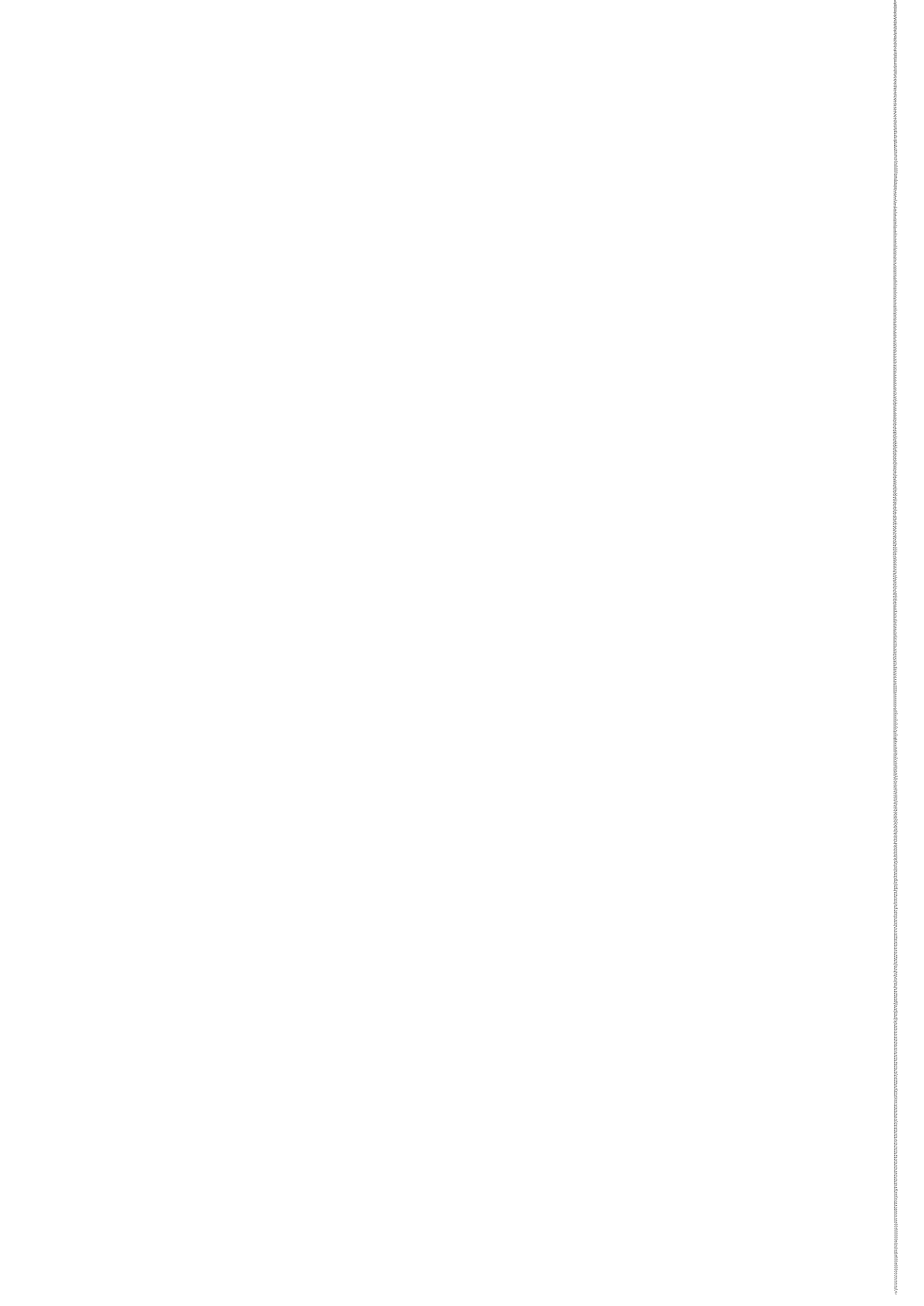
ウシ……………66
 氏子総代……………47, 59
 ウチエン……………26
 うどん……………71
 ウナイゾメ……………64
 ウブメシ……………84
 産湯……………84
 ウマヤ……………23

〈え〉
 エーナ(家名)……………89
 疫病払い……………77
 エビス講……………80
 エビスサン(エビスさん)……………27
 恵方……………73
 エンスイセン……………64
 エンツナギ……………42, 88

〈お〉
 お稲荷様……………76
 オエベスサマ……………112
 オオアシ……………78
 大銀杏……………84
 オオド……………27
 オオハライ……………37
 大晦日……………73
 オオヤ……………22
 大山講……………76, 111
 オカガリ……………74
 お飾り……………73
 オカッテ……………26
 お弘法さんの日……………86, 109
 オコワ……………65
 オサンバコ……………77
 お産婆さん……………81
 お地蔵さん……………60
 お七夜……………85, 89
 お釈迦さん……………60
 オショウコ……………36
 オショウバン……………89, 91
 オスワサン……………23
 お供え……………73
 お供えモチ……………43
 オソナエワリ……………64
 オダイヤ(地主)……………44
 オタナサマ……………74
 オタル……………89
 オチツキノボタモチ……………92
 オチャ……………28
 オチャハン……………80, 86, 98

雄蝶雌蝶……………91
 オツウヤ……………95
 オデューヤ(お大家)……………51
 オテントサンネンプツ……………111
 男の正月……………74
 お念仏……………60, 61
 お雛様……………59
 オヒマチ……………43, 51
 お不動さん……………50, 60
 オフルマイ・オフルミャー
 (お振る舞い)……………15, 42, 43, 53,
 54, 55, 56, 57, 60, 76, 77, 85, 92
 お宮参り……………85
 オモテ……………22
 オモヤ……………43
 オモヤク……………91
 オヤサン……………43, 51, 58, 88
 オヤネンプツ……………43, 98
 オヤブシ……………51, 88
 オユウジャ……………70
 オンビ……………75
 オンベ……………86

〈か〉
 カイコン(開墾)……………20, 51, 67
 カオミセ……………91, 92
 カケバン……………65
 カサグモ(笠雲)……………20, 21
 風祭……………53, 57, 107
 柏木本家……………43, 51
 柏木屋敷……………7, 44, 47
 カセギ……………63, 67
 カゼノカミさん……………93
 片月見……………80
 カチキ……………78
 カチキヤスミ……………78
 カッター……………18
 カツノキ……………74
 カネオヤ……………42, 43, 51, 58, 72,
 77, 82, 85, 88, 91
 カマヤ……………23
 紙位牌……………43, 98
 カメノコウ……………29
 カヤバ……………50
 カヤムジン(萱無尽)……………34, 50
 粥……………74
 カラウス……………66
 カラスナキ……………93
 刈り入れ……………66
 カリモン……………31, 94, 96



索 引